プリンス・エクリプス

安部由理野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プリンス・エクリプス

【Ｎコード】
Ｎ６１５７Ｌ

【作者名】
安部由理野

【あらすじ】
皆既日食のその時に生まれた第二王子エクリース。昔から『真昼なのに暗闇で生まれる者は不幸を呼ぶ者』と言い伝えられてきたその者とは、エクリースなのだろうか？　案の定、エクリースを産んだ母ドロテアは病の床に伏し、王はエクリースを遠ざけてしまう。そして闇の王、絶世の美男デスティが現れるとの噂が流れ、人々は益々エクリースを恐れていく・・・。そんな頃、エクリースはある娘と出会う。そして、再び起る日食の日に、自分を愛する娘と結ばれるとその呪いは解けることを知る。不幸な呪いを背負う美形の王

子の遍歴と苦難の物語です。

第一巻　第一章　日食に生まれた王子　1

プリンス・エクリプス
～ＰＲＩＮＣＥ　ＥＣＬＩＰＳ～

自分を愛してくれる者、近付いて来てくれる者をことごとく不幸にしてしまう、日食の闇の中で生まれた美形の王子エクリース。彼の持って生まれた運命は変えられるのだろうか？

第一巻

第一章　日食に生まれた王子

1

全ての光と闇は、人間のうかがい知らない彼方からやってくると信じられていた、その昔々のこと。

ある王国では、王妃ドロテアがいまや第二子の臨月を迎えていた。けれども王妃は健やかで美しく、長男である三歳の王子を既に持ち、王とその臣下や民達は何の心配も憂いも有してはいなかった。ただ一人、王妃の侍女達の内一人が、ある不吉な噂を耳にするまでは。

それは魔女と呼ばれていたアンジェラと言う年老いた女が、西の果ての小川の側で占っていたという話を、誰かが聞いてきたのだ。実はアンジェラの母は、“魔女”として先代の王の時代に火あぶりの刑にかけられていた。

その時代は魔女と呼ばれる女達や黒猫が大勢捕らえられ、火あぶりになったのだったが、その余りの惨たらしさに、今の王の時代になって以降、そのような残忍な刑罰は取り止めになっていた。

アンジェラはさる旅人にこう告げたそうだ。
『真昼なのに暗闇で生まれる者は不幸を呼ぶ者。そしてその者はいずれこの世に生を受ける』と……。
恐れおののいた旅人はすぐさまこの国の大臣に告げた。けれども、その言葉を誰も信用しなかった。
『真昼なのに暗闇で』などという馬鹿げた話があるわけではないと、みんなは考えた。例え雨が降っていようと、暗闇にはならない。ありえないことだと。

そして皆思った。母を殺された恨みの為に、アンジェラはそう恐怖を煽っているのだと。けれども聞き捨てなら無いと思った王は、すぐさまアンジェラを捕らえるようにと、おふれを出したのだった。
けれども兵士達がその場所に行って見ると、アンジェラの住んでいた小屋は小川の側で燃え、アンジェラの姿はもう消えていた。人々は最初の内恐れていたが、日が経つ内に忘れ果てていった。
そしてその恐怖を凌駕するかのように、王妃ドロテアが第二子を妊娠したのだ。既に王子が生まれている為か、誰もが男の子でも女の子でもどちらでもいいと考えていた。

日に日にお腹かが大きくなっていったが、王妃はいつも健やかだった。最初の王子ブライトも又、弟か妹が出来るのを楽しみにしていた。王宮中はいつも笑いが絶えず、王一家は仲が良かった。全てがうまく行っていた。そう……その日までは。

その日、一片の雲も無く空は晴れ渡っていた。
王妃はブライト王子と侍女を伴って、中庭で遊んだあと、池の噴水を眺めていた。爽やかな心地良い風が吹く春のうららかな日。全てが美しく新鮮だった。
その時一陣の風が吹きぬけ、王妃の長い髪を揺らした。王妃はゾ

ッとして顔を挙げた。辺りがひんやりとし、鳥の鳴き声がやんだ。そして薄暗くなっていく大気の中で、侍女達が不安そうに首を傾げているのが見えた。

「王妃様……何だか変ですわ」
「真昼だというのに、辺りが急に暗くなってきて」
「雲なども無いと言うのに……どうして？」

けれども一人の従者が上を見上げて、口をパクパクし、指差した。
「太陽が！　太陽が欠けて行く！」
皆が空を見上げた。確かに太陽の一部が欠けている。
「おお、神様！　こんなことが！」
年老いた侍女がそう祈っていると、突然王妃が苦しみ出した。

「ううっ……うっううっ」
「あ！　王妃様！　ご出産では？」
「産気づかれたのですよ！　さあ早く、王妃様を部屋の中へと！」
薄暗がりの中、侍女達は苦しむ王妃を抱き、王宮へと運んで行った。

そして王妃ドロテアは、最も暗くなったその闇の中で、子供を産み落としたのだった。
「男の子ですわ！　王子様ですよ！　まぁ、本当に綺麗なお顔ですこと」
産婆はその男の子を抱き上げたが、直ぐに顔をしかめた。嫌な予感が身を貫く。
「背中に丸い形の黒い痣が！　まるで何かを覆っているような不吉なしるし……」
その時、次第に辺りが明るくなっていき、やがて太陽は再び燦然と輝き始めた。

第二王子エクリースはこうして生を受けた。そしてそれは悲劇の始まりだった……。

2

エクリースを産んで以来、王妃ドロテアは高熱に犯される様になった。何日もその熱は引かず、王は生まれたエクリースのことよりも、愛する王妃の病を心配する余り、食事も喉を通らなくなっていった。

王は思いだしていた。大臣から言われたアンジェラと言う名の“魔女”の言葉を。

『真昼なのに暗闇で生まれる者は不幸を呼ぶ者。そしてその者はいずれこの世に生を受ける』

――それは、第二王子エクリースなのか……？　日食（＝エクリプス）に生まれたので、エクリースという名を付けたが、それは間違いだったのかも知れない。

いや！　罪の無い無垢な幼児を、そのように思い込むとは！　それこそアンジェラの復讐に他ならないのだ。わたしはそんな言葉を信じてはいけない。

けれども王の不信は強く、ほとんどエクリースに会いに行く事すらなかった。国中の名医や外国の医者までも呼び、王妃の回復に努めたかいがあったのか、ほどなくしてやっと王妃の熱は下がった。

けれども、王妃は以来ちゃんと起き上がることも出来ず、ただベッドに横になっているか、せいぜい気分のいい時に椅子に座ることしか出来なくなった。

「あなた……済みません。何も出来なくなってしまって、王妃とし

ての勤めすら出来なくなりました。可愛い息子達と遊ぶ事もできず、あなたの夜の相手も出来なくなり、生きていても仕方の無い女になってしまいましたわ」

とある日、王妃は見舞いに訪れた王に向って悲しげに言いかけた。

「でも、息子エクリースを憎まないで下さい。あんな言葉は単なる悪ふざけ。誰でも、お産の後に身体を壊す女は多いものです。たまたまわたしがそうなったまでのこと。決してエクリースのせいではありません。息子であるあの子を恨まないで！」

王妃ドロテアは王の手を力無く握り締め、涙を流しながら懇願した。王はその横に座り、ただただ王妃の金色の髪の毛を撫でているだけだった。

「けれども、ブライト様は御妃様と同じ蒼い瞳と金色の髪を持っているというのに、エクリース様は、瞳も髪も真っ黒ですわ。何だか薄気味悪いのです、わたしは」

と王妃の一番の侍女ハイラが、溜まらずすすり泣きながら王に取りすがった。

「実を申せば、わたしも余りあの子に会ってはおらぬ」と王は答えた。

「けれども、透き通る肌にキラキラ煌く黒い瞳とつややかな黒髪は、それは見事だと乳母ジュリアは言っておるぞ」

「ジュリア様は、エクリース様の乳母ですし、ご自分の乳を飲ませていらっしゃるので、お心が傾いているのです。ま、致し方のない事ですが」

とハイラが憎々し気に言った。

「わたしは、残念ながらエクリースを愛することは出来ぬ。妃はこんな有様だし、アンジェラの語った言葉も気になってな」

「当たり前ですわ！」とハイラが同意した。

「ブライト様のように、お妃様と生き写しならともかく、ご次男は闇の中で生まれた王子様ですわよ。宮中の者はみんな、エクリース様のことを“プリンス・エクリプス”、日食王子と呼んでおられます。不幸を呼び込む定めだと申しておりますわ」

「言うな！」と王は厳しい声で制した。

「それが真実かどうかは、いずれ分かる事だ。わたしの息子を、そのような呼び方で言うのは許さぬ！」

「はい、分かりました。どうも済みません、王様。以後慎みます」

ハイラは優雅に一礼した。けれども下を向いたハイラの顔には、エクリースに対する憎悪が隠されていたのだった。

3

3

エクリースはほとんど父王と会ったり語ったりすることもなく、けれどもすくすくと乳母ジュリアによって育てられた。

ジュリアには、同じ頃に生まれた一人息子が居た。エクリースは王子という身分にもかかわらず、王宮に入ることが許されていなかったので、ジュリアの家でその息子グライスと兄弟のように育った。

けれども時折、エクリースは母ドロテアが恋しくて、夜通し泣き続ける事があった。その夜泣きはジュリアの夫で厩番のトロイを苛立たせたが、やはり王子ゆえにきつく叱り付けることも出来ない。

乳母ジュリアは、この父母から愛されていない王子エクリースを哀れと思っており、どちらかと言うと溺愛していた。それは時として実子グライスに注ぐ愛情よりも強いものだったので、トロイは陰では腹立たしく思っていた。

実母ドロテアは、嫡男のブライトを愛していると同時に、この不憫な息子エクリースも愛していたのだが、自分の手で息子を育てる事ができない上に、会うことすらままならない運命を嘆いていた。

けれどもこの三つ違いの兄のブライトは、心優しい王子であり、子供なりにドロテアを慰めていた。そしてブライトは、時々訪れては直ぐに帰ってしまう弟エクリースに対しても、いつも優しく接し、決して苛める事などはなかった。

確かにブライトは、次期王に相応しい容姿と聡い知能と、そして思いやりの深い性格を有している申し訳の無い少年で、そして世継ぎの王子なのだ。

王は当然ながらこのブライト王子を溺愛し、身体の効かなくなっ

た妃のドロテアの代わりに、常に自分の元に侍らせていた。そして自ら、字や計算を教え、チェスや剣の手ほどきをし、ドロテアが側に居ない寂しさを紛らわせていたのだ。

けれども王宮は常に暗い雰囲気に包まれていた。それはまるで黒い暗黒の靄に常に覆われているような、そんなうっすらした何か翳りが王宮中に漂っている。その中に住んでいる者達も又、いつも陰でひそひそとあらぬ噂話をしていたのだった。

そんな陰鬱な気分は、瞬く間に伝染して行き、城下の町にもただならぬ空気がいつも重く垂れ込めていた。

人々は何かを恐れていた。それは、闇の王である異世界の主、デスティが現れるのを。デスティは、悪の運命を司り、時折ふいに現れるのだった。けれどもその前には、どの時代にもこのような陰鬱な空気が垂れ込めていく……。

長老達はお互いに囁き合っていた。

――この間、デスティが現れたのは何時だったのだろうか？　あれは……我々がまだまだ青二才だった頃だ……。そろそろデスティが現れてもおかしくは無い頃合だな。

そして人々は長老達に尋ねた。デスティとは、どのような人物なのかと。長老は答える。

「それは陰惨な雰囲気の、人間なのか妖かしなのか分からないが、けれどもこれだけは言える。絶世の美青年の姿で現れるのだ」と。

では、デスティは誰なのだろうか？　それを知るのは、誰でも恐れることだった。

☆―☆―☆

けれどもある日、長老の一人がエクリースに出会った。その頃エクリースは6歳になっていた。ほとんど誰とも会わず、城下の森の奥に建つ、ジュリアと厩番のトロイの家で過していたのだ。

そして学ぶ事も出来ず、着飾ったり、美味しい山海の珍味を食べる事もなかった。着ている服装は、ジュリアの一人息子グライスと同じようなお古で、継ぎはぎのあるものだった。

けれども6歳のエクリースは毎日楽しく暮らしていた。何よりも、自分を愛するジュリアと、兄弟のようなグライスと遊んで暮らすことが一番大切な時間だったからだ。

森の中で、エクリースとグライスは、黄緑に黒い淵の在る鮮やかな蝶々を追い駆ける為に走り回っていた。蝶々はヒラヒラと舞い、二人のチビ達を翻弄しているかのように、ゆうがに飛び回る。

そこに長老シスリーが偶然散歩中に、この二人の童（わらべ）と出会った。長老は何らかの超能力を宿していなければならなかったが、このシスリー長老は鋭い勘を持っていた。

シスリーはしばし立ち止まり、可愛い童の様子を眺めていたが、急に胸苦しさに襲われたのだった。そして目の前の童の一人の未来の幻を見てしまった！

それは一際美しい美貌の青年。黒い肩までの髪に黒い瞳。それは美しいが、けれども背後に黒い影が見える。

「あ！　もしやあれはデスティなのだろうか！？」

シスリー長老が首を振ると、その陰はフーッと消えた。そして一人の幼児がこっちを見ていたのだった。

「君、誰？」

「わたしはシスリーと申す者」

「そう？　僕はエクリース」

エクリースは無邪気に微笑むと、背の高いシスリーを見上げた。

その途端、シスリーの背後にヒヤリとした冷気が押し寄せ、彼は震え上がったのだった。

4

4

シスリー長老は王宮に戻ると、すぐさま王の所に謁見を願い出た。緊急の用事だと言って。王は信頼する長老の一人の用件にすぐ反応した。

シスリーが王の謁見の間に入ると、王は9歳のブライト王子とチェスをしていた。いつ見ても、ブライト王子は輝かしく愛らしく品があり、先ほど出会ったエクリース王子とは雲泥の差があるような気がしたが、けれどもエクリースもいずれ見目麗しい王子にならぬとも限らない。

けれども少なくとも今朝遭遇したエクリースは、ボロを纏い泥だらけの野生児のような男の子で、とてもブライトにはかないそうに無い。

「何だ、シスリー？」と王はチェスの駒を持ちながら聞く。

「ちょっとお話がございます。失礼ながら、ブライト様には少しお暇を」

「何だ、大袈裟だな」

「いえ、大事な用事ですので」

「分かった」と王は頷いた。「ブライト、ちょっと乳母と外に行ってくれないか。この勝負は又明日にでも続けよう」

「僕の勝ちですよ、どう転んでも」とブライトは勝ち誇ったように言った。

「確かにお前は少年ながらチェスが上手だな」

と言う王の顔は、満足げに輝いている。

けれどもブライト王子は王の命令には逆らわず、一礼をして部屋

から去って行った。
「いつもながら、ブライト様のお振る舞いは上品そのものですな。その上、お妃様に似てお美しい」
とシスリーは、ブライト王子が出て行った扉を見つめつつ、感心しながら言った。

「確かに、その通りだ」と王は頷いた。
「これでこの王国もご安泰でありましょう」
「そうだな。そうあって欲しいものだ」と王はなにやら考え込みながら言った。
「ところでお前の忠言とは何だ？」と王はクルリと振り返る。その銀髪が凛々しい。

「実は」とシスリーは躊躇しながら言いかけた。「エクリース様のことでございますが」
「エクリースか！」とそう言う王の言葉には、どこか棘があった。
「エクリースがどうした？」
「エクリース様は危険でございます！」
「なにぃっ！？　なんと申す！」
シスリーは思わず跪きながらも、決然と言った。

「あのお方の背後に潜む影を見たのでございます、王よ！」
「なんと！　お前はあの子に会ったのか」
「偶然ではございますが、あの森の中で」
「なぜ危険なのだ」
「恐れながら……エクリース様こそ、デスティではないかとわたしは感じたのでございます」
「なんだと！？　エクリースが闇の王、デスティ！？　そんな馬鹿な！」
王は憤慨して、顔を真っ赤にした。

「卑しくも長老であるわたしは、特別な才能を有している者。エクリース様の背後に蠢く何者かを感じたのでございます。今は幼児ではあらせられますが、いずれご成長の折には……」
「馬鹿を申せ！」
そう怒鳴ると、王は拳でテーブルを叩いた。その拍子に、テーブル上のチェスの駒が当たりに飛び散っていく。

「そんな馬鹿なことが……」
「王様！　すぐさまあの王子を殺すのです。でなければ、遠く異国の果てに奴隷としてお売り下さいませ！」
「何と言うのじゃ！　我が子を殺す！？」
「そうしなければ、あなた様やこの国の運命は暗闇に閉ざされ、あの王子の周りは不幸な者だらけになりましょう。
考えても御覧なさい。あの王子は、皆既日食のその時に生まれました。そしてお妃様は、お産みになられた後は、あの有様でございます。王子は、生まれつき不幸を背負っておられる。そして生きていても、いずれデスティに乗っ取られるだろう、そういう運命なのです」

シスリー長老は王に詰め寄った。その顔は必死で、何とかしてこの国を守ろうとする気概に満ち、決して私利私欲で言っているのではない事は明らかだ。王は腕を組んで、疲れたように椅子に座り込んだ。
「わたしは正直言って、エクリースを好きではない。ブライトの方が賢くて優しい。ブライトを愛しているが、エクリースは……。
けれどもだからといって、自分の息子を殺したり奴隷に売ることなど出来ない。分かってくれ、シスリー。お前の忠誠心はまことに嬉しいが」

「それでは王様、エクリース様を秘かに見張っているというのは如何でしょうかな?」
とシスリーが提案すると、やっと王は顔をあげた。
「そうだな。それぐらいはしなければならないだろう。まだ6歳の幼児だが、子供という物はどんどん大きくなっていくものだからな」
「それでは、息のかかった者を選んで、それとなくエクリース様を見張る事に致しましょう」とやっとシスリーは元の穏やかな表情になって、一礼して去った。

「ああ！　わたしは実の息子を信じることが出来ないのか！」
王の溜息は、暗い王宮の中に吸い込まれて行く……。

5

その５

王妃ドロテアから内密に呼ばれた王は、絹のカーテンで仕切られた薄暗い寝室に入った。そこには、昔の美貌を微かに留めた王妃のやつれ衰えた姿が在った。ドロテアを見る度に胸が痛む王は、目を背けたくなる心を抑えて、そっと愛する妻の側に座った。

「何かわたしに話があるとか」

「ええ、そうですわ」とドロテアは苦しげに答えた。ふっくらとした薔薇色の頬を持った王妃ドロテアの昔日の面影は、今はもう無い。

けれともドロテアは僅かに手を差し伸べたので、王はその手を苦悩と共に取った。

「何だ？　何でもそなたの願いをかなえようぞ」

「では、あなた……率直に申し上げて宜しいでしょうか？」

「ああ、なんなりと」

「では」とそこまで言うと、ドロテアはしばし躊躇っていたが、やがて口を開いた。

「では、側室をお迎え下さいませ」

王は驚いて身を硬直させた。

「何を申すのだ！　ドロテア！」

「是非、側室を、王よ」

「そんなことが出来るはずが無いではないか！」

「なぜなのです？」とドロテアは苦しげに尋ねた。

「それは……」

「あなた様は、王なのです。この国に責任がありますわ。どうかわたしのことはお気になさらず、新しい方をお迎え下さい。もうわた

しは何も出来ませぬ。あなたの為に差し上げることは、何も無いのです！」

「何を言うのだ！？　わたしには、ブライトとエクリースという二人の王子が居るではないか！　もうそれで充分なのだ、我が妻よ」

ドロテアは手を引っ込めた。そして奇妙な微笑を浮かべて言う。

「例え二人の王子が居たとしても、それで充分ではない事ぐらいあなたもご存知のはず。ブライトはともかく、エクリースには何かと不穏な噂が絶えませぬ。是非、お若い方を迎えて、ブライトとエクリースの兄弟をお作り下さいませ。そして寝屋でのお勤めも、あなたのような壮年には必要なのですわ。

わたしはもう駄目です。ただあなたとの睦み合いを思い浮かべるだけで、それだけでいいのです。わたしは側室を切に求めているのですから。あなたの為、この国の為に」

「出来ぬ！　わたしはそなたを愛しておる！」

「それとこれとは違います。あなたには責任がお在りの筈です。二人の王子を愛するように、これから生まれ出てくる兄弟をも愛するべきなのです」

そこまで言うと、王妃ドロテアは激しく咳き込んだ。王は慌ててドロテアの背中をさすった。

「これはそなたの本心なのか？」

「ええ、もちろん……」

余りにも激しい咳で言葉が中断したので、王は人を呼びつけた。ハイラを先頭に侍女達が慌てて駆けつけて来、話はこれまでになった。

「王様、今日はこの辺でお引取りを」とハイラが頭を下げるのを見て、王は渋々ドロテアの寝室を後にしたのだった。

その後数日間、王は煩悶していたが、やはりどうしても側室を迎える決心はつきかねていた。ブライト王子を見ていると、次の世継ぎの王としてこれほど相応しい王子は居なかったせいもある。けれども一方では、エクリースのことだけは、王の気がかりな点だった。

そのくせ、王がエクリースと逢う回数は、以前よりも減っていった。何か忌まわしいものが押しとどめている如く、王の心に蓋をしたのかも知れない。

「わたしは側室は持たぬ。王妃はこう言ったが、わたしにはそのようなことは出来ないのだ」と王は控えている者達にそう言い続けていた。

けれどもそれから半年後、王妃ドロテアはこの世を去って行った。喪が明けた一年後、臣下達が再婚を勧めたが、哀しみの王はその気にならず、ひたすらドロテアの面影を追い求めて暮らしていたのだった。

王妃の死は、この国を益々暗黒の霧の中に置いたかのようだった。エクリースが8歳、そしてブライトは11歳になっていた。

6

6

王妃の死は、やはりエクリース王子のせいだという噂が、王宮ならず国中に広がっていき、王は遂にエクリースには会わなくなった。そして王宮に定期的に招く事もなくなった。

エクリースは8歳になったにもかかわらず、相変わらず森の奥のジュリアのボロ家に住み、ろくな教育も受けてはいなかった。

そして又母ドロテアの葬儀にも参列できなかったが、けれどもエクリース自身は余り病気らしい病気もせず、すくすくと育っていた。母を失った悲しみも、やがて義兄弟のグライスとの生活で次第に忘れていく自分が居た。貧しかったが、エクリースにとっては毎日が楽しい日々だった。

一方王宮では、実の兄のブライト王子がエクリースを懐かしんでいた。やはり愛する母ドロテアを失ったという悲しみと寂しさで、ブライトはいつにも増して弟のエクリースに逢いたがっていた。

「ねえ、お父様。この頃はエクリースをお召しにならないんですね」と益々凛々しくなったブライトは、ある日王に向ってそうポツンと言った。ちょうどチェスの最中で、王はハッと顔をあげた。その目の前には、もう立派な少年となったブライトが金色の巻き毛に包まれて、訝しそうに佇んでいる。

その姿が余りにも亡き妻ドロテアに似ているので、王はそのことに対してもハッとしてしまったのだ。

「いや、それは……」と王が言葉に詰ると、ブライトはさっと自分の駒を置いて勝ち誇ったように叫んだ。

「僕の勝ち！」

王がチェス板を見ると、確かにブライトの勝ちだった。
「さすがじゃな！」
負けても王は悔しくは無く、むしろここまで成長したブライト王子が益々頼もしく感じるのだ。

「僕が勝ったから、僕の願いを聞いてくれますか」
とブライトは真剣な面持ちで、王に迫った。
「何だ？」
「弟のエクリースに会いたいんです」
「エクリースか……」
王は絶句する。
「弟に対してのいわれの無い中傷や噂などは耳にしています。けれども僕は弟に会いたい。もしも王宮にお召しが無いのなら、僕が弟に会いに行きますがいいですね？」

しっかりした口調の真剣なブライトの訴えは、王の心を幾分溶かしていく。
「そうだな、まあいいだろう。けれども長老のシスリーと部下達を連れて行くように。お前を一人にはしたくないのじゃ」
「ああ、そうなの」とブライトは少しガッカリしたものの、直ぐ顔を輝かして、
「ありがとうございます、父上！　それじゃあ、彼らを連れて行きますから」と言い、王の首に抱きついた。
「じゃあ、明日行って来ます。時は春。ウグイスが鳴き、花々は咲き誇り、小川の水は冷たいけれど澄んでいる。嬉しいなぁ！　弟と思い切り遊びたいし話したい」
そう朗らかに喋るブライトは、本当に品が良く美しかった。

けれども翌朝、シスリー長老がこっそりと王の部屋にやって来て跪いたのだった。

「王よ！　ブライト様をエクリース様に近付けてはなりませぬ」
「何と申す、シスリーよ」
と王は振り返った。今見下ろしていた窓からは、今しもブライトの馬が中庭の広場に引き出されたところだったのだ。見事な栗毛の馬だったが。

「わたしは何やら胸騒ぎがするのです」
「それはまことか？」
「これを年寄りの単なる妄想だとはお考えめされるな。わたしは勘の鋭い者。嫌な予感がわたしの胸をかき乱しまする。なにとぞ、なにとぞ、もう一度お考え直してくだされませ」
「ならぬな。王子は弟に会うのを待ち望んでおった。確かにこの一年以上、わたしはブライトにエクリースを逢わせてはおらなかった。がブライトはその事で悩んでおったのだ」

「王様！　エクリース様は周囲の者を不幸にするという星の元に産まれたお方なのです。そのことを軽んじてはなりませぬぞ！」とシスリーは詰め寄る。けれども王はその妄念を払い除けた。
「黙れ！　エクリースと共に暮らしているあの者達一家は、今までなんとも無いではないか！？　近寄る全ての者達を不幸にするとなぜそう言えるのだ！」
「それはそうですが……けれどもあの者達は下賤な者達に過ぎませぬ。いや……。乳母のジュリアは、息子のグライスを産んで以来、もう妊娠出来なくなってしまったとか。それに、夫のトロイとの仲もはかばかしくありませぬが」
「その程度なら、だれでも多少の不幸は背負っておるわ！」
と王はシスリーの懸念を一笑にふした。

「とにかく、ブライトがあのように喜んでいるのじゃ。わたしはそれを止める事は出来ぬ」

王は窓からブライトの姿を見下ろしながら、そう呟いた。けれどもその言葉とは裏腹に、心の奥に澱の様に溜まるどす黒い感情だけは、払拭することが出来なかったのだ……。

7

7

ブライト王子はお供にシスリーと数人の屈強な兵士を連れて、エクリースに会いに森に出かけた。本当はブライトはこのような仰々しいお供を嫌がったのだが、大人しく優しい彼には拒否できなかったのだ。

その上、王やシスリー達が、エクリースに会うのに奇妙な恐怖心を持っているのを、賢いブライトは気付いていた。

一行がやっと森の奥にある厩番トロイのあばら家に着くと、物音で中から二人の少年が出て来て、物珍しそうに一行を見つめていた。ちょっと見るとどちらが王子で、どちらが厩番の息子か分からないほど、二人とも継ぎはぎの当たった泥だらけの服を着、髪はボサボサなのだ。

辛うじて、右側に立つやや背の高い片方の少年が際立って美しいので、やっとそちらがエクリースだと判ったほどだ。

けれどもエクリースとグライスは目を見交わして、クスクス笑っている。

「何がおかしい？　我々は王子ブライト様の一行だ。エクリース様はこちらへ」

とブライト付きの騎士ウーリッヒが重々しく口上を述べると、中から慌てふためいた様子の一人の中年女が飛び出してきた。

そしてその女、乳母ジュリアは、一行の前にひれ伏さんばかりにお辞儀をする。

「これはこれは！　何のお知らせも無く、急にこちらにお越しとは！　その馬上のお方が、若様で？」

「そう、ブライトだ。そなたはジュリアか？」とブライトは馬上から言いかけた。
「わたしは弟エクリースに会いに来た。ここ一年ほど、エクリースが姿を見せなかったのでね」
「誠に恐悦至極に存じます」とジュリアはへりくだって言うと、ボーっとしているエクリースの背中を押した。
「ちょうど明日、エクリース様は１０歳のお誕生日をお迎え致しますが」
「それは良かった！　エクリースに土産を持って来たぞ」
と心優しいブライトがそう言うが、エクリースは黙ったまま突っ立っているばかり。

　こちらの一行は、エクリースの礼儀のなさと無愛想な態度を見て憮然としたが、ブライトだけはただ微笑んでいた。
「会いたかったぞ、エクリース」とブライトが声を掛けたが、
「あ……はい……」とエクリースはそう短く曖昧に答えただけだった。
「まるで、ただの庶民の子供だな」と一人の兵士がそっと隣の兵士に耳打ちした。
「礼儀作法なども全く嗜（たしな）んでおらぬようだ」
「まるで、野生児ですな」
「無礼で礼儀知らずの野蛮人のようです。唯一つ、それでも際立ったお美しさをのぞけば」
「だが、この王子は先の妃には似ておらぬ」
「さようで」
　二人の兵士はひそひそと囁き合っていた。

「さ、どうぞこちらへお入り下さいませ」と精一杯ジュリアが言ったが、シスリーがそれを制した。
「我々はただエクリース様とお会いしたかったまでのことじゃ」

「さあ、エクリース！　こっちへ来て、わたしと語らおう。そして何かの遊びをしようか」
「お、おれ……いや、わたしは木登りとか、鳥を探したりとか、小川で魚を獲ったりするほうがいい」
「そうか」とブライトは少しも怒らず、この愛想の無い弟をニコニコしながら見下ろしていたが、やがて馬から下りた。

「それじゃエクリースの好きなことをしよう」
「あ、兄上……」とエクリースはしどろもどろになった。ブライトが近寄ると、エクリースが退くといった具合に。
「エクリース」とブライトは言いながら、瀟洒な上着のポケットから銀色に輝くものを見せた。「これは時計と言うものだ。時を刻み、わたし達に教えてくれる。これを誕生祝いにそなたにあげよう」
「あ！　ブライト様！　そのような高価な物を」
とシスリーがたしなめたが、ブライトは構わずその時計をエクリースの泥だらけの掌に握らせた。
「さあ、取っておくのだ。我が弟よ」
「は、はい」
そうくぐもった声で言うと、エクリースはニコリともせずその小さな銀鎖の付いた銀の時計を受け取った。

エクリースとブライトは、呆気に取られているチビのグライスを置き去りにしたまま、小川のほとりの草原に出かけた。もちろん、直ぐ背後には騎士ウーリッヒがピタリと付いて、何か起こらないようにと見張っている。
ブライトは兄らしく色々話し掛けていたが、エクリースは仏頂面のままむっつり答えているだけだった。

「エクリース、字は覚えた？　計算は？」
「字は少しだけ。計算も足し算だけかな」

ブライトは思わず嘆息してしまう。
「お前の年齢ではもっともっと学ぶものがある。是非、王宮に来てちゃんと色々学ばなければいけないよ、エクリース」
「けれど、兄上」とエクリースは顔を歪めた。「おれ、いやわたしが王宮に行くことを、父上はお許しにはならないでは?」
その声音は悲しげだったので、ブライトは我知らず弟の肩を親しく抱いて引き寄せた。
「大丈夫だよ。必ずわたしがお前を引き取るように、父上に言うから」
「けど、わたしは“不吉な子供”なんだろ!?」
と叫ぶエクリースの声には、明証しがたい怒りと悔しさが滲み出ていたのだった。

8

8

エクリースとブライトの二人は、小川のほとりに来た。小川と言ってもかなり流れは急で、春先の雪解け水の冷たいせせらぎが、思いのほか勢いを増している。

二人の王子達は、その側の木陰に座り込んだ。風が、ブライトの金髪とエクリースの漆黒のボサボサに切られた長い髪の間を吹き抜けていく。

「エクリース、ここでの生活はどうだ？　楽しいか？　王宮の方がいいのではないだろうか」とブライトが問いかけると、

「兄上……」とエクリースは俯いて言った。「わたしは……本当に、闇の運命を司る“デスティ”なのですか？　この森の住民ですら、わたしを見るとそう言うんです……指を差しながら、怖がって」

「そんなはずが無いだろう！」とブライトは、この両親から“捨てられた”も同然の弟を不憫に思いつつ、否定した。けれどもそれは嘘の否定だったのだが。

「怯えなくていい！　お前はお前だ。第二王子エクリース。ただそれだけだよ」

そう言い掛けると、ブライトは暖かい家庭の愛を知らないエクリースの肩を抱き寄せた。

「何も心配するな。わたしが何とかしてやるから」

「兄上……」

エクリースは初めて実の兄の真意を知って、少しだけ微笑んだ。

「それにしても、その姿は酷いな」とブライトは顔をしかめながら、エクリースの着ているボロを見る。「わたしのケープをあげよう」

「いや、それは」とエクリースは身を引いた。「要りません、兄上」
「そうか」とブライトは無理強いしなかった。

侍従がブライトの栗毛の馬を引いてやって来た。
「ブライト様、もうお時間でございます」
「なに？　もう？　まだ少ししか弟と話してはおらぬ」
「それで充分でございましょう」と侍従は冷淡に言い放った。「王様の命令でございます」
「ああ、分かったよ」
そう言うと、ブライトは名残惜しそうに立ち上がった。

「この場所は綺麗な所だな。又来るぞ。その時はもっと色々話してくれ、エクリース」
「あ……はい。兄上」
ブライトは自分より少しだけ背の低いエクリースの肩をポンポンと叩いて、その栗毛の馬に乗った。
「兄上！」と突如エクリースが叫ぶ。
「何だ!?」とブライトは馬上から答えた。
「その馬、今は殺気が……乗られないほうがいいかも……」
「何を言うのだ!?　この馬はわたしの馬だぞ。いつも大人しいので有名な名馬だが」
「それは……アラブからの馬ですね」
「そうだ。アラブから分捕った名馬だそうだ」
「今すぐ降りて下さい！」
「どうして?」
「それは」
そこまで言うと、エクリースははたと言いよどむ。自分でもなぜだか分からないが、馬の気が立っていることだけは分かる。そして馬の背後に、何かの暗い影が見えたのだ。

「兄上が危険です」
「何を言うのだ!?　さあ、もう行くぞ。さらばだ、エクリース！又会いに来るからな！」
ブライトは片手を挙げて、エクリースに別れの挨拶をした。ところがその瞬間だった。
突如その名馬が後ろ足だけで立ち上がると、鋭くいななないた。ブライトははずみで、激しく地面に叩きつけらてしまったのだった。
「兄上〜〜！！」とエクリースは悲鳴をあげた。

臣下達、兵士達、そして側に居た騎士ウーリッヒ、それからもっと離れて立っていたシスリー長老達が慌ててブライト王子に駆け寄った。皆、顔色は真っ青で、ある者はわなわな震えている。
一番最初に駆けつけたエクリースを腕で乱暴に突き倒し、「どけ！」と荒々しく言ったウーリッヒが抱かかえると、ブライトは足を怪我したらしく痛そうに呻いていた。
「ブライト様！　大丈夫であらせられますか!?」
とウーリッヒが問いかけると、
「ああ、大丈夫だ。ちょっと足首をくじいたらしい」
とブライトは健気に答えた。
「わたしとしたことが！　若様を守れなかったとは！」
「大袈裟だよ、ウーリッヒ、わたしなら大丈夫と言ってるだろう！？」
とブライトはやや癇癪を起こしながら叫んだ。

「ブライト様、すぐさまここを出立なされませ。早く弟君より離れるのでございます」
といつの間にか近寄って来ていたシスリーが、不気味にたしなめた。
そしてシスリーは、地面に倒れているエクリースをジロリと睨み付ける事も忘れなかった。
「ここは不吉な場所。ブライト様には似つかわしくない所でござい

ます」
「シスリー。わたしは……そんなことは……」
「さ、ウーリッヒ。殿下をすぐにそなたの馬へと」

エクリースは馬の背後にある黒い影が無くなったのを知った。けれども、そのことについては何も告げなかった。
その日の内に、『エクリースの呪いによって、ブライト様が御怪我なされた』との伝言が、王の元に伝えられたとも知らず。

9

9

「あの馬には、戦死したアラブの戦士の呪いがあったように見えた」と小屋に戻るなり、エクリースは言った。「僕には分かる……けど、誰も信じてくれないけど……」

「で、どうなった？」とグライスが聞くと、

「兄上が落馬しちゃったよ」とエクリースは事も無げに答えた。「でも、それがまるで僕のせいのように、みんなは騒いでた」

「そんなの、ありかよ～」とグライスは不満顔だ。「ずっと一緒に居るけど、君は王子様と言うよりも、もう身内も同然だ。なのに俺達には、何の厄介ごとも起きてはいないじゃないか！　みんな、馬鹿だな～」

グライスは真顔で憤慨している。小柄だが、どこかひょうきんで憎めない少年だ。

「さ、あしたはエクリース様の１０歳のお誕生日！　何を召し上がりたいですか？」

と相変わらずエクリースを愛するジュリアは、優しく言いかけた。

「何でもお好きな物を仰って下さいな」

「ジュリアは料理が上手いからね」とエクリースは楽しげに言った。

「でもいいんだ。僕はさ、兄上から良い物を頂いたから」

そう言うと、エクリースは自慢げに兄ブライト王子から貰った銀鎖の付いた時計を取り出した。

「でも時計の針の読み方は知らないけど」

「時計という物は、物騒な物ですわ」とジュリアがたしなめた。

「どうして？」

「時とは恐ろしいものだからです」

「何でだよ？」
「いずれ分かります、その時が来れば」
「何だよ。せっかくもらったのに！　一緒に喜んでくれないの！？」
プンプン怒り出したエクリースは、サッと外に出て行った。慌てて、グライスが跡を追う。

「エクリース様。物は愛には勝てませんわ……」
とそうジュリアは淋しく呟くばかり。そして物陰からは、ジュリアの夫のトロイがじっと今の様子を伺っていたのだった。

☆　―　☆　―　☆

その頃、王宮では大変な騒ぎになっていた。
世継ぎの王子ブライトが負傷したというので、王の動揺と怒りは凄まじかった。エクリースを信用してブライトを出した結果がこの有様になり、シスリー達はその王の様子を冷ややかに眺めていたのだ。

「ですから、お止めになれば良かったのです」とシスリーは慇懃に言った。
「お前の言う通りだったな。ブライトは以後エクリースには近付けないつもりだ」
「けれども、ブライト様のお怪我は大したことはありませんでしたが」
珍しく騎士ウーリッヒが反論した。

「何を申す！　お前も見ていたのであろう、ウーリッヒ！」
「けれども、エクリース様はブライト様を庇おうとなされていたように、わたしには見受けられましたが」
「そうかな、ウーリッヒ殿。わたしにはそのようには見えなかった

ぞ。あの馬がエクリース様を見てから、突如いななき始めたのじゃ！」

シスリー長老の言葉に、騎士は黙り込んだ。長老からは見えなかったはずなのを、ウーリッヒは知っていたのだが、思い込みとは恐ろしい。

「分かりました。それではこれにて」

黙ったままウーリッヒは一礼して下がって行った。

「如何でしょう、王様。エクリース様を、遠い異国へと追放なさったらどうでしょうか？　この国に及ぼす災いを防ぐ為、又これはエクリース様の御ためでございます。

このままでは、エクリース様も又、将来は自らお苦しみになるかもしれませぬゆえ」

「どこへ追放するというのだ、シスリー。エクリースを引き受ける場所など有ると申すのか？」

「さぁ、それは」とシスリーも言葉を濁した。

けれどもややあって、シスリーは名案が浮かんだのか、パッと顔を輝かした。

「これはどうでしょうか、王様。

数年前、あなた様の言いつけに背いて、捕虜達を大勢逃してしまった咎により、ドリアン伯爵は辺境の地へと追放されましたな。本当は処刑されてもいいものを、お情け深い王様の恩赦により命を救われ、けれども北の寂れた山岳地帯へと追放された……」

「ああ、あのドリアンか！　なるほど、それはいいかも知れぬ」

「エクリース様を引き受けないと、ご家族の身が危ないと仰られませ」

「そうだな」

そう言うと、王はどっかと椅子に深く腰掛けた。

「家族は何人だったかな」
「奥方様、それから9歳のベアトリス姫、それから弟君のクリフ坊ちゃま、以上の四人でございます」
「では、エクリースの身を引き受けないと、代わりに嫡男のクリフを人質にすると言いつけよう」
「それが宜しゅうございますよ！」
とシスリーは、ずる賢そうな笑いをその老いた顔に微かに浮かべたのだった。

第二章　追放　1

第二章　追放

1

国の北の果て、辺りにはうっそうと茂った暗い森と、一方には絶壁。そして崖下遥かq谷底には、轟々たる川が流れている。南方に行く街道は唯一つ。それも一つ間違えば、谷底に落ちていくほど狭い道。

そのような陰気な場所に、ドリアン伯爵一家は数人の侍従と侍女達と侘しい住まいを持っていた。

伯爵一家が住まう古城に、使者によって今しも王からの手紙がもたらされていた。

ドリアン伯爵はその書状を一瞥すると、深い溜息をついた。

「あなた。どうなされたのです？」と奥方が顔を覗き込む。「なにか……悪いお知らせですか？」

「ああ、そうのようだ」と伯爵は率直に答えた。

「え！？　それは……？」

「安心しろ。わたし達を殺そうというのではない。けれどもある意味ではもっと大変なことを、王は我々に仰せつかったようだ」

「何なのです？」と奥方は震え声で聞き返す。

「王の二番目の王子、エクリース様を預かって欲しいとの仰せだ」

「それは！」

奥方は驚愕の為に身を縮めてしまう。

エクリースの評判は、不運なことにこのような辺鄙な場所にも聞こえていた。不幸を呼ぶ、日食に産まれた王子、闇の使者デスティ

の生まれ変わり、等々である。
「エクリース様を？　それを拒む事は出来ないのでしょうか」
「我が息子、クリフを人質に取り、エクリースに何か有れば直ぐにクリフを殺すと言われる」
「むごい事ですわ！　クリフをあの呪われた王子の身代わりにと？」
「他人の風評を鵜呑みにするな」と伯爵はたしなめた。
「だってあなた、そうでなければなぜこのような場所に王子を置くのです？」
「厄介者だからだろう。最近、お世継ぎのブライト様がお怪我なされたと聞く。それもエクリース様の目の前でらしい。王はこれ以上、エクリース様をブライト様に近付けたくはないと見える」
「でもそれじゃ、エクリース様は今度はわたし達に、きっと不幸を運んで来ますわ！」
「そうとは限らぬ！」と伯爵は苛々して怒鳴りつけた。

「とにかく、使者が返事を待って待機しておる。直ぐにも返事を差し出さないと、何が起こるか分からぬぞ。クリフの為にも、それからベアトリスの為にも」
「ああ～！」と奥方は既に絶望の悲鳴を挙げていた。

そこに一人の愛らしい姫が、乳母の手を振り切って駆け寄ってきた。この姫にかかると、この陰気な古城をも、パッと明るく輝くようだ。
「ベアトリス！」と奥方は叫んだ。
「わたし、聞いていました。王子様がいらっしゃるのね」
と9歳になるベアトリス姫は可憐な声で言った。「楽しみだわ」
「何を言うの、ベアトリス！？　その王子は……」
「お母様、誰であろうと、お客様は大歓迎よ。わたしは何ともないもの。ここではお友達も居ない事だし」とベアトリスは無邪気に答えた。

もしも将来を見通すことが出来ていたら、ベアトリスはそうは答えなかっただろうし、伯爵夫妻もエクリースを引き受けはしなかっただろう。

けれども伯爵は、結局王の意向に沿う他はなかった。やがて嫡男のクリフとエクリースは、近いうちに交換することに決まってしまったのだった。

2

エクリースとドリアン伯爵の嫡男クリフとの交換条件が折り合わない間、時間ばかりが経っていく内に、やがて夏が来た。

一方、エクリースの兄ブライト王子は、シスリー長老と王の企みを知って激怒していた。ブライトの足の怪我はもうほとんど良くなったと言うのに、王は二度と弟エクリースに逢わせようとはしないのだ。

ブライトは、呪いや迷信の類を、全然信じてはいなかった。むしろ自分達兄弟の仲を裂こうとしているシスリーに対し、憤りを隠せないでいた。そしてブライトは、夏になってもその苛立ちは消えなかった。

ブライトは、段々王の言う事を余りまともに聞かなくなって行った。それはブライトが成長し、もう子供ではなく少年に近くなり、反抗期になったせいかも知れないのだが。

けれどもある日、エクリースにとって決定的な事件が起ってしまったのだった。

エクリースは暇な時には、ブライトからもらった銀の時計を揺らして遊んでいた。時計の針は止まったままだったが、元々時計の読み方を全く知らないエクリースにとっては、それは綺麗なオモチャにしか過ぎなかった。

銀鎖の付いた時計をブラブラ揺らしていると、兄ブライトの明るい微笑や柔和な表情が脳裏に浮かんで、和やかで平穏な気持ちになるのだった。

―　兄上はどうしておられるのだろう。最近はとんと来ては下さら

ないが……。仕方ないよな。僕の噂のせいなんだ、多分。
あのアラブ馬の陰にある、戦士の霊はその後どうなったんだろう？　兄上に何も無ければいいんだけど。

エクリースはゆっくりと揺らしながら、その揺れを見て淋しさを紛らわせていた。
けれどもそういうエクリースの有様を、そっと盗み見ている人物が居た。それはジュリアの夫、厩番のトロイだ。
トロイは朝早く森から出て王宮の外の厩で一日中働き、そして日暮れ頃に疲れ果てて戻って来るという毎日を過している内に、知らず知らず鬱憤が溜まっていた。
いくら働いても生活は楽にはならず、エクリースの為に頂く僅かなお金はことごとく食費などで消え、自分の酒代にもならない。その上、妻のジュリアはエクリースの身の回りの世話ばかりして、自分のことなど何も構ってはくれない。
けれどもそれだけならよかった。トロイが一番腹が立っていたのは、所詮エクリースは今はこのような有様であっても、いずれは王子として豊かな生活が約束されているということなのだった。
それなのに一人息子のグライスは、何年経っても背が伸びず、どうせ厩番にしかなれない。そして数年後にエクリースが出て行った暁には、もっと貧しい生活が待っていることだろう。

―　エクリース王子を養っている限り、我々に幸せは来ないに違いない！　それなのにあのジュリアときたら、実の息子よりも王子を大切に思っている……。なんと理不尽なことなのだ！

トロイの憤りはその内に、エクリースに対する憎しみに変っていったのだ。
ある日、トロイはエクリースが銀の時計を持ったまま、居眠りをしているのを見た。エクリースはたった一人で、小屋の外のベンチ

に横になって眠りこけ、時計は今にも地上に落ちそうだった。
残念な事に、王子としての身分であるエクリースは、やはり全てにおいて無防備なのだった。

トロイは時計と言う代物が高価であり、ほとんどの市中や村の人々が持っては居ない貴重品である事を知っていた。それはほとんど宝石と同じ価値があった。今まで貧乏しか知らないトロイは、例えエクリースを育てていてもその報酬が僅かなのに苛立っていた。
そしてそんなトロイの目の前で、エクリースは時計を取り落としてしまったのだ。時計の落ちる不吉な音がしたが、エクリースは目を覚まさない。
トロイは少しずつエクリースに近寄ると、そっと静かに泥まみれの時計の鎖を掴んだ。その時計は今はトロイの手の中で、妖しく輝いている。トロイの顔に、ニタリとした笑みが浮かんだ。

「こいつを町外れの市場で始末しよう。闇の値段では、どれだけのお金になるだろうか。こいつは楽しみだわい。それをもらったら、まず最初に酒場で思いっきり高価な酒を飲むんだ！　それから……。ああ！　考えるだけでウキウキするぞ」
トロイは時計を掴んでポケットにねじ込むと、いそいそと町へ向った。けれどもトロイのこの行為が、いずれは恐ろしいことを引き起こすとは知らずに。

3

3

エクリースはある日、珍しく王宮近くの東屋に呼ばれた。こんな事は滅多にないことなので、エクリースはてっきり父王が来てくれるものだと信じていた。その内に侍女達が黙ったままエクリースを裸にして湯船に入れ、ボサボサの髪を梳いてちゃんとした髪型にカットした。

それからエクリースは、今までに着たことのなかった薄いブルーの絹の服をあてがわれた。

けれどもやって来たのは、騎士ウーリッヒと画家の二人だけだった。

「おおっ！　エクリース様！　本当におかわいらしくなりましたな」とウーリッヒはエクリースを一目見た途端、そう正直に発すると跪いた。

「やはり、エクリース様は亡くなられた王妃様のご息男、ご立派におなりでございます」

エクリースはやんちゃそうな瞳をくりくりさせ、無邪気にその騎士に尋ねた。

「ねぇ、父王とブライトお兄様はここには来ないの？」

「残念ながら」とウーリッヒは思わず言葉を濁す。「どちらも大変お忙しいご身分ゆえ、こちらに参るのは無理かと」

実際はそうではないのだが、ウーリッヒはそう苦しい嘘を付かざるを得なかった。

「そう」とエクリースが淋しそうに言っている間に、画家がキャン

バスを立て始めた。
「絵を描くの？」
「そうでございます。こちらの宮廷画家がエクリース様のお姿をお描きになるのです」
「そうか！　その間、僕はここに居ていいんだね」
「恐れながら」と益々苦しい嘘をウーリッヒは付く事になる。「エクリース様に与えられた時間はこの一日だけでございます。その後、すぐさま乳母の所へとお帰りなさいませ」
「絵はたった一日では描けないはずだよ」

「デッサンは一日で充分なのです、王子様」と画家が始めて口を差し挟んだ。
　王子と言われて、エクリースはやっと自分の身分を思い出し、淋しそうに微笑んだ。
「そうか……僕は王子だったんだ」
「誠に申し訳ございませぬ」とウーリッヒは頭を下げた。「王子というご身分をお忘れになるだけ、そのような慎ましい生活に置かれていられるとは」
「いいんだ」とエクリースは言った。「僕は不吉な子供なのだから」
　そう言うと、エクリースは黙ったまま東屋の椅子に座った。

　画家はエクリースの持つ妖しい雰囲気に圧倒されながら、チョークを走らせていた。この１０歳の少年は、やはりただならぬオーラを放っており、それが人々を驚嘆させもし、又脅威に感じることもあることを知った。
　この目の前の少年が王子であり、そして人々に不幸をもたらすのかそれとも幸いを与えるのか、目の肥えた画家でさえ判別できないほど、座っているエクリースは神秘的な美しさをたたえていたからだ。
　画家は黙ったままチョークと筆を運び、ウーリッヒは入口近くで

立ったままじっとしていた。奇妙な沈黙だけが、この美麗だが寂れた東屋を支配していた。

一日の終わりの鐘が鳴り渡り、画家はやっと筆を置いた。
「宜しゅうございましょう、エクリース様」
「そうか」とだけ騎士は言い、遠くに控えていた侍女達を呼んだ。
エクリースが面食らっている内に、侍女達は再びエクリースにその麗しいブルーの服を脱がせると、もと着ていたボロを着せ、チラッとエクリースに一瞥を与えて慌てて去って行った。
そしてその時始めて、エクリースはブライトから与えられた時計が無くなっているのに気付いたのだ。

エクリースはポケットを探り、そしてボロ服のあちこちを触ってやはり時計が無いのに気付いて蒼白になった。
「さあ、戻りましょうか、エクリース様」
とウーリッヒが言いかけても、エクリースは真っ青になって身体中をまさぐっている。その様が何を意味しているのか分からないこちらの二人は、呆気に取られてエクリースを見つめた。

「何かお困りごとでも？　王子。それとも、もうあちらへは戻りたくないと？」
と問いかけるウーリッヒに向って、エクリースはやっとの事で言った。
「いいゃ、そんなことじゃないんだ。だけど……」
「だけど？」
「いや、いいよ」
ブライトからの時計を無くしてしまったことがこの上ない災いをもたらすのではないか、とエクリースはその時感じて微かに戦慄した。

☆　―　☆―　☆

夕刻、ある貧相な男が、一つの銀鎖付き時計を持って、街中の外れの闇市場に現れていた。そしてその男、トロイは、一軒の怪しげな店に入り、その銀色に輝く時計を示して言った。

「これを売りたいんだがね」

店の男はすぐさまこれが盗品だと見抜いたが、黙ったまま受け取ると、トロイにとっては多大な額の銀貨を渡してそっと告げた。

「このことは黙っているように。いいな」

トロイは頷くと、その銀貨をポケットに入れ、酒場へと繰り出したのだった。

4

4

広大美麗な王宮の、鏡の張り巡らせている長い廊下を、今しもブライト王子が息を切らせながら駆けて行く。その肩までの金髪を揺らしながら……。

ブライトは焦っていた。今しがた侍女の内最も下の位の一人から、弟エクリースが東屋に来ていたこと、そして夕暮れ前に戻るはずだということを聞いたからだ。

本を読んでいたブライトはその瞬間ガバリと起き上がると、すぐさま駆け出したのだった。

廊下の端でブライトは騎士ウーリッヒと衝突しそうになった。

「ブライト様！　どちらへ！」とウーリッヒは嫌な予感がしながら尋ねると、ブライトは息せき切って答えた。

「お、弟が！　エクリースがこの王宮に居たんだって！？」

「ああ、はい。まことにその通りでございます」

とウーリッヒは慇懃に答える。

「では、エクリースは……」

「もうお戻りでございます」

「なにぃ！」とブライトは思わず立ち止まると、憤りを秘めたその碧い瞳をウーリッヒに向けた。

「何を言うのだ！？　来たと思ったら、もう戻しただと？」

「さようで。エクリース様は、近々ドリアン伯爵様の所に長い間ご逗留なさる予定でございます。よって、あちらはエクリース様のお姿を拝見したいと申されて、その為に画家が慌ててエクリース様のお姿を描きとめておく為にお呼び致したしだいで。決して、こちら

にお招きしたわけではございません」
「何だって!?」とブライトはその美しい顔を歪ませた。
「我が弟を、あの最果ての伯爵家に留め置くだと申すのか？　その上、その為に描く絵に費やす時間が弟に与えられた日は、たった一日だと言うのだな！
　それなのに、このわたしに知らせないとは！　一体どんな了見なのだ、お前達は！」

　騎士ウーリッヒは腰を屈めて、慇懃に答えた。
「これもシスリー長老のお考えにございます。エクリース様はなるだけ短いご逗留が我が王宮にとっても良いことだと」
「して、父上は？」
「ご賛成されました」
「……！？」
　ブライト王子は、両手をダラリと下げたまま、その場に棒立ちになった。
「それでは……父上はわたしには弟を逢わせないおつもりなのか」
「いずれ又……春が巡ってくれば、その時にはもう一度。けれどもその前に、エクリース様は、多分ドリアン伯爵の元に行かれる事でしょう」
「何を言うのだ！　お前達はわたし達兄弟を引き裂くつもりなのか！」
とブライトは怒鳴った。

　日暮れ時の鐘が遠くで鳴った。
「もう間に合いませぬ」とウーリッヒは無慈悲に言った。「けれども痛ましいとは思っておりますぞ、このわたしは」
「そんなことは無いだろう！　お前も一緒なのだ！　みんな寄ってたかって、わたし達を引き裂く！　たった二人だけの兄弟だと言うのに、妙な迷信や噂によって、わたし達を不幸にしてしまうのだ！

いいか！　人間を不幸にするのはエクリースではない！　お前達だぞ」

ウーリッヒは黙ったまま、頭を下げていたが、やがてブライトは背中を丸めてもと来た方向へと廊下を歩き出した。その背中をウーリッヒは静かに見つめていた。長い廊下には、蝋燭の火があちこちに灯り出し、淋しい王子を照らした。

5

5

雪の積もった北の最果てのドリアン伯爵邸に着いた大きな包みを開けてみると、それは少年の肖像……美麗なブルーの服に包まれ、黒い髪に包まれた愛らしい少年王子の姿だった。

「まあ、綺麗！」とベアトリスがまず叫んだ。

「案外可愛らしい王子様なのね、エクリース様は」

と伯爵夫人がぼそぼそと、けれどもどこか不服そうに呟いた。

「画家がわざと美しく描いたのさ」とドリアン伯爵は、ぶすっと言うと、目を背けた。

「でも、本当に綺麗ね」とベアトリスだけが、相変わらずエクリースの肖像画を見つめていた。「嘘じゃないと思うわ」

「ベアトリスったら、あなたは本当に優しい子ね」

と伯爵夫人が言ったが、心ここにあらずといった感じだった。

伯爵と伯爵夫人は、雪が解けた春になると愛しい一人息子のクリフを王宮に差し出し、そして忌み嫌われている王子エクリースを代わりに育てなければならないのだった。今まで散々難癖をつけては先伸ばしにしていたのだが、肖像画が来た以上もうこれ以上は伸ばせそうも無い。

二人はわずか7歳のクリフを見ては、別れの日を想像して涙にくれていた。けれども皮肉にも唯一人、ベアトリスだけは新しい客が来るのを無邪気に待ち望んでいたのだった。

ベアトリスは活発な姫であり、新しいものが好きだった。この暗い陰気な場所に訪れる人々はほとんど居ない。どのような人であったとしても、新顔がやってくるのは歓迎すべきことだったのだ。

ベアトリスはその栗色の髪をリボンで留め、薄氷の張った池を見つめたり、窓からじいっと中庭の雪景色を見つめては、エクリースが来るのを待っていた。そして、
「きっとステキな王子様なのよ！」とベアトリスは侍女達にもいつもそう言っていた。
「本当にお人よしで無邪気な娘だわ」と伯爵夫人は至って機嫌が悪かったが、日々は刻々と過ぎて行き、やがてその日取りと王の書簡が届いた。
書簡には、エクリースにちゃんとした学問と礼儀作法を身に付けて欲しいという事、必要なものは何でも直ぐに送るということ、そして預かるクリフにもちゃんとした家庭教師と侍女を付けて大事に育てるという約束をした。
そして最後に、こう記されてあった。

『無事に成人するまでエクリースを育てた暁には、ドリアン伯爵一家を再び王宮に迎えたい……』

「これは信じて宜しいのですね、あなた」と夫人は伯爵に詰め寄った。
「再び都に戻り、伯爵家の名誉を継ぐ事ができるのですね！？」
「そうらしいな」と伯爵は顎を撫でた。「この書簡は、証明として取っておこう」
伯爵は狡猾そうに、その書簡を引き出しに仕舞いこんだ。

☆　―　☆　―　☆

ちょうどその頃、ある成金の布織物の商人が銀鎖の付いたキラキラ光る時計を持って、献上品を王に届けに王宮に上がった。この時計は実は壊れており、針は動かなかったが、闇で安く買い叩いたもので、この成りあがりの男にとっては単なる装飾品として飾るだけ

で満足だったのだ。
それがこの成金商人の不幸の始まりだった。
商人が王宮に通され、布を届けて帰る途中、王宮の外庭で狩りに出かけていたブライト王子一行とすれ違った。
その瞬間、不吉な時計は時を刻む代わりに、キラリとその忌まわしい光を放ったのだった。

「待て！」と馬上のブライト王子が、既に声変わりした凛とした声で、その頭を下げている成金商人に命令した。
「その時計はそなたの物か？」
「はい」と商人は得意げに答える。彼は勘違いしていた。王子が自分の時計の美麗さに目を留めたと思いこんだのだ。

「そうか」とブライト王子は不敵に微笑んむと、さっと片手をあげた。
「こいつを捕らえろ！」
「え？」と商人は訝しげに顔をあげる。
「その盗人を捕らえろ！」と再びブライトは命じ、すぐさまその商人は縄をうたれて牢獄に繋がれて行った。
「なぜだ！」と言う悲痛な叫び声を残して。

6

6

成り上がりの毛織物商人は、激しい拷問に直ぐ白状した。その銀の壊れた時計は、闇市である男から買ったとのことだった。兵士達は闇市に行き、瞬く間にその男を捕まえると、もっと激しい拷問を加えた。

「さぁて、この時計を持って来たのは誰だか言うべき時が来たな。そもそもこれがどなたの物か、お前は知っているのか」

と尋問した無慈悲な兵士長は、恭しくその時計を掌に載せて顔を近付けたのだった。

「知りません……そいつはどうせガラクタ同然。もう壊れてしまって修復が効かない物です。銀に値打ちがあったにせよ、ただの装飾品に過ぎないので……」

これを聞いた兵士長は、その男を容赦なく殴りつけた。

「ばかもの！　これはな、こちらのブライト王子の私有されていた物なのだ。祖父に当たる、元の王の持ち物であり値打ちがある無しではなく、大切な元王の形見なのであるぞ！」

「そ、そんな……」と闇市の男はガタガタと震え出した。

「そんなはずは無い。持って来た男は、けちな野郎でそんな値打ち物を持っているはずが無いような人間だった。

奴はこう言ったのだ。これはごみ溜めで拾ったのだと」

「ごみ溜め！？」

兵士長は益々いきり立つ。

「おそれ多くも、ブライト様の持ち物を、ごみ溜めの物だと申すの

か！　それだけでお前は死罪に値するだろうよ」
「やめてくれぇぇ～～～～！！」と哀れにも天上からぶら下がっている男は悲鳴をあげた。
「言うから、言うから、俺を死罪にはするな～！」と男は喘いだ。
「ではこれはどこから？」
「厩番の、貧相な男でトロイと言う奴だよ……そいつが、なぜこれを持っていたかは、俺は知らねぇ」

「厩番のトロイ？」と兵士長は首を傾げたが、側に居た若い兵士が耳打ちした。
「トロイと言うのは、“あの日食の暗黒で産まれた王子”エクリース様を預かっているものです！」
「なんと申す！　ではそいつは……？」
「おお！　俺は破滅だ！　そんな物だったとは！　あの王子に係るものは、ことごとく不幸になると知っていたら、こんな代物はてこでも買わなかったのに！」
と男は喚いた。

「もう遅いな」と兵士長は冷淡に言うと、その男を鞭打った。
絶叫が響く中、兵士長は顎で命令した。
「早速トロイを連れて来い！」
「はっ！　確かに承りました」
若い兵士とその部下達は、深い森の奥へと駆けて行った。

☆　―　☆―

☆

雪解けと共に、遥か北の果てへ行かされると言うエクリースは、このところ毎日浮かない日々を送っていたが、けれども一人だけ喜んでいる者が居た。それこそ、トロイその人だ。

トロイは早くこの厄介なお荷物を遠くへと旅立たせ、自分達の責任を放棄したかったのだ。その時は刻々と近付いている。

けれどもトロイは知らなかった。時は無慈悲なもの。その刻々と刻む時は、今度は自分に牙を向いて来るということを。

「エクリース様。お代わりはいいのですか？」

と豆のスープを気だるそうに木のスプーンでかき回しているエクリースを、心配したジュリアが顔を覗き込んで尋ねた。

「ああ、もう要らない」とエクリースは投げやりに言い放つと、つとその木皿を向こうに押しやった。

「もういいの？　じゃあ、僕が食べていい？」とグライスが頼み込んだ。最近、グライスの背中はかなり曲がり、将来せむしになるのは明らかだった。

ジュリアはそのような息子を不憫に思っていたが、この時代ちゃんとした薬など何も無い。

「ああ、いいよ。最近さぁ、何だか食欲が無くて。決して不味いわけじゃないんだよ」

とエクリースが言い訳を言った時、扉が蹴破られ、サーっと一陣の冷たい風が吹きぬけて行った。

「な、何者なのです!?」とジュリアが驚いて立ち上がると、さっとトロイの顔が青ざめた。

三人の兵士達は残忍な顔付きで、すぐさまトロイを羽交い絞めにした。

「お前がトロイだな！　容疑は分かっているはずだ！」

トロイはその時、自分の運命が尽きたことを知った。

7

7

トロイが引き立てられて行った後、ジュリアの狭い小屋では沈黙が重く漂っていた。

トロイの容疑は、「ブライト王子の時計を盗んだ」という物であり、それはエクリースにとって非常なショックだったのだ。

親代わりのトロイとは余りいい関係ではなかったものの、けれどもトロイはやはり自分を庇護していた大切な人。そして愛するジュリアの夫であり、兄弟のようにして育ったグライスの父なのだから。

「僕が、ブライト兄上からの贈り物である時計を失ったのは確かだ」とエクリースは力なく言った。「けど、だからと言って、トロイがそれを盗んだとは思いたくない」

「見たわけではないのでしょう、エクリース様！　それをあの人に差し上げたと言って下されば、あの人は助かりますわ」

とジュリアが揉み手をしながら言う。

「でも嘘をつくのは嫌だ。別にあげたわけじゃないもの」とエクリースは否定した。

「兄上からの品物を、誰かにあげるなんてこと、できっこない」

「でもそれじゃ……父ちゃんは、死刑になっちゃうよぉ」

とグライスはほとんど半泣き状態だった。

「大丈夫だよ。僕が兄上や父上に何とかしてもらうように言うから。きっと拾ったけど、そのまんまにしている内に、魔が差したんだよ。少しのお金の為に目が眩んだんだ」

「少しのお金と仰いますが、エクリース様」とジュリアは初めて激しい口調で言った。

「わたし達、庶民にとっては、大層な額なんですよ！」
「そうか……ごめん……」とエクリースはうなだれた。

「でも、拾ったとしても、父ちゃんはきちんとエクリースに返すべきだったんじゃない？」
とグライスは涙のあとのある瞳を上げた。
「それはそうだし、正論だけど……でも悪魔が囁いたのよ！　あの人がそんなことまでするとは思えない！」
「大丈夫だよ、ジュリア！　必ず僕が何とかするから」
エクリースは気が咎めながらも、必死になって言い張った。けれどもそれ以来、この小屋には冷たい空気が流れていくのを、エクリースは敏感に感じ取っていたのだ。

☆　―　☆　―　☆

酷い拷問を受けながらも、トロイは盗んだ事は否定した。そして、ひたすらエクリースが自分に与えたのだと主張したのだった。
「本当とは思えぬ」と兵士長は思ったものの、一応エクリースを召還することを、王とブライト王子に進言した。
ブライトは、即座に、
「エクリースが、わたしが贈った物をそう簡単に他人にあげるはずがない」
と主張したが、王は一応エクリースを呼び戻す事にしたのだった。

かくしてエクリースは、途中森の中で例のブルーの絹の服に着替えさせられ、王宮に召された。
王宮では、途中の廊下で、侍女達や貴族達がこの美麗に着飾った少年を見て、皆溜息を付いたのだった。
「あの可愛らしい少年は誰？」
「天使のような、ステキな少年ね」

「あのようなお美しい少年は、ブライト様以上かも知れぬ」
と王宮の人々は噂し合ったが、それがよもやエクリース王子だとは気付かず、あとになって知らされたのだった。それほど、エクリースは誰も気付かないうちに、見目麗しい美少年へと成長していた。

8

8

王宮中の人々の視線を一身に受けているとは露知らず、エクリースはいそいそと奥の間、王とブライト王子がいる美麗な部屋へと案内された。

けれどもそこに立っていた二人の様子はかなり奇妙で、不思議な目付きでエクリースを眺めるのだ。エクリースは思わず、その場に立ち尽くした。

「父上……兄上……」とそこまでしか言えず、エクリースは絶句した。

「なにか、わたしに御用とか？」

「そうだ、エクリース、我が子よ」と呼びかける王の言葉は取って付けたような響きがあった。「ついては、ブライトがお前に聞きたいそうなのでな」

「はい」とエクリースは心臓をバクバクさせながら答えた。

「エクリース」と今度はブライトが呼びかけた。もうブライトは、少年から若者へと差し掛かっている。声変わりもし、成長が著しい。

「お前はわたしが贈った時計を、どうしたのだ？」

「はい。……無くしてしまいました。兄上、どうも済みません。うっかりして……」

「そうか」とブライトは頷く。「お前を育てている厩番のトロイは、お前がその時計をトロイに渡したのだと申しているが、それはまことか？」

ブライトの碧い瞳は、射る様にエクリースに注がれていた。ブライトは口を開いたが、しばし躊躇っていた。

嘘をついてトロイを助けるべきか、それともブライトの前では正直に答えるべきか。まだ幼いエクリースには選ぶ事などできなかった。答えは一つしかない。

「いいえ」とエクリースは小声で答えた。「わたしは、トロイに渡したりはしていません」

「神かけてお誓いなさい」と横からシスリー長老が険しく言った。

「そうでないと、地獄に墜ちますぞ、エクリース様」

「はい、神かけてその通りです」

「やっぱり」とブライト王子は溜息をついた。

「待て！」とその時王が口を開いた。

「まことだと申すのなら、トロイの前でそう証言するが良い」

「父上！　トロイは土牢に捕らえられております！　そこに案内するのは如何なものでしょう。今のエクリースの証言だけで充分ではありませんか。年端も行かぬ弟をそのような陰気な場所に連れて行くのは……わたしは納得できません」

ブライトは言い張った。あの陰惨な場所に連れて行くと、まだ少年の域を出ていないエクリースの証言が変わるかも知れないと危惧したからだ。

「ブライト！　真実は一つしかない。ここでそう言うのなら、エクリースはトロイの前でも真実を語ることだろう」

「状況によってくるくると証言が変化するというのなら、エクリース様の方が嘘つきということになりますな」とシスリーも王に同意した。

「僕は嘘つきじゃない！」とエクリースはシスリーの姦計にかかって、そう叫んだ。

「エクリース！」とブライトが呼んだが、エクリースは兄の方をチラッと一瞥しただけだった。

「それじゃあ、参りましょうか、エクリース様」
シスリーの有無を言わせぬ重々しい一声で、とうとうエクリースは今まで一度も足を踏み入れた事も無い、暗い地下牢へと連れて行かれることとなった。

☆　―　☆　―　☆

エクリースは前にシスリー、後ろに兵士達に取り囲まれて、土牢へと向った。
じめじめした湿度の多い陰気な場所には、昼間だというのに太陽の届かぬ暗闇が広がり、エクリースには恐ろしかった。
やがて松明の灯りの元、前方に壁にぶら下がっている半裸の男を見て、エクリースはハタと足を止めた。身がすくんで、それ以上歩けなくなったのだ。

トロイは力なく頭を上げ、エクリースを認めると微かに嗤った。
「おお！　これはこれは王子様では？」
「こやつが、エクリース様から銀の時計を盗んだ奴です」
とシスリーが言うと、
「盗んだかどうかは、わたしは知らない。見ていないもの」
とエクリースは幾分罪が咎めながら呟いた。
「けれども、この卑しい男に差し上げたわけでは無いのでしょうな。この男は例の時計を闇で商人に売り払い、その金で散々街で飲み食いし、売春婦と遊んだのですぞ！　そんな男に、よもや情けはかける必要はございませぬ」

「トロイ……」とエクリースは呼びかけると、一歩近寄った。
「わたしの時計を、どうしてそうしたのだ？」
「おや、これはこれは。時計はあなたがわたくしめに下さったのではありませんか」

とトロイは卑屈に言い張った。
「トロイ。どうしてそんなことを言うのだ!?」とエクリースは哀しみに浸りながら言いかける。
「わたしはお前に時計はやってはいない!」
この言葉を聞くや否や、トロイの顔は憤怒で真っ赤になった。そして鎖に繋がれた両手を激しく揺らしながら、唾を吐いた。

「エクリース王子! お前の将来に呪いあれ! 今までの俺達の恩義すら感じないとは!」
「でも……わたしは嘘はつけないよ、トロイ!」
「それでいいのでございます、エクリース様」
とシスリーが冷たく言いかけた。
「さ、わたしが証人となりました。ここを去りましょうぞ。この者には残酷な死刑が待っておりまする」
「死刑!? そんな……それは……」とエクリースはどもった。
「さ、さ、参りましょう。この忌まわしい場所を去るのでございます」
シスリーはエクリースを促すと、無理やりその腕を掴んでその場からエクリースを連れ戻した。背後にはエクリースを呪うトロイの絶叫がこだました。

9

9

トロイは死刑になる事が決まった。
その日以来、あれだけ自分を可愛がっていたジュリアの態度が一変し、そして兄弟のように育ったグライスが冷たい目を向けるようになった。エクリースは一人だけ外でぼんやりと過ごし、小屋には夜に寝に帰るだけになった。
自分がしたことが本当にいいことだったのか、それとも間違っていたのか、それすらも自信が無くなり、淋しい風が吹いていくようだった。

ある日、それは嵐の日だったが、仕方なくエクリースが小屋の隅に両膝を抱えて座っていると、ジュリアが片手に柄杓を持ってやってきた。
「エクリース様、お話がございます」
「なに？」とエクリースは両膝から顔を上げた。
「わたしは今までこの１１年弱、あなた様を愛情を持って育ててきました。全てを犠牲にして、そうしてきたのです。それなのに、あなた様の仕打ちは……ひど過ぎます！　たった一言、そうだと言えばいいものを、そうは言わず、その為わたし達は夫であり父親であるトロイを失い、路頭に彷徨ってしまう事でしょう！　そんなことなら、あなた様をここまでお育てするつもりは無かった！！」

「でも、ジュリア。僕は嘘はつけなかったんだ！　嘘はつけない。そうなれば地獄に墜ちるって言われたんだよ」
「嘘も方便というのですわ、エクリース様」
「ジュリア……お前の愛は、無償の愛だと思っていた」

「エクリース様！　これだけは言っておきますわ」とジュリアは眦を吊り上げた。
「この世に、“無償の愛”などという馬鹿げたものは在りません！」
「馬鹿げたもの……」とエクリースは言ったが、急に悲しくなって俯いた。
「分かったよ、ジュリア。分かった……僕が間違っていたのかも知れない」
「もう遅いんです」とジュリアは冷たく呟いた。

愛し、そして第二の母だと思っていたジュリアに激しく罵られ、エクリースの気持ちは暗澹となった。やがてそれは、外の嵐と負けないほどの嵐となって、エクリースの心に激しい風が吹き抜けていく。

―僕にはもう行く所が無いんだ。王宮にも、この厩にも。……父王や兄上が言うように、僕は最果ての寂れた領地にしか、居る場所が無いような気がする。もう直ぐ春が来たら、僕は率先して彼の地に赴こう！　だけど……その間は、ここに居ることは出来ない。

エクリースはふらふらと立ち上がると、そっとドアに近付いた。外は風雨が荒れ狂っている。エクリースはサッとドアを開けると、その中に飛び出した。
早春の冷たい雨も、吹き荒ぶ風も今のエクリースには何にも感じなかった。エクリースはただ闇雲に、行き先も分からず走り続けた。森の奥へ奥へと、ずっと先に、暗闇も嵐も何も怖くなかった。本当に怖いのは、人の心だと今知ったのだから。

けれども何かにぶつかり、エクリースは倒れた。それは古い木の切り株で、その根元にエクリースは座り込み、暗い森をただ見つめていた。風雨で全身ずぶ濡れだったが、その冷たさも何も感じずに

座っている内に、次第にエクリースはうとうととし始めて頭を木の株にもたれると、眠ってしまったのだった。

☆　―　☆　―　☆

エクリースが失踪したと気付いたジュリアとグライスは、周辺を探し回ったが諦め果てて小屋に戻った。けれども驚きはまだあったのだ。

小屋には兵士達が居り、二人の帰りを待っていた。そしてエクリースが居ないと知ると、その兵士達はゆっくりと立ち上がって不敵に微笑んだ。

「明日トロイが、王宮の高窓から吊るされて死刑になると伝えに来たのだが……どうやらエクリース様も居ないらしいな。もしもエクリース様の身に何かが起こると、そなた達二人の命も無いと思えよ！」

ジュリアとグライスは真っ青になった。少なくとも、トロイの死刑まで何も無ければいいと思っていたのだが、エクリースがまさか失踪するとは思わなかったからだ。

けれども朝日が差す頃、兵士の一人がやっと木の株で眠る、あどけない少年を発見したのだった。

「エクリース様、ですか？」とその若い兵士が言いかけると、エクリースは目をパチリと開けて、その兵士を見上げた。

「そうだけど……」

「良かった！　わたしはビクターというしがない兵士でございます。あなた様を無事に見つけて、とても嬉しゅうございます」

エクリースはその兵士ビクターの真摯な瞳を、じっと見上げた。

10

10

若い兵士ビクターと共に小屋に戻ったものの、ジュリアとグライスの親子はますますエクリースには冷たくなった。食べる時も無言、そして終始冷たい空気があたりに漂っていた……。

けれども一つだけ朗報があった。エクリースを見つけ出したこの若い兵士は、エクリースのお守り役としての任務を与えられ、この小屋でエクリースがドリアン伯爵のもとに行くまで共に住むようにと言われたのだ。

それはブライト王子の配慮だった。

ブライトはエクリースの身を案じていた。夫を殺されるという身になったジュリアが、エクリースにその憎悪の刃を向きかねないと、なんとなく感じ取り、そして護衛を付けるようにと配慮したのだった。

エクリースはブライトの配慮には気付いていなかったものの、どことなく純朴で誠実そうなこの兵士に、親しい感情を持つようになっていた。

けれども、トロイの処刑の日になると、ジュリアとグライスに対する奇妙な申し訳なさで、どこか胸苦しくなってくる。

「わたしどもはこれから行ってまいります」とその日の朝、ジュリアは慇懃無礼な言葉遣いで、エクリースに告げた。「我が夫の処刑をこの目で見て参りますゆえ」

その言葉遣いには、明らかな皮肉と憎しみが込められているのを、ビクターは察しエクリースを心配そうに見つめたが、エクリースはただ、

「ああ」としか言わず、横を向いた。
「それでは」
そう一言だけ言うと、ジュリアとせむしのグライスの二人は、城内に向って歩いて行った。その後姿は背中が曲がり、やるせない無念の思いを表していた。

「ねぇビクター」と、その後姿が見えなくなった頃、エクリースは若き兵士に向って親しげに言いかけた。手には、例の忌まわしい時計がある。忌まわしいが、さりとてブライトから貰った物だ。そう簡単には手放せない。
「はいっ、何でございましょう？」
「正直に言うのが悪い事なの？」
「はい……その答えは、まことに難しいですね」
「どうして？」
「時と場合によりまするから」
「僕には……分からない」とエクリースは正直に答えた。
「王子様は、今だ幼いからでございますよ。それ以上は、深く考えませぬように。それはそうと、もうあと数日でエクリース様は北の果てに赴かれるのですね」
「そちらの方が、僕にとっては気持ちが楽なんだ」とエクリースは少しだけ微笑みながら言った。「僕はここに居ない方がいい」
「それは……」
ビクターは絶句した。この目の前の幼さを残した美少年が、深い洞察を有している事に気付いたからだ。

「お淋しいでしょう」
「いいや、全然」とエクリースは答えた。
「けど、兄上と会えなくなるのは少し辛いけど」
「いや。兄上様は、こっそりとお忍びで直前にここに来られる予定です」

「ええっ！？　ほんと？」とエクリースは飛び上がった。ビクターは少しだけ後悔した。このことは黙っているようにと、騎士長のウーリッヒから言われていたからだ。
けれども今更嘘だとは言えない。

「本当のことでございますよ」とビクターはにっこりと微笑み返しながら言った。
「わたしも、正直に申し上げましたね」
「ほんとだね」
エクリースも嬉しそうに言い返す。ところがその途端、不気味な鐘の音が、遠く王宮の方から響いてきたではないか。
「何なの？」
「ああ、あれは」とビクターは躊躇したが、意を決して続けた。
「処刑が行われたという合図でございます」
「そうか」とエクリースは深くうな垂れた。

「トロイは王宮の外壁から、吊るされました」
ビクターは義務的に告げた。
「まことに残念なことですが」
「僕は、ここの人達を不幸にする気は、毛頭無かったのに」
「それは分かっておりますよ、エクリース様！」
「それなのに……どうして？」
頭を上げたエクリースの瞳には涙の露があった。
エクリースがそっとビクターに頭を傾げると、ビクターはいとおしそうにその小さな頭を抱き止めた。

11

11

大勢の人々が見物に来ている城内では、鐘の音の合図と共にトロイが塀から頭上高く吊り下げられた。ボロを身に纏っただけの囚人は哀れにぶら下がり、その瞬間人々はざわめき、ジュリアは悲痛な叫び声を上げた。

息子のグライスは、そのような母親を何とかして抱き止めた。

「おっかさん！　しっかり！」

「ああ、グライス！　わたし達は過ちを犯してしまったのよ」

とジュリアは折からの強風にぶらぶらと揺れるトロイの死骸を見上げながら、悲痛に喉から搾り出した。

「過ちって、なに？」

「あの“不幸を呼ぶ日食王子”を育てるんじゃなかった！　やっぱりあの王子は、デスティだったのかも知れないというのに！　それなのにわたしは、要らぬ同情心で忠義立てしてしまって、お前をも父亡し子にしてしまった……。もうわたし達に行き場は無いわ」

ジュリアはグライスにしがみつくと、おいおいと泣き出した。人々は三々五々と散り始めたが、ジュリアとグライスだけはいつまでもその場に佇んで居たのだった……。

「かあさん」とグライスは乾いた声で言う。「僕が仇を討つ」

「え？」とジュリアは顔を上げた。「なんだって？」

「だから、僕が仇を討つって言っただろ」

「どういう意味なの？」

「まあ、まかせて」とグライスは小さな胸を叩いて不気味に言った。

「仕返しをするのさ」

「恐ろしい！　お前までそんな気持ちになるとは！　もう諦めるほかは無いと言うのに！」

ジュリアは小柄な息子に取りすがったが、グライスの純真な瞳に、ある邪悪な何者かが宿っていたのをジュリアは知らなかった。

☆　―　☆　―　☆

「ねえ、グライス……君、怒ってない？」と翌日エクリースは何事も無かったかのようなグライスに向って、恐る恐る言いかけた。グライスはくるりと振り向くと、

「いいや。結局はとうちゃんが悪いんだし。人の物を盗んで売り払うなんてことをしたからだよ」

「ごめん、グライス。でも僕は君達がどこかで仕事を見つけるのを、兄上や父上に頼み込むよ。約束する」

「ありがと、エクリース……いや、王子様」

「そんな……そんな言い方やめてくれよ」

「けど、そうだもん」とグライスは微笑んだ。その微笑みの陰に毒を隠して。

その時、高らかな角笛が聞こえ、明らかに蹄の音が聞こえだしてきた。

「あ！　誰か来た！　あの角笛は……ブライト様！？」

「そうだよ、グライス！」とエクリースは興奮して叫んだ。ビクターの言った通りだったのだ。ブライトはエクリースを忘れてはいなかった。

エクリースは勢い良く、小屋を飛び出した。けれども瞬間的に、何かを感じて足を止めた。遠くにブライトが、例のアラブの馬に乗っている姿が見える。けれどもそれは、エクリースには、“幻影”のように、そして蜻蛉のようにゆらゆらと揺れて見えるのだ。

「兄上……」と言うエクリースの言葉が尻すぼみになった。けれども、ブライトは頓着せず、馬から下りて真っ先にエクリースの元に駆け寄ると、ひしとエクリースを抱き締めた。直ぐ側には騎士ウーリッヒ、そして数人の兵士達が付き従っていた。

ブライトに抱かれたエクリースは嬉しい反面、けれどもなにかぞっとするものを感じて身をすくめた。

「どうした、エクリース？　顔色が悪いぞ」と問いかけるブライトに、エクリースは強張った顔で答えた。

「べ、別に……なんでもありません」

「今日はお前の１１歳の誕生日だったな、エクリース」

「え！？　あ、そうか」

エクリースは自分の誕生日すら忘れていたのだ。なぜなら、毎年ジュリアが心づくしの料理を作ってくれていたのに、今年は何も無かったからだ。

「なんだ、忘れてたのか」

そう笑うブライトは、輝くばかりに美しい王子だ。けれどもエクリースの背中は、なぜかぞくぞくしていた。なぜだ？　どうして……？

「さ、エクリース。又例の川に行こう」

とブライトは、奥に息を詰めて潜むジュリアとグライスを無視して、エクリースを誘った。

エクリースは躊躇いがちに振り返った。そしてそこに、憎悪に満ちた瞳を見た。グライスのぎらぎらとした視線は、まるで鋭い棘のように身体に感じる。

「良かったですね、エクリース様」と純朴なビクターだけが、何も疑わずにエクリースに囁いた。「ゆっくりと兄上と時を過ごして下さい。もうしばらく会えないのですから」

「そうだね」と呟いたエクリースは、再び何かもやもやしたヴィジ

ョンに襲われて顔を歪めた。けれども、それに気付いたのは誰も居なかった。

エクリースとブライトが歩いて行くそのかなり背後に、グライスが足音を忍ばせて秘かに追い駆けて行く。

12

12

芽吹き始めた花々の蕾があちこち、そして若草色になった野原を、エクリースとブライトの二人はゆっくりと歩を進めていた。辺りはすっかり春めき、遠くからせせらぎの音が聞こえる。

けれども二人のかなり後ろには、ブライトの馬を持った従者達と騎士ウーリッヒが従っていた。従者達からは二人の背中は見えるものの、声は全く聞こえない。

そして更にその後ろを、グライスがピッタリと後をつけていた。田舎育ちのグライスは、小柄な故か、足音が全然しないので、前方を行く誰もがグライスの存在に気付かなかった。

「良い日だな」とブライトが、浮かない顔付きのエクリースに向って言いかけた。

「そうですね……」

「このようなうららかな日和に生まれたお前は、幸せ者だ」

「でしょうか？」とエクリースはやっと沈んだ顔を上げた。

「ああ、弟よ！　トロイのことなら気に病むな。あいつは、犯罪者だったのだから」

賢いブライト王子はエクリースの悩みを察して、そう言った。

「でも兄上。残された家族はどうなるのです？　路頭にさ迷わせないようにして下さい。そう父王に伝えて下さい」

「お前は優しいな」とブライトはエクリースの頭を撫でた。「分かった。そう王に伝えよう。なんと言っても、二人はお前をここまで育ててくれた者達だ。例え父親が処刑されたにしろ、残った家族には何の罪も無い」

「ありがとう、兄上！」
胸のつかえが降りたように感じ、初めてエクリースはニッコリ微笑んだ。その様子を見て、後ろの従者達一行は微笑ましく感じた。けれどもグライスは……。
―あいつめ！　こっちの気も知らずに、へらへら笑っていやがる！　俺達の不幸を嗤っているんだ！
グライスの心は、今や邪悪なものに染まっていた。何を聞いても何を見ても、それは自分達の不幸をせせら嗤っているようにしか見えないのだ。
グライスの暗い情念を知らず、こちらの二人の兄弟はやがて川の畔に来て、その柔らかい草地に腰をおろした。
「昨年もこうやって、お前と話をしたな。けれども一年が過ぎるのは早いものだ。もう直ぐ、お前は北の果てに行かされる。しばらくは会うことも出来ないな」
「兄上」とエクリースは躊躇いがちに言いかけた。
「なんだ？」
「これ」
そう言いつつ、エクリースはポケットから、例の銀の時計を取り出した。そしてそっとそれをブライトの手元に渡した。
「返します……これ」
「どうして？」とブライトは幾分訝っていた。
「時とは恐ろしいものだ、と言われたので」
「何を言う！？」
「決して兄上の好意を嫌がってるのではありません。時計は単なる機械で、銀製品。それは人の心を醜く変えます。けれどもそんなことではなく、わたしは“時”そのものが怖い。それは手に入れられ

ないし、決して元には戻せない。そして矢のように早く、いずこかへ飛び去って行く。これを見ていると、いつもそう思うんです」

「なんだ、そんなことか」とブライトは微笑んだ。「そんなことは気にしなくていい。少なくとも、これはわたしだと思って、持っていてはくれないかな？　これは兄だと。そして兄であるわたしは、常にお前の味方なのだと」

「兄上……」

エクリースは改めて兄ブライトの心の優しさを感じて、嬉しくなった。エクリースはその時計を再び、元のポケットへとねじ込んだ。

「絶対に離しません。これは兄上なのだから」

「そうだよ、エクリース！　……それにしても、お前は一年の間に随分成長したなぁ。身体だけではなく、心もまた」

ブライトは愛する弟の肩を抱き寄せた。

「あ！　何か跳ねた！」とエクリースが川面を見て叫んだ。

「鱒かな！」とブライトも立ち上がる。「行ってみようか」

「ええ」

兄弟は恐る恐る川の方へと近寄った。

「やっぱり鱒ですね！　これを料理するのがジュリアは上手いんです！　でも流れは急だから……魚を獲るのは、それは、それは……トロイの役目でした……」

エクリースは急にトロイの恨みがましい目付きを思い出して、鳥肌が立った。嫌な予感にふと後ろを向くと、ブライトの愛馬の陰から一人の男の姿が現れているのを見たのだった！　それは、以前見たアラブの兵士のようでもあり、そしてトロイのようでもある。その陰は、ゆらゆら揺れながらこちらに向って来るのだ。

「兄上！」とエクリースは叫んだ。

「ん？」

「ここから早く去りましょう」

「え？　何を申す？」
「何だか、嫌な予感がして……」
「弱虫だな、お前は」とブライトは笑った。
とその時、その笑顔がまだ残っている内に、エクリースに向って突進する影が、あっという間にエクリースを川へと突き落としたのだった。
「やったぜ！」とその影のようにも見えたグライスは、雄叫びを上げた。同時に、グライスを捕まえようと従者達がこちらに駆け寄って来る前に、ブライトはエクリースを助ける為に、躊躇いも無く冷たい川へと飛び込んだのだった。

13

13

「あ！　ブライト様～～！！」と騎士ウーリッヒが絶叫したが、既にブライトは川の流れに逆らって、エクリースの頭の方へと泳いでいく所だった。

雪解け水の流れはかなり急で、泳ぎが得意なブライトでも、エクリースの所に近寄るのはかなり大変だった。おまけにエクリースは泳げないのだ。

「エクリ～～ス！！」と呼びかけるブライトの声に、溺れかかっていたエクリースは微かに反応した。けれども流れは二人の距離を縮めるばかりか、反対にブライトの体力を奪って行く。既にエクリースは頭だけが、辛うじて浮いているばかり。

ウーリッヒは着ていた鎖帷子（くさりかたびら）を脱ぎ捨てて、自分も飛び込んだ。次いで飛び込んだのは、ビクターだった。ビクターはブライトよりも、エクリースの方に向って力強く泳いでいく。

一方、ブライトはようやくエクリースの元にたどり着いた。

「エクリース、わたしに？まれ！」

そう叫ぶと、溺れかかっているエクリースは大量の水を飲みながら、必死になってブライトに？まった。けれども溺れる者の力は、馬鹿には出来ないほど強く、ブライトは逆に水に沈んでいく……。

「エクリース様！　ブライト様ではなく、わたしにお？まり下さい！」

とやっとエクリースに近付いたビクターが叫ぶが、必死の形相のエクリースには何も聞こえなかった。というより、何者かがエクリー

スの耳に蓋をしてしまったかのように、エクリースはただ闇雲に、ブライトに取りすがっているだけだったのだ。

そして…ブライトはふっと居なくなった……。ブライトは急流に押し流され、その金色の髪だけが浮かんでいるだけで、それも次第に遠ざかって行く。

エクリースは直前にビクターの手にしがみついたので、ビクターはエクリースを岸へと引っ張って行った。

けれども、ウーリッヒは何か悲痛に叫びながら、流れ行くブライトを追い駆けつつ、猛烈な勢いで泳いでいく。岸辺に居る他の従者の内、何人かはブライトの姿を目で追いながら、走っていた。そして一人が先回りをして飛び込み、ようやくブライトを捕まえる事が出来たのだった。けれども既にブライトの意識は無かった。

びしょ濡れで震えているエクリースが助け出されると、がんじがらめに縛られたグライスが「ちっくしょう！」と罵声を浴びせた。

「お前なんか、死んじまえばいいのに！」

その直後、従者達に殴られて転がったものの、グライスはその小さな身体を震わせながら、尚も悪態をつき続けた。

「お前なんか、生きていてもみんなを不幸にするだけだい！　今は助かったとしても、いつかお前はやられちゃうぜ！」

エクリースは哀しげにグライスの方を振り返った。

「グライス……君は、僕の兄弟だったと言うのに……」

「兄弟なんかじゃない！　僕は呪ってやるからな！　おとうを殺し、おっかあを不幸にしたお前を！」

エクリースは目を見開いたまま、何も言い返すことが出来なかった。

「エクリース様、今は放っておきなさい」とビクターが囁いた。

けれども安堵したのもそれまでだった。ウーリッヒともう一人が、

ぐったりしたブライトを抱きながらやって来たのだ。その顔は、むしろブライトよりも蒼白だ。

「兄上？　兄上～～～！！」とエクリースは自分のことも忘れて、叫んだ。

「兄上は大丈夫なの？」

それには答えず、ウーリッヒは無言でブライトを草原に横たえた。ブライトは金髪を散らしたまま、目を瞑りびくとも動かない。その姿は、昇天した天使のようにも見える。

「ねえ、どうしたの？　兄上は……息してないよ。どうして！？　なぜなの？　兄上……大丈夫なんでしょ」

思わず取りすがったエクリースに目を向けると、ウーリッヒは虚無的に静かに答えた。

「エクリース様……最悪の事が起こりました」

「最悪の事？　それって……兄上が……」

「そう。お亡くなりになりました」

そこまで言うと、ウーリッヒは堪えきれずに泣き出した。

「この野郎！」と一人が縛られているグライスを蹴り飛ばした。けれども、もう一人は冷たい視線をエクリースに投げかけた。

「僕を助ける為に……兄上は……亡くなられた……死んだんだね。嘘だ！　嘘だ～～！　だってさっきまで、兄上は僕と一緒に居て、楽しく喋ってたのに……そんなことって……」

「エクリース様。これは事実でございます」

と囁いたビクターの胸の中で、エクリースは泣き喚いた。そんなエクリースを、傷ついたグライスは自分の痛みも忘れて、小気味良さそうに見つめていた。

14

14

弔いの鐘の音が、王宮とそして城内全てに陰気に響き渡っていた。これから、溺死した第一王子ブライトの葬儀が始まる合図だと市民達は感じた。王宮には入れないが、どういう有様なのか、市民達は大体察していた。

その通り、王は嘆きと怒りの両方に身を打ち震わせ、臣下達は皆押し黙り、じっと控えていた。

その中には、ちょうど同じ日にここに送られてやって来た、ドリアン伯爵の嫡男、八歳のクリフが呆然と立ち、その横には蒼白で今にも倒れそうな様子のエクリースが、全身黒ずくめの喪服を着て、やはり直立不動で立ち尽くしていた。

黒髪黒い瞳のエクリースは、同じく黒い喪服を着ているので、全体的に皆よりもっと暗い影に覆われているように見えてしまう。そして元々色白の肌なので、血の気のないその顔はもっと白かった。けれども一方ではその黒の色が、なぜかエクリースの美しさに拍車を掛け、その美がある種の恐怖感を、あたりに与えているのだった。

「見て、エクリース様を」ととある貴婦人が、その隣の貴婦人にそっと囁いた。

「喪服がお似合いなのね、エクリース様は。喪の色が元々合っていらっしゃるわ、不吉な事に！」

「そうね。まるで、闇の王“デスティ”の権化のように感じてしまうのは、わたしだけなのかしら」

と言われた貴婦人がそう答えた。

「いいえ、いいえ！　わたしもそう感じるわ。いえ……恐らくここに居並ぶ全ての者達が、エクリース様が“デスティ”の生まれ変わ

りだと思っているに違いないのよ」

全ての冷たい視線が自分に注がれているとも知らず、エクリースはただ悲しみの底に沈んでおり、何も聞こえず何も見えなかった。ただ一人、祭壇の前に安置されている兄ブライト王子の遺骸を除いては……。

ブライト王子は、まるで眠っているようにしか見えなかったが、その身体にはもはや魂の欠片も無いことは明白だった。その横顔は美しいが、けれどももう二度と動かない。

祭壇上での司祭の祈りが終わったあと、王はやっとぬかずいていた顔を挙げた。その頬は真っ青で、涙のあとがある。

「お可哀想な王様！」と例の貴婦人が又囁いた。「あんなにご立派な跡継ぎを亡くされたのですから。本当に神様は無慈悲ですわね」

「次の跡継ぎはエクリース様になっていますが、よもやそういう事は無いでしょうね」

ともう一人が皮肉っぽく言い返す。

「そんなことあるはずがありません！　エクリース様は、そこに立っておられる可愛い男の子、クリフ・ドリアンの身代わりに、北の果てに赴かれるのですから。明日にでもね」

「まあ、それは体のいい“追放”ですわね」と相手が付け加えた。

「二度とお戻りはできないでしょうよ」

「多分……王様は、これでやっと後添えを娶られるでしょうね。ドロテア様の面影は、もはやブライト様の死と共に消え果た事でしょうから」

「しっ」とやっと貴婦人は制した。「そろそろ葬送が始まるわ」

兵士達がブライトの棺（ひつぎ）を持ち上げようと近寄ったその時、脱兎の様にエクリースがブライトの遺骸に駆け寄った。それはあっという間だったので、誰も止めることが出来なかった。

「兄上～～～！！」とエクリースは叫びながら、ブライトの方に突進してゆく。

「誰か！　王子を止めろ！」と騎士ウーリッヒは叫び、自分もエクリースを阻止しようと走り出した。

あと少しと言うところで、エクリースは兵士達とウーリッヒに捕まった。けれどもエクリースは手足をバタバタさせながら、なおも叫んでいた。

「兄上～！　わたしのせいで……わたしのせいでこんなことに！　なぜわたしより先に死んだんです！？　わたしは兄上をこの世で一番愛していたのに！」

「あなたのせいではありませぬ、エクリース様！」とウーリッヒはエクリースを万力のように抱き止めながら、素早く囁いた。

「ことの原因は、あの卑しいせむしのグライスです。父トロイの仇を打とうとして、あなたを川に突き飛ばした！　だからあなた様のせいではない」

「いや！　わたしのせいだ！　わたしの……わたしが溺れかかったから、兄上はわたしの身代わりに死んでしまった！　わたしの代わりに……」

「ええい！　見苦しい！！」

と突如、王の声が響き渡った。エクリースはその中に、深い怨念と憎悪を感じた。

「ウーリッヒ！　エクリースをこの場から連れ出せ！　ブライトの葬儀には出席させられぬ！」

「あ、はいっ！」とウーリッヒはすぐさま答えると、強引に暴れるエクリースをその広間から引きずって行った。

「明日、エクリース様が北に追放されたあと、正午にはあのグライスという男の子が処刑されるそうですわ。見に行かれます？」と貴婦人が言いかけると、隣の貴婦人はさすがに身をぶるっと震わせて

小声で答えた。
「いいえ。わたし……小さな年端も行かない子供の処刑は、とても見ることが出来ませんわ」
「そうですよね」と当てが外れたように、その貴婦人は言った。「でもわたしは参ります。父子揃って極悪非道な者達は、罰を受けねばなりませんもの」

その二人の貴婦人の側を、ぐったりしたエクリースが引きずるように連れて行かれ、貴婦人達はその有様を目で追っていた。
「二度と戻って来ないほうが、あの王子様の為でもありますわね」と一人がそっと言った。「わたし、あの王子が少し哀れに感じてきました」
「まあ！　酔狂なこと！」と最初の一人が、扇の陰からそう意地悪く付け足した。

第三章　物言わぬ王子　1

1

まだ消えやらぬ雪道が、北へ行くにつれ深くなっていくその中を、侘しい一行がとぼとぼと歩を進めていた。５人全員が馬に乗り、その内一人は黒い服とマントの少年だった。

「ぼちぼち日暮れになります」とビクターが騎士ウーリッヒに向かって言った。

「もう三日目だな。それにしても、険しい山道だ」

「あの鋭い峰々を見て下さい。恐らく夏でも解けない雪化粧ですね」

先頭の二人は立ち止まり、ふと遠くにある鋭い山々を見上げた。

「けれどももうすぐ到着ですよ。この峰を越えれば、そこには静かな谷がございます」

と猟師のいでたちの男が言いかけた。この男が道案内人なのだ。

「やれやれ、やっとか……長い道のりだったな」

「それにしてもウーリッヒ様。エクリース様は、この道中一言もお話にはなりませんが」

「悲しみのせいであろう」

「いや……そうでしょうかね～」とビクターはつと後ろを振り返る。無表情なエクリースが、どこを見るとも無い視線を漂わせ、ぼんやりと馬上に居た。

「以前はこうではありませんでした。結構お喋りするし、明るい面もお持ち合わせで」

「余程ショックなのであろう。気にするな」

「そうでしょうかね……」

と気遣わしそうにビクターは答えたが、直ぐに快活な笑みを浮かべた。

「さあ、いよいよですね～。長かったな～この道中は。ですよね、エクリース様！」

その問いかけにも、エクリースは聞いているのかいないのかはっきりせず、何も答えない。

「ほらね。やっぱり変でしょう、ウーリッヒ様？」とビクターはウーリッヒに囁いたが、ウーリッヒは黙したまま、馬に鞭を当てて駆け出した。

☆ ― ☆ ― ☆

確かに小さな峰を下り始めると、前方に夕日に輝く緑の谷が見えてきた。小さな小川の周りには、わずかばかりの農家が点在し、真ん中に林に囲まれた古びた館が見える。

「あそこが、ドリアン伯爵様のお屋敷でございます」

と道案内人が指差しながら答えた。「わたしは、クリフ様をお連れ申し上げたものですから」

「では、先に行って出迎えるように言ってくれ」

とウーリッヒは冷静に命じた。

「少なくとも、今晩はちゃんとした飯とベッドにありつけますね」

と、楽観的なビクターは、道案内人が駆け去ったのを見届けながら言った。

「さあ、どうかな」とウーリッヒは常に冷静だ。

迎える側のドリアン伯爵邸では、道案内人の伝言で右往左往していた。

「やっと来られたか！　随分遅いな」とぶつぶつこぼす伯爵に、

「きっと、何かあったんですわ」と奥方が取り成した。「少なくとも、あなた、クリフはちゃんとあちらに着いたそうですわ。美麗な

部屋と衣服を頂いたそうですわよ」
「一体、どんな王子様やら、だ」とドリアン伯爵は溜息をついた。

けれども、ベアトリスは道案内人が来ると、侍女と共に急いで自室に入り、乏しい衣装ダンスを開けて、あれやこれやと衣装の品定めをしていた。
「ねえ、これがいい？　それとも、このピンクの方が？　アンネット、どっちがいいと思う？」
「姫様には、どちらもお似合いですわ」と侍女のアンネットが答えた。
「でも、一番新しいこの薔薇色の服はどうでしょう？　この間異国の行商人が持ってきて、あたしが縫ったものですが」
「そうね！　そうだわね」とベアトリスは無邪気に手を叩く。「王子様は、一体どちらがお好きかしら？　やっぱりアンネット、あなたが縫った服よね、きっと」
アンネットは、いついかなる時にも快活さと無邪気さを失わない、この好奇心溢れるベアトリスが仕事抜きにしても好きだった。ベアトリスは、この陰気な気候、暗い館の中の“太陽”だったのだ。

「ほら、来た！」とベアトリスは、すりガラスを通して、下を見た。四人の男達が、馬に乗ってやって来た所だったのだ。
「あの黒いマントの少年が……エクリース様では？」
とアンネットがベアトリスの耳元で囁く。
「随分陰気な感じね」とベアトリスは囁き返した。「でも、やっぱり綺麗な方！」
「ご用心を！　あの方には余りお心を許さない方が宜しいかと」
とアンネットは、用心深く言ったのだった。

2

2

エクリース達一行が、ドリアン伯爵の陰気な玄関口にやって来たときには、ちょうど夕日が沈むところだった。

ドリアン伯爵夫婦が外に出て出迎え、夫人の方は優雅にお辞儀をしたが、チラリとエクリース王子を見つめ品定めをしたのだった。結果は余り良いものではなかったが……。

二人が丁重に出迎えたにも係らず、騎士ウーリッヒの態度は尊大で、おまけに肝心のエクリースは一言も喋らなかったし、表情を変えもしなかったので、こちらの二人は当惑したように顔を見交わした。

「ウーリッヒ様、やはり正直に経緯を申し上げた方が宜しいかと」とそっとビクターが耳打ちしたが、ウーリッヒはそれにも答えず、さっさと館の中に入って行った。そのあとを、エクリースは何も言わずに付いて行く。

廊下に待ち受けていた伯爵の従者や侍女達も、チラリとエクリースを一瞥していた。そして、やはりエクリースの蒼白な整った顔立ちが、人間の肌と言うよりも大理石のように白く、全く喜怒哀楽の表情が無いのに驚いた。

けれども伯爵夫婦も、こちらの従者達も何も言わずに一礼しただけだった。

その時、二階から長い階段を駆け下りて行く靴音に、誰もが―ただしエクリースを除いて―ビクッとしたのだった。

「姫様！　そんなにお急ぎにならないで下さいませ！」

と叫ぶアンネットの声には耳を貸さず、ベアトリスは転ぶように階

段を駆け下りると、突如エクリースの前にやって来て、さっとお辞儀をした。

「エクリース様ですね！　わたしは、ベアトリスと申します！　よろしくそこここまでお越しになりました。以後宜しく」とハキハキと物怖じせずに言う長女を、伯爵達は唖然として見つめていたが、慌ててその間に分けて入った。

「これは失礼を致しました。エクリース様、この娘は、我々の長女１０歳のベアトリスでございます」

エクリースはほんの一瞬だけベアトリスを見たが、何の変化も見せなかった。

「お怒りにならないますな、エクリース様」と急いでウーリッヒが耳打ちする。「ここは片田舎。これらの者達も皆田舎者ゆえ、小娘一人の礼儀作法もわきまえてはおりませぬので」

けれどもエクリースは何も答えなかった。ベアトリスは小首を傾げたが、それほど驚いている様子でもなく、微笑んで見せた。けれどもエクリースの表情はピクリとも動かない。

「失礼を致しました！　さあ、姫様。エクリース様はお疲れなのです。長旅でしたからね。晩餐の時にでも、ゆっくりお話すれば宜しいでは無いですか」

と慌ててアンネットが取り成し、ベアトリスの小さな手首を引いていった。

「済みません、エクリース様。不躾な態度、どうかお許し下さいませ」

と謝る伯爵夫人は、今始めてエクリースの中に何の感情も無いのを知った。

ウーリッヒはエクリースの肩を抱えるようにして、与えられた部屋に無言のまま入って行った。

一行が躊躇いがちの伯爵家の人々の目から遠ざかったあと、例の道先案内人が急いで戻って来て、伯爵にぬかずいた。

「エドウィン！　何ですか、あの態度は！　王子様といえど、あれではお里が知れますわね。一言も仰らないとは！」と奥方は感情を爆発させる。

「いいえ、奥方様。エクリース様は、道中ずっとああいう風でした。我々にも一言も仰らず、すっかり無表情であられました」

「あれでは、木偶の棒と一緒ではないですか！」

「まさに木偶の棒なのですぞ、奥方」と冷ややかに出たその言葉の主は、そっと戻って来たウーリッヒだった。

ウーリッヒは静かに、けれども冷然と伯爵家の人々を見回した。

「王子があのようになられたのには、訳があるのです。今それを述べなければなりませぬな」

そう言い始めると、ウーリッヒは全ての事の経緯をかいつまんで述べた。それを聞いた後、伯爵夫婦は深い溜息をついたのだった。

「分かりました……。けれどもこれからの難儀が知れますな。もっと早くそれを言って欲しかった」

「知ろうと知るまいと、あなた方はあの王子を預かった身。これから色々教育をして頂きます」

「はい、分かりました。けれどもウーリッヒ殿、教育よりも先にあの王子の心を溶かさなければならないのでは？　それは我々にとっては、非常な難題となりましょう」

と伯爵は静かに答えたのだった。暗雲に覆われている先行きに、大いなる懸念を抱きながら。

3

3

従者が晩餐の合図に、手に持っていた鐘を鳴らした。奥の部屋で、エクリースをめぐって口喧嘩していたドリアン伯爵夫婦も、ベアトリスも静々と何事も無かったかのようにダイニングに入って来たが、肝心のエクリースはなかなか姿を見せなかった。

伯爵家の人々が長い間待たされ、そのイライラが頂点に達しかけた頃、ドアが開きやっとエクリースが現れた。ここに来た時の地味な姿ではなく、例のブルーの衣装に身を包み、騎士ウーリッヒと共に静かに足音も無く入って来た様は、まるで亡霊がふいに現れたような気がして、居並ぶ人々は身を硬くした。

けれども直ぐ、人々はエクリースの氷のような立ち居振る舞いとは別に、惚れ惚れとするその美しさに目を奪われてしまったのだった。エクリースは黙ったまま自分の席についた。その時、ポケットから少しはみ出ていた銀の時計が椅子に当たって微かな音をたてた。

「エクリース様のお疲れは取れましたかな?」

と伯爵が恭しく尋ねたが、エクリースはそちらを見もせず、そして何も答えない。

「ほら、あなた。エクリース様はやっぱり変ですわよ。幾らあのような悲しい出来事があったにせよ」と横の奥方がそっと小声で耳打ちしたが、伯爵は渋面を作ったまま口軽な奥方を睨みつけた。

「あ、いや。まだまだお疲れは取れないご様子。けれども美味しいご馳走を頂くと、若様の気も晴れましょう」と慌ててウーリッヒが代わりに答える。

「そうですわね。それに……あのような……悲惨な……」

と言いかける奥方の袖を、伯爵は思いっきり引っ張った。
「あ？　あら、わたくし、なんてことを言ったのかしら？」
奥方は慌てて取り繕う。そのような様子を、エクリースの隣に座っていたベアトリスは興味深々で眺めていたが、エクリースのズボンのポケットから出ている時計をチラリと見つめ、無邪気に問いかけた。
「まあ、それは何なのでしょう！？　初めて見たわ！」
エクリースはチラッとそちらに視線を向け、大体自分と同じ年齢の女の子にやっと気がついたようだった。
けれどもエクリースの無表情は相変わらずで、一言も言葉を発しない。

「さあさあ皆さん、さぞお腹がすいていらっしゃる事でしょう！そろそろ夕餉に致しませんこと！？」
気を効かしたつもりの奥方は、手をパンパンと鳴らした。それを合図に、台所の奥から取り取りの料理やお菓子や飲み物、そして酒などが次々に運び込まれた。それはまるで、クリスマスと復活祭が一遍に来たようなご馳走だったので、ベアトリスは大はしゃぎだった。又ウーリッヒや扉の陰に立って居たビクターも、そのご馳走の臭いに思わずゴクリとしてしまう。
「こんな辺鄙な所ですから、大した御もてなしも出来ませぬが、一応森で獲った鶉や鶏、そして我が家の庭園で取れた野菜などで精一杯料理人が腕を振るったものなのですわ。お菓子も美味しゅうございますわよ」
と奥方は必死の形相で、説明しはじめた。

「ま、宮廷のお料理には叶いませぬが。それはそうと、エクリース様のお口に合うでしょうか？」
「充分でございます」とウーリッヒは丁寧に答えた。「エクリース様は、極めてご質素な生活をなさり、宮中にはほとんど居られなか

ったのですから。ですな、エクリース様？」
と聞くウーリッヒがじっとエクリースを見つめても、エクリースはやはり言葉を発しない。ここに居る全ての人々の視線がエクリースに注がれているというのに、エクリースは一切意にも介さない様子だった。

「あ……それじゃあ皆様、拙い田舎料理ではございますが、頂きましょう」
「それでは謹んで。奥方様」とウーリッヒが答えると、エクリースは黙ったまま料理を口に運び始めた。
横に座っていたベアトリスは、じっと例の時計を眺めていたが、ふと出来心でその時計に触りたくなり、手を伸ばした。その途端、エクリースはベアトリスを射る様な鋭い視線で睨みつけ、さっとその時計をポケットの奥の奥まで突っ込んだのだった。
ベアトリスはハッとして、哀しげな顔になったが、けれども直ぐに自分の不躾な態度を反省し、肩をすくめつつも、滅多に出ないお菓子に手をやった。その仕草が余りにも可愛らしかったので、いつもは冷厳なウーリッヒも思わず微笑んだ。
けれども唯一人、微笑まなかった人物……それはエクリースなのだった。

4

4

初夏になり、シスリー長老は王に呼ばれ、その長い回廊を歩いていた。けれどもシスリーは王の用件をほぼ察しており、その歩は老人にも係らず軽い。

ほどなくして着いた王の私室に入って行くと、王は椅子に座って何か物思いに耽っていた。

「シスリーでございます」

「おお、シスリーか。まあ入れ、そしてその扉をしっかと閉じよ！」

「はい、分かりましてございます」

シスリーが王に近寄ると、王の前のテーブルには三つの額に入った絵が並べられていた。「やはり」とシスリーは、心の中でニタリと笑う。

「シスリー！　わたしは後妻を妃として正式に娶ることにした」

「それはようございましたな」とシスリーは一礼した。

「ブライト亡きあと、今となってはエクリースただ一人。例え北方に追放同然に追いやったとは言え、やはりエクリースは世継ぎの王子には違いない。けれどもあれがこの国を背負って立つ事は、到底考えられぬ」

「当然でございましょう」とシスリーは頷いた。

「見てくれ、この絵姿を！　実は次の妃の候補が三人も居るのだ。南の隣国の末の王女、公爵家の次女、それと南方の大地主にして我が従弟に当たるロックフォードの娘」

「いずれ劣らぬお家柄ですな」とシスリーはしたり顔だ。

そしてシスリーは順にその三つの絵姿を覗き込んだ。

「皆、お美しい」
「絵の上ではな」と王は皮肉っぽく言い返す。「わたしは美しさよりも、逞しさを望むのだ」
「逞しい、ですかな？」
「そうとも！　前の妃は気立てが良く、大層な美貌だった。けれども身体は弱く、又産んだ一人は夭折し、もう一人は“デスティ”の生まれ変わりなどとよばれておる。
わたしは後妻には、美しさよりも気の強さ、そして体力の有る男勝りの姫を望むのじゃ。世間知らずに育った楚々とした姫ではなく」

その時、シスリーはなぜか胸騒ぎがした。けれども、それが何なのか分からない。
「なるほど、誠にご立派なお考えでございます」
「王たるもの、今度の婚姻は愛情ではなく、ある意味打算なのだ。が仕方ない。この国を守るためには」
「な～るほど」
「ついてはシスリー、お前の超能力の勘というやつで、この中で誰が最も男の世継ぎを産めるか、占ってほしいのじゃ」
「分かりましてございます」
シスリーは恭しく礼をすると、一枚一枚その絵をじっと見つめ始めた。そしてある絵姿の前で、ピタリと歩を止めた。
その絵は、南の隣国の末娘だった。ぱっちりとした黒い瞳ながら、髪は金髪。その不思議なアンバランスさが麗しいが、ただそれだけではなかった。その娘の絵姿からは、何かもやもやした得体の知れない物が漂って来たからだ。シスリーは思わず顔をしかめた。

「王様、この方の名前は？」
「イデット、と申す」
「イデット様で……」
「その者が気に入ったか！？」

「いえ、そういうわけでは……」
シスリーは言葉を濁すと、次にロックフォードの姫に移った。その姫からは、柔らかく暖かい光が溢れてくる。
「このお方は？」
「ヨランダ姫と言うそうじゃ」
「おお、そうですか！」
シスリーはこの姫の中にある、心の澄み渡った景色を知った。けれども、その姫からは又姫、そして又姫……。
「残念ながら、このヨランダ様は最も相応しくありませぬ」
「なぜじゃ！　わたしもこの姫が一番気に入っておったというのに」
「この方は、姫君しかお産みになられませぬ！」
「なんと言うこと！」
「けれども、イデット様は確実に男の子をお生みでございますぞ」
「それでは、残りの一人は？」

シスリーは最後の一人の絵姿を見つめた。それは哀しく儚げだったが、最も清らかな魂を持った姫君……。
「この方の名前は？」
「メロディーヌ」
「残念ながら、この方は姫君一人を産んですぐ、お亡くなりに……」
「分かった。では、イデット王女だな、わたしの妃としては！　決まりだ！」
「よしなに」と一礼したシスリーは、初めて悟った。そのイデットの絵姿が、妖しげに揺れ、そして邪悪に微笑んだのを。
シスリーはもと来た廊下を歩きながら、これで良かったのかどうか自問自答していた。けれどもほどなくして、次のお妃が発表された。それは南の隣国の末娘、イデット王女だと。

5

5

王宮では、ドロテアのあと釜としてイデット王女が妃としてやって来るというので大騒ぎになっていたが、遠く離れたドリアン伯爵の領地では、喧騒をよそに遅い初夏がやっと訪れていた。

「ねえアンネット。エクリース様は、いつもあの木の枝の上で、じっとしていらっしゃるわね」と頬杖を突きながら、ベアトリスが横のアンネットに向かって淋しげに言いかけた。

開け放たれた窓の向こうには、広い人造の池があり、そのずっと奥には涼しげな大木が緑に覆われている。その枝の上にまたがるように、エクリースのブルーの服がチラッと見える。エクリースはいつものブルーの服以外は着ないのだった。

「せっかく王子様が来たと言うのに……なんだかつまんない」

とベアトリスは言うと、溜息をついた。

「毎朝、毎昼、毎晩一緒にお食事するのに、一度もお話にはならないんだから」

「でも、それで宜しいのですわ」とアンネットは実は胸を撫で下ろしていたのだった。

「どうしてよ!?」

「あの方には近づかない方が良いのです、お嬢様」

「知ってるわ、デスティの化身だというんでしょ?」

「それは単なる噂に過ぎませんが、けれどもデスティではなくても、ただの客人に過ぎません。何も無く、いつかは王宮に戻られるお方ですよ」

「そうね」とベアトリスは嘆息した。

「でも、お勉強は熱心だとか。それに何でも習得が早いんですって。わたしの先生も、エクリース様の頭の良さに驚いてらしたわ」
「一度も、声を出して本をお読みにはなりませんがね」
「でもすらすらと何でも書けて、そして数学の才能もおありとか。何か楽器も弾けたら、尚更いのにぃ。例えばリュートとか」
「歌は無理ですわね」とアンネットは皮肉っぽく言った。「ベアトリス様はお上手なのに」
「でも、わたしはいつも一人ね」とベアトリスは淋しく言った。「クリフも居ないし、お友達なんか誰一人居ないもの。せめてエクリース様が、もう少し快活なお方なら良かったのに。ちょっとガッカリ」

アンネットはせっせと針を動かしていた。その可愛い服は、やや淡いグリーン地に刺繍糸で白い花があちらこちらに刺繍してある上等な服だった。
「ベアトリス様はもう少しで11歳。お誕生日には、色々な方々を招待しておられますわ」
「どうせ来ないわよ」とベアトリスはふくれっ面で反論する。
「こんな所まで来る人は、余程の変人よ」
「でも、この服はその為の服なのです。あとレースを付ければ終わりですわよ」
「綺麗ね。いつもありがとう、アンネット」
そう言うと、ベアトリスはこの忠実な若い侍女の頬にキスをした。
「楽団もお呼びしております。ちょっとした舞踏会もあるみたいですわよ。素晴らしい夏になりそうですわね！」
「そうなればいいけど」

☆ ― ☆ ― ☆

長い間、エクリースは例の木の枝の上でぼんやりと過ごし、遠く

を見ていた。兄ブライトからもらった時計は常に持っている。そして時々それを見つめてはいたが、悲しみは薄れるどころか、見る度にもっと重くのしかかって来るのだ。

「エクリース様！　そろそろ夕餉でございます。日は高いですが、もう夜なのですよ。降りて下さい」

常に共に居るビクターが、木の下から上に向って声を張り上げた。騎士ウーリッヒがそそくさと去った後は、ビクターと元から居るエドウィンだけがここに残り、他の者達は全て王宮へと戻って行ったのだ。

ビクターは淋しくはなかった。王宮が恋しいとは思ったが、けれどもこの自然の中での生活も悪くは無い、と最近思い始めていた。そして常にエクリースと共に居る事にも慣れ、今ではエクリースの少しの表情だけで、エクリースが今何を考えているか分かるようになっていた。

―　その内、きっとエクリース様はお話になる時が来る。きっと！　みんなはエクリース様を、まるでサタンか妖怪の様に感じているが、僕はそうは思わない。心の傷が深ければ、人は時として言葉を失うものだ。まして、親に捨てられたと感じればなおさら。

いつかきっと、エクリース様がお話になる時が来るはずだ。僕は信じている。

ビクターという存在が如何に大切なものなのか、今のエクリースには分かっていなかった……。

6

6

夏の終わり頃、ベアトリスの１１歳の誕生日のパーティがささやかに行われた。侍女アンネットが縫い上げた薄緑色のドレス姿に、同じく濃いグリーンのリボンを栗色の髪に飾ったベアトリスの姿は、１１歳とは言え既に艶やかな若い女性の芽の息吹きを感じられるほど、充分可愛らしくそして美しかった。将来は、きっと奥方以上に美人になるだろうと、招待された誰もがそう感じていたほどに。

けれどもただ一人、エクリースだけは大広間の隅に立って無表情なまま、皆に祝されているベアトリスの姿をぼんやり眺めているだけだった。

結局王宮から来たのは、騎士ウーリッヒだけ。それもどうやらウーリッヒの真の目的は、ベアトリスではなく、エクリースの様子を伺いに参上したようだった。

ウーリッヒはにこやかにベアトリスに挨拶したあと、そっとビクターの元に近寄った。

「どうだ？　エクリース様のご様子は」

「ご覧になっている通りでございます」とビクターは答えた。

「相変わらずのご様子のようだな。して、何か言葉は発せられたか？」

「いいえ」とビクターはややきつい口調で言った。「一言も」

「もうあの日から大分経つのにな」

「例え半年経とうと一年経とうと、いやそれ以上経っても、エクリース様のお顔に笑顔が戻り、言葉が出てくる事は、今のままではありますまい」

「そうか……」

ウーリッヒは腕組みすると、隅の陰に紛れ、まるで暗闇の主のようなエクリースの青白い顔を見つめた。

「けれどもエクリース様の学問は着々と進んでおります」
とビクターは少し誇らしげに言い足した。
「ほう！」
「非常に頭の良い少年であると、教師達は口々に申しておりました。その上、少し背が伸びられました」
「そうのようだな」
「エクリース様が己れの素質の良さと美しさを自覚されてそれを受け入れる事が出来れば、必ずやエクリース様はご立派なお世継ぎとなられましょう！」
「本当にそうなると思っているのか、そなたは」とウーリッヒは叱責した。

「実はな……秋には、南の隣国の姫君がお輿入れになられる。王の正式な妃としてだ」
「それは存じております」とビクターは冷淡に答えた。「けれどもお世継ぎをお産みになるとは、分かりますまい」
「いや。シスリー長老の話だと、その確率は高そうだとな」
ビクターは微かに眉を寄せた。
「そうなると……エクリース様は……？」
「必要ないということになるだろうな」
ビクターはそれを聞くと、無言になった。

ふと見ると、ベアトリスが広間の真正面に立ち、側にリュートを持った音楽教師が座り込んでいた。
「皆様方！　ベアトリス様が歌をお歌いになられますぞ！」と従者の一人が声を張り上げたので、全員がベアトリスのほうを向いた。けれどもエクリースだけはその時ですら、窓から暗い夜の庭を見つ

めて続けているのだった。
「わたし……歌を歌います！」とベアトリスは、可愛らしい声で言った。
「待ちくたびれた駒鳥、っていう歌を」
そう言うと、ベアトリスは優雅な貴婦人のようにお辞儀をした。
「可愛いですね～」とビクターは横のウーリッヒに囁いた。
「ベアトリス姫か……」とウーリッヒは何か別のことを考えながら、上の空につぶやく。
「エクリース様とベアトリス姫が……」
「え？　何か」
「いいや、何でもない」とウーリッヒは手を振った。
「さあビクター、ベアトリス様の歌を聴こうではないか！」

リュートの前奏が物悲しく奏でられ、ベアトリスは歌い始めた。

ああ　駒鳥よ　お前の愛は　いつまで耐えられるのか
待ちくたびれた　駒鳥よ
日々　毎月　そして毎年　お前は待ち続け
そして　ある日　朽ちていく
さえずる樹の枝から　はらりと落ちて
地面に横たわるまで
お前は　待ち続ける

愛しい　人を　いつまでも

その時、エクリースはハッと振り返り、ベアトリスをじっと見つめたのだった。ここに来て初めて。

7

7

「その歌は歌うな～～！　やめろ！」
と突如、今まで黙っていたエクリースが、ベアトリスを指差しながら叫んだので、人々の目は一斉にエクリースに注がれた。ベアトリスは歌をやめ、びっくりした瞳でエクリースを見つめている。
「その歌は……駒鳥と言うのは……」
そこまで言うと、エクリースはふいに黙り込んだ。口をあんぐりと開けたまま、当惑気に人々を眺めている。顔は蒼白、今にも倒れそうだ。

「駒鳥とはどなたで？　一体どうなさったのです！？」
と慌てて駆け寄ったビクターに、エクリースは頭を振り、俯いた。
呆気に取られていたベアトリスは、遂に顔を歪めてワーッと泣き出した。わなわなと身を震わせながら、奥方がベアトリスを抱き締めると、ベアトリスは奥方の胸に飛び込んで泣きじゃくった。楽しいパーティが一変し、人々は不安そうにざわざわし始めた。

「さあさあ……皆様方。これから遙々呼んで参りました異国の吟遊詩人が、代わりに歌物語を歌いますぞ！　どうぞご拝聴あれ！」
と慌てて進行係が叫んだので、人々はやっと静まり、急いで出て来た年老いた吟遊詩人の方に視線を向けたのだった。
「やれやれ、助かった……」とビクターは呟いたが、
「エクリース様！　急にあんなことを仰るとは、一体全体どうなさったのです！？」
と今度はエクリースに向かって問いかけた。
エクリースは何かを喋ろうとしたが、けれども漏れて来るのはシ

ューシューという息づかいだけだった。

「落ち着いて！　落ち着いて下さい。今の意味はどういう……」

「ビクター、問いただしても無駄だ」と突然ウーリッヒが二人の背後から囁いた。

「恐らく、亡くなられたブライト様のことを思い出されたのであろう」

「あ……そうか」とビクターは得心したが、けれともエクリースは激しく首を横に振る。髪が乱れて、バラバラになってしまうほどに強く。

「どうやら、そうではないご様子ですが」

「では……誰のことなのかな、王子！」

「ご自身のこと？　それとも……ベアトリス様の？」

エクリースは両手で自分の頭を挟んで、その場にうずくまった。

「誰でも宜しいでは無いですか。この歌に何らかの魔力があったのでしょう。詮索するのはもう止めませんか！？」とビクターはウーリッヒを咎めた。

「とにかく、わたしはエクリース様を自室に連れて行きますので」

「それが良いだろうな」とウーリッヒは答えた。

☆　―　☆　―　☆

「あなたっ！　もう我慢できませんわ！　いくら王子様だか何だか知らないけれど、ベアトリスが歌っている最中に、あの“もの言わぬ王子さま”が突然、『歌はやめろ』なんて仰って！　これほど酷い恥をかかされたのは初めてです！」

控えの間では、泣きじゃくるベアトリスを抱きながら、奥方はドリアン伯爵に対して癇癪を破裂させていた。

「でも奥様、ものは考えようです」と聡い侍女のアンネットは横か

ら言い添えた。
「何なのよ！」
「つまり……あのエクリース様は、ベアトリス様がお嫌いなのですわ。でもいいじゃありませんか。逆にあの方がベアトリス様を好きになられたら……本当に怖いことですわ」
奥方は口をきっと結ぶと、貧しい頭を働かせた。

「そりゃそうかも……知れません。あの王子がベアトリスに手でも出したりしたら、もっと恐ろしいことになるかも知れませんしね」
「あの王子は、周りの親しい人々を不幸にするという噂です。この際、ベアトリス様も目が覚められたことでしょう。お二人は仲が悪い方がいいのです、奥様」
「アンネット、あなたは賢い娘ね」と奥方はニヤリと嗤った。
「ベアトリス……分かりましたね。あの王子の本性を。王子はあなたをみんなの面前で侮辱したのです。以後近寄らないようになさい」
言われたベアトリスはつと顔を挙げた。その目はまだ濡れていたが、けれどもその表情は奇妙だった。
「わたしは、エクリース様を嫌いにはなれません、お母様」
「まあっ、何と言う事を！」
「きっと、わたしの歌を聴いて何かお感じになられたのよ」
「ベアトリス様は、お優しいお嬢様ですもの。でも今は、そのことには触れないで下さいまし」とアンネットは、唖然としている奥方からそっとベアトリスを引き離した。
「さあさ、もうお眠りになる時刻ですわよ」

同じ頃、ビクターは読み書きの教師から、一通の手紙を渡された。そこにはエクリースの美麗な文字が一行書かれてあった。
「わたしはなぜだか不思議な胸騒ぎに我を忘れてしまい、重苦しい何かがわたしを叫ばせた。それはなぜなのか、わたしには分からない」

8

8

秋になり、イデット姫が王宮に輿入れしてきた。厳かな結婚式のあと、素晴らしい披露宴が三日三晩続いた。けれどももちろん、エクリースは招待されていなかった。代わりに、愛くるしく、今では王宮中のアイドルのような存在になっていたドリアン伯爵の一人息子、クリフ・ドリアンが出席し、辺りの出席者を和ませていたのだった。

☆　―　☆

エクリースは例の事件以来、再び寡黙になり誰とも打ち解けず、自分の殻に閉じこもったままだった。特に、ベアトリスが来るとさっと目を背け、スタスタと遠くへ離れて行くのだ。

その頑なまでの態度、そして薄汚くなってもまだ着続けるブルーの服は、そろそろボロボロになりかかっていったが、それでも頑として他の服に袖を通すことは無かった。今では、ビクター以外は誰もエクリースに近付かなくなっていた。

「ご病気なのです、エクリース様は」

とある日、ベアトリスはアンネットに言った。アンネットは寒くなった部屋の暖炉にせっせと火を熾すため、木切れを投げ入れていた。

「病気のようには見えませんが」

「いいえ、肉体じゃないの」とベアトリスはキッパリと言った。そして両手を胸に当てた。「心が、なのでしょう」

「姫様は本当にお優しい方ですわね」とアンネットは微笑んだ。

☆　―

「それはそうと、今持っていらっしゃるその紺色のベルベットは？」
「エクリース様の衣装にするの」
「まぁっ！」とアンネットはのけ反りそうになった。「幾ら綺麗な服を作られても、それは無駄と言うもの」
「そうかしら」とベアトリスは言った。「ここの冬は寒いわ。今の服のままでは、お風邪を引いてしまわれる」

それからベアトリスはアンネットの肩に両手を置いた。
「アンネット、お願い！」とベアトリスは嘆願した。「エクリース様の冬服を縫ってあげて！」
ベアトリスの無邪気な願いを断ることは、アンネットには出来るはずが無かった。
「分かりました。確かにお縫い致します。背丈は、あの従者のビクターより少し低いぐらいですかしら？」
「全てお前に任せるわ。でも暖かそうでいて、結構お洒落で、エクリース様の雰囲気にピッタリのものにしてちょうだい」
「なかなか大変ですわね、ベアトリス様のご注文は」とアンネットは溜息をついたが、少しでもこの淋しい姫君が慰められるならと、渋々針を取り出したのだった。本当は、エクリースの為にではなく、あくまでベアトリスの喜ぶ顔が見たかったからだ。と言うのは、アンネットは、エクリースがこの贈り物を受け取らないだろうと信じていたからだ。
「お可哀想なベアトリス様。あの奇妙な王子がこのベルベットの衣装を突きかえしたら、ベアトリス様はどんなに悲しまれるか。……いいえ、逆にそれでいいのよ。その時は、ベアトリス様も、エクリース様のへの思慕が消えるとき……。思慕？　これは思慕なのかしら！？」

☆　―　☆　―　☆

エクリースとビクターは、王宮よりも早く秋が深まった深々とした北の森に入り込み、ただ黙々と散策していた。
ビクターはこんな時でも、弓矢は離さなかった。森には何があるか分からない。もしかしたら凶暴な動物、そして森に棲むと言う魔物や妖精の類が出るかもしれないとビクターは常に構えていたが、エクリースはどんどんと先立って歩いて行くのだ。

「エクリース様！　エクリース様ぁぁ！　もうこれ以上は危険でございますよ。ぼちぼち日暮れも近くなって参りました。もうお戻りにならなければ」
と息を切らしながらビクターが叫びかけると、やっとエクリースは歩みを止めて振り返った。
「さあ、戻りましょう。皆様方が待っておいでになりますよ」
エクリースはそれを聞くと、黙って首を横に振った。
「そりゃまあ……皆様方は待っている振りはなさっていますが。けれどもこれだけは真実です。あのベアトリス姫だけは、あなたを心から待っておられます。わたしには分かる。彼女の情け深い無邪気な心と、清らかな外見に似合う高潔な人格を」
エクリースはじっと聞いていたが、初めて微笑んだ……ような気がビクターにはした。

「寒くなると雪が降り、直にクリスマスとなりましょう。楽しみですね、そのパーティが。ベアトリス様の誕生日以来ですよね、そのような華やかな席は。そして奥方様は、舞踏会も企画されております」
そこまで言うと、ビクターはひたと近寄ってエクリースの耳元で囁いた。
「ベアトリス様の未来のお婿様選びの為だそうですよ。あの姫君は今は１１歳ですが、直ぐに麗しい娘へとご成長されましょう。奥方

様は、何人かの身分の高い少年や若者を、クリスマスにお呼びだそうです」

エクリースは今初めて、そのビクターの言葉にもやもやした何かを覚えたのだった。

9

9

クリスマス前に、王宮に喜びの知らせが広まった。新王妃イデットが懐妊したと言うのだ。王自身は、今回王子が生まれるのか、それとも王女なのかまだ懐疑的だったが、とりあえず思った以上に早くイデットが妊娠したので大いに喜んだ。そしてシスリー長老はしたり顔になった。

「これで王子が生まれれば、この王国も安泰でございます」

とシスリーは王に耳打ちした。「あのエクリース様のことも、このまま放っておいて済みますゆえ。聞けばエクリース様は、ほとんどお話にはならないとか……このまま聾唖でいらしても宜しいでしょうから」

「早まるな！　イデット王妃が王子を無事に産むまでは、あの憎いエクリースがやはり跡継ぎなのだからな」

王は拳を握って、シスリーをジロリと睨みつけた。

「わたしはそんなにお人よしでは無いぞ、シスリー」

「はい、その通りでございます。ちと早まりましてございます。申し訳ございませぬ」

けれどもシスリーには既に見えていたのだった。イデットの体内に王子が宿っている事を。

☆　―　☆　―　☆

一方、イデット王妃は懐妊したことが分かって以来、今までの楚々とした有様をかなぐり捨てていた。その美貌が、段々と妖しさから不遜な美へと変化していった。

そして本来持つ我がまま一杯に振る舞い、王宮中を闊歩していた。イデットに付く女官達も又、傲然と顎を上げて、そこかしこで傍若無人の態度を取っていたのだ。

イデットが持っていたただ一つの懸念……それはやはりエクリースのことだった。その為にも、是非王子を無事出産しなくてはならない。加持祈祷の類が昼夜別たず行われ、イデットはまるで高貴な女王のように大切にされていた。

そしてイデットは遂に、今まであちこちに飾られていた、ドロテアの絵を全て取り払うように、王に命じたのだった。

以前ドロテアに仕えていたハイラは、そのようなイデットの傍若無人の振る舞いに激怒していた。けれども今のハイラには、何の権力も無い。

「せめて、エクリース様がもう少しまともな王子なら、今度南から来たあの忌々しい王妃の成すがままにさせておくものか！　けれども今はそれは無理だわね」

とハイラは身近な侍女に愚痴をこぼしていた。

「とはいえ、ハイラ様。イデット妃のご懐妊は少しお早いような気が致しますが」

とその侍女は、そっとハイラに囁いた。

「え！？　確かに……そうかも知れぬ。けれども初夜の日に、ご懐妊なされたやも知れぬでは無いか」

「確たる証拠はありませんが、あのイデット妃には母国では良からぬ噂の数々がございまして」

「なに？」とハイラは身を乗り出した。

「あの方は、この御婚姻のお話の前に、さる貴族の若き貴公子との噂がございました」

「それはまことか？」とハイラは息を飲んだ。

「はい。イデット様の御付の高慢ちきな侍女のお喋りを小耳に挟ん

だのでございます」
「けれども、確たる証拠は何も無い。今このことを王に述べたとしても、王は取り合わないであろう。もう既にイデット様の虜となっておられるし、何より王子が産まれるかもしれないと言う、あの狡猾な長老の予言に惑わされている様子だから」
「本当に、そのようですわ。王様は今ではドロテア様のことを思い出しも致しませんね。わたし達をも、王宮の端へと追いやられております。ドロテア様の高貴な絵姿を取り去られたと言うのに、一言もイデット様に文句は仰いませぬ」
「困ったことよの」

ハイラとその侍女がひそひそ話していると、その横をイデット王妃と取り巻きの貴族達、そして南から来た侍女達の一団が、二人の横をすり抜けて言った。
「この王宮も、イデット様の権力の巣窟となるかも知れぬな」
とハイラは深い溜息を付いたのだった。

10

１０

１２月の初め、ドリアン伯爵邸の辺りに初雪が降った。
ベアトリスははしゃぎながら外に出ると、アンネットや下男達と早速雪投げなどの雪遊びに興じていた。
その様子を、エクリースは見るとも無しにそっと見つめていることを、ビクターだけは知っていた。
「ご覧下さい、お嬢様を！　ああやっていられるところは、伯爵令嬢というよりも、まるで溌剌とした村娘のようですね」
とある日、ビクターは窓際に佇むエクリースに言いかけた。エクリースはチラッと振り向いたが、つと顔を背けると窓際から離れて行く。ビクターは少しだけ後悔した。

「あの……エクリース様もご一緒に雪遊びをなさいませんか？　以前はよくやっていたはずですが」
エクリースはその黒い瞳でじっとビクターを見つめた。確かに、去年はジュリアやグライスと共に、粗末なあばら家から飛び出して、雪玉を投げつけたりしていたものだ。けれども今はそれは過ぎ去った幻に過ぎない……。
一年という時は、全ての人生を変えてしまった。時は恐ろしい……。恐ろしい？　そうだ、確かにジュリアは時とは恐ろしいものだと言っていた！　エクリースは顔をしかめた。

けれども今外で駆け回っているベアトリスは、実に楽しそうで人生を謳歌している。駆け回るたびに、フードからその栗色の長い髪がなびいていく。そして荒く息をしている頬は薔薇色に染まり、あたかも暗い冬でさえベアトリスの前では、春を待つだけのシーズン

にしか見えないのだ。
　再びエクリースは、遠くで駆け回るベアトリスを見つめだした。
「もう直ぐクリスマスが来ますね」とそっとビクターは言った。

☆　―　☆　―　☆

　クリスマス少し前に馬車がやって来て、ドリアン伯爵邸に止まった。そこから、15歳くらいのそばかすだらけの少年と二人の従者が降り立った。
　ドリアン伯爵と奥方が急いで出て来て、馬鹿丁寧に出迎えた。
「御覧なさい、エクリース様。あの方は、公爵様のご次男ドイル様でございます。遙々王宮からやって来たそうですよ」
とビクターはエクリースに囁いた。
「あちらの方が、ドリアン様よりも位は上なのです。まず第一の婿殿候補ですね」
　エクリースはチラッとビクターを一瞥すると、目をパチパチさせた。
「ですが……お美しさ凛々しさは、もちろんエクリース様の方が遥かに凌駕していますがね」と付け加えるのを忘れないビクターだった。

　次の日やって来たのは、獅子っ鼻の少年でやや小太りだった。その姿よりも、威張りかえった様子が、少々滑稽でもある。
「あの方は、王様の腹違いの義弟の三男であられます。少々オツムが悪そうですがね。けれども、確かに権勢は明らかですが。大層なお金持ちですし、お名前はオリビエ様です」
　ビクターはふ～っと息を吐いた。
「やれやれ、一体何人来るのやら」

　又次の日、一台の麗々しい馬車がやって来た。この馬車は先の二

台の馬車よりもっと作りが頑丈で装飾も見事。そして中から出て来た少年も、一番素晴らしい容貌だった。

「あの方は、今の妃イデット様の義弟にあられます、サミュエル様。まだ１４歳だというのに、あのお振る舞いは洗練されていてご立派ですね。ま、多少傲慢な所はありますが、今までで一番マシな客と言えましょう」

エクリースとビクターが窓越しに見つめていると、ドリアン公爵夫婦が見るからに卑屈にペコペコとお辞儀をしているさまが見て取れた。

「御覧なさい。あのように遜らなくとも、宜しいというのに。愛娘の未来の婿候補という以上致し方ないのかもしれませんが」

ビクターがそう呟くと、雪がはらはらと降って来た。

「今晩は冷えそうですね」とビクターは付け加えた。

☆　―　☆　―　☆

「これでクリスマスのお客様は三人ですね」とアンネットがベアトリスにスカーレット色のベルベットの服を着せながらそう耳元で囁いた。

「いずれ劣らぬ方々ばかりですわよ」

「そう」とだけベアトリスは気の無い返事をする。

「ドイル様は公爵家の地位を戴くかも知れませんし、オリビエ様はああ見えて荘園をかなり持ち、国でも有数の大金持ちでございます。そして、サミュエル様は異国の方ではありますが、現王妃の義理の弟君。姿形の良さは群を抜いておりますわね」

「興味ないわ」とだけベアトリスは言った。「お父様達は、あの内の誰かをわたしの将来の婿殿になさる気かしら？」

「多分」

「まだ早すぎないこと？」

「いいえ！　婚約は早い方が宜しゅうございますよ。時とは残酷な

もの。あっという間に過ぎてしまうものです。お嬢様が若く清らかな内に、どなたか良い方との縁は大切にしなければなりませんわ」

「……そういうものなのかしら？」

「人生とはそういうものです」とアンネットはキッパリと言った。

「さあベアトリス様。お支度ができました。とてもお美しいですわよ。まるで今降り積もる雪の精のように」

11

11

サミュエルがやって来たその日、ささやかな晩餐会が開かれた。エクリースと客人の三人の少年達が広間にやって来て各々の席に付いたが、少し遅れて来たベアトリスは入口で少し躊躇った後にやっと入って来た。

エクリース以外の三人の客の少年達は、サッとベアトリスに一瞥を与える。三人の瞳は、まるで値踏みをするよな様子がありありと見て取れ、壁際のビクターは嫌な気分になった。

少年達は一人一人ベアトリスに近寄り、その華奢な掌に儀礼的なキスと言う挨拶をした。三人は明らかに半ば成熟していたので、まだ子供っぽいベアトリスに対しては義務的な感情しか抱いてはいないようだったが。けれども三人とも、ベアトリスが将来可愛い少女になるだろうということ、そして自分達は互いに競争相手だということは気づいていた。

ただエクリースだけは、じっと真正面を見つめたままで自分の席でじっとしていた。

「皆さん、ようこそこんな鄙びた場所へお越し下さいました！　さあさ、なんの豪華なおもてなしは出来ませぬが、精一杯の料理でございます。どうぞお召し上がり下さいませ」

と奥方が明らかに作り笑いを浮かべて、この貴い少年達に向って言いかけた。

三人の少年達は互いに牽制しあいながら、ややぎこちなく食べ始めていたが、やがて彼らの感心はベアトリスからエクリースへと自然に移って行く。

「ほらほら、あの席に着いているのが“物言わぬ暗闇の王子”エクリースだぜ」
と獅子っ鼻のオリビエが隣のドイルに囁いた。
「随分とボロッちい服を着てるね。まるで下男みたいだ」とドイルは軽蔑したように答えた。
「でもあいつを育てた暁には、ここの伯爵は王宮で大層な地位と名誉を与えられるそうだから、嫌々居候させているらしいよ」
「ってことは……あのちっちゃいお嬢さんも、将来は華々しい令嬢に変身するわけだな。富と名誉を兼ね備えた」
そう言うと、ドイルはもう一度ベアトリスの方を見つめた。ベアトリスは淋しそうに下を向いて、皿を突ついている。

「確かに、あの横顔はちょっとそそるね」とドイルは舌なめずりをしながら言った。
「おいおい、急に心変わりするなよ。お嬢様の未来の相手が誰か、まだ分かんないんだぜ」
「オリビエと言ったね、君は。確かにまだそんなこと分かりゃしないけどさ」
「君達、何をこそこそと囁き合っているんだい？」
と突然サミュエルが口を差し挟んだので、二人はギョッとしてそちらを向いた。金色に輝く髪を持った美貌のサミュエルの視線が、じっと二人に注がれていたからだ。
「い、いや、別に」とドイルはしらばっくれる。
「お嬢さんのことだろう？　君達のスケベ心は見え見えだよ」
とサミュエルは辛辣に言い放った。「まだ子供じゃないか、お嬢さんは。ただし、将来性のある子供だけどね」

大人っぽいサミュエルの言い方に負けたのか、先の二人は口をつぐんでしまった。
「いいかい。僕の義姉が王子を産むと、姉は押しも押されもせぬ立

派なここの国の国母となるんだよ。そうなれば、ドリアン伯爵が誰を選ぶか、自ずと知れたものじゃないか」
「じゃあのエクリースは？」
「どこかに追放されるさ……多分」
そう言うと、サミュエルは肉を口に運んだ。
「ちぇっ、まず～」
「所詮田舎料理だもんな」とドイルが相槌を打った。「けど、サミュエルといったね、君、お義姉さんが王子を産むかどうかまだ分かんないぜ」
「産むさ。そういう運命なんだよ」とサミュエルは自信満々に答えた。

「やな奴だな、あいつ」とドイルがオリビエに囁いた。「お妃の栄光を傘に着てさ」
「異国から来た奴なのに」とオリビエも同意した。
「最初から、愛情なんてあのお嬢さんに持つはずが無いよ」
「じゃオリビエ、君はどうなの？　あの娘のこと、気に入った？」
「別に。でも婚約したら、他の美人を愛人に持っていても、文句は言えないよね」
「僕もそう考えてた」
二人はお互いに顔を見交わすと、ふふふっと卑しい笑いを浮かべた。
その時、ドイルは何かに気づいてその方を見た。するとエクリースの鋭い視線が、いつの間にか自分達に注がれているではないか！
そしてその瞳は、二人の今の言葉全てを見透かしているようだったのだ。ドイルの身内に、戦慄が走る。

「どうしたの？」と太っちょオリビエが聞く。「震えてるよ」
「あ……いや、何でもない」
けれどもオリビエも又、エクリースの視線を感じて恐怖感に身を

震わせたのだった。
次の瞬間、エクリースはさっと視線を逸らすと、何事も無かったかのようにスープをすすり出した。以後、この晩餐会は陰気な雰囲気のまま、過ぎて行った。

12

12

「エクリース王子の様子がどうか、調べてきなさい」

そう義姉のイデットに命じられて、サミュエルは渋々ここまでやってきた。イデットは子供を産む前から、悪い噂のある“暗闇の王子”エクリースを怖れ、そして嫌っていた。王が幾らエクリースを疎んじていても、実質上のお世継ぎはやはりエクリースだったからだ。

「あの王子は、わたしの生まれるべき息子の競争相手となりましょう。何と言っても、エクリース王子は年上。良からぬ噂が数々あるとは言え、やはり世継ぎは世継ぎ。油断なりませぬ。お分かりか、義弟よ」

とイデットは、この腹違いの義弟サミュエルに厳しく言い放った。サミュエルの母は、お手つきした身分の低い女官であり、サミュエルはイデットから見れば卑しい血筋だったのだ。ただサミュエルの持つ美貌だけは買っており、それだけは認めざるを得なかった。

「上手くいけば、お前は伯爵家の娘を手に入れ、その娘の財産を貰うかも知れぬ。けれどわたしからの家督は一銭たりとも無いと、心得よ。よい返事を待っていますよ、サミュエル」

この冷酷な義姉からの命を受けたサミュエルは、この地にやって来た。そして早速、エクリースの様子を観察していた。けれども、エクリースはただ無表情であると言うだけで、特別怪しい素振りは見せない。まだ年下の少年の面影を残した、類稀な容姿の持ち主であることだけは分かった。恐らく、その美貌は自分を越しているかも知れないと。

そして又、案に相違して、エクリースがベアトリスとは仲がいい

ようにも見えない。サミュエルは、鵞ペンを握ったまま、どう返事を書こうかと迷っていたが、明晩のクリスマス・イブのミサと次の日の舞踏会のことで相談に来た従者に邪魔されて、渋々立ち上がった。

従者は見事な刺繍のある緑色の服とマントを捧げていた。

「サミュエル様。これはイデット様からの贈り物でございます。明日の舞踏会にはこれをお召しになって、ベアトリス様と踊って頂きたいとの事でございます」

「分かった」とサミュエルは気の無い返事をした。「着よう。それでいいのだな」

☆　―　☆　―　☆

ところで同じ頃、そばかすだらけのドイルの元に、ドイルの従者がやって来ていた。

「ドイル様、お母上様からこの衣装を着て、明日の舞踏会にベアトリス様を誘うようにとの仰せでございます」

そう言うと、従者は長持から見事な紫色のベルベットの服を取り出した。

「如何でございましょう？　お母上の愛情が篭っておりまするな」

「分かったよ。あのお嬢さんを誘えばいいのだな」

と一番年長のドイルは、そのすべすべした服を触ってみた。

「さぞお似合いでございましょう！」と従者は嬉しそうに微笑む。

隣の部屋では、オリビエが金色の地に銀糸の刺繍のある服とマントを試着して、悦に入っていた。

「ど派手な服だが……まあいいだろう。ああいう席では、派手な方が目立つ」

「でございますとも」と従者は揉み手をしながら囁いた。「ぴったりでございますよ、オリビエ様」
「そうでもないんだよ。ちと窮屈でな、最近又太っちゃって」
「お菓子の食べ過ぎでは？」と従者は渋面を作った。「少しお控えなさいませ。でないと……踊りの最中に破れでもしたら……」
従者の心配は、杞憂ではなかった。

☆ ― ☆ ― ☆

「エクリース様。先ほどベアトリス様から、贈り物がございまして」とビクターが言い難そうにしながら、何かを捧げ持ってやって来た。手には、美しいベルベットの服が、紺色の明るさを際立たせている。
「艶やかでございましょう？　エクリース様にお似合いですよ、きっと。実は明日の舞踏会に着て頂きたいとの、直々の仰せにございます」
エクリースはじっと、その紺色の服を見つめていた。が、つと顔を背けてしまう。

「では……これはお返ししましょうか。せっかくですが……」
ビクターが残念そうに俯くと、エクリースがさっとその服を取った。そして黙ったまま、その服を握り締めているではないか。
「エクリース様……？　ではご承知で？」
エクリースは、うんと縦に首を振ったのだった。ビクターの顔が思わずほころんだ。
「絶対にお似合いですとも！　あとのあの盆暗なお三人には負けませんよ！」

13

13

厳粛なミサの次の日の夜、クリスマスを祝う晩餐会と舞踏会が開かれた。

白い雪のような衣装のベアトリスは、年齢よりませて見え、ハッとする可愛らしさだ。この場所には、ベアトリス以外の若い女性は、女官が数人ぐらいしか居なかったので、圧倒的に男性の比率が高かった。

けれどもこういう夜には、中年や歳を召した初老の夫人まで出て来て、クリスマスを祝う為に皆着飾って来ていたのだ。

もちろん、例の三人の高貴な少年達も列に連なっていた。彼ら三人は、まだ大人の若者にはなり切ってはいないが、けれども貴重な若者達だと言っていいだろう。夫人達の視線を浴びながら、彼らはツンと鼻を高くしていた。

晩餐が大体終わると、やがて楽師達の音楽が始まり、まずドリアン伯爵と奥方がゆったりとしたリズムに乗って、優雅に踊りだした。

「クリスマス用パンプディングは、まあまあ美味しかったな」

と食いしん坊のオリビエが、皿の上に今度はシロップのかかったクッキーを置いて言うと、

「君は食べすぎなんだよ」とドイルがオリビエの手を制した。

「もう直ぐ、僕達の番だと言うのにいつまで食べているつもりだい!?」

「全くその通り」と今度はサミュエルが横槍を入れた。「これ以上食べると、君のそのキンキラキンの服が破けるぜ」

「何だよ〜お前ら〜」とオリビエは、やっと食べるのをやめた。け

れども視線は、恨めしそうに皿の上のお菓子にやっている。

「このオリビエは色気より食い気らしいな」とドイルがサミュエルに囁いた。

「この分では、ベアトリスがオリビエを誘う事はなそさうだぜ」

「さあ……どうかなぁ？」

「ところでサミュエル……あの王子様は出席していないみたいだね」

そうドイルに言われて、サミュエルは辺りをぐるりと見回した。

いつもは暗い夜なのだが、今日ばかりは有るだけの蝋燭と松明とシャンデリアの光でよく見渡せる。

「ほんとうだ！　あいつ、怖気づいたのかな？」

「て言うより……あのボロ服ではね～」とドイルは意地悪く言った。

向こう側には、俯き加減のベアトリスが余り食欲もなく、空の皿の上のリンゴのタルトを突いていた。

「今日のベアトリスは、子供というよりもう少女って感じだな」

とドイルが舌なめずりしながら呟く。

「確かにね」とサミュエル。「こうして見ると、案外美少女だ」

「あと数年すると、結構美人になるだろうな。少なくとも、奥方よりは」

そう言うと、2人はくっくっと嗤い合った。

音楽が変わり、ドリアン伯爵夫婦は疲れて自席へとついた。

「もうヘトヘト」と奥方がそう言うと、ベアトリスに向って、

「あなたも誰かと踊りなさいよ、ベアトリス」と息をつきながら促した。

ベアトリスは顔を挙げると、虚しく視線を辺りにさ迷わせる。

「でも……」

「あそこに、貴い少年達が居るじゃないの。その誰かと踊りなさいよ」

「ああ、あの人達ね」
「何だか、気の無い返事ね。他に誰が居るって言うの、ベアトリス」
「あの着飾った方々のこと？　踊らなくちゃダメ？」
「次の曲は、ゆるやかな調べのはず。ちょうどあなた達向きの曲なのよ！　さあ！」

ベアトリスは渋々立ち上がった。白いレースのリボンがヒラヒラと春先の蝶々のように揺れる。彼女はスカートの裾を持ち上げると、仕方なく三人の少年達の方へと歩み始めた。
けれどもそれは最後まで到達しなかった。入口が開き、一人の少年が進み出たのだ。薄暗がりの淡い光に映える、紺色のベルベットの光沢と白い襟がその少年を引き立てている。
「あっ」と背後に立つアンネットは思わず叫んでいた。「あれは……」
ベアトリスも振り向いた。そして彼女は満面の笑みを浮かべて、そちらに近寄って行く。並み居る人々もそちらを振り返った。

「エクリース様！」とベアトリスは呼びかけた。するとエクリースはベアトリスの手をぎこちなく取ると、瀟洒にお辞儀を返すでは無いか！　その優美さと美しさに、その場の人々は思わず見とれてしまう。
「僕と……踊って下さい……ベアトリ……ス……」
途切れ途切れに言うエクリースに向って、ベアトリスは嬉しそうに答えていた。
「もちろんですとも！　喜んで」
そう言うと、ベアトリスもまた優雅にお辞儀をし、エクリースに手を取られるままに広間の真ん中に進んだ。
「まあ、あなた！　こんなことがあっていいのでしょうか！？」
と奥方は叫んでいた。
「若い者達の好きにさせるがいい」と伯爵は静かに答えた。けれど

もこちらの三人の少年達は、焼けるような憎しみの眼差しをエクリースに注いだのだった。

14

14

典雅なリズムに乗って、エクリースとベアトリスは踊り始めた。近付いたり遠ざかったりしながら、次第に二人は見つめ合い周囲の喧騒など何も耳に入らないかのように、ひたすら踊り続ける……。

ドリアン伯爵夫妻はもとより、侍女のアンネットもビクターも、そして例の三人の少年達も、ただただ呆気に取られて、エクリースとベアトリスの踊りを見つめていた。

「何なんだ、あいつ！　何も言わず、寡黙で愚鈍でボロ服を纏っていたと言うのに、今晩の変貌振りは何だよ！　いいカッコしやがって！」

とオリビエがそっと罵った。

「まんまと、先を越されちまったな」と冷ややかにドイルが同意した。

「まあまあ、君達のお怒りはごもっともだがね……今や、あのお嬢さんの最大の関心事が何か分かっただけでもいいと思わなくちゃ」

とサミュエルは二人をなだめた。

そしてサミュエルは、エクリースの本質が何かを探りたくなった。エクリースは謎だらけなのだ。確かに王子ではあるが、不可解な出生を持ち、不愉快な噂で満ちていると言うのに、同性から見てもどこか引き付けるところを持っているのは否めない。

サミュエルは、義姉のイデットにどう書こうかと頭を悩ませた。その実、視線はじっとベアトリスに注がれていく。

やがて典雅な楽の音が止むと、皆はパチパチと拍手し始めた。ド

リアン伯爵も立ち上がると、ベアトリスに向って手を挙げた。ベアトリスは幸福そうに微笑み、エクリースは無表情ながらも顎を軽く下げて、伯爵に挨拶を返す。その仕草は、誰が見ても上品で洗練されているのだ。

―　一体いつどこで、エクリース様はこのような仕草を身に付けられたのか？　いや、それともそれは、生まれつきの“何か”なのかも知れぬ。最初から持っている美と、そしてあとから備わった教養の成す業なのか……？　いずれにせよ、大人になられたものだ。

従者のビクターは我を忘れて、エクリースの変化に戸惑っていた。

「今日はありがとう、エクリース様。一緒に踊って頂いて」

とベアトリスがエクリースに言いかけると、エクリースは暫くして答えた。

「この服は僕にピッタリと合いました。まるで魔法のように」

「それは良かったわ」

「ありがとう、ベアトリス」

「い、いいえ……」

ベアトリスは微笑むと少しだけ手を挙げ、自分の席に戻った。エクリースは目礼すると、少し離れた壁際に後退した。

「ちっ、全く何だよあの二人！　見せ付けやがって」

「妬いてるのか、オリビエ？」

「いや、そうじゃないが……結局、なんだかんだ言っても、王子様には女の子は目が無いと見える」

「さ、君達」とサミュエルが促した。「今度は快活なマドリガルだ！　僕達の番だぜ」

「相手は誰？」と気の無さそうなドイルが言うと、

「ベアトリス以外の女達さ」とサミュエルは答えると、自ら広間の

真ん中に出て行った。
サミュエルはその音楽に合わせて、活発に動き、その踊りは違う意味で素晴らく、人々を魅了した。
「あいつもやるよな～」
「さあ、オリビエ。僕達も負けては居られないよ！　輪に加わろう！」
ドイルの誘いで、ようやく鈍なオリビエもその重い腰を上げた。

男子達と女性達は、互いに入れ違いになって輪になって踊り始めた。けれどもベアトリスは興奮冷めやらぬ思いで、暗がりにじっと立ち尽くすエクリースを見つめていた。エクリースは、今や“もの言わぬ王子”ではない。
けれども、その麗しい横顔には笑いが無かった。

突然誰かの笑い声で、ベアトリスはハッとして踊りの輪を見つめた。ドイルがオリビエのお尻の辺りを指差して、大笑いしているのだ。その横のサミュエルも苦笑いしている。
オリビエのお尻の辺りの服が裂け、オリビエは真っ赤になって手でそれを隠している。オリビエの従者は、自分の助言が杞憂ではなく本当になってしまったので、顔を覆っていた。
ベアトリスもプッと噴出した。横の奥方は、下を向いたまま笑いを堪えるのに必死だ。けれども一人だけ笑いの無い人物が居た。それはエクリース。彼はただ無機的にオリビエの大恥を見つめていた。
オリビエは従者に連れられて外廊下に出された。笑い転げるドイルは床に転がりそうになっている。オリビエは、この屈辱を絶対に忘れまいと誓っていた。
サミュエルは冷笑を浮かべながら、手を叩いた。
「さあさあ、皆さん！　又踊り続けましょう！」

第四章　雪解け　1

1

大恥をかいてしまったオリビエは、次の日悔し涙にくれながら出て行き、新年前にはドイルもサミュエルも、ドリアン伯爵の館から慌てて去って行った。

あとは又いつものように淋しい日々が続いたが、けれどもベアトリスは全然淋しくはなかった。なぜなら、ほんの一言二言ではあるが、毎日エクリースはベアトリスに何か話しかけ、又ベアトリスからの問いにも短いが答えるようになったからだ。

これには、ビクターも喜んだ。アンネットは呆れたような様子だったが、けれどもベアトリスが幸福であれば、アンネットも嬉しいのだ。

エクリースとベアトリスは、食事の席で少し話す内、どこかで会うと又話だし、ほとんどはベアトリスが喋っていてエクリースはただ聞いているだけなのだが、それでもベアトリスは毎日が楽しかった。

深々と雪が降る大晦日の夜に、やっと新年の鐘が鳴っている時にも、ただエクリースは黙っていたのだが、

「エクリース様……新しい年ですね」とベアトリスが言いかけると、エクリースは、

「そうだね」とただ一言答えたのだった。ベアトリスは有頂天になってはいたが、けれどもエクリースの顔に全く笑いが浮かばない事が少し不満だった。

「新しい年は、きっと良いことが沢山ありますように」とベアトリスが言った。
「ね、そう願うでしょう、エクリース様」
「さあ」とエクリースは答える。「僕に良いことがあるとは思えない……」
「そんなことはありません！」とベアトリスはキッパリと否定した。
「きっと良いことがありますわ」
エクリースはただじっとベアトリスを見つめていたが、「お休み」と言って自室へと去って行った。
「神様。いつかエクリース様の顔に、素晴らしい微笑が浮かびますように」
とそっとベアトリスは祈った。

☆　―☆

―☆

サミュエルは戻って来る早々、早速義姉のイデット妃に呼ばれた。
「それで？」とイデットは人払いをすると直ぐ、サミュエルに向って尋ねた。
「え？」
「あなたのこの報告書だけでは、物足りませぬ！」
「それが全てでございます、姉上」とサミュエルは跪いた。
「エクリースがあの田舎娘に踊りを申し込み、そして楽しそうに踊っていた、とただそれだけですか！　馬鹿な！　あのオリビエと申す愚鈍そのものの少年は、エクリースによって恥をかかされたとあちこちで言いふらしているそうな。あの者は、王の甥に当たられる者。王宮中にも言いふらしております」
「それはちと違います」とサミュエルは言いにくそうに答えた。
「違う？」

「エクリースは何もしておりません、姉上。オリビエの服は、もともと小さかった。というより、オリビエが太り過ぎていたのです。それで踊りだしたので、破けてしまったのでしょう。
それにオリビエを嗤ったのは、ドイルです。エクリースは何も言わず全く笑わずでした」

イデットはじいっと狐のような瞳を、義弟に注いだ。
「お前はエクリースを庇っておいでか？」
「まさか！　わたしは真実のみを語っているまでのこと」
「もしもそれが真実ならば……エクリースは既にもう“物言わぬ王子”ではないということになる。又、女嫌いでも無いと言うことも言える。あの伯爵令嬢は、あわよくば王妃の座を狙っているのかも知れぬな」
「まさか、あの可愛い小娘が、そんな大それたことを！」
「お前は女心というものを知らぬ！」とイデットはピシャリと言った。
「ベアトリスと言ったな……その少女はいずれ、エクリースをものにするかも知れないというのに、呆れた者よの、そなたはただ指を咥えて見ているというのか！」
サミュエルは、ベアトリスの行く末に暗雲が漂っている事に気づいたのだった。

2

2

イデット妃は、以来寝ても覚めてもドリアン伯爵家の小娘“ベアトリス”のことが忘れられなくなった。どんな姫なのかは想像に任すほかは無いが、それでもベアトリスもいずれ年頃になると、花も恥らう乙女に変身するだろう。そうなれば、自分の競争相手になるのは必定だ。

イデット妃はベアトリスのことを思う度、嫉妬と憎しみの炎に身を焼かれるようになった。そしてそれに比例して大きくなるお腹を愛しみ、何とかして無事に王子が生まれてくるようにと、狂おしく祈っていた。

☆ ― ☆ ― ☆

イデット妃の狂乱振りもそして伯爵夫婦の心配なども露知らず、エクリースとベアトリスは日に日に仲良くなっていった。

特に雪が積もっている庭に出ては、二人で雪遊びをしたり、橇で駆け抜けたりしたし、雪が降っている時には、暖炉の側で覚えている詩をお互いに朗読しあったりした。それも飽きてくると、チェスや駒遊びに熱中し、一日中ベアトリスの笑い声が絶えなくなった。

それに伴って、ビクターとアンネットはしばしば出会うようになっていき、やがて二人はお互いに慕い合う仲になっていった。

そういう二人を、ドリアン伯爵夫婦は複雑な思いを抱いて、見つめていた。

「最近ベアトリスは明るくなっていくな。今もエクリース様と二人で、外に出て走り回っているそうな」

とある日、暖炉の側で伯爵がボソッと言った。
「毎日のように……あの二人は一体どういう仲なのだろう……」
「ご心配には及びますまい。二人ともまだまだ子供。子供は子供同士、戯れているだけですわ」
「けれどもいずれ二人とも育っていく。そうなれば……」
「何を仰います！」と奥方は厳しい声音で制した。「ベアトリスの結婚相手は、この間来られた、お三人の貴公子の少年の一人と決めていたはずですわ。ですから、これ以上ベアトリスとエクリース様を近付けてはいけませぬ！」

ドリアン伯爵はゆっくり面(おもて)を挙げた。
「そうは言っても、この界隈で誰も友達の居ないベアトリスから、エクリース様を取り上げてしまうことは出来ない。それにエクリース様も、最近は時々お話になり、顔色も良くなられた。これは良い兆候だよ、お前」
「でも、わたしは心配なのです」
と奥方はそっと夫の側に座った。そして燃え盛る暖炉の炎をじっと見つめる。
「何が？」
「決まっていますわ。あの王子は、周りの人々を不幸にすると言われているのですよ。可愛いベアトリスの身に何かあったらと……わたしは心配なのです」
奥方の意に反して、伯爵はカラカラと笑い出した。

「何だ、そんなことか！　お前も迷信深い奴だの。これまで見たところ、王子の周辺では何も起っておらぬでは無いか！　あの舞踏会の時、オリビエ様の尻の辺りの服が破れたのを除いては」
「冗談ではありませんわ！」と奥方は苛々して言い返した。
「まあ暫く様子を見ていよう。そして何か事が起これば、エクリース様とベアトリスを離す事にしよう」

「何か起こってからでは遅いのです」と奥方は呟いた。
「そんなことより、王宮のクリフから手紙が来たぞ。クリフはあちらで大層人気者になり、イデット妃から可愛がられているという」
「イデット妃……何だかわたし、あの方を好みませぬ。会ったわけではないのですが、なんとなく」
「お前は何かと心配性だな」と伯爵は又しても笑い出した。
「大丈夫だよ、何もかも上手く行く」
「そうでしょうか」と奥方は、伯爵に気づかれぬように小声で呟いた。

3

3

春はまだ先だと思われる寒い朝早く、明け方前の暗闇の中、黒いフードを被ったドリアン伯爵夫人と侍女がそろそろと厩の方に向かい、一頭の葦毛に馬に跨ると、二人はある場所に向って一目散に駆けて行った。

伯爵夫人の方は、馬を駆る侍女にしがみついていた。

「こんな危険を冒してまで、行く価値があるのでしょうか」

と奥方は前方の侍女に言いかけた。

「奥方様。その者は、よく当たると言う評判の占い師なのです。この辺りの村人達は、何か分からない事があると、その者の所に行くと言いますわ」

「それにしても、こんな朝早く」

「その者は、朝早くか夜遅くでしか人に会わないそうです。一度、追われたことがあったそうでして。母親は、魔女として以前火あぶりに合ったのだそうですから、多分警戒心が強いのでしょう」

「名前は何と言うの？」

「確か……アンジェラと」

「アンジェラ？　アンジェラ……はて、どこかで聞いたような気がするが、思い出せぬ」

「さあしっかり？まって下さいませ。いずれどこかで思い出すかもしれませぬ。もう直ぐですわ」と侍女は言った。奥方はそれきり黙り込んだ。

☆　―　☆　―　☆

アンジェラは、大分前から人の気配に気付いていた。
「人が近付いて来ておる。おや？　高貴な方のようじゃ。二人じゃな」
アンジェラは不気味に哂うと、暖炉に薪をくべた。
「馬に乗って来ておるな。もうすぐお二人はここにやって来るようじゃ。あれ？　女か。女が二人。一人は中年で一人は若い」

アンジェラが暖炉にうずくまっていると、やがて予知した通りに奥方と侍女が息を切らしてやって来た。
二人はアンジェラの小屋の薄汚さと不気味な佇まいに少し躊躇していたが、意を決して中に入った。
「ようこそ」と暗がりで声がし、年老いているのかどうかも年齢の定かではない女性が、ぬっと立ち上がった。
「伯爵夫人と、その供の侍女よ」
「な、なぜ分かるのです!?」と奥方は驚愕の声を上げた。
「それ位分からなければ、占い師とはいえぬぞえ」
とアンジェラは答えた。「それも評判のな」
「そうですわね」
奥方はそう言うと、未知の領域に足を踏み入れた事を少し後悔していた。

「今日はどういうご相談かえ。して報酬は？」
「お金はこちらです」と侍女がかなりのコインの詰った皮袋をポーンと投げて寄越した。
「大した礼儀者じゃのう」
そう皮肉っぽく言うと、アンジェラはその皮袋をすっと自分の懐に入れた。
「侍女の不躾な態度、お許し下さい」と奥方は一応謝った。そちらの方がいいと感じたからだ。

「ではどういう……？」
「娘のことです！」と奥方は単刀直入に答えた。「娘を救いたいからですわ」
「男からかえ？」
「ええ……まあそうです。まだ、大人の男とは言えませんが」
「少年だな。それも、一際美しい少年じゃな」
「え、ええ」と奥方の声は消え入りそうになっていく。
アンジェラはじっと奥に引っ込んだ目で、奥方を見つめた。

「その少年の名前は？」
「エクリース……王子」
「おお！　エクリースか！　なるほどのう。そなたが怖れるのも無理は無いの」
「やっぱり……それでは」
「いや待て、そういう意味ではない。エクリース様ご自身は、何もせぬ。けれども」
「けれども？」
「人の運命と言うものは、自分には罪が無くとも、誰かを不幸にすることがおいおいにしてあるものじゃ。与えられた運命は変えられぬ。けれども、運命は人生において、それ程大切なものではない。運命だけでは推し量れぬ」
「その意味するところは何なのです！？」と奥方は叫んだ。

「勇気、忍耐、肝要、そして、愛。そのようなものがあれば、運命も又違ったものとなるであろう」
「そ、そんなわけの分からない事を聞きに来たのではありませぬ。我が娘ベアトリスはどうしたらよろしいのです！？」
「ベアトリスか……よい名じゃ。又心優しい純真な娘じゃな」
「どうすれば！　教えて下さいませ！　どうか」
遂に奥方は、アンジェラに額ずいた。

「娘が１５歳になるまでに、そのエクリースと離さなければならないぞえ。そうでないと」
「そうでないと？」
「娘の命は無い！」
「ああ～～っ！」
奥方は悲鳴を上げて倒れこんだのだった。

4

4

朝食には奥方は出なかった。どうやら早朝の遠乗りで疲れた、と言ってベッドにもぐってしまったのだ。

「変ね。こんなに早く、それも寒いのが苦手なお母様なのに……遠乗りだなんて」

とベアトリスは、真正面に座るエクリースに身をかがめると、そっと囁いた。エクリースは眉根を微かに寄せた。

「何か隠していらっしゃるのかも」

「僕には……奥方様が、恐れおののいている様が見える」

とエクリースはポツリと呟いた。

「どうして、あなたには分かるの？　今までもそういう事があったわね。見えないものが、あなただけには見えるってことが」

エクリースはその問いには答えず、黙ったままパンをちぎっているばかり。

「今度、わたし達も遠乗りしましょうか？　父はレディのたしなみとして、ぼちぼちわたしも乗馬が出来なくてはならないと言っていたし、あなたもでしょ、エクリース様」

「そうだね」とエクリースはぼそっと答えただけだった。

☆　―　☆　―　☆

けれどもそれは実現しなかった。奥方が熱を出し、何日も苦しんでいたからだ。ベアトリスは心配の余り、常に母親の側に居たし、エクリースもそれ以上は何も語らなかった。

ベアトリスはどうやら母親の熱が下がりだしたので、やっと人心

地がついていつもお気に入りの窓辺のチェアに行く為に、立ち上がった。この所、ベアトリスの背は少し伸び、少女らしい初々しさを身に纏っていたのだ。

「それじゃお母様、わたしは少し外に……」

そうベアトリスは、目をつぶっていた奥方に向って言いかけて立ち上がった。けれどもそれは出来ずに終わった。

突如、奥方の痩せた手が伸び、ベアトリスの手首を掴んだのだ。瞬間、ベアトリスは何か冷たいものをヒヤリと感じて、ぞっとした。

「ベアトリス！」と奥方は低いくぐもった、けれども不気味な声で言った。

「は、はい」

「お前は、エクリース王子をどう思う？」

「どうって……」とベアトリスは躊躇った。「とても……頭の良い、お心の優しい方だと……」

「ふん、馬鹿な！」と奥方は目をカッと見開いて嗤い出した。

「お前は、あの王子が如何に危険な存在かを知らぬ」

「危険な、存在？」

「そうです。お前は、その内にあの王子とは離れなければなりません。もしも、幸せになりたいなら、エクリース様とは仲良くならぬが身の為ですよ！」

そう言うと、奥方はやっとベアトリスのか細い手首を離した。ベアトリスの手首には、奥方の指型がくっきりと着いており、ベアトリスはその跡を思わずさすったのだった。

けれども指跡よりも、その尋常ならざる奥方の言い方に、ベアトリスは怖気を振るっていた。

「それでは、お母様。お元気になられて良かったですわ」

そう無理やりに偽りの微笑を作ると、ベアトリスは奥方の部屋を出た。

彼女が部屋を出ると、侍女が膝を軽く曲げて礼をする。
「お母様のご様子が……良くなりましたわ」
「分かりました」とその侍女は、冷たく答えると部屋の中に入った。その途端、ベアトリスは壁に背をもたれ、深い哀しい溜息をついたのだった。その栗色の瞳には、今にも涙がこぼれ落ちそうだ。
ベアトリスは今こそ、母親である奥方が、なぜかエクリースを憎んでいるのに気づいたのだった。そして、自分がエクリースを愛していることも知った。

のろのろと暗い廊下を歩くベアトリスは、回廊で向こうからやって来るエクリースの姿を認めた。エクリースはいつものように、真っ直ぐ前を向き、生気の無いけれども端正な顔をベアトリスに向けた。
けれども、突然ハッとしてエクリースは歩みを止めると、ベアトリスをじっと見つめる。
「ベアトリス……」と初めてエクリースは自分から言いかけた。ベアトリスは荒い息をつきながら、エクリースを見上げた。
「エクリース……様……」
「どうした？　ベアトリス」
「いいえ……別に何とも」
そう答えつつ、けれどもベアトリスはエクリースの腕に倒れ込んだのだった。

5

5

誰も居ない回廊の端にひっそりと佇む小礼拝堂の中で、エクリースとベアトリスは黙ったまま冷たい椅子に腰掛けていた。

礼拝堂の曇りガラスから、雪が激しく降っているのが見える。

「春はいつ来るのかしら？」とベアトリスが独り言のように言うと、横に座るエクリースがそっとベアトリスの手を取った。そして、

「冷たい」と呟く。

ベアトリスは手を離そうとしたが、意外なほどのエクリースの指の力に抗うことはできなかった。

「エクリース様の手は暖かいですわね」とベアトリスは頬を微かに染めながら答えた。

「大丈夫？」

「ええ……もう大丈夫です」

「どうしたの？　気分でも悪かった？　何だか……泣いていたような気がしたけど」

エクリースの声は、幾分かすれ、もう直ぐ声変わりがする前兆の響きがした。

「いいえ、何でもないんです」と健気にベアトリスは答えた。けれども、さっきの奥方のおぞましい仕草と言葉が脳裏から離れない。

「震えているじゃないか」とエクリースはチラッとベアトリスに目を向けると慎重に答えた。

「本当に何でもありません。ご迷惑をおかけして済みません、エクリース様」

「ベアトリス……」

そう囁くと、エクリースはそっとベアトリスの小さな肩を抱き寄せた。まだ思春期直前のベアトリスは、途端に緊張したが、けれどもエクリースの温もりが彼女を安心させていく。それは不思議な感覚だった。

「春になったら、乗馬の練習を始めよう。僕ももうすぐ12歳になるから、そろそろ始めないとね。ベアトリス、君もお転婆だから一緒に練習するよね」

「まあっ！　お転婆だなんて！」

そう叫んだものの、ベアトリスはどこかホッとしていた。エクリースがベアトリスに抱く感情が、まだ完全に熟していないのを知って、幾らか安堵したのだ。多分エクリースは、ベアトリスのことを、“妹”か“お転婆娘”としての友達と見ているのかもしれない。

「いや？」

「いやじゃありません」とベアトリスは微笑んだ。

その時、カチンと何かが石椅子の縁にぶつかった音がした。

「あら？　何かしら？」

「多分、これだよ」とエクリースはベアトリスから手を離すと、自分の上着のポケットから、静かに時計を取り出した。それは以前、ベアトリスが見たことがある物だった。今は鈍く銀色の輝いている。

「時計？　お屋敷に有る大きな掛時計しか、わたしは時計など見た事が無いけど」

「同じ物だ。時を刻むという点においては。でもこの時計は壊れていて、時を刻む事はできない。むしろその方がいいんだけどね……時間は恐ろしいものだと、ある人は言っていたから」

その時エクリースは、ジュリアのことを思い浮かべていた。乳母のジュリアは夫と息子を処刑されたあと、何処とも無く国を去って行ったという。彼女を思い出すと、今でもエクリースの胸は痛むのだった。

「どなたかの贈り物？」
「ああ、兄のね」
「お兄様というのは……ブライト様のこと？」
「う・ん」とエクリースは聞こえないほどの小声で微かに答えた。
「ああ、ごめんなさい！　わたし、その事は言わないつもりでしたのに」
　ベアトリスも少し聞いていた。厩番の少年に突き落とされたエクリースを救おうとして、溺れて死んだ、類稀なき非凡で将来を期待されていた美しい王子のことを。
「いいんだ」とエクリースは尚も俯きながら言った。「あれは、ぼくのせい」
「でも！」とベアトリスは反論しようと構えた。
「いいんだ！」とエクリースはベアトリスを制した。「少なくとも、僕の為に身代わりになって兄は亡くなった……それは事実じゃないか。もう二度と、あの優しかった兄に会うことは無い……この世では」
　ベアトリスは初めてエクリースの持つ哀しみと、悲しい運命に気づき、そしてそのことをあからさまに語ってくれたエクリースをもっと愛しく感じた。心を許してくれたのだと思うと、ベアトリスはそれだけで嬉しかった。
「さあ、もう大丈夫そうだから、部屋に送ってくよ、ベアトリス。あ、それから！　もうエクリース“様”なんて呼ばないで。僕たち、もう友達なんだから」
「そうね」とそう答えたベアトリスは、半ば嬉しく半ばガッカリしていた。けれども、１１歳で“恋人”となるには確かに早過ぎる。
　ベアトリスは幸福感に浸されながら、ゆっくり立ち上がった。
「早く春が来るといいね～」とエクリースは言った。

6

6

やっと起き上がれるようになった奥方は、物陰からエクリースとベアトリスの様子をじっと執拗に伺っていた。

「15歳までに……何とかせねばならぬ。あの陰気で不吉な王子から、可愛いベアトリスを離さなければ」と奥方は鋭い視線でそうブツブツ呟いていた。

「もう直ぐ春がやってくる……因果なものじゃの、時が巡ってくるというのは」

そう言うと、奥方は深く嘆息した。

☆ ― ☆ ― ☆

一方王宮では、イデットのお腹が目だって大きくなってきた。けれどもイデットはいたって健康でよく食べ、相変わらず我がまま放題だったが、王はそれでもイデットには何も意見できなかった。何より、王はそのお腹の赤ん坊が気がかりだったからだ。

「王はわたしのことより、このお腹に居る胎児がご心配とみえるな」とある日、イデットはリンゴを齧りながら、側に付く侍女ダイアナにこ皮肉っぽく言った。

「そんなことはございませぬ。毎日一度必ず王様はイデット様のご機嫌伺いにいらっしゃいますし、いつもお優しい言葉を掛けて下さいます」

「ふん」

そう吐き捨てると、イデットは齧りかけのリンゴを放り投げた。

「不味いっ！　何か美味しいものはないのかえ、この王宮には！」

「はいっ。ですが余りお太りになられるのも、お体には差し障りま

す」

「お前はいつも、模範的な言い方じゃの」とイデットは言った。

「けど、いいわ。もう少しの辛抱。王子が生まれた後は、わたしはしたい放題ができるゆえ」

「けれど……エクリース様と言う、年上の王子様がいらっしゃいます」

「エクリース、ですか」とイデットはそう言うと、狐のような目を細めた。その美貌が、醜く変わるのも知らず。「いつか、あの者を葬ってみせる」

それからイデットは、声にならない含み笑いを漏らしたのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

「ねえねえ、アンネット！　雪が溶け出したわ！　とうとう春がやって来たのね！」

ある朝、起きだしたベアトリスは雪の下から顔を出しているマツユキソウの若芽を見つけたのだった。マツユキソウは、春の訪れを知らせるという白い清楚な花で、俯き加減に花を咲かす。

「やっと寒い冬も終わりますわね」とアンネットも暖炉に薪をくべながら相槌を打った。

「そうよ。そしてエクリース様と、一緒に乗馬を練習するの！」

「お嬉しそうなこと！」

「あら」とベアトリスは頬を染めた。「だって、最近彼は明るくなったし、口も効いて下さるわ。わたし達、いいお友達なのよ」

「お友達、ですか？　それだけで？」

「何が言いたいの、アンネット」とベアトリスは少し自制心を働かせながらそう素っ気無く言った。「そんなことより、アンネット、最近あなたこそ、ビクターが近寄ってくると、なぜかお顔を背けてしまうのね。でもその瞳は嘘をつかないわよ」

ベアトリスの口元には、含み笑いがあった。

「まあっ……それは……」
余りにも図星なので、アンネットはどう言い訳していいのか分からない様子だ。

暫くすると、ベアトリスの言った通り、マツユキソウは段々頭をもたげ、そして遂に白い可憐な花を咲かせた。
「花が咲いてるよ！」と息を切らせながら、外からエクリースがベアトリスに向って来たとき、ベアトリスの胸は高鳴った。
「ほら！　まるで君のような白い花だね、ベアトリス」
さっと差し出されたエクリースの手の先には、白い花があった。
「君にあげる」
「え？　ああ、そう？　ありがとう、エクリース」
エクリースは大事そうに、マツユキソウをベアトリスの栗色の髪に差した。
「よく似合うよ」
「やだ～～！」とはにかむベアトリス。

「お二人は仲が宜しい事！」とビクターに近寄ったアンネットが言いかけると、ビクターは視線をエクリースからアンネットの方に向けた。
「エクリース様をあんなに朗らかにしてくれて、ベアトリス様には深く感謝しております」
「もちろん！　お嬢様は素晴らしいお方ですもの！」
とアンネットは得意そうに答えた。
「でも……アンネット」とビクター。
「なにかしら？」
「これを……あなたに」
ビクターがおずおずと差し出したのは、マツユキソウだった。
「まあ……」
「お受け取りになられますか？　それとも……」

「否定できるとお思いになって？」

そう言うと、アンネットも又、ビクターからの可愛い、そして心の篭った贈り物をニッコリと手にしたのだった。

7

7

春になり雪が溶けると、王宮から乗馬の教師が渋々やって来て、エクリースとベアトリスの二人に乗馬を教え始めた。二人は競って練習し、元々才能が備わっていたのか、教師が驚くほど上達していった。

エクリースは慎重に馬に乗るタイプだが、ベアトリスはかなり大胆に乗る。渋々やってきたはずの乗馬の教師、下級貴族のプラット氏も、いつの間にかこの地に馴染んでしまっていた。何より、評判とは違うエクリースの明るく凛とした姿と、ベアトリスの可憐さに心が和み、この田舎の生活も悪くは無いと感じ始めたのだ。

けれども唯一つ難儀だったのは、エクリースが決して川辺には行かない事だった。遠出するのもひたすら森の中であり、水辺には近寄らないのだ。見かけに寄らず賢いプラット氏は、エクリースの心の澱に気付いていた。

ベアトリスも又無理にエクリースを、川には誘わなかった。二人の仲睦まじい姿は、兄妹のようでもあり、ある時にはハッとする艶かしさも有していたが、けれども所詮二人はまだ子供同士。言い争いも振る舞いも大人から見ると子供っぽく、まだまだあどけなさが抜けてはいない。

けれどもプラット氏は、英邁だと言われていた亡き王子ブライトにも負けず劣らず、エクリースが聡く、気高く、多少暗いところは有るにしても、将来この王国を背負って立つのも悪くは無い、と思うまでになっていた。

何より、一年前に比べ、エクリースは背が伸び、少年らしく成長

していたし、そして前には分からなかったが、びっくりするほど美少年になっていたからだ。

来週は、いよいよエクリースの12歳の誕生日。この国では12歳と言うのは特別な年齢で、もう“大人”として扱われるのだ。

高貴な12歳の少年が着ると言う紫色のケープも贈られてきて、ドリアン邸は誕生日の晩餐会の準備に大わらわだった。形式だけの王からの手紙も添えられていたが、エクリースはそれをチラッと一瞥しただけだった。その文字に、愛情が無いのは明らかだったからだ。

「随分素っ気無いお手紙なのね」とそれを読んだベアトリスは思わず率直に述べてしまった。「あら、失礼を致しました。こんなこと言ってしまって」

「いいんだ」

そう短く言うと、エクリースはベアトリスの手元からその手紙を受け取り、ピリッと破いて暖炉に入れ込んでしまった。

「まあ！　……せっかくの……」

「構やしない」とエクリースは言った。その上等の紙で出来た手紙は、あっという間に灰になっていく。

「父上はお忙しかったのだろう。あちこちにインクのシミがあったしね」

「もともと、捨てる紙でしたのね」とベアトリスは直ぐに見抜いて言った。

「ああ、そうみたい」

「エクリース……」

「同情はよして！」と珍しくエクリースは遮った。「どうせ僕は父上の愛には値しない息子なんだから。むしろ、書いてくれただけやっとと言う感じだったんだろうし」

「そうね。……でも明日のこと考えましょ。厨房では今からいい匂

いがしてきているのよ。きっと素晴らしい晩餐会になるわ」
「君達の待遇はとてもありがたいと思っているんだよ、ベアトリス」
「いいえ。一年前に比べ、あなたがこんなに喋っているのを誰が想像したかしら！」
とベアトリスは朗らかに言った。

「ねえねえ、何を歌ってあげましょうか？」
「ベアトリス！」と突然エクリースはこちらを向き、鋭い視線をベアトリスに向けた。
「なに……かしら？」
「あの『待ちくたびれた駒鳥』の歌だけは歌わないで！」
「ああ、……あの時の……」
ベアトリスは苦い思い出を脳裏から蘇えらせた。
「あなたが嫌ならやめるわ。わたしは大好きなんだけど」
「ごめん。でも、あの歌はダメだ」
「どうして？」とベアトリスは、奇妙なほどはっきりと言うエクリースを訝しがって、尋ねた。
「ダメなんだよ！　ダメだと言ったら、ダメなんだ！」
「分かったわ……」
ベアトリスは承諾したが、心の中では苦い涙を溜めていた。ベアトリスはそれをぐっと飲み込んだ。エクリースが嫌いなのだから、仕方が無いとは知りながら、それでもどこか腑に落ちない。
けれどもベアトリスはその点では従順だった。
「他の歌を歌うから……それでいい？」
「ああ、ベアトリス！　君の歌は大好きなんだよ、本当は」
「ありがとう」とベアトリスは答えたが、その実心は、得体の知れない哀しみに陥っていた。

8

「イデット様、プラットよりお手紙が参りましたわ」とイデットの侍女が、袖の下からそっと手紙を差し出したので、イデットは大儀そうにそれを引っ手繰った。

さっと一瞥したイデットは、すぐさま側の暖炉にその手紙をくべた。手紙はめらめらと不吉に燃え果てていく。

「どうでした？」

「どうやらエクリースは、ドリアン伯爵令嬢のベアトリスと益々仲が良いようじゃな。この間のエクリースの１２歳の誕生日にも、二人は睦まじく踊っていたそうじゃ。あの伯爵め、ベアトリスとエクリースを本気で結婚させたいらしいと見えるな」

「でも、エクリース様の評判はサイアクですわ」

「確かに、ここでは。けれども、客観的に見て、あの王子は思ったより素晴らしく成長しているらしい。もう“物言わぬ”王子ではなく、見識豊かな礼儀をわきまえた立派な若者になるだろうと、プラットが書いておる。

そう！　誰もがエクリースに会うと、どこか魅了されるらしい。義弟のサミュエルもそうだった。このままでは、わたしが王子を産んだとしても、油断はできぬぞえ」

イデットはかなり大きくなったお腹を柔らかな東方の絹の服で包み、あちこちを歩き回っていた。

「エクリースは魅力があり、そして類稀な美しい少年に成長したそうじゃ。将来危険な存在よの、わたしの息子にとっては」

「それでは……」

「手出しは出来ぬぞ！　王はエクリースを嫌ってはいるが、輝かし

く成長した息子を見れば、憎しみも和らぎ気が変わるかも知れぬ。王は今でも、エクリースに対する幾ばくかの愛情を失ってはおらぬ。それは微かなものだが、けれども人間は移ろいやすいし、悲しみもいつかは薄らぐ。

ああ！　一体どうすればいいのやら！」

イデットは悔しそうに揉み手をした。

「イデット様。もう一通、お手紙がございましてよ」

「え？」

「あの方からですわ」と侍女は意味深に囁いた。「ラウール様からです」

「……！」

イデットは絶句すると、すぐさまその手紙を奪った。そして我が胸に当てる。

「ああ！　どれだけお待ちしていたか！」

「大層危険なことでしたが、ようやく手に入りました。こちらに来た、商人からこっそりと手渡されましたの」

「おお！　この字こそ、まごうかた無きあの方の筆跡じゃ！　このお腹の胎児の父親の……」

「しっ！」と侍女が制した。「お声を出しますな。壁に耳あり、ですから」

イデットはハッとして口元に手をやると、そそくさと手紙の封印を切った。読んで行くうちに、イデットの顔はみるみる明るくなっていくのが分かる。それは今までの冷酷な顔の王妃ではなく、恋する若い女の表情になっていた。

「ああ！　ラウール様……今でもわたしをお忘れではないとは！　今でも……今でも、わたしを慕っていると書いておられる……」

「お読みになりましたのなら、すぐさま焼き捨てましょう、イデット様」

と侍女は冷淡に述べた。
「何を言う!?　焼き捨てるですって！　わたしにはそんなことは出来ぬ」
「ですが、この手紙が誰かに知れたら一大事ですわよ！　例え王子がお生まれになったとしても、それは不義密通の子として裁かれてしまいますわ！　ご存知ですか？　あのハイラと言う前妃の侍女が、イデット様のことを不審の目で見つめていることを！」
「もちろん！　事は上手くやります。けれども、この手紙はわたしの宝。あの方の愛を証しするものです」
　イデットはその手紙を胸に押し当てたまま、梃子でも渡す気は無い様子だった。

「分かりました。それでは、あそこに入れておきましょう。けれどもイデット様、いつかその手紙は破棄されなければなりませぬ。お分かりですね。これはイデット様だけの為ではなく、祖国の為でもあるのですから」
「我が祖国に、汚辱はそそがれぬ」とイデットは毅然として言った。
「大丈夫です。ことは誰にも知られはしない……少なくともそうするつもりですから」
　イデットは怪しく微笑んだ。
　翌日、イデットのその侍女が、掘に溺死体として浮かんでいるのが発見された……。

9

9

雪が溶け、花々がようやく綻び出した頃、遠乗りに出かけたエクリースとベアトリスは、プラット氏がうっかりしている隙に、プラット氏を振り切って何処かへと馬を駆って行った。

二人は思い切り馬を駆けた。駆けて駆けて、遂に今まで来た事の無い場所に来てしまった……。

「ああ～、疲れたぁ。ここどこかしら？」

と我に返ったベアトリスがエクリースに尋ねた。

「ごめんね、明日あなたの１２歳の誕生日だと言うのに……こんな所まで来てしまって。言い出しっぺのわたしなのに、何だか遠くまで来て、又家に帰れるかしら？」

「大丈夫だよ、ベアトリス」とエクリースは慰めるように言った。

「やろう！と言ったのは僕だから。確かに、プラット氏から逃れたかったしね」

「見事、逃れたわね」とベアトリスはニヤリと笑う。笑うとベアトリスの白い歯が少しこぼれて、子供っぽく見えてしまう。

「少し休みましょうか？」

「うん」

そう同意すると、エクリースもベアトリスも馬から下りた。

そこは暗い森だった。樹木が高く生い茂り、ドリアン邸の建つ低い樹木だけの低地ではない。

「何だか、不気味」とベアトリスは弱気を出して言った。「こんな所が森の中にあっただなんて……わたし達、世間知らずなのね」

「まだまだ子供だからな～」
「でもあなたは、王宮を知っているのに！」
「王宮は、余り知らない。知っていたのは、外れの淋しい小屋だった。小さくて冬は寒いし、食事も粗末だった。だけど……楽しい日々だった……」
エクリースの声は段々小さくなり、その内に溜息と共に消えて行った。

「もう二度と戻らないんだね、過去は」とエクリースは銀の時計を取り出しながらそう静かに言った。「時というのは、確かに恐ろしいものなんだと最近少し分かるようになった。過去は戻らず、知らない内に時間は経っていく。何をしても、何をしなくても、僕達は一刻一刻歳を取っていくんだ……」
エクリースの言葉は、誰かに言うというよりも、自分自身に呟いているようだった。
「でもエクリース。それは今青春に向っているのよ。急に歳を取るわけじゃないわ！」
その朗らかなベアトリスの言い方に、エクリースはやっと微笑んだ。
「君はいつも前向きなんだね。そういう所が僕は……好きだ……」
「あら」とベアトリスはピンク色の頬を、更に赤く染めた。「お追従なら要らないわよ」
「嘘じゃない！」とエクリースは向きになって言い張る。
「君のその明るさが、僕にとっては救いになるんだよ。本当さ」

ベアトリスは少しだけ、エクリースに向き合った。若草色のリボンが揺れ、同じく若草色のマントの中の身体が硬直した。
「いつも君が側に居てくれたら、いいのにな」とエクリースはさっと横を向きながら言う。
「僕の今までの残酷で侘しい生活が、少しでも華やぐと思うからね」

「でもあなたは」とベアトリスは少し躊躇いつつ答えた。「王子様ですもの」
「それが？」
「この国の王様になるかもしれないお方なのよ！」
「それが？　それがなに？」
「そんなお方が、わたしのような者を……。いけないわ！」
エクリースはさっとベアトリスの小柄な身体を抱き締めた。ベアトリスは抗わずに、じっとしていた。
「今とは言わないけど、でも約束して欲しい」
「約束……？」
「僕の側に居て」
「……ええ……嬉しいわ」とベアトリスは率直に、そして正直に答えた。

「遠出して良かったな～」とエクリースは言うと、微笑んだ。
「あらっ、エクリース！　あなた、笑ったわね、初めて笑ったのね！」
「本当!?」とエクリースも言い返した。
「だって……笑っているじゃない！　ステキな笑顔だわ」
エクリースはもう一度だけベアトリスを抱き締めると、やっと手を離した。
「それじゃ、戻ろうか。この約束は誰にも言わないで」
「ええ、分かったわ。わたし達だけの“秘密”ね」
そう言うと、ベアトリスはひらりと馬に飛び乗って、朗らかに笑いながら駆け出した。そしてエクリースも慌てて後を追ったのだった。

10

10

もと来た道を引き返しているつもりが、エクリースとベアトリスはいつの間にか道に迷ってしまっていた。既に早春の一日は暮れかかろうとしており、西の空が茜色だ。

「どうしよう!?　ここはどこなのかしら?　わたし達、家に戻れる?」

「段々寒くなってきたね」とエクリースも心細そうに答えた。

「ねぇエクリース。向こうから何か聞こえて来ない?」

と耳聡いベアトリスが囁いた。

「え?　なに?」

「何だか……聞こえてくるの。そこへ行きましょう!」

ベアトリスが先に走り出したので、仕方なくエクリースは彼女の後を追った。

やがてベアトリスが耳にした物音は、小川のせせらぎなのだと二人は気づいた。切り立った断崖の下、轟々という音を立てて、冷たいそしてたっぷりした雪解け水が流れている。

「この川に沿って下れば、もうわたし達の家よ!」

そう叫んでベアトリスは小川に近寄ろうとしたが、エクリースは黙ったままその場に凍り付いていた。

「どうしたの、エクリース?　怖くないわよ。木々が茂っているし、まだ明るいわ」

「そうじゃない」とエクリースは小声で答えた。突如、何かがエクリースの脳裏に浮かんだのだ!　水に流されて行く自分、そして叫びつつ飛び込む兄のブライト。それから、いつの間にか水面に消えた、あの輝かしい金髪……。

エクリースの心臓は激しく打ち始め、顔面から血の気が失せていく。

「エクリース……あなた、真っ青よ！　ああ、そうか！　そうなのね……ごめんなさい、エクリース」

ベアトリスは、ゆっくりと自分の馬をエクリースの馬に近付けた。けれどもエクリースは馬上で硬直したまま、ベアトリスと目を合わそうともしない。

「エクリース……」

「話しかけないで！　僕は……僕は今の今まで、兄のことを忘れ去ろうとしていた卑怯者だ！　兄は僕のせいで死んだのに！　僕はその悲しみを隠し、罪を免れようとしていたんだ。何と情けない……そして卑劣な奴なんだ、僕は！」

エクリースは俯いた。

「エクリース。それはあなたの罪では無いわ」

とベアトリスが言いかけると、エクリースはキッと顔を上げた。

「僕のせいだよ！」

「違う！　あなたを恨み、突き落とそうとした人のせいなのよ。だから自分を罵るのはやめて！」

「確かに、僕を嵌めようとしたのは、あのグライスだった。グライスとは、まるで兄弟のように育っていたのに、ある時からあいつは、僕を目の敵にしだした。けれどもその大元を辿れば、それもこれも僕の持っていた銀の時計のせいだった！」

「何もかも自分のせいにしないで、エクリース！」

とベアトリスは悲痛に叫んだ。「自分を哀れむのはやめて！　そんな暇があったら、将来のことを考えてよ！　あなたは、もしかしたら王位に付くかも知れ無い人なんだから！」

けれどもエクリースは下を向いたまま、くっくっと泣き出した。

「そんな風に考えられないんだよ、ベアトリス」とエクリースは本音を語った。「そんなに考えられたらどんなにかいいか！　だけど無理なんだ。兄の姿が頭から離れない。怒りに身を震わせた父の恐ろしい瞳も又、忘れられないんだ。

その上、僕を産んだせいで、母も亡くなった。僕は、自分が誰かを幸せにすることすら出来ないんだよ！」

「だったら、わたしを幸せにしてよ！」とベアトリスは駆け寄り、思わずエクリースの黒髪に囲まれた頭を抱いた。「だったら、いいでしょ？　いつか幸せにしてくれるのなら、あなたの噂も呪いもいつかは無くなってしまうわ。他人も誰も何も言わなくなるわよ、きっと」

エクリースは黙ったまま、自分の頭（こうべ）をベアトリスに預けていた。けれども手の甲で涙を拭くと、やっと顔を上げた。辺りはもう薄暗い。

「分かった。……この川沿いに館に戻ろう」

「あなたが、川を見たくないのは分かる。でも、わたしが居るじゃない！？　わたしが先導するから大丈夫よ」

そう言うと、ベアトリスはさっと身を離して、ギャロップで馬を駆りだした。その後ろ姿をエクリースはぼんやりと見つめていたが、直ぐに自分も彼女の若草色のリボン目掛けて馬を走らせた。

―　未来の花嫁は……ベアトリス、君しか居ないよ！　君のように勇気があり、明るい楽観的な人こそ、僕には必要なんだ。

エクリースはやっと心を落ち着かせることができ、そして幸福な気分にもなった。時々振り返るベアトリスに向って微笑もうと努力しながら、やがて二人は全員が心配していたドリアン邸に辿り着いたのだった。

けれども唯一人、奥方だけは冷たい目でエクリースを凝視し、側

の侍女に囁いていたのだ。
「明日はエクリース様のお誕生日だが……エクリース様だけ、ここから消えて欲しかった……」
「奥様！　それは」
「しっ！　この言葉は、聞かなかった事にしておくれ」
そう言うと、奥方は作り笑いをしつつ、ベアトリスに駆け寄ったのだった。大事な大切な娘を、何かから護ろうとするかのように。

第五章　新しい王子の誕生　1（前書き）

まるで兄妹のように仲良くなったエクリースとベアトリスの幸福は、新しい王子の誕生によって、得体の知れない陰に包まれていく……。

第五章　新しい王子の誕生　1

1

『……エクリース王子の12歳の誕生晩餐会は、滞りなく終わりました。ご出席の方々は賑やかに歓談し、エクリース王子は常にベアトリス様に視線を注いで楽しげでした。今では王子はかなり朗らかに成長あそばされ、乗馬のみならず勉学にも優れ、又そのご容姿は輝かしいものがございます。

　ベアトリス様とエクリース様は、互いに目を見交わされ、又踊りなども楽しげに踊られていました。ただ、客の一人が、“ある歌”を所望されましたが、ベアトリス様はそれはエクリース様によって禁じられているゆえ、歌えないと弁解なさっておられましたが……』

「なるほど！　歌えない歌!?　それは何だろうか」

と今まで読み上げていたイデット王妃が、ふと顔を上げた。

「どう思う、マルゴット？」

　尋ねられた新しい若い侍女が顔を上げると、賢そうな瞳を煌かした。

「どうやらそれは……エクリース様が何かをお考えでは？　それとも、エクリース様には何かを感じ取る才能がお有りと聞いておりますが」

「お前は聡いの」とイデットは言った。

「それ以外は、何という事は無いプラットの便りじゃ。相変わらず下らない事ばかり！　その上、最近はエクリース王子を誉めてばかりだわ」

「けれども、危険ですわね」とマルゴットは呟いた。

「なに！？」

「エクリース様の周辺では、最近何一つ厄介な出来事は起っておりませぬ。“災いの王子”と言われていたのに、これでは“幸福の王子”ではありませぬか！　王がどうお考えか、イデット様はお聞きになられて？」

そう聞かれてイデットはハッとしたようだった。

「確かに“災いの王子”とは程遠いな。今では、“デスティ”の再来などと言いふらす輩は居なくなったようじゃ……」

「でも大丈夫ですわ」とマルゴットは冷静に述べた。「イデット様が王子をお産みになられれば、王様のご関心やご寵愛は、新しい王子様の方に向うでしょうから」

「責任重大じゃな」

そう言いつつ、イデットだけはこの胎児が王の子ではない事を知っていたのだが。

イデットはプラットの手紙を、暖炉に放り込んだ。

その途端、イデットはお腹を抱えて喘いだ。

「い、痛い……痛いのじゃ……」

「イデット様！　もしや……でもご予定は来月では？」

「そ、早産かも知れぬ」とイデットは侍女マルゴットを遮った。

「誰かを呼んで参れ！　早く！」

「は、はいっ！」

マルゴットは慌てて、産婆を呼びに駆け出していった。

「いよいよ、生まれるのか。ああ！　王子であって欲しい！　でないと、あのエクリースが跡を継ぐ事になってしまう！　どうか、王子を！！」

陣痛に苦しみつつ、イデットは邪な祈りを捧げていた。

☆　―　☆　―　☆

イデットが、いや、王も他の従者も、そして人民達も希望していた通り、イデットは玉のような王子を産んだ。王はその新しい王子をサイラスと名付け、自分の子ではないと知らないまま、溺愛した。何よりも渇望していた新しい跡継ぎ。これでエクリースに王位を譲らなくて済むのだ。

例えエクリースがサイラスよりも年長であったとしても、王は嫌っているエクリースを王位に就ける気は無かった。そして数年すれば、王はサイラスを皇太子とするつもりでいた。

けれども、ここに一人だけ疑問を持っている人物が王宮に存在している事を、王は気づいていない。それは、ハラレ。元の王妃付きの侍女で、今では王宮の侍女達の主と化している老侍女長だ。

「ふん。イデット妃は、二ヶ月ほど早く、子をお産みになられたようじゃな」

とハラレは側のお気に入りの若い侍女に囁いた。

「お噂は聞いております」とその侍女も冷淡に答えた。「けれども、王様はそんなことは意に介されませぬ。又イデット様の息のかかった産婆は、これは早産だと申しておりました」

「早産、か」とハイラはせせら笑った。「早産の子にしては、大柄じゃの」

「例のお噂は本当でしょうか？」

と若い侍女は近寄って耳打ちした。

「御輿入れの前に、あちらに恋人が居られたと言う……」

「確たる証拠はないようじゃ」とハイラは溜息をついた。

「確かに、ラウールと言う若い貴族と仲が宜しかったようだが……契りを交したという証拠は何も無い」

「でしょうね。ただ、お国から連れて来た古い侍女が、溺死したというのも何かの偶然でしょうか？」

「それは……分からぬ」とハイラは口元を歪めて呟いた。「ご成長あそばされれば、自ずと誰に似ているか分かろうというものじゃ。

だが、エクリース様が跡継ぎと言うのも、これまた考え物じゃな」
「どっちに転んでも、同じ事と仰りたいので？」
問われたハイラは、意味深に扇の陰で微笑んだ。

2

2

時は巡り、壊れた時計の針は動かなくとも、時間は一刻一刻と過ぎ行く……。

サイラスという新しく王子が生まれたという出来事は聞いてはいたが、北の果てではエクリースとベアトリスは、ごく自然に仲良く日々を過ごしていた。

夏が過ぎ、そして冬が二回訪れ、そして去って行った。

エクリースは１４歳の利発な少年になり、ベアトリスはもうすぐ１４歳の可愛いレディへと成長していた。その間、不幸なことや厄介ごとは何一つ起らず、いつしか人々はエクリースを忘れ、新しい王子サイラスが二歳になったことだけを祝っていた。

王はサイラスを溺愛していた。歳を取ったときの子供は可愛いと言うが、王の溺愛ぶりは異常とも言えるほどで、そしてイデット妃への寵愛振りも凄まじかった。

王は常に、よちよち歩くサイラスを片時も離さず、何一つ疑わなかった。サイラスは確かにイデットに似た面立ちの可愛らしい幼児で、賞賛を浴びるに相応しい子供でもあった。けれども、無理も無いことだが、大層わがままに育ってもいたのだった。

サイラスを泣かせた侍女達は、容赦なく鞭打たれ、皆が腫れ物でも触るようにサイラスに接していた。

「王様のサイラス様へのご寵愛振りは、最近とみに激しいようだな。少々目に余るようじゃ」とある日シスリー長老がお付の者に言ったほどだ。

「これでは、近いうちにサイラス様を皇太子に即位させるかも知れ

ぬ」
「けれども厄介なことが起りました」
と側近は告げた。
「何じゃ？」
「ドリアン伯爵から、エクリース様はもう充分ご成長し、勉学や剣術、そして諸々のマナー全てを習得されたので、もう王宮にお返ししたいと言う手紙が王宛に来たそうで」
「なるほど、エクリース様の存在を忘れて居ったわ」
とシスリーは顎鬚を撫でた。

「人づてに聞く話では、エクリース様のご成長振りは著しく、それは素晴らしい王子に相成ったというお話でございます」
「素晴らしい王子？」
「さようで」
「１４歳と言えば、もう立派な若者の端くれ。で、王は何と？」
「一度、エクリース様を王宮に召したいと、それも渋々ながらですが」
「どのようなお方に成長なされたのだろうな？」
「大層聡明でお美しい少年とか」
「そうか。それは一度拝見せねばな。けれども王のご意向は変わるまいて」
「確かに。もう既に、ブライト様を忘れておいでのご様子ですからね」
「時とは酷（むご）いものじゃな。あの素晴らしかったご長男をお忘れとは！　去って行った者は、いずれ忘れ去られる。それが世のならい、なのであろうの」
「まことにその通りで」
二人は、遠く広大な庭で戯れている王と小さなサイラスの姿を見つめて頷いた。

☆ ― ☆ ― ☆

「エクリース！　やっぱり行くの？」
「仕方ない。父上からのご命令なんだよ、ベアトリス」
朝食のあと、回廊ではベアトリスがエクリースに詰め寄っていた。
ベアトリスはかなり背がスラリと伸びた美少女となり、振り向いたエクリースは、初対面の誰もがハッと息を飲む一際目立つ少年になっていた。とある詩人が、アポロンだと謡った如く。
「だけど、すぐ戻って来る。ただちょっと僕と会ってみたいだけらしい。僕も弟とは初めて会うしね」
「サイラス様ね……でも、腹違いの弟なんでしょ？」
とベアトリスは勝気そうに言った。春の雨の音が中庭を濡らしている陰気な朝だ。

「ああ……だけど、弟には違いないからね」
「あなたは、本物のお人よしね！　あれだけ父王様から邪険にされているというのに」
「けれども、命令には逆らえないんだ」
「そうね。もしも逆らうと、何と思われるかそれが怖いわ」
ベアトリスはそっとエクリースに近寄った。
「わたし、何だか不安で」
「何も心配は要らないよ。まさか父上が僕を取って食うわけではないだろうに！」
「取って食いそう……」とベアトリスは呟いた。

「馬鹿な！　ベアトリス、君は心配性だよ」
「特に、あなたの事ではね」
「君をここに残したままで、ずっとあっちに居るはずがないじゃないか」
とエクリースは優しく言いかけた。

「ならいいんだけど」
「僕は、世継ぎになどなる気は無いんだから。それは父上もご存知だし、世継ぎは弟だと決まったようなもの。そうなれば、僕は自由だ。そしたら君と……いや、それはあとでの話だけど」
「エクリース……あなたを愛してるわ。失いたくないの」
その言葉を聞くと、エクリースはビクッと身を硬くした。けれども直ぐにベアトリスの肩を抱くと、その頬にそっとキスをした。
「分かってるよ、ベアトリス。そして僕の気持ちも知っているはずだ。ね？」
「ええ」とベアトリスは、押し寄せる不安を隠して微笑んだ。雨の音が、どこか不吉に響く……。

3

3

回廊で話し込んでいるエクリースとベアトリスを、奥方が盗み見ていた。エクリースに注がれる視線は、憎悪に満ちている。
「このまま、戻って来ないといいのに！」
「はぃ？　エクリース様のことですか？」
「ええ、もちろんよ。あの朝、凍えるような朝を忘れた事は無い。あのアンジェラという占い師と会って話したことを」
「はい。もちろんでございます」と侍女も頷いた。
「ベアトリスが15歳になる前に、エクリースを追い出すか、それともベアトリスをどなたかの嫁にするかどちらかにしなければ、取り返しのつかないことになるかも知れぬ。それを忘れるでない！」
「承知致しましてございます、奥方様」と忠実な侍女は頭を下げた。

奥方が凝視しているとも知らないエクリースは、自室に戻ると旅支度を始めた。お供はビクターと、そしてドリアン伯爵家の屈強な兵士二人で、総勢でもたったの四人だ。彼らは馬車ではなく、皆馬で王宮へと向う事にした。わずか一日半の行程だ。
トントンと扉を叩く音がして、アンネットの顔が覗いた。ビクターが近寄ると、アンネットはさっとビクターに熱い視線を向け、それから恭しく何かを差し出した。
「これを、ベアトリス様からエクリース様へと」
「何だい？」とエクリースが尋ねると、
「わたしが縫いました、エクリース様のご衣裳とマントでございます」
とアンネットが答えた。
「薄紫色のビロードか。それは又立派な物だな」

「い、いえ。エクリース様がお召しになると、服の方が負けてしまいますわ」
「世辞が巧くなったな。ところで……ほら、ビクター、アンネットを送ってやれよ」
「ええっ？」と驚くビクター。
「お前達の仲は、僕には分かっているさ」とエクリースはウインクした。
「まあっ、エクリース様ったら」
アンネットの頬が朱色に染まり、ビクターは礼をして慌ててアンネットの側に寄った。
「それでは、暫く失礼を」
「ああ、ゆっくりでいいよ」と笑いながらエクリースはビクターを去らせたのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

「若様は、もうすっかり大人になられて」とゆっくり歩きながら、アンネットがビクターに寄り添うようにしながら言った。
「そうだな……人間の機微をよく分かっておられる」
「ステキにご成長されて。こちらに来た時にはどうなるかとヒヤヒヤだったのに」
「厄介者が来たと？」
「い、いえ、そんなことでは」
「嘘をつくなよ、アンネット。エクリース様は嘘など直ぐ見抜かれる賢い若様だからな」
「そしてお綺麗な」
「それもこれも、こちらでの待遇が良かったおかげだ」
とビクターは言い、アンネットの手を取って手の甲に優雅にキスをした。

「まあ！　何をなさるの？」
「君達がエクリース様を、大切に愛情を持って接して下さったおかげだよ。あんなに朗らかに、素晴らしい王子にご成長されて」
「ありがとうビクター。でも……」
「でも？」
「一人だけ、そうではない方がいらっしゃいますわ」
「ん？」
「奥方様です」とアンネットは険しい顔で答えた。
「なんと！」
「奥方様は、これ以上ベアトリス様との仲が進まれるのを、大層恐れておいでですわ」
「お二人の仲は、そういったものではないと……」
「あなたも世知に疎い方！」とアンネットは幾らか小馬鹿にしたように言って、肘で突いた。

「お二人は既に、お約束されてましてよ……将来のことを。わたしには分かります。ベアトリス様が幾らお隠しになっても」
「確かにそうかも知れないが、けれども二人はまだまだ子供では……いや、違うか」
「本当にあなたって方は！　まだ大人ではありませんが、でももう子供でもありませぬ」
とアンネットはピシャリと言った。
「お二人は、互いに愛し合っておられます。でも事がそう巧く行くと考えるほど、わたしも愚かではありませぬ」
　ビクターは、そう言い切ったアンネットをヒタと見つめたのだった。けれども次の瞬間、二人は唇を重ねていた。
「例えそうでも、わたし達はいつか必ず……」とビクターは喘ぎながら囁いた。

4

4

春の雨がみぞれに変わった早朝、エクリースはビクターと二人の兵士と共に王宮に向けて出立した。

エクリースは旅装なので、ベアトリスから貰った薄紫色のチュニックとマントは着ず、濃いねずみ色の地味ないでたちだったが、馬上にスックと乗るその姿は、二年前にここに来た時とは違って別人のように成長し、又凛々しい美少年に変貌していた。

見送るベアトリスも、以前のおぼこいお嬢様の姿はどこへやら、今は見目麗しい乙女になっていた。ベアトリスは門の陰でフードですっぽり顔を覆ったまま、エクリースを見送っていたが、それは自分がすすり泣いている姿を見せたくなかったからでもある。エクリースにとってベアトリスは、いつも朗らかに笑っている娘でなければならなかったのだ。

「それでは、行って参ります」とエクリースは馬上からドリアン伯爵夫婦に会釈をした。伯爵は少し悲しそうにし、奥方は優雅にお辞儀を返していた。けれども俯いた奥方の顔には、微かで邪悪な笑みが浮かんでいたのだ。

「道中気をつけてな！　又あちらに着いたら、我が息子クリフにも会って、宜しく伝えてくれ。クリフはちょうど１０歳。如何しているかのう？　……いや、それはいいとして、エクリース様、ご無事に戻られよ！」

「分かりました、伯爵。きっと戻って参ります。クリフ様にも必ず、ご夫妻のことなどをお伝え致します。それでは！」

そう大声で挨拶すると、エクリースは踵を返す直前に、さっとベ

アトリスを見つめた。ちょうどベアトリスも、チラリとエクリースを見つめたところだった。それは僅か、2秒ほどか……。二人は何も言い交わさず、冷たい雨の中別れて行った。

―　エクリース様。あなた様はもう戻らなくて宜しいのですわ……。

奥方は、冷たい雨よりもっと冷たい怨念を抱いていたのだ。

エクリースが見えなくなるまで凝視していたベアトリスは、アンネットに促されて自室に入ったが、フードを取りもせずその場に泣き崩れたのだった。

「ベアトリス様！　エクリース様は必ずお戻りですよ！　そんな、今生の別れのように泣いては、エクリース様も嫌がられましょう」

とアンネットはベアトリスのフードに手を掛けたが、ベアトリスはさっとその手を振り払った。

「分かっております。けれど……片時もあの方と離れる事が、こんなに辛い事だとは思いませんでした……。わたしは弱い女ね、アンネット」

「いいえ」とアンネットは直ぐに否定した。「恋する女と言うものは、みんなそうですわ」

「あなたもなのよね、アンネット。でもビクターも必ず戻りますよ、きっと」

「お慰めしているわたしが、ベアトリス様から慰められるとは！」

そのようなアンネットの手を、ベアトリスはじっと握り締めた。

「お祈りしておきましょうね」

「はい、お嬢様」

☆　―　☆　―　☆

「イデット様！　鳩文が参りました！　エクリース様がご出立されたそうですわ！」

イデットの新侍女マルゴットが、薄い貴重な紙切れを持って慌てて入ってきた。けれどもイデットは新しい王子サイラスを抱いたまま、暖炉の側にじっと座っているばかり。

「何を慌てているのです！？　もう手は打ってあります」

「では！？」

「まあ、見ているがいい。エクリースは無事にこちらまで辿り着けるのかしらね？　ふふふふふ」

マルゴットはイデットの企みを何となく察すると、黙ったまま薪をくべ、そこに伝言の紙切れを投げ入れた。薄紙は直ぐに燃えて、跡形も無くなった。

「マルゴット、わたしは眠くなった。この子をあやしておいておくれ」

「はい、かしこまりました」

マルゴットは答えると、ぽっちゃりしたサイラスを抱いた。

「本当にお可愛らしい！」

「もちろんですとも」とイデットは断言した。

「必ずこの子が、この国の跡取りとなるのです！」

5

5

「寒いな……」とエクリースは思わず呟いていた。ベアトリスが居るドリアン伯爵邸は、既に遥か彼方へと過ぎ去った暗い森の中だ。

「氷雨となりましたな」とビクターは寄り添いながら応えた。

「今晩の野営はこのままでは凍えるような夜となりましょう。つきましては、峠の脇道へと寄り道した方が宜しいかと。あそこには、数々の洞穴があるそうですからそこで雨宿りが出来ますぞ！」

と兵士の内髭面の一人が大声で言った。

けれどももう一人の若い方が、反対意見を述べた。

「エクリース様。峠の脇道へ逸れれば、道に迷いかねません。おまけにその道は、大蛇が出ると昔から言い伝えられております。その大蛇は、人を一飲みしてしまう恐ろしい大蛇だとか……。

お寒いですが、峠の道を行く方が無難かと思われます」

「どう致しますか、エクリース様？」

とビクターが躊躇いがちに尋ねると、エクリースは少し首を傾げて考え込んだ。

「大蛇か……その話は僕もベアトリスから聞いた」

「そうでございましょう？」と若い方が勝ち誇って言うと、髭面の兵士が遮った。

「カカカカ！　大蛇如きの噂話を恐れるとは、とても将来の王者とはなり得ませぬな！」

エクリースはキッとその兵士を睨みつけた。

「エクリース様。ここのところは、ちゃんとした道の方が宜しいかとわたしも思いますが」と忠言するビクターを、エクリースはじっ

と見返し、そして気弱に言った。
「薄暗くなってきた。例え居たとしても大蛇も夜には出まい。洞穴の方がいいかも……」
「もちろんそうですとも！　さすが、王様の御子。そのような戯けた噂話に恐れない者こそ、誠の跡取りでございますぞ！」
「跡取りとしてはどうでもいいのだが……では脇道へと急ごう！」
―　所詮、エクリース様はまだ歳若い少年でしかないと見えるな。
ビクターは少々ガッカリしていたが、諦めてエクリースに従った。髭面兵士は、得意満面の面持ちだったが、けれども人知れずニヤリと不気味な笑いを浮かべた事には、誰も気付かなかった。

☆　―　☆　―　☆

「いいですか。エクリース王子を、大蛇が棲むというあの脇道に誘導するのです！　そしてお前は脇目も振らず、わたしの元に戻りなさい。あの王子をこのまま黙ってここに住まわすわけにはいかぬ！　どんな手を使っても、もう二度とここに戻って欲しくは無いのですから。お分かりですね」
昨日奥方に呼ばれて、こう秘かに言い付かった事を髭面の兵士は忘れていなかった。多大な銀貨と共にそう命じられた通り、兵士はまんまとエクリース達を大蛇の森へと誘ったのだった。

「けれども、奥様。何ゆえ、そのようなことを……？」
「お前はただ黙ってわたしに従えばいいのです。これは夫にも内緒ですよ！」
「多分噂話なのでしょうが、もしも本物の大蛇が居たら……エクリース様は……」
「余計な心配をするでない！　わたしの命令を聞かぬなら、考えが

あります」
「いや！　分かりました。ではそのように致します」
「褒美は弾みますよ」
そうニッコリ嗤うと、奥方は銀貨の入った皮袋を手渡したのだった。

☆　―　☆　―　☆

「何だか不気味な森ですね～」
ともう一人の若い兵士が、怖気づいて言うと、ビクターが睨みつけた。
「雨は止んだようだ。どこか野営地を探そうではないか」
「不気味だが、大蛇など居るはずが無い。どうせ村人が、大きな蛇を見てそう大袈裟に喧伝したのだろう」とエクリースも相槌を打つと、馬からヒラリと下りた。
「どこかに平たい土地が無いかな？」
下りたエクリースはキョロキョロと辺りを見回した。けれども、その場所以外は見つからないようだったし、既に辺りは夕刻。ビクターが松明に火を灯すとやっと見えるぐらいの暗さになっていた。

「この辺りしか無いようですね。それでは焚き火をして、パンと乾し肉でも頂きましょうか？」とビクターが諦めて言うと、もう一人の兵士がウロウロし始めた。
「どうした！？」
「あいつが居ません、ビクター様！」
「なに？　居ない？」
「一番殿（しんがり＝後ろ）から付いて来ていたはずなのに……どこへ消えたのやら」
「変だな？」とビクターは首を捻った。けれども、
「その内に、付いて来るだろう」とエクリースはのんびりと答えた。

同じ頃、髭面の兵士は自分だけ一行から離れると、元来た道を一目散に戻っていた。けれども突然馬が悲鳴を上げて棒立ちになり、その兵士は今にも落馬しかかった。辺りは誰も居ない、不気味な暗闇。その中に一対の赤い炎のような光がこちらに迫って来る。

一瞬兵士は、その持ち主の正体を見た。それは、巨大な灰色の鱗に包まれた蛇の鎌首。

「ぎゃあああああ～～～～～！！」

兵士の絶叫は、けれども途中で消えた。なぜなら、その大蛇が一瞬の内に兵士を一飲みしたのだ。

「何か、聞こえませんでしたか？」とビクターが小首を傾げた。

「何かの叫び声のようなものだったが」とエクリース。

「ブルブルブル……けれども、他の獣の声ではないでしょうか」

と若い兵士はすっかり怖気づいている。

「多分そうだろうな。獣は炎には近付かぬ。大丈夫だ、落ち着け！」

と勇んで言ったビクターだが、得体の知れない恐怖がこの３人を包んでいた。

6

6

ドリアン伯爵邸では、奥方が夜通し髭面の兵士を待っていた。けれども、兵士は一向に戻って来た気配が無い。奥方が暖炉の側でうとうとしている内に、夜明けが来た。

鋭い朝日の光線で奥方は目覚めた。ガバっと起きたものの、やはり兵士はやって来ない。

「さては！　あの者め！　銀貨を持って逃げたのか！」

奥方は歯噛みして地団太を踏んだ。

その時、「奥様！　奥様～！」と叫びながら部屋に侍女が駆け込んで来た。

「何です！？　朝っぱらから騒々しい」

「あの、兵士の、馬が駆け込んでまいりました！　でも、兵士は居ないんです！！」

「何と申す！？」

「馬の背中には、なにやらねっとりとした物がありましたわ！　奥様……これは……」

「大蛇か」

「はい、多分」

奥方は最初は驚愕していたが、その内に口元に嗤いを浮かべていた。

「よいではないか。エクリースもやられたに違いないゆえ」

震えていた侍女は、奥方はもしかすると大蛇より恐ろしいかも、とふとそう思った。

☆　―　☆

―　☆

その頃、兵士と交代で寝ずの番をしていたビクターは欠伸をしながら起き上がった。昨日と違って、今日は暖かい朝日が差し込み、良い天気になりそうだ。

ふと見回すと、直ぐ側の崖には無数の小さな洞穴があったものの、やはり人間が隠れるぐらいの穴は無さそうだった。

「お目覚めですか、ビクター様。どうやらあの穴は、蛇どものねぐらのようでございますね。わたしはどうもこの場所が好きになれませぬ。夜中にも、怪しげな物音がしたり何かの鳴き声がしたりして、生きた心地がしませんでした」

「お前は臆病だな」

「いいえ！　わたしはこう見えても森育ちなのです。けれども、こんなに何とも言えない不気味な森は初めてでございます。両親も、この森には近寄るなと子供の頃からわたしに言い聞かせておりました。早くここを立ち去りましょう！」

「分かった、分かった」とビクターは苦笑しながら立ち上がって、土ぼこりを払った。

その時、一つの穴から蛇が顔を出した。

「ぎゃっ！」と一声叫ぶ兵士。

「驚くな！　小さな蛇ではないか！」

「どうした……？」と焚き火の側に寝ていたエクリースも起き上がった。

「エ、エクリース様！　ここは不吉な場所でございます。早く立ち去らねば！」

と兵士はほとんど喚くように取りすがる。

「何を慌てているのだ！？　不吉な場所？　確かに……不思議な森のようだ」

「何を寝ぼけているのです、エクリース様。御身がお大切ですぞ！　この兵士の言うように、やはり早々と出立した方が宜しいかと。

朝御飯は抜きです」とビクター。
「お前達が言うなら仕方ないなぁ」とエクリースは渋々起き上がった。その視線が蛇の穴に向く。
「おお！　可愛い小さな蛇達だな」
「何を呑気な事を！」とさすがのビクターも呆れ顔だ。

　すると不思議な事が起こった。無数の穴から、小さな蛇がぞろぞろと出て来たのだ。そして鎌首を上げて、エクリースを見つめている。小さな舌が、どうにも気持ち悪い。けれどもエクリースは全く怖がりもしなかった。
「ほら、見ろ！　この蛇達は、首領、つまりボスを待っている。もしかしたら親蛇なのかもしれない」
「親って……？　それって大蛇？　まさかぁ！」
と兵士が口をポカーンと開けた。
「ああ、そうだ。親蛇だな。やはりここは蛇達の聖所なのだろう」
「あ、あの……それでは尚更、早くここを……でないと恐ろしいことに……」
とビクターも途切れ途切れに言う。

「無理ですぅ」と兵士の情けない声が響いた。「む、無理……っす」
「なぜだ？」
「だって、背後に……だ、大蛇が居るんです……燃える様な瞳でこちらを見てます！」
　ビクターがチラッと後ろを見ると、今まで見たことも無い巨大な大蛇の姿が見えた。
「わあああぁぁぁぁぁぁ！」
　チロチロと舌を出し、ぬめぬめした灰色の鱗を光らせ、大蛇はするするとこちらに近寄って来る……。

☆　―　☆　―　☆

ベアトリスは二階の自室から、兵士を乗せていない馬を蒼白な顔で見つめていた。

「ベアトリス様……あの馬は……エクリース様は一体……」

と震えながらアンネットが言うと、

「黙って！」とベアトリスは制した。「エクリース様は大丈夫よ…きっとご無事だわ」

その言い方は、まるで自分自身に向かって語っているようだった。けれども、不吉な胸騒ぎは抑えることが出来なかった。

7

大蛇は既にエクリースの直ぐ側まで近寄っていた。ビクターと若い兵士が、その場に凍り付いて動く事も出来なくなって見守っていると、エクリースだけはすっくと立って、その大蛇と相対していた。

大蛇は赤いチロチロした三つに分かれている舌を出して、今にもエクリースを飲み込むその側まで近寄って行った後、ピタリと動きを止めた。赤い小さな燃える瞳が、じっとエクリースに注がれている。

「どうしたんだ、一体!?」とビクターが叫んだ。

「エクリース様が何か話しかけようとしております」と震えながら兵士が言うと、

「馬鹿な！　あんな蛇に言葉など分かるものか！」

とビクターは吐き捨てる。

けれどもその兵士が言った通り、エクリースはじっと立ったまま、おもむろに口を開いていた。

「大蛇よ、この森の主(ぬし)よ……僕達がお前の子供達に危害を与えるつもりは無いのを知って欲しい！　わたし達は、ここがお前とその子供達にとっての聖所だったとは知らなかったのだよ。お前が我が子を守ろうとしているのは分かる！　お前の体内には、既に一人の男の骸(むくろ)が入っているのが、僕には見えるのだから」

それを聞くと、残る二人はますます恐慌状態に陥った。

「なんと！　それでは、もう一人の兵士は……あいつの腹の中か」

「恐ろしいことでございます、ビクター様！　我々も飲み込まれるのでしょうか!?　ああ、神よ！」

「祈った所で始まらぬ！　エクリース様の様子を伺おう。どうやら、信じられぬことだが、あの大蛇はじっと耳をすませているようにも見えるぞ」

ビクターの言ったように、大蛇はそれ以後一歩も動かず、ただシューシューとした息を吐いているだけだった。

「そうだ。僕達はお前に許しを請うて居るのだ！　ココから速やかに去るゆえ、あの二人と共にここを立ち去るまで、黙って見てはくれないか？　どうか信用して欲しい」

「蛇が信用するですと！？」と兵士はぶるった。

「シーッ、黙れ！　エクリース様は、時々何かが見えるときがあるのだ。今までもそういう事が数回あった。ただの人には何も見えないものが、エクリース様には見えるのだ！」

「信じる他はありますまいな」と兵士は観念したように呟いた。

ところが蛇は二人の恐れとは裏腹に、低く頭を下げたではないか！　それはこちらから眺めていると、まるで大蛇がエクリースに平伏しているように見えるのだ。

「ありがとう、大蛇よ」とエクリースは言った。

「分かってくれたのか！　ここにはもう二度と来ないようにする。しかと約束する！　では大急ぎでここから立ち去るゆえ、あの者達にも危害を加えないでくれ！」

大蛇の鎌首はほとんどエクリースの背丈と同じぐらいだったが、今では地面スレスレにまで下がり、まるでエクリースにお辞儀をし、拝しているかのようだった。

「さあ、行くのだ」とエクリースは尚も大蛇から目を逸らさず、手でビクターに合図した。ビクターと兵士の二人はおどおどしながらも、慌てて馬に乗り込んだ。エクリースはジリジリと後退りしながら、近寄って来た怯えきった馬を制しつつ、ヒラリと乗った。

「さあ、右へ！　駆けろ！　思い切り駆けろ！」

と叫ぶエクリースの声で、三人は右手の森へと猛烈な勢いで駆け出した。
「催眠が冷める前に、早くこの森を脱出するんだ～！！」
「催眠！？」と駆け抜けながら、ビクターが大声を上げた。
「そうだ！　あの大蛇は確かに母親だが、決して良い蛇ではない。僕にはあいつの腹の中に半分溶けたもう一人の兵士の姿が確かに見えたのだ！　急がないと、あいつは僕達を追いかけてくるぞ！」
「ひ、ひえぇぇぇぇ～～～～！！」と若い兵士は悲鳴を上げ、ビクターもぞっとしながら必死の有様で暗い朝靄のかかった森を突き抜けた。
「早く！　早く～～～！！　もう直ぐ森から出られる！」
エクリースの叫び声に急かされる様に、三人がやっと森を駆け抜けていくと、その背後から、キェ～～～ッと言う不気味な大蛇の鳴き声らしきものが聞こえ、そしてやがてそれも聞こえなくなった。

☆ー☆ー☆

開けた台地に来た時、初めて三人は馬を止めた。彼らも馬達も荒い息をついていた。
「助かった……」とビクターが命からがら言った。
「これもエクリース様のおかげでございます」
とほとんどすすり泣きながら若い兵士が感謝の言葉を言う。
「でも、あいつは……あの大蛇の腹の中か……何と可哀想に！」
とビクターが呟くと、エクリースはそっとビクターの耳元に近寄って囁いた。
「まあ可哀想と言えばそうだが、自業自得だけどね」
「え！？」
「これには、何らかの企みがひそんでいたようだよ」
とエクリースは無邪気に言ってのけた。
「さ、ここから王宮まではあと半日だ！　お腹はすくが、とにかく

急ごう！」
「はいっ！　エクリース様！」と誇らしげにビクターは答えたのだった。

8

8

王宮の長い廊下では、居並ぶ人々がざわざわと囁き合い、ある人物を見つめていた。その人物がこちらに来ると、人々は一斉に壁際に寄り、自ずと道を譲る。その中を一人の黒髪と黒い瞳の少年が、真っ直ぐ前を向いたまま通り過ぎて行く。その後を、二人の若者が従っていた。

少年は誰もが賛美してやまないほどハッとする美少年で、特に貴婦人や高貴な侍女達は扇で顔を半分覆いながらも、感嘆の溜息を漏らしていた。

「あの若いお方は誰なのかしら？」

「涼やかな瞳、麗しい横顔、秀でた額にかかるウェーブした黒い髪の毛……まるで名画を見ているようですわね」

「どなたかに似ていませんこと？」

「そうかしら……あ、でも確かに誰かに似ていらっしゃるような気も……。あの艶やかな振る舞いや、どこか気品漂う風情が……」

「もしや、エクリース様では！？」

「まさか！　……けれども、そう言えばそうかも」

王宮の人々の噂やざわめきを他所に、エクリースは真っ直ぐに父である王の元へと急いでいた。

この王宮では良い思い出は一つも無い。どこかゴテゴテとし、燦然と輝くシャンデリアも、まるで氷のリンクのようなピカピカに磨き上げられた廊下も、華やかな曲線を描く階段もどれもこれも美しいが、エクリースには余り好ましいとは感じられなかった。

エクリースは素朴なドリアン伯爵邸をふと思い出し、そして悲しげな目で見送っていたベアトリスのことを目に浮かべた。

王宮の入口の門番は、王からの召喚状を持っているエクリースを瞬きもせず見つめていたものだ。彼の知っている“エクリース王子”は、わずか二年の間に、かくも見事に蛹から蝶に孵ったのだ。

門番の瞳には、畏敬の念すら浮かんでいた。

「どうぞ、我が君」と門番は言うと、頭を垂れた。

「ありがとう。そう畏まるなよ」とエクリースは無邪気に言う。そういう所は、まだまだ子供っぽい。

「王様がお待ちかねでございまする」

頭を垂れる門番に軽く会釈すると、エクリースは王宮に足を踏み入れた。

☆ ― ☆ ― ☆

あと少しで王の間という直前、エクリースは背後に凍えるような冷気を感じて振り返った。一人の美しい女性が、腰を屈めて会釈しているのだ。その豪華絢爛な服装では相当位の高い女性だと思われたが、彼女から放たれる毒気に当てられて、エクリースは思わず緊張した。

「エクリース様。この方は、今の王妃イデット様でございます」と侍女が恭しく述べ立てた。エクリースはイデットには逢ったことがなかったのだ。

「ああ……そうか！　新しいお妃様なのだな。義弟のサイラスの生みの母……いや！　違う……」

「なんと仰いました!?」と侍女はびっくりして言い返した。

「いや……何でもない」とエクリースは答えたが、突然脳裏に現れた若く綺麗な青年の像に戸惑ってもいた。

―　今頭に浮かんだ幻は、確かに父上ではなかったが……一体誰なのだ!?

「エクリース様でございますか？　わたしはイデット、あなた様のお母様の後に嫁いで来た者でございます」

　イデットは遜りながら頭を下げた。本当は下げたくはなかったのだが……。そして感じていた。想像以上に、エクリースが素晴らしい王子である事を知り、恐慌に陥りそうになっていたのだ。今のままでは、将来サイラスは明らかに負けてしまうとイデットは確信していた。

「どうかお見知りおきを、エクリース様」

「義弟サイラスの母上なのですね」とエクリースは言いかけると、イデットの放つ毒々しい光を遮るかのように、ツと顔を背けた。

「又後でお会いしましょう、継母様」

「はい、それでは」

　そうしとやかに言うと、イデットは下がった。心を怒りと嫉妬で煮えたぎらせながら。

9

9

イデット王妃は自室に戻るや否や、秘めていた怒りを爆発させた。側に置かれてあった高価な東方の茶器を壊し、美麗なソファを壁に投げつけ、それでも足りずと侍っていた侍女達に殴りかかったのだった。

「イデット様！　お鎮まり遊ばしませ！」とマルゴットが叫ぶと、イデットはやっとその憤りの炎を何とか鎮めた。が、直ぐにマルゴットに厳しい声音で命じる。

「例の者をここへ！」

「はいっ！」

マルゴットは他の下々の侍女達を下がらせると、ある場所に赴きやがて戻って来た。側には、厳つい兵士がただ一人。

「お連れしました」

「お前も下がるが良い」とイデットは命じ、直ぐにその見知らぬ兵士とイデット二人だけになったのだった。

「さて、誰も居らぬ。リカルド、お前は確かにエクリースを狙ってやると豪語していたな。それがどうじゃ！？　エクリースは涼しい顔で、この王宮にやって来ておるではないか！」

とイデットは、憎々しくその兵士に言い放つ。

「はい」とその兵士、リカルドは言いにくそうに返答した。

「わたし達は確かに、例の峠道でエクリース様ご一行を待ち伏せしておりました。けれども待てど暮らせど、一行はやって来なかったのでございます。後で、その一行は大蛇の森の方へ行ったと聞かされました。

イデット様！　まさか、エクリース様ご一行が、あの大蛇の潜むという森へ入って行くとは、夢にも思わなかったのでございますよ。お信じ下さい！」

「なるほど。お前達は、いずれも馬鹿面をして、峠で待っていたと言うのか！」

「あの森を通って行く者はほとんど居ないのでございます」

「けれども、エクリース達だけはそこを通りぬけ、何事も無いかのようにしゃあしゃあと王宮に入った……」

「何事もないとは思えませぬ！」とリカルドは強調した。「なぜなら、一行は総勢四人と言うことでしたが、今では三人に減っております。多分……一人は大蛇の餌食になったものと思われますが」

「けれども、エクリース本人には何もなかったではないか！　あの王子は無傷でここにやって来たのじゃ！」

「ええ……はい」とリカルドは小声で答えた。

「お前の失態はとくと分かった。けれども、今回は見逃してあげよう。その代わり、今度は絶対に失敗するな。お分かりかえ」

「はい。イデット様」

「お前の妹は、わたし付きの下女として付いて来ておる。お前が失敗すると、妹も……分かるな？」

「あ！　……はい、承知致しました」

リカルドは深々と頭を下げた。

「去れ！」とイデットはイラつきながら命じた。「全く、役に立たぬ者達ばかり！」

☆　―　☆　―　☆

エクリースは王の間で長い間待たされていた。側にはビクターだけが付いている。周囲には屈強な兵士達が、二人を見張っていた。

「王様のお出では遅うございますね」
「何も心配は要らぬ」とエクリースは答えて、ビクついているビクターに微笑みかけた。
「わたしは、王の息子だ。父王は何もせぬ」
「でしょうかねぇ」とビクターは懐疑的だ。

けれどもエクリースの言った通り、暫くして奥の間の扉が開き、朱色のマント姿の王の姿が現れた。直ぐ側にはシスリー長老が、険しい顔で付き従っている。

王は一歩踏み出し、静かに頭を垂れている一人の少年を見て、驚愕に我を忘れていた。その姿は、亡くなったブライト王子にも、又前妃ドロテアの面影をも明らかに有しており、それ以上に以前の素朴な風情の跡形もなくなった、一人の聡明で美しい少年の姿だったからだ。

以前は憎しみと嫌悪しか感じなかった王だが、今のエクリースの有様を見て、気持ちの変化が訪れた。
「おお！　エクリースか！　よくぞ、戻って来たな」
と言いかけるその声音には、どことなく父親らしい優しさがチラッと垣間見える。
「はい、父上。お久しぶりでございます」
そう応えるエクリースの口調も滑らかで、燐としている。そしてエクリースは顔を挙げた。王は、ドロテア妃の面影をそこに見出し、思わず感嘆と以前の嘆きを思い出していた。
「エクリース！　……立派になったのう。ドリアン伯爵の育て方が如何に素晴らしかったか、それがよく分かるぞ」
「ドリアン家では、皆様が本当にわたしを愛しんで下さいました。そのおかげでございます、父上」
そう言ったエクリースの脳裏に、只一人だけ鬼の形相の奥方の姿が浮かんだのだった。

10

10

王は立派で美しい少年に成長したエクリースを見ると、今までの冷酷な感情が少しずつ溶けていくような気がした。『呪いを背負った王子』という噂が嘘のように、輝くばかりの息子エクリースが目の前に立っているのだ。それも、父である王から追い出されたというのに、恨みがましい目つきは全くなく、素直で静かな佇まいなのだ。

王は、前王妃ドロテアを思いだし、目を細めて我が子を見つめた。

その時、奥から一人の幼児がタタタッと駆け寄って来た。鮮やかなグリーンのビロードの上下を着た可愛らしい幼児だ。

「エクリース、この子がお前の義理の弟サイラスだ。どうだ、愛らしいだろう?」

言われてその子は、丸い目をエクリースに向けた。まだあどけないサイラスは、じっとエクリースを見上げている。

「サイラス、ここに居るのがお前の兄だよ。エクリースだ」

と言いかける王に向って、サイラスはチラッと王に目を向けた。

「よろちく」と言う幼児言葉が出て、思わずエクリースとビクターは微笑んだ。

「よろしく、サイラス！　僕の可愛い弟よ」

エクリースが手を差し出すと、サイラスは恥ずかしそうに紅葉のような小さな自分の手でその手を取って上下に振った。それからはにかんだように、王の背中に隠れてしまう。

「本当にサイラスは可愛らしい！」とエクリースは感嘆した。ちょうどサイラスの歳には、エクリースは王宮から追い出されて、乳母

ジュリアの小屋に住んでいたのだ。エクリースは感慨深く手を引っ込めた。

「それでは、お前達は疲れているだろうから、用意された部屋に戻るが良い。サイラスとは又明日にでも会って遊んでくれ」

「はい、父上」とエクリースははっきりと答えた。

「それではこれにて」

一礼するとエクリースはビクター共々王の間を出た。

「バイバ～イ」とサイラスが小さな手を振る。エクリースはニッコリと微笑みかけて、部屋を後にした。

☆ー☆ー☆

「どう思う？」とエクリースが完全に出て行った途端、王は手を顎の下に当てて横のシスリーに問いかけた。

「どう、と仰いますと？」

「エクリースだよ、決まっているだろう」

「ご立派におなりでございますな。少年は成長が著しい。この二年間で、エクリース様は随分と変わられました」

「それは見ての通りだ」と王はイラつきながら言った。

「エクリースの心の中だ」

「バリアーがございますな」とシスリーは重々しく告げた。

「バリアー？」

「外見は見目麗しい聡明そうな少年でございます。けれども、完全に払拭されたわけではございますまい」

「何が？」

「“デスティ”の影でございますよ」

「“デスティ”！？　暗黒の使者か！　……いや、わたしにはそうは見えぬが。聡明で心清いものを持っているような気がするのだが」

「いずれ分かります」とシスリーは意味深に言った。「暫くご逗留されるのですな」

「ああ、暫く様子を伺っていよう」

二人がひそひそ話していると、サイラスがじれったそうに王のマントを引っ張った。

「父上〜、遊ぼ〜遊ぼ〜、ねぇねぇねぇ」

サイラスの方に注ぐ王の眼差しは、明らかにエクリースに対するものとは違っていた。何もかも受け入れる……そのような“甘い”眼差しだ。

「よしよしよし、分かった。では次の間で一緒に遊ぶとしようかな、サイラス」

「うん」

「サイラス……お前は先ほどの兄が好きか？」

と唐突に王が言いかけると、幼いサイラスは困ったような表情になった。

「分かんない」

「それはそうだな、悪かった、サイラス」

王はサイラスの頭を撫でると、ひょいとサイラスを抱き上げた。

「何があっても、次の王位はお前の物だぞ、サイラス」

「うん！」とサイラスは訳が分からずにキッパリと答えたのだった。

11

11

すっかり春爛漫となり、王宮の中庭には見事な花々が咲き乱れ、その緑の中でエクリースとサイラスが鬼ごっこや石投げなどという単純な遊びながらも結構興奮する遊戯で戯れていた。

その様を王とシスリーは、陰から眺めており、そしてイデット妃も王の近くで春の日を浴びて輝くばかりの美貌を誇っていた。その金色の髪は日光にキラキラ反射し、その相反する黒い瞳はじっとエクリースとサイラスを凝視している。

「妃や、エクリースとサイラスは瞬く間に仲良くなっていったな。やはり血は争えぬ。二人は義理とは言え、まごうかたなき兄弟なのじゃからな」

「さようでございますね、王様、我が君よ」とイデットはしおらく答えた。

「けれども、もう暫くするとエクリース王子は、再び北の果てに戻すのでございましょう?」

「それなんだがね……妃よ」と王は少し躊躇いつつ言いかけた。

「何ですの? まさか……?」

「いや、王子はドリアン伯爵の元に返す。ただし一時的にな」

「一時的ですって!?」とイデットは叫んだ。「では、エクリースに王宮に戻れと仰るの!?」

「まあ、そうだな」と言う王の言葉は歯切れが悪い。

「何と言うこと!」とイデットは憤慨やるかたない様子でバシッと扇子を叩いた。

「妃や、実はドリアン伯爵とは約束しておったのじゃ。エクリースが立派に成人した暁には、元に戻すとな。その為に、ドリアンの息子クリフを人質としてこっちに預かっておった。けれどもそのクリフももうかなり賢い子供に成長しておる。ぼちぼち、二人を交換してもいい頃合だ」

けれども、イデットはフンと横を向いたままだ。その鼻腔は怒りの為に膨らんでいる。

「まあまあ、怒るな、妃よ。王位継承権はその内にサイラスに譲る。いずれサイラスは皇太子となり、例えエクリースがどんなに立派な青年になろうとも、サイラスの下位でしかない立場なのじゃ」

「そのお言葉を信用出来まして!?」とイデットはピシャリと言い放つ。

「もちろん……それは……」と王が言葉を濁していると、今まで黙っていたシスリー長老が静かに語り始めた。

「イデット様の心配もごもっともでございます。けれども、サイラス様が五歳におなりあそばして、その堅信礼を受ける時には、王はサイラス様を皇太子になさる所存です」

「確かなのねっ!」とイデットは怒気を含んだ声で言い寄った。

「もちろんそれは確かだよ、イデット」

「でもあと三年もありましてよ! 三年ですよ! 三年!」

「あっと言う間だよ、イデットや」と王は優しくなだめると、イデットの肩を抱いた。

「そうでしょうか……。ところでエクリース様は、あのドリアン家のお嬢様と良い仲とか聞いておりまする。ひょっとして、お二人は将来を誓い合った仲なのでは? だったらエクリース様をここに置いておくのは不都合かと」

すると王は、ハハハと笑い出したのだった。

「そんなことはあり得ぬ」

「なぜなのです？」とイデットは怪訝そうだ。「わたしはてっきり……」

「この間ドリアン伯爵夫人から、わたしに手紙が来た」

と王はひそひそと言った。

「手紙！？」

「確かにエクリースとあちらのベアトリスは、二年間という月日を共に暮らし、まるで兄と妹のような間柄になったという。けれども、奥方はこう書いておる。

『どうか我が娘ベアトリスを、例の三人の貴公子の少年の一人に嫁がせたい』とな」

「……！？」

イデットは、思いがけない奥方の懇願に幾らか衝撃を受けていた。

――それでは、あの欲の深い奥方は、一人娘を王子エクリースに嫁にはやりたくないと見える。それはなぜじゃ？　王子に嫁がせた方が、もしかして王妃になれるかも知れないというのに！　なぜじゃ……何か曰くがありそうな気配……。

「分かったか、イデット」

「あ、はい」

「よって、エクリースには別の姫を探さなければならぬな、いずれは。エクリースは約束通り、我が王宮に迎えよう。今度冬が来る前にでも、もう一度呼び寄せる。そしてここに共に暮らす。見てごらん。サイラスとはウマが合いそうだ。良い兄となるだろう。それでよいな」

「はい、よしなに」とイデットは大人しく答えて、頭を下げた。

――エクリースが王宮に住む！　そうとなれば、又何か考えねばならないわ！

イデットが邪な目配せを侍女マルゴットに移すと、マルゴットは意味深に微かに頷いたのだった。

「さあ！　今宵はエクリースの為に、盛大な晩餐会を催そうぞ！　そして国中のうら若い姫君達を招いて舞踏会も開く予定じゃ！」と王は楽しそうに言った。

「たまには、妃であるそなたとも踊ってみたいものじゃな、なぁイデット」

「はい」とイデットは氷のように答えた。「わたしも楽しみでございますわ」

12

12

サイラスと遊んだ後、暫くあてがわれた部屋で休んでいたエクリースは、おもむろに手紙を書き始めた。宛名はもちろんベアトリスだ。

ここに着いて以来、あっという間に二週間が過ぎ去った。その間エクリースは息つく暇もなく、王宮中を巡り様々な人々と会い、色々な会合や会食やパーティに出席し、お芝居を見たりサイラスやクリフ・ドリアンと会ったり喋ったり遊んだりしている内に、いつの間にか時間が経っていったのだ。

時間とは恐ろしいものだ、と思ったのはふと兄ブライトからの銀時計を触った時だった。侘しいドリアン邸では、時は静かにゆっくりと流れていた。そして時間はたっぷりあるような気がした。けれどもここ王宮では、時はあっという間に飛び去っていく。夜自室に戻るともうへとへとで、まださすがの若いエクリースでも疲れは容赦なく彼を眠りに誘(いざな)うのだった。

『愛するベアトリス

僕はここに来る前は、酷い所かも知れないと覚悟していた。けれども来てみると、義弟サイラスはとても無邪気で可愛らしい子供だし、僕達は直ぐに仲良くなって行った。

そして君の弟クリフにも会った。彼はもうすっかりしっかりした10歳の少年に成長していた。勉学も良く出来、マナーも申し訳ない素晴らしい少年だよ。さすが君の弟だね……』

そこでエクリースはしばし筆を止めた。

『美味しい料理、広大で煌びやかな王宮に別邸……けれども僕には

やはり君の住む北の森が恋しいのはなぜだろう？　ここに君が一緒に居たならとそう度々思う。だから……』

そこまで書いた時、ビクターがやって来た。麗々しく薄紫色のビロードの上下と白い絹のチュニックを捧げ持っている。エクリースは慌てて筆を置き、その手紙を裏返した。

「今晩は盛大な晩餐会ですよ、エクリース様。さあさっさとお着替えして、身支度を整えなくてはなりませぬ。これから忙しくなりますね」

「又か……一体いつになったらゆっくり出来るのだろう？」

とエクリースは呟いた。

「郷に入れば郷に従え、ですかね？　けどわたしもそろそろここでの生活が落ち着かなくてね。あ、そうそう。エクリース様は、あと一週間で北の森にお帰りしなければということです」

「そうか！　それは良かった！」とエクリースは思わず両手を打ち鳴らした。

「それは良かった。若様はここがお気に入られたのかと」

「まさか！　まあ楽しい場所ではあるけれど、田舎育ちの僕には相応しくない場所だからね」

「それはようございました」とビクターもホッとして呟いた。

「ですが、又こちらに本格的に戻って来られるときには、いよいよ北の森ともさらばですね」

「え！？」とエクリースは顔を挙げた。「何だって！？」

「知らなかったのですか？　王様は、エクリース様へのお怒りが解け、ここへずっと置いて置きたいのだそうですよ。もっぱらの噂ですが」

「そんな……」

喜びは一瞬にして、悲哀に変わった。

「大丈夫ですよ。その内にベアトリス様もこちらに参られるようで

すし」
「本当か？」と再び歓喜が押し寄せたが……。
「はい。いずれ、どなたかの貴公子に嫁がれるご予定のようですが」
「貴公子に嫁ぐ！？　……まだ早いのでは！　ベアトリスはまだ１４歳じゃないか！」
「早過ぎはしません。特にご令嬢方はね。それに一年はあっという間です」
「そんな馬鹿な……」
エクリースは側の椅子に力なく腰を下ろした。

「高貴な方々は、自分の意のままにはならないものなのですよ、エクリース様。残念ではございますが」とビクターは慰めた。
「とにかくこの衣装に早くお着替えを」
急かすビクターの手でエクリースはその衣装に着替えさせられたが、その間エクリースは黙り込んだままだった。今の今まで、エクリースはいつまでもベアトリスが自分の側に居るものだと信じていたからだ。けれども、状況は少しずつ暗転して行っているらしい……。

「さあ、できました！　鏡を御覧なさい！　エクリース様ほどの御方は、今晩の晩餐会にも誰も居りません。それにこれは……ベアトリス様からの贈り物でございますよ！　よくお似合いです」
そうビクターに言われて見た虚ろな瞳に写る鏡の中の自分は、鮮やかな衣装に包まれた一際目立つ少年の姿だった。

13

13

エクリースが晩餐会に出かけたときには、既に多くの人々が席に就いていた。彼が大広間に入室するや、席に就いていた人々は一斉に立ち上がりエクリースを迎えたので、エクリースは驚いて入口で立ち止まった。

「エクリース様。さぁ、中へどうぞ」と背後からビクターが囁き、やっとエクリースは中へ入ることが出来たのだった。

並み居る人々は皆エクリースを凝視していた。ある者は感嘆し、ある者は憎悪し、ある者は嫉妬し、そしてある者はただただうっとりとしていた。その中をエクリースは、非常によく似合っている、薄紫色の鮮やかだが品のある衣装に包まれて真っ直ぐ自席に進んだ。目の前には王とイデット王妃が座り、その側にはクリフ・ドリアンがくるくるした目を見張りながら座っていた。

「宝石は何も身に付けてはいないが、見事だな、息子よ」と王は感に堪えないように言いかけた。イデットは微笑んだが、内心は忸怩たる思いがあったがうまくそれを隠している。

「いいえ、父上。わたしはブライト兄上から頂いた、銀時計だけは身に付けております」

「そうか……ブライト……悲しい出来事だったな」

「そうですね」

一瞬父子は沈黙したが、直ぐに楽の音が鳴り響き、晩餐会が始まったので、二人の気まずい沈黙は絶たれた。

「今晩は思い切り楽しむが良い、エクリース」

「はい、ありがとうございます」
「今日の主賓はお前だよ」
と言う王の瞳が微かに笑っていることに、勘の鋭いイデットは気づいた。
「サイラスは？」と聞くエクリースに、イデットは、
「サイラスはまだ幼いゆえ、もう床についておりますわ」と如才なく答えた。
「今晩のお妃様は事のほかお美しい」
「まあっ！　エクリース様は、お上手ですこと！」
とイデットはお愛想笑いをした。

「そんなことより」と王が中に入ってくる。「あそこに座って居る乙女達がお前を凝視しておるぞ。いずれ劣らぬ家柄と容姿に恵まれたお嬢さんがただ。舞踏会が始まると、続々お前に『踊ってくれ』とお誘いに来るだろうよ、我が息子よ」
　王のその声は優しく響き、イデットは思わず王の心を疑った。もしや王の気持ちが、サイラスではなくエクリースに移ってしまったら、元も子もなくなるのだ。けれどもイデットは、お芝居に長けていた。
「そうですわ、エクリース様。あの可愛いお嬢様方は、あなたを狙っていらっしゃることよ」
「狙っている、などと」とエクリースは思わず頬を染めたが、けれども視線を移しもせず、脳裏にはひたすらベアトリスの素朴で可憐な姿があったのだ。

☆　―　☆　―　☆

　宴はどんどん進み、いよいよ舞踏会が始まった。まず最初に王がイデットを誘い、広間の真ん中に進み出ると、他の貴族達も又各々

妻や婚約者や恋人達の手を優雅に取って、王夫婦に倣う。
恋人の居ない男性貴族達も、近くの乙女を誘い、それでもダメな男達はもうかなり歳を取った老貴族の夫人達をも誘っていた。
エクリースは席に着いたまま、甘いお菓子を口にしていた。そしてエクリースは鮮やかな砂糖菓子を、そっとポケットに忍ばせていた。それはベアトリスへの贈り物とするはずだったのだ。

王達は、楽の音と共に優雅に舞い、踊っていない客達はただただうっとりと、その様を見つめていた。
「見て御覧なさい、エクリース様。王はとても楽しそうですね」
とビクターが囁くと、
「そうだな」とエクリースは心ここにあらずと言った調子で答えた。
「ベアトリス様がいらっしゃらないのが、とても残念です。エクリース様もそう思われているのでは？」
エクリースは余計なことを言うビクターを睨みつけた。
「お前こそ、里心が付いたのではないのか？　アンネットが恋しいのだろう？」
「これはお戯れを！」
そう否定するビクターは、けれども内心図星なのでドキッとしていた。ふと見ると、エクリースはふふふっと含み笑いをしている。

その時、
「エクリース様」と言う鈴の鳴るような声がし、振り向くと薄いピンク色の上品なドレス姿の少女が、エクリースの直ぐ側まで立っていたのだ。
「あなたは……？」
「わたしは、アナベラと申します、エクリース様」
そう答えると、ピンクの服の少女は腰を屈めてお辞儀をした。
「アナベラ……？」
「はい。アナベラ・ドリアン。ドリアン伯爵様の弟のドリアン子爵

の娘でございます。ベアトリス様とは従姉妹に当たりるんです」
エクリースは、アナベラと言うベアトリスよりも少し歳下らしい
その可愛いらしい少女を、じっと見つめたのだった。

14

14

「嫌な予感がする……」
ベアトリスは夕暮れた庭に立ち、ほのかに朧ろに翳る月を眺めて、そう呟いた。その呟きは、なぜか少し離れていたアンネットにも聞こえていた。
「嫌な予感ですって……？　それはなぜでしょうか。エクリース様のことですか、それとも……」
「いえ、いいの」とベアトリスは淋しげに答えた。
「お淋しいのですね。けれどももう直ぐエクリース様は、ここへお戻りになられますよ」
「でも、又直ぐ去って行くわ！」
とベアトリスは激烈に答えた。
「ただ、ご気分が優れないだけですよ。夜風に当たりますわ。さぁ、もう家に入りましょう」
「今頃エクリースは……何をしているのかしら」
ベアトリスの呟きは、夜のしじまに消えた。

☆　―　☆

―　☆

「エクリースよ、せっかくゆえこの可愛らしいお嬢さんのお誘いを受けたらどうじゃな？」
いつの間にか席に戻っていた王の呼びかける言葉に、エクリースはハッとして我に返った。目の前のアナベラは悪びれずに、率直に微笑んでいる。どこかベアトリスと似てはいるが、けれども似て非なる存在だ。

「それでは」
そう答えると、エクリースはベアトリスの従妹アナベラの手を取った。その途端、痺れのような衝撃がエクリースを襲い、エクリースは一瞬だが眩暈に襲われた。
「どうなさいました？　お疲れでは、エクリース様」
「いや……なんでもありません。わたしは踊りは下手ですが、いいのでしょうか」
「そんな、柄にもないお言葉を」
そう言うと、アナベラは口元を押さえた。

楽の音がもっと優しい曲に変わり、今度は若い男女が対になって踊りだした。もちろんエクリースはその円の真ん中に居る。薄紫色のビロードは、シャンデリアの無数の蝋燭の光に輝き、もともと目立つその容姿をもっと目だたせている。
やがて彼らは静々と上品に踊り始めた。
並み居る人々は、あらゆる感情を抱いて見つめていた。感嘆、恐れ、嫉妬、羨望、喜び、そして得体の知れない怒りを。

「ご覧、イデット。あの少女はドリアン子爵の次女だそうだが、いつの間にか綺麗な少女に育ったな」と王がイデットに囁くと、イデットはやや軽蔑を込めてその黒い瞳を見開きつつ、王を見つめ返した。
「何をお考えですか？」
「よく見なさい。お似合いの二人だ」
「まだ年端も行かぬ少年少女ですわ」とイデットは冷淡に言った。
「ただし、あのアナベラというドリアン家の少女の踊りは上手ですが……多分今宵の為に、さぞレッスンに励んだのでしょうね」
けれどもイデットには気付いていた。エクリースの顔がどこか浮かないことに。イデットの口元に得体の知れない微笑が一瞬だけ浮かんだ。

「ほらほら、見ろよ、オリビエ」と端の方に座っていたドイルがすぐ隣のオリビエを肘で突いた。オリビエは踊りには目もくれず、一心不乱になって、美味しいお菓子を食べ続けていたのだが。
「何だよぉ？　あ、エクリース？」
「じゃなく、あの娘、アナベラ・ドリアンだよ」
　オリビエは顔をチラッと挙げて見たものの、
「ああ、まあ綺麗な子だね」としか言わない。「僕はもう舞踏会は懲りたよ」
「そりゃそうだろうな。あの時、ドリアン伯爵邸で散々恥を掻いたのだからさ」
とドイルはさも軽蔑したように言った。
「けどさぁ、あの娘、エクリースの気を引こうとしているんじゃないかな？」
「どうでもいいけど」とオリビエは可愛い砂糖菓子を口にした。
「他の小娘達は、嫉妬深い目付きをアナベラに注いでいるぜ」
「エクリースのようなもてる奴には、女達は釘付けさ。座って居るだけで寄ってくる。それなのに、こっちの方には誰も来ない……」
「ふん、馬鹿な奴らめ」と少し離れた席に就いていたサミュエルは二人の会話を耳にしながら呟いた。「自分達が到底エクリースに叶わない事を知っていながら、そんな御託を述べてさ」

　その小曲は終わりに近付いていた。踊っている若者達も汗を掻きだしている。けれども、踊りは意外な終幕を迎えたのだった。突然、今までにこやかだったアナベラが胸を押さえて苦悶の表情を浮かべながら、その場に崩れ折れ、人々が騒ぎ出したからだ。
　エクリースは驚いてその場に凍りついた。
「アナベラ！」と叫びつつ真っ先に寄って来たのは、アナベラの母の子爵夫人だった。彼女は呆然と立ちつくしているエクリースをどんと突くと、アナベラに被さった。

「アナベラ！　アナベラ！　……ああ、どうしましょう！　息をしていないわ！」

「医者を呼べ！」と王は立ち上がりながら叫んだ。皆はざわざわしその場は騒然とした。その騒動の中、イデットだけは奇妙に落ち着いていた。

「やはり、エクリースは“呪いの王子”だったと見える。ふふふ…ふっふっふ……うおっほっほっほっ！」

そして、

「エクリースに近寄る者は……当分誰も居なくなるな」

とサミュエルは不気味に独り言を言った。

第六章　疑心暗鬼　1

第六章　疑心暗鬼

1

思わぬ終わり方をした晩餐会の夜更け、エクリースは自室で頭を抱えて座り込んでいた。その直ぐ側を、ビクターが心配そうに立ち尽くしている。

「どうして……あんなことに！？　あの子は直前まで元気だったのに」

「エクリース様、ご心配あそばしますな。アナベラ・ドリアン嬢は死んではおりませぬ。危なかったとは言え、控えていた医師によって息を吹き返し、今は休んでいると言いますから。医師によると、どうやらアナベラ嬢には、かねてより心の臓の病がおありで、それが出てきたということです」

「そうは見えなかったが……」とやっと顔を挙げながら、エクリースは言った。

「ごくこぐ幼い頃だったようでございます。以来そのケは無かったのだそうですが……今夕は少し興奮されたのでしょう。或いは踊りがアナベラ様のお体に障ってしまい……」

「どっちにせよ、わたしが悪い。踊るのではなかった！」

「エクリース様のせいではありません！」

とビクターはキッパリと言った。

「がしかし、皆の噂は分かっております」

そう言うビクターの声は沈んでいた。

「エクリース様に近寄る者には、災いが訪れるのではと……まこと、憤懣やるかたない噂ではありますが、人々とはそういうもの。けれどもいずれ人々は又忘れてしまいます」

「そうならいいが」とエクリースは小声で言った。

「僕はもうあそこに戻りたい。ここは僕の居る所ではないような気がする」

そう言うとエクリースは窓辺に近寄り、曇りガラスから夜の暗闇を見つめた。

「けれども王様は……」

「父上もきっと気が変わられるさ！」とエクリースは珍しく怒鳴った。「僕が居るとろくな事は無いと、そうお思いだ。せっかく父上と良しなにできたと思っていたのに、又振り出しだな」

「さあ……王様のお考えはどうなのでしょうね」

「ベアトリスに会いたい。従妹のアナベラと踊った僕が悪いんだ。ベアトリスと少し似ていたから、つい踊ってしまった。けれども、手を触れた途端、何か嫌なものを感じた。きっとあの時……！　だからやめればよかったのに！」

「ご自分を責めないで下さい」とビクターは兄のような口振りで優しく言いかけた。

「そうだね、ビクター。全てはお父上次第だ」

エクリースは闇の中に、ベアトリスの澄んだ茶色の瞳を見ていた。

☆　―　☆　―　☆

王と王妃の寝室では、王は浴びるようにワインを飲み続けていた。

「あなた！　もう飲むのはお止めなって！　さあ、床に就きましょう。今日は大変な日でしたが、アナベラは助かったのですから良しとしなければ」

と促すイデットの腕を、王は邪険に払った。

「わしは……エクリースが素晴らしい王子に育って、大層喜んでいたのに……けれどもそれも束の間だったとは！」

「アナベラはただの病なのですわ！　病を隠して踊っていたのが、

単に災いとなっただけです！」
「いや！　あいつはやっぱり……“デスティ”！　災いの化身なのだ！」
「もぅお！　馬鹿なことはおよし遊ばせ！　あなたは酔ってらっしゃるわ。さぁさ、もう寝てしまうことですわよ。嫌なことは忘れて、ね？」
　猫なで声のイデットにそう言われた王は、とろんとした目付きで渋々ベッドに入った。すると、疲れていたのか、もう中年過ぎの王はすぐさま鼾をかき出したのだった。
「やれやれ、単純なお人ですこと！　けれどもそれがわたしの思う壺」

　イデットは王の寝室からそっと出ると、隣の居間へ戻った。そこには夜更けだというのに暖炉には赤々と血のような炎が燃えており、マルゴットがその直ぐ側にしゃがみ込んでいた。
「王様は如何でしょう？」
「よく眠っておいでです」
「熟睡する薬を入れましたゆえ」
「それはいいが……マルゴット！　そなた、アナベラという小娘の皿に撒いた毒、少し多過ぎたのではないのか！？　やり過ぎては為にならぬぞえ！」
「あ、はい……イデット様、以後気をつけます」
「もう少しで死ぬ所であったではないか！」
「はい、済みません」
「ま、今回は許してやろう。さて、人々の噂はどうじゃな？」
「もちろん！　それはイデット様の思惑通りでございますわ。貴族達はやっとエクリース様のあの黒いお噂を思い出したようですから」
　ここぞとばかり、自分の失敗を取り繕うかのようにマルゴットは言った。
「そうか……それはいいことじゃ」とイデットはニタリと微笑んだ。

「以後、エクリース様に近寄る者は余程の命知らずだけとなりましょう。王様もエクリース様に対して、再び疑心暗鬼となられますわ。再びお心を開く事はないと思われます」
「けれども、それだけでは足りぬかも知れぬ」
「それだけでは、と申しますと？」とマルゴットは顔を挙げた。その頬が炎で染まっている。
「もしや……」
「まぁわたしに考えがある。エクリースを徹底的に叩きのめす方法が」
イデットは小さく呟いた。さすがにマルゴットには、イデットの心の内はそれ以上は窺い知れなかった。

2

幸いアナベラ・ドリアンの意識は回復し、医者は家族に大丈夫だと告げた。けれども、一言、「もう“あの王子”には近寄らぬが身のため」と釘を刺すのを忘れなかった。そして家族はその忠告に深く頷いたのだった。

ドリアン子爵達は、アナベラの体調不全の原因は、子供の頃の心臓の病にあると信じて疑わなかったし、そしてその再発がエクリースにあるということも、どこかで信じ込んでいた。

「馬鹿な話かもしれない。兄上のお世話しているエクリース様が災いの主であるとは、本当は信じたくは無い。けれども、現実にアナベラは危篤状態に陥った。これは由々しき事だからな」とドリアン子爵は顎をしごき、アナベラに二度とエクリースに近寄ってはならないときつく言い渡したのだった。

アナベラは幾分不服そうだったが、けれども父親には刃向かえない少女に過ぎなかった。

けれども、アナベラの兄ジョーダンは違っていた。

エクリースより二つ上のジョーダンは、既に身の丈も大人並みで力も強い豪胆な性格だったし、又、むこうみずでもあった。

彼は、エクリースへの復讐心と妬みに燃えていた。

「父上！　あの王子をこのまま放っておいて宜しいのでしょうか！？　わたしは合点がいきませぬ」

「黙れ！」とドリアン子爵はこの血の気の多い１６歳の息子を叱り付けた。

「どんな噂があろうと、卑しくもエクリース様はもしかすると跡取りと成られるお方じゃ。その上、もう直ぐ兄上の北の森へと戻られ

る。あと暫く辛抱しておればよい。それぐらい自重できぬか、お前は！」

「けれどわたしは……悔しいのです」とジョーダンは搾り出すように言った。

「あのエクリースがのうのうとしている様を見ていると……アナベラは死にかかったというのに、王子にお咎めは無いとは！」

「お前の気持ちは良く分かる。けれども、アナベラは病気であったのだ。それがあった以上、仕方あるまい」

と父ドリアン子爵は、息子の逞しい肩を叩いた。

「その上、王もあの王子には何も言わぬようじゃ。ことを荒立たせるなよ、ジョーダン」

「は、はい、父上。そのように致します」

ジョーダンは悔し涙を飲み込んだ。

「それではわたしは、妹の見舞いに」

「それが良かろう」と子爵は穏やかに微笑んだ。けれどもジョーダンが去った後、子爵は深い吐息をついたのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

アナベラを見舞った後、部屋に戻ったジョーダンの元に、召使いが恭しく手紙を運んで来た。差出人不明の手紙で、封を切ると男文字で何かが書かれてある。

『はしたない尻軽女を妹に持ったものよ！　あの妹はこの歳で、王子を誘惑しようとしていたのか。その罰が当たったのだ。それなのに、王子を貶めようとするのは卑劣なやり方だとは思わないか？　もしもこの手紙に異存があるのなら、明日の夕刻、西の塔の下に来るように』

「何だと！？　何と言う内容なのだ！　このような卑怯千万の手紙

を書いたのは、一体誰なのだ？　ええぃ！　我が妹を侮辱するなど、もってのほか！」

ジョーダンは悔し紛れにその手紙を握り潰した。

「待てよ？　差出人は誰だ！？　明日の夕刻、と書いてあるな……」

ジョーダンはクシャクシャになった手紙を、もう一度広げてみた。

暫く思案していた彼は、壁に吊るしてある自分の長剣にチラっと目をやった。

「妹の汚名を晴らす良い機会かも知れぬ」

ジョーダンは深く息を吸い込んだ。

「明日か……」

☆　―　☆

―　☆

「他人を騙って手紙を書くなどということは、後味が悪うございます、義姉上」

「これでいいのじゃ、サミュエル。お前が罪悪感を持つ必要は無いぞ」

とイデットは自室の奥で、義弟サミュエルに微笑みかけたが、サミュエルはどこか腑に落ちなかった。けれどもサミュエルはイデットの権力の強大さを、誰よりも分かっている少年だったのだ。

「サミュエル……お前、幾つになった？」

「もう直ぐ17歳でございますが」

「そうか、大きくなったものよのぅ。そして美しい若者になった。お前の母、わたしの父の第二夫人が亡くなって以来、わずか五歳だったお前を慈しみ育てたのはわたしだったということ、よもや忘れては居まい」

「それはもちろんでございます！」

「そうか……ではぼちぼち、お前も伴侶が欲しかろう。それもちゃんとした家柄で、そして可愛い娘が良いな」

「許婚（いいなずけ）と仰いますか？　まさか、それは！」
「お前は賢い。ただ美しい若者だけではないとみえる。そう！　お相手は、ベアトリス・ドリアン！　既にあちらの奥方はご承知じゃ！」
「えっ」
「不服か、サミュエル？」
「いいえ、そのようなことは」
そうサミュエルは答えたものの、どこか浮かない表情をイデットは見抜いていた。
「これは良い縁組となろう。のう、サミュエル？」
サミュエルは黙ったまま頷いた。

3

3

結局、エクリースはベアトリスの手紙を完成させなかった。多分ドリアン子爵から、兄であるドリアン公爵へと仔細な手紙が行っているはずで、これ以上ベアトリスに心配をかけたくなかったからでもある。

その上、後暫くでエクリースは又北の森へと戻っていくことになっていた。

エクリースはいつものように、夕刻まで西の塔の下で剣術の練習をするのが常で、この日もビクター相手に汗を流していたのだった。

この塔は昔罪人を入れていたという塔で、かなり陰気な建物だったし辺りは鬱蒼とした荒地になっていた。誰も近寄らないというのが、逆にエクリースにとっては都合が良かったからだが、その日エクリースはふと剣の手を止めた。まだ日は翳っていなかったのだが。

「どうなさったのです、エクリース様？　もう早やお疲れですか？」

「何かが起こりそうな気がする」

「何かが？」

「虫の知らせというものか……とにかく今日はこれでやめよう。ベアトリスへの贈り物選びでもしていた方がいいかも知れないな」

エクリースはそう言うと、自分の剣を鞘に納めた。

「里心がお付きですか？　ハハハ、エクリース様もただの恋するオトコであられたとは！」

「からかうな」とエクリースは頬を真っ赤にしながら抗議したが、ビクターはあえて何も問いかけなかった。

「お前こそ、アンネットへの土産でも考えてるがいい」

そうはにかみながら言いかけたエクリースが、宮殿に戻ろうとした時だった。鬱蒼とした木の陰から、一人の若者がふっと現れた。途端にビクターはエクリースの側に寄って、剣の柄に手を添えて構える。

「何者だ！！」

けれどもその若者は、黒っぽいマントに包まり、押し黙ったままだった。そして一歩一歩、エクリースに近付くのだ。

「名を名乗るがよい！　これにおわすは、エクリース様と知ってのことか！？」

「知ってるさ」と若者はくぐもった声で言い放つと、パッとマントを脱ぎ捨てた。その手には、キラリと鈍く光る長剣があった。

「何奴！」とビクターもスラリと剣を抜く。

「わたしに何の用なのだ」とエクリースだけは、奇妙に穏やかに聞いた。

「妹を中傷する手紙を書いたのは、お前か！？　それとも隣に居る木偶の棒か？」

「妹！？」とエクリースは首を傾げた。「ああ、そうか。君はドリアン子爵の……」

「そうだ、わたしはジョーダン・ドリアン、アナベラの兄だ！」

「そして、ベアトリスの従兄か……それがどうしたのだ？　その血走った目付きは、わたしへの何かの恨みが有るのか？」

「あのいい加減な噂を信じているのですか、ジョーダン様は！」と呆れたようにビクターが言いかけると、

「黙れ！」とジョーダンは怒鳴りつけた。「下司は黙っていろ！わたしはエクリースに用事があるのだから。それにわたしは単に噂などを信じているのではない。この手紙がその証拠となろう」

そう言い放つと、ジョーダンは剣を持っていない手で、例の手紙を地面に投げつけた。手紙はヒラヒラとエクリースの足元へと飛んでいく。エクリースはそれを拾い上げると、さっと目を通した。

「これは酷い文面だな。君の気持ちもお察しする。が！　これはわたしが書いたものではないぞ！」
「嘘をつけ！」
「筆跡が違う」
「それでは、この下僕に書かせたのか！」
「ビクターの筆跡でもない。これは……極めて洗練された文字だな。一見乱暴そうに見えるが……」
「誰のでもいい！　わたしはお前に侮辱された妹の名誉の為にやって来たのだ！」
「侮辱などしていない……それに……」
「もういい！　エクリース！　剣を取れ」
「は！？　何を言うのだ。わたしと勝負するつもりなのか？」
エクリースは初めて厳しい眼差しを、この怒れる若者に注いだ。
「気でも違ったのですか、ジョーダン様！」
とビクターも叫んだ。そして身を張って、エクリースを庇う。
「わたしは本気だ。お前は王子だが、疫病神。そして“呪いの王子”なのだからな。それをわたしは信じている」
「エクリース様に刃（やいば）を向けるとは！　あなたもこのままでは為にはなりませんぞ！」
「構わぬ！　わたしは後世に、“呪いの王子”を倒した者として、後々までに言い伝えられるだろう！」
「奇妙な功名心だな」とエクリースは、生まれて初めて皮肉と軽蔑を込めて言った。

4

4

王宮から離れた西の塔の元で、三人の若者達が各々の剣を構えて対峙している。その辺りには、見えない鬼気迫る緊張感が漂っていた。ビクターはエクリースの全面に立って守りつつ、少しずつ後退りし、ジリッジリッとジョーダンが詰め寄っていく。ジョーダンは年齢よりも屈強な若者で、さすがのビクターもその押し出しと気迫にタジタジだった。

けれどもエクリースはビクターの背中に隠れつつも、スラリとした細めの剣を構えている様は、どこか氷のようでもある。

「エクリース！　お前は従者の背中に隠れている卑怯者なのか！出てきて、わたしと勝負しろ！」

「ジョーダン様、あなたは自分が何をしようとしているか、判断できないのですか！　これは、ある意味反逆罪に当たりますぞ！」

とビクターは声を枯らした。

「呪われた人間は、更に誰かを不幸にするものだ。その信念は、わたしは変わらない！」

とジョーダンも負けずに答えた。

「あの手紙はわたしが書いたものでもなく、企んだものでもない。誰か他の者が、お前を陥れようとして送った物に違いない。もっと冷静になれば、話し合いも出来るのだが」

とエクリースは静かに言いかけたが、ジョーダンの考えは変わらない。

「へっ、話し合い！？　エクリース！　お前は正々堂々と勝負も出来ない弱虫なのか！！」

「エクリース様は、まだ１４歳におわしますぞ！」

とビクターが尚も庇った。
「それがどうした!?　わたしだってまだ16に過ぎぬ。だが逃げはしない」

「ビクター、お前は誰かを呼んでくるがいい。わたしは、この言葉では納得出来ない男と勝負するつもりだ」
そう言うと、エクリースは全面に躍り出て、剣を構えた。
「さあ、来るがいい、ジョーダンとやら！　わたしは弱虫でもなければ、そんな下らない手紙を送った者でもない！　……どうしてもわたしと勝負したいなら、望むところだ」
「エクリース様っ！」とビクターは絶叫した。
「ビクター、お前は去れ！　わたしの命令を実行しろ！」
「ですが……もしもエクリース様にお怪我でもと……」
「構わぬ！　怪我をすればそれは天命。そしてその又逆も、天命だ！　さぁ、行け！」

エクリースとジョーダンが剣を交じわせたのは、ほぼ同時だった。火花が散り、二人の剣は空中で激しく交わった。体躯はジョーダンが上だが、腕はエクリースのほうが勝っていた。
「エクリース様っ!!」とビクターは絶叫したが、この場は一刻も早く誰かを呼んで来るのが先だと確信したビクターは、脱兎のように駆け出した。
「直ぐに戻ります!」
けれどもエクリースは多分その言葉を聞いていなかったに違いない。彼はジョーダンの長剣を受けるのに必死だったからだ。受けた後、見事にエクリースは横に廻り込む。

「逃げるのか、エクリース王子！　この弱虫め！」
「そうではない！　わたしを真剣にさせていいのか!?　よーく考えろ、ジョーダン！　お前の方が、歩が悪いのを思い知れ！」

エクリースは廻り込んだと見せかけて、一回転した。そしてジョーダンの長剣の柄に、自分の鋭い剣を引っ掛けた。ジョーダンは、ほっそりとしたまだ少年の域を出ないエクリースが、剣術は人並みはずれて巧いのに気付いたが、もう遅い。

ジョーダンの剣は遥か遠くに飛んで行く。エクリースは素早く、その剣を足で蹴飛ばし、自分の剣の切っ先をジョーダンの首筋に突きつけた。

「さあ！　どうする、ジョーダン。もう諍いはここでやめてはどうだ!?　わたし達は話し合いが必要なのだよ。そうだろ？　君は誤解しているんだ」

ジョーダンは突っ立ったまま、悔しげに両手の拳を結んだ。エクリースは表情も変えず、すっくと剣を構えたままだ。

「もうやめよう！」と再びエクリースは言いかけた。「こんな馬鹿げた事はお終いにしよう。きっと誰かが謀ったのだ。君を利用しようとして……」

「黙れ！　己のやった卑劣な事を認めないとは！」

そう叫ぶと、隙のあったエクリースに向って、ジョーダンは懐からもう一振りの短剣を抜き出すと、猛烈な勢いでエクリースに向って来たのだった！

「くたばれ～！」

ふいを突かれたエクリースは思わずその短剣を避け様と、自分の剣を振り回した。その切っ先が向ってくるジョーダンの胸を切り裂き、その瞬間赤い血潮が噴出した。

「あっ！」とエクリースが叫ぶと、ジョーダンは目を剥きながら胸を塞ぎつつ、まだ若芽の草原に倒れこむ。

「ち、畜生……このぉ……」

薄暗がりの中、ゆっくりとジョーダンが倒れているその最中に、向こうの方からビクターと二人の兵士達が駆け込んできていた。彼

らは剣を持って呆然と佇むエクリースと、血潮に塗れて倒れ伏すジョーダンを唖然として見つめた。彼ら兵士達には、エクリースが恐怖に包まれた人物にしか見えなかった。

5

5

「そうか……ジョーダン・ドリアンは深手を負って、危篤状態となった……」

サイラスと戯れていたイデット妃は、従者が告げた言葉を聞いてそうゆっくりと返答した。サイラスは眠いのか、ぐずっている。

「で、エクリースの方は？」

「それが……あの若さで、なんとも無かったのでございます。恐るべき強さの余り、周囲の者は益々エクリース様のことを“デスティ”の化身ではないかと……」

「馬鹿な！　人の噂ほど当てにならぬものは無い」

とイデットは言い捨てた。確かに、真相を知っているイデットは“デスティ”の存在など怖れるはずが無いのだ。

「これ、乳母よ。サイラスを寝かしておくれ」とイデットは、従者が去るとうって変わった猫なで声で、側の乳母に促した。サイラスは眠い目をこすりながら、やっとのことでイデットの頬に、お休みのキスをする。その仕草は可愛い二歳の幼児の姿。

「可愛い我が子！　次の王位は、必ずお前のものにするぞ」

去り行く我が子サイラスの小さな背中に向かって、イデットはそう優しく言いかける。

けれどもサイラスと乳母が居なくなると、イデットは怒りを爆発させた。

「マルゴット！　又しても、あの疫病神はまんまと運命を下に敷いたとみえるの！　事もあろうに、ジョーダンの方が斃れてしまうと

は！」
　部屋中ぐるぐる廻るイデットの影を、マルゴットは黙って見つめていた。
「ジョーダンはもっと強い猛者だと思っていたが……わたしの誤りだった」
「はい。エクリース様は、お若いのに剣術に優れていらっしゃいましたのね」
「そう、プラットが以前わたしに手紙で記していた通りだった。わたしも迂闊者よの」
「けれども、王様はひどくお怒りとか……。噂では、エクリース様を軟禁なさっているようですわ。この様子では、エクリース様に王位など渡すはずがございません」
「マルゴット、お前はまだ親子の心情を知らぬ！　心変わりは幾らでもするものじゃ」
とイデットは吐き捨てる。

「だが……王はエクリースを即座にここより追放するであろう。しばらくはここに呼び戻す事はしまいて」
　怒れるイデットの顔が、心なしか穏やかに成った。
「何しろ、またまた評判がた落ちですものね。それに、ドリアン子爵家ではエクリース様に対する恨みは相当のものがございます」とマルゴットはしたり顔で答えた。
「けれども、エクリースは王子。又しても、裁判にはかけられぬ。お咎めは襲ってきたジョーダンにあるであろう。まあ、哀れなドリアン子爵殿！」
　イデットはほほほっと、掌を口に当てて嗤いだした。
「娘と息子、どちらもエクリースと関係して、倒れてしまうとはな」
「けれども真実は……別ですけれど」
とマルゴットは、邪悪な女主人の美しい横顔をじっと見上げたのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

「真実を述べよ、エクリース！」

シスリー長老を連れて秘かにやって来た王は、エクリースが軟禁された部屋で、声を荒げていた。ビクターは壁際に押し黙って立ち、エクリースは粗末な椅子に腰掛けている。

「真実は不明です。けれども、この手紙をお読み下されば幾らか分かろうというものです。少なくとも、この筆跡はわたしのではないということが」

とエクリースは目の前の丸い木のテーブル上に置いてある、例のくしゃくしゃの手紙を指差した。

「これはジョーダン・ドリアン宛に来たと言う手紙です。恐らくジョーダンはこれを読んで激昂したと思われますが」

苛立つ王に代わって、シスリー長老がその枯れ枝のような手を差し伸べて、手紙を掴んだ。そしてさっと一瞥すると、黙ったまま王に手渡す。王も何とか気持ちを落ち着けて、それを読んだ。

「なるほど……この手紙……これは誰かの悪戯なのか？」

「そうかも知れませぬ」とシスリーは恭しく答えた。「そうでないかも……」

「わたしは息子を信じたい」と王はエクリースを見つめながらそう言った。

「息子には罪が無いと。けれども、ジョーダンを傷つけたのは確かな事だ」

「ジョーダンはもう一振りの短剣を持っていたのです！　わたしはそれを避けようと……」

と答えるエクリースに向って、

「けれどもそれを見た者は誰も居らぬ」と王は静かに答えた。

「残念ながら、王子様に置かれましては、ここには長居出来ぬと思われますが。王子様に対する畏れや悪い噂、そして恨みなども渦を巻いておりますゆえ」

とシスリーが最後に、決め付けるように言った。

「そうだな」と王は力なく答えた。「ジョーダンにも罪があるが、彼は今瀕死の状態じゃ。エクリース！　お前は明日朝早く、ここを発つがよい！　ビクターと二人だけで北の森のドリアン家へと戻れ！　そしてわたしが命じるまで、そこに居続けるのだ！　しばらくここへは戻って来ぬが良かろう」

父王の命令に、エクリースはただ「はい、父上」と答えただけだった。

6

6

明朝まだ明けやらぬ宮廷から、二頭の馬が弾かれたような猛烈な速さで駆け出して行った。二人とも黒いマントをなびかせ、風のように去って行く……。

その姿を王宮の一室から見下ろしていた老女が居た。彼女は暁の薄暗がりの中でも、ギラリと光る瞳を持ち、そして老いたりといえどもその視線は厳しい。

「ハラレ様、もう起きていらっしゃるので？」

と眠たげな下女が欠伸を噛み殺しながら、そう話しかけた。

「それでは、何か暖かいものを」

「よい、セシル」とハラレ、前亡き妃ドロテアの侍女は言った。「どうやらあの馬は、エクリース様のようじゃが……」

「でしょうかしらね？　こんな朝早くご出立ですか？　それも誰も見送りも無く？」

「そうなっても仕方あるまい。何しろ、あのドリアン家の馬鹿息子を殺しそうになったと聞いておる」

「あの事件は、あちらの責任もあるのではという噂ですが」

と何も知らない下女セシルが答えた。

「喧嘩両成敗とな？」

「変な手紙が来たといいますよ、ジョーダン様に」

と下女は耳元で囁く。

「ふん、なるほど」とハラレは意味深に頷く。

「お前、イデット妃をどう思う？」

とハラレはくるりと振り返りながらそう尋ねた。

「イデット様でございますか？」と下女は目を白黒した。「お美し

い方で……」
「そうではない！　あの女の心を言っておるのじゃ」
「心、ですか？　さぁ」
「ドロテア様とは大違いの外国女め！　それが王の心を捕らえているとは！　大方、息子サイラス王子を、お世継ぎにするつもりであろう」
「……でしょうか……」
「お前はあの国の女だったな」とハラレは皮肉っぽく言った。「ではイデット妃について、何か悪い噂を聞いておらぬか？」
　下女は黙り込んだ。けれども意を決したように、口を開いた。
「イデット様には……実は恋する方が居たと言うお噂でした」
「ほぅお？」とハラレは目を細める。「それは誰じゃな？」
「確か……お若い騎士で、位は低いもののイデット様のお近くに仕えていた若者でございます」
「で？」
「それは美しい美丈夫であられて、宮中の女官達の人気を独り占めでしたわ」
　下女の瞳には、微かな憧れと嫉妬が浮かんだ。
「名は？」
「ラウール・デュボア様でございます」
「ラウール・デュボア！？」そう叫ぶと、ハラレはニンマリと嗤った。
「もしや、イデット妃はその方とデキていたのではないかな？」
「まさか！　そんなことは！」
「まあよい」とハラレはテーブルの上の暖かいミルクを飲んだ。「いつか事実が分かるであろう。それはそうと……あちらの国に行く者はおらぬかな？　スパイとして最適な者は？」
　下女はハッと息を飲んだ。
「もしや……わたしと仰るのでは？　ハラレ様」

ハラレはこの問にニタリと笑いで答えた。
「お前以外誰が最適と言うのじゃ、セシル？」
「ええ……はい」
「やりたくないのはよく分かる。大層危険なことだからな。けれどももしも何かを掴んだならば、お前を奴隷の身から自由人に解放してやってもいいぞ。そして下女から女官に出世も叶うだろう。さあ、どうする、セシル？」
セシルは俯いていたが、暫くして顔を挙げた。
「わたし、やり遂げますわ」
「それは殊勝な心掛けじゃ。これは内々に頼むぞ、セシル」
「はい、分かりました」
「それでは……」とハラレは若いセシルの耳元に何事かを囁きかけた。

7

7

早朝、日が昇りきらぬ内にエクリースとお供のビクターが王宮を抜け出してしまったのを知ったイデットは烈火の如く怒り狂った。

「王はわたしに黙って、エクリース王子を逃したのじゃな！　ゆ、許せぬことじゃ」

イデットはしばし喚きながら、苛々と部屋中を歩き回った。そんな女主人をマルゴットはじっと見つめているばかり。

「けれども王妃様、王様はあの忌々しい王子をあの北の森に放てきなさったのですから、エクリース様ももう暫くは帰って来ないでしょう」

「けれども、まだ生きておるではないか」

「やはり、エクリース様を……亡き者にするのはなかなか難しいと……」

「愚か者め！」とイデットは怒鳴った。「いいチャンスだったというのに。が、今はまだその時期では無いかも知れぬ」

イデットはやっと諦めたように、窓際の長椅子に腰掛けた。ふと外を見やると、ガラス越しに春の気配がしていた。イデットはハタと意を決して、手を打った。その瞳に、並々ならぬ決意が滲み出ている。

「そうじゃ、マルゴット。サミュエルを呼べ！」

と命じるイデットにマルゴットは静かに頷き、やがてサミュエルを連れて来た。

「お連れ致しました」

「入れ。お前はここから去るように」

いそいそとマルゴットが去って行くと、サミュエルは緊張してイデットの前に佇んで居た。その義弟をイデットは嘗め回すように見つめていたが、やがて彼女は口を開いた。
「以前そなたに、ドリアン家のベアトリス姫を娶わせたいとわたしが言ったのを、覚えておるな」
「はい」
「直ぐにここから馬を駆って、北の森のベアトリスの館に行くように！」
「え！？」
「わたしの親書を携え、奥方に渡すのじゃ。奥方は多分そなたを歓迎し、すぐさまベアトリスの婿として暖かく迎え入れるであろう」
「けれども、イデット様……」
「何じゃ？　不服か？」とイデットは硬直しているサミュエルを睨みつけながら問いかけた。

「いいえ、そうでは……。けれども、エクリース様はもうここを発たれたとか。わたしはその後塵を拝すことになりましょう」
「そんなに変わらぬ。エクリースと僅か半日しか違わないだろうし。あちらの奥方は、“呪いの王子エクリース”を、好いてはおらぬし、まして可愛い愛娘の婿などにする気は全く無いのだ」
「はい、分かりました」
「ベアトリスはきっとそなたの貞淑な妻となろう。そしてドリアン家の財産も頂けるのじゃ。出世も思うがまま」
イデットは近寄ると、サミュエルの肩に手を置いた。
「大役じゃ、果たしてくれるな、我が義弟よ」

☆　―　☆　―　☆

その頃、早朝から駆け抜けていたエクリースとビクター、そして

二頭の馬は、やっと休息をとることになった。二人と二頭は、もうへとへとだった。

ある小川の畔に馬を止めた時も、エクリースはなるだけ小川から身を離していた。小川は苦手だ、どうしても動機が激しくなる。

「如何なされましたか、エクリース様？　お疲れで？」

「いや……そうではない……」

「けれども、ここで暫く休みましょう。それから峠を越えて、北の森へと」

「ああ」とエクリースは、切れ切れに答えた。

「分かりました。エクリース様は小川がお嫌いでしたね。どうも済みません、どこか他の所に」

「いや、よい」とエクリースはどっとその場に座り込んだ。「ここで良い。確かに疲れた」

そう言うと、エクリースは深い溜息を付いたのだった。

「今頃、ベアトリスは、どうしているのだろう……？」

「明日にでもお会いになれますよ、エクリース様」とビクターは優しく慰めたのだった。

「そうだな。僕にとっては、今やベアトリスの居る北の森が故郷のような気がする」

エクリースは遥か遠くの空を見上げた。

7（後書き）

明けましておめでとうございます。年末年始につき、少し更新が遅れてしまいました。どうも済みません。今年も宜しくお願い致します。

8

8

夕暮れになったので、ビクターは乏しい枯れ木で焚き火を焚いた。急いで出て来たので、持って来たのは僅かばかりのワインのボトルと、硬いビスケットだったが、二人は文句も言わずに黙って具した。

「さぁ、エクリース様。わたしが番をしておりますゆえ、安心してお休み下さい」

とビクターが促したが、エクリースは膝を抱えたまま、その小さな焚き火の側にじっと座って居るばかりだった。

「ビクター」とやがてエクリースは小声で言いかけた。

「はい？」

「僕は、本当に“デスティ”の生まれ変わりなんだろうか？」

「何を仰います！？」とビクターは驚愕の余り、思わず大声を上げた。

「あなた様が、闇の王“デスティ”の生まれ変わりなど、誰が信じましょう！　少なくともわたしは絶対に信じません。今までお仕えもうしあげて参りましたが、エクリース様のような純なお方は、そんなにこの世に居らっしゃる者ではありませんぞ。

エクリース様、この世の中は醜いものです。人間はその中でも特に醜い。憎しみ、嫉妬、欲、その他のおぞましいものが満ち満ちておりまする。けれどもあなたは違う。何が起こっても、それを恨む事は無く、努力を怠る事はありませぬ。そのエクリース様が、何ゆえ？」

ビクターはまるで掻き口説くように、エクリースに迫った。炎に映えて、エクリースの横顔は美しいが、しかしこのうえなく悲しげだ。

「なぜなら……」とエクリースは口を開いた。
「僕の行く所、必ず不幸が誰かに襲ってくる。ベアトリスの従妹アナベラが倒れ、そして兄のジョーダンは今瀕死の有様だ。過失とは言え、彼を傷つけたのは、まごうかた無き僕なんだよ！　ベアトリスには、何と言って弁解すればいいんだ!?　それにもっと恐ろしいことが……」
「えっ!?」
「ビクター」とビクターに顔を向けて言いかけたその表情は、悲しみと言うよりも畏れに満ちている。「僕は怖いんだよ、怖いんだ！　ベアトリスは僕と一緒に居てはいけないのではないか、と最近よく思う。彼女を不幸にしそうでしょうがないんだよ。僕と居ると、僕と居ると、ベアトリスは……」
　エクリースは苦渋に満ちた表情で、俯いた。ビクターは暫く虚けたように黙り込んでいたが、やがて語り始めた。

「エクリース様。例えエクリース様ではなくとも、愛する人を本当に幸福に出来るのか、という思いは誰しもが持っているものです。将来は分からない。先に何が起こるのか……病、不幸な出来事、事故、失恋、飢え、裏切り、そして死……そんなことを考えていると、将来が恐ろしい。それは貴方だけではありませぬ」
　エクリースは顔を上げると、ビクターをじっと見つめた。
「それは……アンネットのことなのかい?」
　ビクターは黙ったまま、頷いた。
「お前も、アンネットについてそう考える時があったのか!?」
「人間とは、本来そういうものでございます。何が起こっても、いずれは誰しもが死を免れません。けれどもそれまで、幸福になろうと努力するものではないでしょうか？　あなただけが、特別なのではない」
「そうだな」とエクリースはポツリと言った。「お前の言う通りだ。

何だか僕は、最近弱気になってしまっていた」

「大切な事は、ベアトリス様を愛しているのならば、あのお方を幸せにするにはどうしたら良いか、前向きに思案することでは？」

「ありがとう、ビクター」とエクリースは素直に述べた。「お前はただの従者と言うより、わたしの義理の兄のような気がするよ」

「それはもったいないお言葉でございます」

「少し気持ちが軽くなった。僕はもう寝るよ、ビクター」

「はい、そうなさいませ」とビクターもやっと微笑みながら言うと、エクリースも出立して初めて、安心したような笑みを浮かべた。

「それじゃ」

そう言うと、エクリースは自分のマントに包まって横になった。

シーンとした森から、時折ミミズクのような声がする。

ビクターは眠るまいと努力していたが、若い身体は自然と眠りを欲していたのだろうか？　彼もまた、座りながらコックリコックリ舟をこぎ始めた。

ハッとビクターが気付いた時は、もう遅かった。ビクターは何者かに口を塞がれ、横に眠っていたはずのエクリースは数人の人影に囲まれて、既に縄をうたれていたのだった。

「ビクター！　ビク……」

そこまで叫ぶのがやっとで、エクリースは脇腹を殴られ気を失い、奈落の底に落ちていく……。

☆　―　☆　―　☆

「馬が！　馬がこちらに疾風のように駆けて来ましたよ、ベアトリス様！」

と叫びながら、アンネットが庭に佇んで居たベアトリスのもとに駆け込んで来た。

「え！　エクリース様なの？」

ベアトリスの顔がパッと輝く。と見るや、ベアトリスはスカートを摘みながら、玄関に走りこんで行った。

ちょうど馬から下りようとしている一人の若者の姿が見えた。

「エクリース様！」とベアトリスが呼びかけると、その若者が振り返った。

「あ……」

ベアトリスは凍りつく。

「サミュエルでございます、ベアトリス嬢」

と若者は慇懃に答えて、軽く礼をしたのだった。

9

9

サミュエルは目の前に立ち尽くす、ベアトリスをじっと見つめた。ベアトリスの結い上げた栗色の髪には、春先の白い花が差してあり、それは実にベアトリスに似合っていたのだ。サミュエルは今まで感じたことの無い胸のざわめきに気付いて、我ながらハッとした。この間見た時のベアトリスはまだ子供っぽい少女という趣だったのだが、今のベアトリスは、既にろうたけた男心をそそる美少女になっていたからだ。

躊躇いの表情を浮かべたベアトリスを、サミュエルは初めて可愛いと思った。

「ベアトリス嬢、お久しぶりにございます」

そう丁寧に言うと、サミュエルはその端正な顔立ちのまま一礼する。ベアトリスも、まだまだ少年っぽいエクリースとは違う、少し年上で大人の雰囲気を漂わせたサミュエルを見つめ返した。

確かにサミュエルは綺麗な若者だが、けれどもベアトリスの失望は明らかだった。ベアトリスはスカートを摘むと、礼を返した。

「ようこそ、サミュエル・グールデュール様。けれども、どうしてこちらへ？　こんな辺鄙な所へ又いらっしゃったのですか？」

サミュエルは、このベアトリスの率直な問いかけに微かに微笑んだ。笑うと、硬い表情のサミュエルの顔は、幾分若々しく変化していく。

後から息を切らせて駆け込んで来たアンネットも、直前で唖然として立ち尽くしていた。

ベアトリスがまごまごしていると、中からドリアン伯爵夫人が悠

然と現れた。まるでサミュエルの訪問を予想していたかのようだ。
ベアトリスは、少し変だと感じた。
それはサミュエルも同じ様子で、怪訝そうにベアトリスを見つめて問いかけた。
「エクリース様は、こちらへは……？」
「いいえ！　いらしてませんわ」とベアトリスは答えた。
「そうですか。確か……わたしより一日前に、こちらへお戻りになったはずですが」
この言葉を聞いたベアトリスは、明らかに蒼白になった。
「では、エクリース様は……」
口元を掌で覆ったベアトリスは、わなわなと震えているばかり。

「サミュエル様、あちらから奥方様が来られておりますが」
と供の者がサミュエルに言ったので、サミュエルは奥方の方を向いて一礼した。全く非の打ち所の無い礼儀作法だ。
その様子を見た奥方は、にこやかに微笑むと優雅にお辞儀をした。
「サミュエル様ですね？　まあまあ、少し見ない間に、すっかり大人になられて、見間違うほどですわよ！」
それから奥方は、呆然と立ち尽くすベアトリスを叱り付けた。
「何をぼんやりしているの、ベアトリス！？　未来の旦那様に向って、ちゃんとご挨拶したの？」
「未来の旦那……様……！？」と驚いたアンネットが呟くと、そっとベアトリスを伺った。案の定、ベアトリスは今にも倒れそうな程震えているではないか。

「ベアトリス様」
そう言い掛けつつ、アンネットはベアトリスを支える為に近寄った。
「アンネット！　これはどういう訳なの？　エクリースはまだ到着もしていないし、お母様が突然こんな事を言われるなんて！」

「さあ、わたしにも何が何やら……」とアンネットは当惑するばかりだった。
「アンネット、わたしは……」
そこまで言うと、ベアトリスは堪えきれずにすすり泣き出した。そんなベアトリスを、サミュエルは半ば可哀想に、半ば小気味良さそうに感じていた。

「ベアトリス！　めそめそ泣くものではありませぬ！　……お前にまだ言っていなかったのはわたしも悪いのですが、このお話はお父上も賛同され、このサミュエル様の姉君に当たられるイデット王妃様も大いに喜んでおりまする。
つまり……王様もご承諾なのです。分かりますね？」
「わたしはまだ、１４歳にもなっておりません、お母様」
とベアトリスが震え声で抗うと、奥方はキッとした視線を投げかけた。
「もうお年頃ですよ、ベアトリス。皆、その頃には誰かと婚約しておりました。わたしも又、１５歳であなたのお父様に嫁いだのですわ。あなたを産んだのは、わずか１７歳でしたもの」
そうピシャリと言ってのけると、奥方は愛想笑いをサミュエルに返した。
「さあさあ、どうぞ我が館へ、サミュエル様。我が娘を、王家の縁戚に嫁がせるとは何と言う幸せなことか！　まだこの子には分かっておらぬようですが」

サミュエルは目礼すると、供の者と共に館の中に入った。ベアトリスがアンネットに身を預けてすすり泣いているのをチラッと見つめたが、今は何も言葉をかけずに。
「アンネット！　エクリースはどうして戻って来ないの！？　サミュエル様のお話では、もうここにとっくに着いているはずよ！」とベアトリスはアンネットに迫った。

「どうしたのかしら？　道中何かあったんだわ！！」
ふいに訪れた不安に掻き雀られ、ベアトリスは顔をひきつらせた。
「ベアトリス様。エクリース様はきっとお戻りですわ。道にでも迷われたのかも知れませぬ。けれども時は春。もう凍死など不測の事態はございますまい」
「そうであればいいけれど……」
ベアトリスの呟きは、風と共に消えて行った。

10

10

エクリースはハッと目を覚ました。辺りは暗く、じめっとした森の臭いがする。そして直ぐに全身の痛みを感じて、微かに呻いた。手足全てをきつく縛られており、そして身体が上下に震動するのは、馬に乗せられているせいなのか？

「ビクター？」と小声で呼ぶと、途端に頭を殴られた。目から火花が散るようで、身体がグラリと傾ぐ。

「てめえのお供の者かい？　そいつは別の馬に乗ってるぜ」

と言う下品な声が闇の中でした。

「ビクター！　ビクター！」と叫ぶや否や、又殴られた。

「うるせぇ！　そいつなら、まだ気絶してるぜ、お若いの」

こう言われて初めて、エクリースは恐怖を感じ出した。先頭に微かに見える灯火は、松明なのだろうか？　ここはどこだ？　そして、こいつらは！？

「お、お前達は何者だ！　名を名乗れ！」

このエクリースの言葉を聞くと、暗闇のあちこちから軽蔑したような嗤い声が漏れた。

「その言いざまは何だい！　偉そうな口を効くじゃないか、まだ小僧っ子のくせに」

「俺達は人買いだよ、小僧」と少しだけ威厳のある声がした。低く、くぐもった特徴のある声音だ。

「人買い……」とエクリースはゾッとしてつぶやく。

「お頭～～！」と子分格の声が慌てた調子で続く。

「いいのさ。こいつらに早く実情を分かってもらった方が、てっとり早い」

とお頭らしき男の声がした。

「ですよね～」と子分格が同意する。

「おいっ、小僧！　それともう一人の野郎！　俺達はな、お前達を捕まえたときには、多分相当の額の金があると思っていたのよぅ。それがよぉ～、まさぐっても殆ど小銭しかねぇや。それでな、盗賊変じて、もう一つの職業である“人買い”になったってわけよ。分かったか、この生意気な小僧め」

「ま、元々俺達は綺麗な娘っ子を狙ってたんだがな……最近政情不安定のせいか、女達が旅に出なくなってさ、少年や青年でもいいやってことになったのさ」

ともう一人の子分の声がした。幾分大人しめの声音だ。

「俺達はついてた。それもとびっきりの上物だからな、てめえは」

と最初の下品そのものの子分の声がする。

「まるで生娘のように綺麗だぜ、おい、小僧。どこの誰だか知らんがね」

「僕は……」と言いかけて、エクリースは黙り込んだ。これ以上、自分の身分を告げていいかどうか、迷ったのだ。

「一体僕達をどうする？」

「あのさ、世間知らずの坊や。東の国々やもっと南の国々では、肌の白い男の子を重宝するって習慣があるんだよ。それ、知らねぇのかい？　お前も、それにもう一人の若い奴もなかなかの男前だぜ。お前達は高く売れる。そして俺達は、ほぼ一年は何もせずに遊んで暮らせるというもんだ」

と大人しい方が告げた。エクリースの全身から血の気が引いていく。

では、もうベアトリスとは会えないのか！？　そしてこの国からも？

その時、「ううん」と呻いて、ビクターがやっと目を覚ましたよ

うだ。
「な、何だ!?　ちっとも動かせない！」
「ビクター、黙って……」とエクリースが言う間もなく、ビクターは叫んでいた。
「エクリース様！　王子よ、大丈夫なのですか!?」
「言うな！」とエクリースが叫んだのも一瞬遅かった。
「なんと！　王子様、とな!!」と下品な方が大声を出す。
「そうだ！　お前達はエクリース王子を捕らえているというわけだ。これが知れたら、お前達は間違いなく八つ裂きだぞ！」
　途端に、お頭と思しき男が、無言でビクターを殴りつけた。ビクターは悲鳴を上げて、黙り込む。
「ビクター、言うな！　何を言っても無駄だよ」
「そうだよ、王子様。……それが本当なら、俺達はもっと稼げるかも知れんぞ！」
　人買い達は欲に目がくらみ始めたようだ。

「王にこいつらの事を言って、たんまり身代金を稼ごうぜ」
「そうそう巧く行くかな」とお頭だけは思慮深く言うと、
「そうだよ。お前達は、何も知らない」とエクリースが答えた。「僕達の為に身代金を簡単に渡すとは思われない」
「だが、てめえは跡継ぎの王子様なんだろ～が」
「いいや」とエクリースは冷ややかに言った。「きっと邪魔者が居なくなったと、逆に喜ぶのかもな。跡継ぎは別に居るんだ」
　この言葉に、さすがの人買い達も黙り込んだ。けれども、
「いや……待て！」とお頭が突然声をあげた。
「以前、リカルドという兵士がエクリースという名の王子を探しておったな。そいつは、確か今の妃の配下で、暗殺命令を受けていた者だ。彼は、その王子を見つけてくれれば、銀貨１００枚を渡してくれると言っていた。何が何でも、そいつを捕らえて、そして殺さなければならないとも言っていたからな。多分そいつに渡すのが一

番だろうよ」
「それじゃあ、そのお妃って奴は、この王子を亡き者にしたがっているのかい？　へー！？　くわばらくわばら。女と言うものは、全く恐ろしい生き物だなぁ」
と下品な子分格がつぶやく。
「イデット妃が！？　まさか！」とビクターが驚愕の余り叫んだが、エクリースだけは黙り込んでいた。
「やはり……そうなのか」というエクリースの溜息か言葉か分からないほど小さな呟きが、暗闇に吸い込まれて行った。「これで全て読めた……」

第七章　未来の花嫁　1

1

サミュエルは重苦しい沈黙の中、晩餐に臨んでいた。すぐ目の前のベアトリスは、顔も上げず何を食べているかも分からない様子だった。ただ、サミュエルの隣のドリアン伯爵夫人だけは始終ニコニコしており、絶えずサミュエルに話しかけてくるのだ。サミュエルはそれが迷惑だったのだが、そつなく自分の役目を演じていた。

けれども時々、それが演技なのか、それとも本当にベアトリスに引かれているのか、自分でも分からず混乱したままだ。

サミュエルはイデットの義弟として、身分の低い側室である母親を持つ身として、常に周囲に気を配り、感情を面に出さずに過ごして来た。

それはイデットと共にこの国に来て以来も、ずっとその態度を崩さなかった。子供の頃からそういう風に育ってきた為、自分の感情というものを押し殺し過ぎ、出すぎた真似など出来ずにこの歳まで来たが、正直誰かを真に愛したことすらなかったのだ。

サミュエルは自分のこの今の感情に戸惑い、心を乱していたのだった。

「サミュエル様、我が娘はきっと良き花嫁となりますわ。自分で言うのもおこがましいのですが、本当によく出来た娘なのですもの。それに……可愛いでしょ？　サミュエル様も遠慮なくこの子に話しかけてくださいましな」

と奥方が囁くと、サミュエルはふと振り向いて言った。

「どうやらベアトリス嬢は、わたしがお嫌いのようで……」
「まあっ！　そんなことはございませんわよ！」
と奥方は大袈裟に叫んで、夫の方を向いた。
「ねぇっ、あなた。ベアトリスはただ、はにかんでいるだけですわよね。常日頃、この森に来て下さる方は、そうは多くありませんもの！」
「うん、まぁそうだな」とドリアン伯爵は相槌を打ったものの、どこか浮かなかった。父である伯爵には、ベアトリスが余り喜んでいないのが手に取るように分かっていたからだ。

「わたしはお先に」
とその時、ベアトリスはスプーンを置いて立ち上がった。フォークと言う物が無いこの時代、ベアトリスはアンネットの差し出したナプキンで手を拭くと、つと立ち上がる。
「これ、ベアトリス！　失礼ではありませんか！　お客人の前で、このような不躾なことをするとは！　それも大切なお客……あなたの未来の花婿殿を」
　奥方が眦を釣り上げて意見したが、ベアトリスは聞く耳も持たずさっさとダイニングを出て行く。
「ハハハ、嫌われましたね～」とサミュエルは取り成したが、奥方の怒りはなかなか収まらず、やっと手を揉みしだいて席に就いたのだった。
「本当にごめんなさい。あなたの前だと言うのに、こんな無作法な……」
「いいえ、いいのです」とサミュエルは冷静に答えた。「いつか分かって下されば、それで」
「まぁ！　サミュエル様……あなたほどお優しい方は居ませんわ」
　奥方は、サミュエルの手を取った。

「あの、サミュエル様。お願いがありますの」

「はい？　どのような」
「必ず、必ずあの子と結婚して下さいませね」
奥方のサミュエルを握る手に力が入り、思わずサミュエルは首を傾けた。その力は尋常ではなく、そして奥方のその目は狂おしく又陰険に輝いていたのだ。
「もちろんです。ですからわたしはこちらに、王と義姉の書簡を携えてやって来たではないですか！？」
「あんな娘でも宜しいのでしょうか？　途中で嫌になられたりなさいませぬか？」
「そんなことは……ただ、ベアトリス嬢は、別にお好きな方でもいらっしゃるのでは？」
これを聞いた途端、奥方の頬がピクピクと引きつっていった。
「まさか！　こんな田舎に住まうベアトリスには、そんなお相手など居るはずはございませぬ！」
「いや……もしかして……ここに住まわれていたエクリース王子とか……」
おっほほほほほ、というけたたましい笑いが、奥方の真っ赤に塗られた口から漏れた。
「何を仰るのです！？　王子はまだ１４歳。ほぼベアトリスと同じ歳ですわ。それに、王子はもしかすると次のお世継ぎ。そんな方に嫁がせるなどという大胆不敵なことを、わたしが考えているとでも？　わたしは欲の無い女、そして欲の無い母でございます」
「まあ、そうかも知れませんね。失礼な事をお聞きしました。お許しあれ」
「いいえ、いいのです。それよりも、ベアトリスが１５歳になる前に、是非婚礼の式を挙げて下さいませ！」
「と言うと……来年？　わたしがちょうど２０歳ですね」
「そう！　それも来年、ベアトリスが１５歳になる前に、必ず！　必ず、お式を！　お約束して下さいませ、サミュエル様、どうかそ

のようにと！！」

この狂おしいまでに切羽詰った奥方の懇願を、少し変だと思いはしたが、元々何事にも従順にあれと育ったサミュエルは、ニッコリ笑って頷いたのだった。

「分かりました。ではそのように致します」

「あ、ありがとうございます……」

奥方は、気が抜けたように、その手を離した。アンジェラの呪わしい予言とその暗い影に怯え、暗澹としていた気持ちが少しは晴れた気がした奥方は、思わず涙ぐんだ。

「ありがとうございます、サミュエル様。きっとそうして下さいましね」

2

2

人買いであり山賊でもある三人は、きつく縛り上げたエクリースとビクターを、自分達の根城である森の奥の、粗末な石造りの壊れかかった屋敷の地下に放り込んだ。そこは以前領主が住んでいたのだが、今はなぜか誰も居ず荒れ果てていたのを、彼らが乗っ取ったのだった。

それから一晩経ち、明け方三人の内お頭がリカルドの元へと馬を走らせて行った。リカルドは王宮から離れた野営地に今は住んでいたのだ。

テントの張られた粗末な野営地にリカルドは居た。

山賊のお頭がちょうど到着した時、リカルドはぬかるんだ地面に膝を抱えて座り、どこか遠くを見ていた。リカルドの妹マルゴットは、その美しさと賢さゆえにイデット妃の侍女に抜擢され、リカルドも幾分出世した。貧乏に育った兄妹にとっては、イデット妃は二人の恩人だ。

けれどもリカルドは、真からイデットを好きにはなれなかった。エクリース殺害命令も、リカルドは仕方なく聞いていた。誰であろうと、人を殺すのはいいものではない。例え敵を倒すべき兵士の身分であったとしても、やはり戦は嫌だし相手を殺すのは好きではない。

けれども、相手が自分に血眼で向って来たときには、思わず殺してしまう。そうしないとこちらが殺される。そういう世界でリカルドは育ってきたのだ。

そのリカルドの目に、馬を駆ける野卑なお頭の姿が遠くから見え、リカルドは立ち上がった。その途端、リカルドは憂いに沈む若者から、勇猛果敢な兵士へと変化した。

「リカルド様！」とお頭は馬から下りると、叫びたてた。「エクリース王子を捕まえました！　偶然でしたが、野営して居る所を発見しまして」

「なにぃ！？」とリカルドは叫び返す。「で、本物か？　そいつらは」

「確かにエクリース王子とそのお供のビクターという若者ということでした。高貴な顔立ちの少年が王子だと」

「証拠はあるのか！」

「へい。これですぜ」

お頭は胸元から、銀の壊れた時計を取り出した。

「おお、これは……」とリカルドが言うと、

「故ブライト様からもらった物とか」とお頭は頭を下げて、恭しく時計を差し出す。時計は陽光に鈍くキラリと光っているが、所々傷があり如何にも古い物だと見えた。

リカルドはふと、以前自分が平兵士の時に係った、ある事件を思い出した。

それは、けちな厩番のトロイという者が、エクリース王子から時計を盗んで？まり、挙句、高い塔から吊り下げられ処刑されたという事件だったが……。今思い出しても胸糞悪くなる事件だった。

リカルドの顔に苦い歪んだ笑いが微かに浮かんだのを、お頭は見ていた。

「リカルド様……何か？」

「いや、別に。ただ、昔の酷（むご）い事件を思い出していたのだ。その時も、エクリース王子が関係していた。あの王子の行く所、何かが起こる。何か、嫌な後味の悪い事が必ず！　だからこそ、イデット様はあの王子を亡き者にしたいのだろう。

そして安心して、サイラス様をお世継ぎにしたい意向なのだ。そのお心をただ母としての得手勝手だとはわたしは思わない。エクリース様は、疫病神なのさ」

「なるほど」とお頭は頷いた。「あんな綺麗な顔をしているのに、そういう運命のもとにあるお方なのだな。じゃあ俺達が心を咎める事は無いか……」

お頭は顎鬚をしごいた。

「それじゃ早速我らの根城に！」

「わたし一人で行く！」

「え！？　それでは」

「そう。これは秘密裏にやらなければならないことなのだ。分かるな？」

リカルドは時計をチュニックの奥に押し込みながら、剣の柄に手をやった。

「さあ！　行くぞ！　今度こそあの王子の息の根を止めてやる。そしてその供の者をもな！」

お頭とリカルドの二人は、そっと野営地を抜け出した。

☆　―　☆　―　☆

居残った二人の手下達は、リカルドを待っている間に退屈しのぎに、サイコロゲームをしていた。が、すぐに飽き始め、何か面白い事が無いかと思案し始めた。

二人の意見は瞬く間に一致した。

「あの王子様とやらを引き出してみたいものだぜ。その綺麗な顔が苦痛に歪むのを見て見たい。どうせいずれ殺される身なんだ。俺達がいたぶっても損は無いと思うけどなぁ、相棒よ」と下品な方が提案すると、もう一人も頷いた。

「退屈な人生には、何かが必要だな。娘っ子の場合はさっさと頂くが、男の子ではなぁ」
「どんなに高貴な人間でも、苦痛には弱いし苦しさにのたうつものだぜ、命乞いしてな」
二人は地下の方に向っていた。何も知らないエクリースとビクターは、地下のじめじめした石畳に転がっていたのだった。

3

暗い森近くに建つドリアン伯爵邸の庭で、サミュエルは二階のバルコニーに佇むベアトリスを認めた。そのバルコニーは、陰気な伯爵邸の中で最も静謐で品のある場所だと、サミュエルは感じていた。

その唯一の美的な場所にベアトリスが立っていたのだ。あと少しで日が暮れるという時刻は、物憂く気だるい趣がベアトリスを包んでいた。ベアトリスの淋しげな横顔と、背中に垂れる茶色の髪が風になびいて少し揺れている様は、サミュエルの冷たく閉ざされた心を少し揺り動かしていた。

「可憐だ……」とサミュエルは思わず呟いた。その呟きが聞こえてもいないのに、バルコニー上のベアトリスはふとサミュエルを認めて視線を落した。

サミュエルは微かに首を下げて、優雅にお辞儀を返す。

「ベアトリス嬢！　そこで何を……？」

「あ、サミュエル様でしたか」とベアトリスは物憂げに返事を返した。「ただここに立つのが好きなだけですわ」

その言葉に、サミュエルは少し近寄ると上を見上げた。

「そちらに登って宜しいですか？」

「ここに？　ええ、向こう側から外階段がございます」

とベアトリスは答えた。この言葉も待たず、サミュエルは軽快な足取りで、アーチ型の階段を駆け登った。

ベアトリスが去って行くものだと焦っていたが、それは杞憂だった。ベアトリスはじっとサミュエルを待っているかのように、その場に佇み続けている。

「ベアトリス嬢」と駆け登って来たサミュエルは、いささかも息の乱れもなく呼びかけた。
「余り長くいると、寒くなりますよ。春とは言え、まだ風は冷たい」
「ありがとうございます」
とベアトリスは丁寧にお辞儀を返した。
「何かお悩みでも？」
「あ？　いいえ……」
「エクリース王子ですか？」
ベアトリスは暫くして、深く頷いた。
「今日も王子は戻って来ていませんね。何かあったのでしょうか。ご心配なのですね、ベアトリス嬢は」
「はい」とベアトリスは消え入るように答えた。
「大丈夫ですよ」とわざとサミュエルは明るく言った。「王子は運の強いお方ですから」
「でも、他の方を不幸にすると、母はそう申しておりました」
「そうかな？」とサミュエルは微かに笑いかけた。「僕はそうは思いませんが」
「では、サミュエル様は、運命の悪戯とでも？」
少しだけベアトリスはサミュエルに近寄った。
「人間は運命には勝てません。けれども、運命もいつかは負ける時がある。僕はそう思いたいものです」
「そうかも知れませんわ」
とベアトリスは言った。「神様は、運命よりも強いのですもの」
「神様が王子をお守りしていると？」
「わたしは、少なくともそう神様に祈っております！」
そのベアトリスの声は甲高く響き、サミュエルは改めてベアトリスの強い意志と、エクリースへの愛情の深さを感じた。
けれども一方では、サミュエルはエクリースには負けたくないと言う切々たる思いを抱いたのも事実だった。

サミュエルはベアトリスの両手をそっと取った。ベアトリスが嫌がるかと思ったが、彼女は抗わなかった。

「ベアトリス嬢……いや、ベアトリス。君は将来わたしの花嫁となる大切な人なんです。あなたを、わたしがお守り致します。それは神に誓っての約束なのですよ」

「でも、わたしは」

「分かっております」とサミュエルはそれを遮った。「あなたの本当のお気持ちは。けれども、わたしはあなたを失いたくない。わたしと居ればあなたは幸せになる。きっとそうなる！　だからあなたはお心を確かに持つのです」

サミュエルに手を取られて俯いたままだったベアトリスだが、その時始めて顔をあげ、親が決めた婚約者をじっと見上げた。ベアトリスは、サミュエルの言葉に偽りは無いと瞬間的に悟った。

「分かりました。あなたの言うままに致します」

「今晩の晩餐会には、せめて途中で退席しないで下さいよ」

とサミュエルが言うと、ベアトリスは恥の為にポッと顔を赤らめた。

「昨晩は済みません、あんな失礼な事をしてしまって。今晩の晩餐にはもう二度とそんなことは致しませんから。あんな子供っぽいことは」

そう言うと、ベアトリスは本心から微笑んで見せたのだった。

4

4

山賊二人に乱暴に引き立てられたエクリースは、蜘蛛の巣の張ったガランとした部屋に縛られたまま転がされた。こんなに手荒に扱われた事の無いエクリースは、ほとんど何も考える事すらできない。

大蛇の森も怖かったが、それ以上に怖いのは“人間”だ。心の闇に潜む不可解で残忍な感情を持つのは、人間だけだからだ。特にこの居残った二人の山賊には、その気配が濃厚なのをエクリースは感じ取っていた。二人からは、見えないが残酷なオーラが出ていたからだ。そのオーラは、どす黒くそして卑しい。

「やあ、王子様とやら」と、二人の中でも更に残酷な方が言いかけた。そしてエクリースの額にペッと唾を吐きかけてニタリと嗤う。

「綺麗なお顔してるな。その顔を汚してすまねぇぜ。俺はな、お頭のようにお前を殺すよりも、遠くアラビアかどこかの果てに売った方がいいと思うぜ。けど許せよ。お頭が殺せと命じれば、それに従わざるをえんからな」

エクリースは見えない憎悪の渦に巻き込まれ、もがいていた。その渦は少しずつエクリースを締め上げているような気がする。そのせいか、何も声が出ない。将来も見えず、エクリースは目を瞑った。

「おい！　何か言えよ！　それとも、俺達に言う言葉は無いってか！」

と第一の山賊は怒鳴りつけた。

「どうせ殺されるのなら、身体はどうなってもいいな」

「その意味は何だい？」ともう一人が震えながら言った。「まさか

……穢すつもりじゃ……」

「その綺麗な身体を穢す！　そうして恥辱にのたうつがいい！　この王子様め！　美味しいものを食べ、綺麗なおべべを着、働きもしない。それなのに、年中パーティばかりやらかしている。そんな貴族や王族達には、恥ずべき死がお似合いだ！」

「おいおい、お前はどうかしているぜ」ともう一人が肩をゆすった。

「そこまですることはない。この若い王子が震え慄いているさまを見るだけで、溜飲が下がるというものじゃないのかい」

「俺も最初はそうだった」と下品な方が告白した。「けどな……美しいものを見ると、俺はシャクに触るんだ。俺は子供の時から醜く、家は例えようも無く貧乏だった。こんなお綺麗で世間知らずの王子様を見ていると、その美を穢したくなるものさ」

「神を冒涜するやり方だな、それは。罰が下るぞ」

「神など必要ない！　相棒よ、俺に罰が下ってもいい！　俺はやりたい事をやる！　俺自身の欲望のままに」

その言葉を聞くと、もう一人は後退った。

「なら、お前だけやれ！　俺はそれを見つつ、酒を飲んでいる」

「下す方と、ただ眺めている方とどっちが罪深いと思う？　王子様」と下品な方が顔をエクリースに近付けて言った。エクリースは答えなかった。確かに、実行犯も傍観者もどちらも同じような気がする。ただ感じたのは、ベアトリスへの耐え難く辛い思いだった。

「ベアトリス……」と思わずエクリースは呟いたが、こちらにはその言葉が益々癇に障ったようだ。

「女の名前など言うな！　まだほんの少年なのに、もう好いた女が居るらしいぜ」

そう叫ぶと、山賊はエクリースを思い切り殴りつけ、エクリースは壁まで吹っ飛んだ。唇が切れて、赤い血潮が噴出していく。それはまるで自分の果たせない思いのようだ。

―　もしもこの場を凌いだら……必ずベアトリスに正式に婚約を申し込もう！　もう遅いのかも知れないが。僕がまだ若い、先があると思っていたから不覚をとってしまったのだ。ああ、ベアトリス！　君は今何をしている……。

エクリースの思いは断ち切られた。山賊の男は、エクリースの背中の衣服を破いたのだ。白い肌が現れていき、山賊は興奮しだした。けれども彼は、直ぐに背中の丸い形の黒い痣を見つけた。その黒い色は際立っていて、まるで底なしの穴のようだ。

「おや、この痣は？」

「こ、これは不吉な痣だと、俺のお袋が以前言っていた。これは闇に隠れた太陽を表しているという話だ」ともう一人が震えながら囁いた。「この王子は、噂通り不吉な生まれと見える。もしかして、こやつは噂通りの“デスティ”かも！　そ、そんな王子などに構うな！」

「そんな迷信は関係ねぇ！」と男は怒鳴ると、エクリースの顎を掴んだ。「だろ？　王子様？」

初めて味わう恐怖がエクリースを襲った。けれども、その真っ黒い丸い痣から、なにやら得体の知れない黒い影が現れてくるのを、二人は同時に見た。

「えっ！」

「何だぁ、これは！」

エクリースが意識しないにも係らず、その黒い影は次第次第にドラゴンの形を成し、その小部屋一杯に広がっていく。一人が気が狂ったように剣を振るって切りつけたが、それは霧のように実態を伴わず、まるで二人の山賊をせせら笑うかのように、完全に本物のドラゴンに変化（へんげ）した。

そして次には二人を覆うように襲い掛かっていく。それは実体が無いが、けれども恐ろしい力を持っていた。覆われた二人は息が出

来ず、窒息していったのだ。

わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～！

ぎゃあ～～～～！！

二人の悲鳴が、その古びたアジトに響き、彼らは喉を掻き毟りながら息絶えた。

5

5

黒い忌まわしい霧のような影がいつの間にか消えると、エクリースの縄目も取れ自然にポトリと落ちていった。

ハッと我に返ったエクリースは、引き裂かれた衣服を胸に掻き抱きながらも、目の前に転がっている二人の山賊達の亡骸を呆然と見つめて、ヘナヘナと座り込んだ。今あった不思議でおどろおどろしい出来事がまるで嘘のように、夕べの光が汚れたスリガラスの窓から差し込んでいる。

辺りは静かだ。けれども、死骸だけは確実に存在し、今までの出来事が夢ではないと言うことをエクリースに示していた。

「そんな……馬鹿な事が……！」とエクリースは血を吐くように叫んだ。

「何と言うことだ!?　どうして、どうしてこんなことが起きたんだろう?」

エクリースには何が何だか分からなかった。ただ彼にも認識できたのは、自分の中から何かが現れ、この二人の卑しい山賊達を殺してしまったこと……。

「あぁぁぁ！　僕の中から、一体何が出てきたというんだろう!?　僕は……何もしていないというのに」

エクリースの声は悲痛に部屋に響いたが、余りの驚きの為か、彼の脳裏にはまだ地下室に縛られ転がされているビクターのことまで頭が廻らなかった。

その時、外からコツコツという音が聞こえ始め、やがてその音が扉の方に近寄って来たが、エクリースは金縛りにあったように身を

動かす事ができない。

扉はきしんだ音をたてて開き、夕日を背にした影が現れた。杖を手にして居る所を見ると、コツコツという音は杖を突いていた音だったのだろう。

目を凝らしてみると、それは老婆だった。

「エクリース王子かえ？」と老婆のしわがれた、けれども厳しい声がした。

「そ、そうだ。お前は一体……」

「おお、王子だったか！　間に合ったと見える。わたしは、アンジェラと言うしがないロマの占い師じゃ」

「アンジェラ！？　知らぬ」

「まぁ知らなくてもよい。それにしても」

そう言いつつ、アンジェラは一歩中に入り、その凄惨な死骸を見つけてさすがに絶句した。

「これは！？　……お前が殺したのかえ、王子よ」

「違う！」とエクリースは叫んだ。「僕じゃない。だけど、得体の知れない何かが、僕の背中の方から現れて、それがまるでドラゴンのような形になったかと思ったら……そしたら、そしたら……」

「分かった、王子。もうそれでよい」とアンジェラは、事の他、優しげに言いかけた。

「さぞ怖かったであろうな？」

「怖かった……」とエクリースはポツリと答えると、突然両手を顔に当ててワァーっと叫びたいのを堪えた。けれども次の瞬間、ほっとしたのか涙が頬を伝う。

「わたしは占い師ゆえ、お前の居場所が分かったのじゃ。それでこちらに駆けつけたが、なにせもう年寄りでな」

「なぜ、僕の所に？」

「お前に是非とも知らせておかなくてはならないことがあっての」

とアンジェラは、今度は平然と言ってのけた。「だが間に合って良かった」

「僕の背中から出てきたあの忌まわしい影は何なの？」

とエクリースが必死で問いかけると、アンジェラは意味深な哂いを、その皺くちゃな唇に浮かべた。

「お前は知らないのか？」

「何のことです？」

「お前の背中にある、丸くて真っ黒な、闇のような痣を」

「痣？　ああ、それは聞いたことがあるけれど」とエクリースは曖昧に答えた。

「けれども、僕の裸体を見たのは、ビクターとジュリアぐらいだったし、二人とも何も言わなかった。ただ一度だけ、ビクターが湯浴みの時、僕の背中に湯をかけたときのこと、『あれ？　この痣は……』と言ったっきりだ。

アンジェラとやら、それは不吉な印しなのか？　何か曰くがあるのだろうか？　教えてくれ」

「これだから、王子と言う代物は、何もかも我が物と勘違いするのじゃ。ものを頼む時には、それ相当の何かが必要じゃとはおもわぬか！？　礼儀をわきまえよ」

「ああ……そうだった。アンジェラ、僕に教えて下さい！」

「それが例え、恐ろしいものであっても？　なにせ、この馬鹿者達を殺してしまうような力を持っておるからの」

「僕は真実を知りたい！　僕は恐ろしい存在なのですか？　僕は……人の噂する、“デスティ”の生まれ変わりなんですか？　どうか教えて下さい！！」

エクリースはほとんど跪かんばかりに、アンジェラの足元に額ずいた。アンジェラは小気味良さげに見下ろしていたが、やがて口を開いた。

「お前は“デスティ”ではないぞ、王子」
エクリースはツと顔を上げた。その表情には明らかに安堵感が漂っている。
「ああ、ほっとした。そうじゃないと知って」
「だが、お前には生まれつきの運命が、それもとてつもなく辛い運命が待ち受けているのじゃ。それだけは本当のこと」とアンジェラはピシャリと告げた。
「辛い、運命？」
「そうよの。まず、王子、お前はベアトリスとは別れなければならぬ。それだけは、絶対にそうしなければならぬのじゃ！」
その言葉は、再びエクリースを稲妻に当たったかのように打ちのめした。

6

6

「ベアトリスとは……別れなければならぬと……？」

エクリースは呆然と呟いた。

「なぜ？　なぜなんだ！？　僕が若いからなのか？　それなら僕が大人になるまで、彼女には待ってもらう」

「それは無理じゃな」とアンジェラは無慈悲に言い放った。「王子、お前がまことにベアトリスを愛しているのなら、尚更そうしなければならぬ。なぜなら、ベアトリスはお前と一緒になる運命ではないのじゃからな。むしろ、お前と共に居てはならぬ運命なのじゃ。

王子、よく聞くが良い。ベアトリスはお前と居ると不幸になってしまうのじゃよ」

「不幸に！？」とエクリースは取りすがるように言った。「ベアトリスを不幸にしてしまうのか！　やっぱり僕は、人を不幸にばかりしてしまう呪われた人間なんだ！」

「それは呪いではない。けれどもお前の持つ運命は、再び皆既日食の日に結ばれる女性を見つけること。それ以外に方法は無い。

そしてそれは、いつ起るか分からぬが、少なくともここ数年ではないという卦が出ておるのじゃ。残念だが、その相手と言うのはベアトリスではない」

「だけど、僕は……」

「１５歳になると、お前と会うだけで、ベアトリスは死ぬのじゃ！

それでもお前は、自分の我を通す気なのか！？」と叱責するアンジェラの声が響いた。

「死ぬ？　死んでしまう！？　ベアトリスが……死ぬ……。ああ！

それだけは耐えられない！」

エクリースは絶望の余り、両手で頭を抱えた。

「お前と一緒にならなければ、ベアトリスは平穏な生涯を他の男と共に過ごす事ができるであろう。王子よ、それは愛すればこその別れじゃ。決して、悲しいことではない」
「ああ、ベアトリス！　ベアトリス……」
エクリースは堪らず、すすり泣きだした。

「僕は何と言う運命を背負い込んでいるのだろう？　ここに転がっている山賊達ですら、僕の呪いのせいで死んだ」
「そうではないぞ、王子！」とアンジェラは叱り付けた。
「ここに横たわる冷たい骸（むくろ）は、今まで散々悪事の限りをつくして来た残忍な男どもなのじゃ！　同情はいらぬ。むしろ彼ら二人は、今まで殺してきた者達、犯してきた女や少年達、殴りつけた女子供達の怨念に殺されたといっていいのじゃ」
「でも、僕の痣のことは？　ここから何者かが出てきたではないですか」
「その痣は暗黒の印しなのじゃ。それは確かなのだが、それは持って生まれたもの。決して消す事はできぬ。けれども、誰でも、自分の暗黒という部分は持っているものなのだが、お前のようにはっきりと身体に刻印されていないだけじゃよ。他の者達は、暗黒部分は心の中に潜んでいるものじゃからな」
「誰でも、暗黒を持っている……？」
「その通りじゃ、王子。少し落ち着いたかえ？」
アンジェラの言葉は優しく変化した。エクリースは涙を飲み込んだ。
「分かりました。僕は……僕はベアトリスの幸福を願います。ですから、別れる事に致します。けれどもベアトリスは、僕の態度にきっと失望するでしょうし悲しむでしょうね」
その言葉には諦めがあった。
「かも知れぬ。けれども、出会いというものは別れの始まり。いつかは別れなければならぬ。それが早いだけと思えばよかろう。いや、

なかなかそうは思われぬだろうが、仕方の無いことなのじゃよ」

「けれども、ベアトリス以上に愛する女性が、この先現れるとは思えない。それはどうなっているのだ!?」とエクリースは叫んだ。

「もしもお前がまことの占い師なら……」

「それは言わぬが華、というものじゃ」とアンジェラはつれなく一蹴した。

「自分で探すが良かろうて。それはそうと……今頃そなたの“ベアトリス嬢”は、さる若者から優しく手を取られておるのが、このわたしには見えるぞえ」

「若者……?」とエクリースは呆然と呟いた。「誰なのだ」

「それは自分で見るがよい。さぁて、わたしはお前に大切なことを告げた。もう用は無い。これから何処かへ去るとしよう。そうじゃ！　お前の従者が地下室で苦悶しておる。その者を早く助ける必要があるのではないかな、王子よ。では」

アンジェラはそう述べると、サッと踵を返し、老婆とは思えぬ素早い歩みで去って行った。全てが、まるで幻想の中の出来事のようだった。

けれども、エクリースの目の前には、二つの骸が転がっており、それが幻ではなかったことを告げている。

「あ！　ビクター！」

エクリースはやっと我に返ると、慌てて地下室へと下りていった。そして恐怖と暗闇に襲われていたビクターの縄を外し、彼を階上へと連れ出したのだった。既に太陽は西に沈みかかっているところであり、血のような真っ赤な光が二つの骸を照らしだしたので、ビクターはその場にヘナヘナと崩れ折れた。

「こ、これは！　どうしてこんなことに」

「それは言うな」とエクリースは言った。

「はい。ですが……」

「そんなことより、早くここを出るのだ！」

と言いつつ、エクリースがビクターの腕を取ったその時、ギィィと鳴ってドアが開いたのだった。

7

7

晩餐に、サミュエルはベアトリスの手を恭しく取ると、席に導いた。綺麗に結い上げた髪に紫色のベルベットの服を着たベアトリスはやや俯き加減ながらも、その横顔は静かでたおやかだ。

「ご覧遊ばせ、あなた。ベアトリスはサミュエル様に対して、今日は幾らか機嫌を治した模様ですわ。昨日の硬い表情が嘘みたいで」

と奥方は、ドリアン伯爵に耳打ちした。

「けれども、幾分哀しそうだな」

「何を仰っているの！？　それはベアトリスの奥ゆかしさなのですわ」

「多分、エクリース王子の帰還が遅れているので心配なのだな。それにしても、王子はどうしたものか……？」

「そんなことより、わたし達、近く王宮に戻れるのですよね」

と奥方は釘を刺した。「そうでないと、今までの苦労も水の泡ですもの！」

両親がなにやらひそひそと囁いているのにも気付かず、ベアトリスは張り裂けそうな心を巧みに隠して、静かに料理を食べていた。目の前には、サミュエルが黙ったまま座り、時折サミュエルの視線を感じる。そしてその金色の巻き毛も……。

「明日、わたし、馬を駆ってエクリース様をお探ししようかしら」

とベアトリスが呟くと、

「僕もお供致します。若い娘が一人で行くのは狂気の沙汰」

とすかさずサミュエルが応じた。ベアトリスは茶色の瞳をチラッと上げた。

「そうですか。それはありがたいお申し出ですわ」

「喜んで！」とサミュエルは儀礼的に答えたが、それがあながち嘘ではないのを自分でも驚いていた。

「ねぇサミュエル様！　婚礼の式は、早ければ今年中でも宜しいのですよ！」

と斜め前から、奥方が明るく言いかけた。「早ければ早いほどいいのですもの」

「それは、ベアトリス様からのお許しがなければ」

「何と謙虚なお方でしょう！　娘と言うものは親の意見には逆らえないものですわ！　ね、あなた」と奥方が促すと、

「あ……まぁそうだな～」と伯爵が言い難そうに相槌を打った。

「娘を嫁に出すのは父親としては少し淋しいのだが、サミュエル・グールデュール殿のようなお方なら、安心と言うもの」

「ですわね、おっほほほほほ。ベアトリスは良い方に見初められたものですわ」

その時サミュエルは見た。ベアトリスの瞳から、ハラリと涙の一滴（ひとしずく）が皿に落ちたのを。

ベアトリスの気持ちはまだまだ自分には無い、とサミュエルは思った。けれども彼女の気持ちをこちらに向けさせるのも、又楽しみだという意欲がわくのはなぜだろう？　エクリースの元からベアトリスを浚い、自分の者にする……。

なぜか明証しがたい欲望が、サミュエルの胸にふつふつと湧きあがった。

「奥方様。明日、わたしはベアトリス嬢と森へ乗馬に行く予定ですが」

「まあ！　それは宜しいわね！　お二人で乗馬ですって！　素晴らしいことですわ」

奥方は手を打ち合わせた。奥方の計略は巧く行きそうだ。イデット王妃も喜ぶに違いない。サミュエルはなかなかの美形で、１７歳

と言う年齢ながら大人の男の色気が既にある。ベアトリスを虜にすることなど訳は無いに決まっている。

そう考えると、奥方は不安が消し飛び、楽しくなってきた。

「サミュエル様に乾杯致しますわ！」と奥方は声高に言うと、銀の杯を掲げた。ベアトリスはチラと奥方を恨めしそうに見つめ、それからサミュエルの方を向いた。サミュエルは上品に優雅に微笑んで会釈を返していた。

―この方が、わたしの未来の夫なの……？　確かに世間的には、申し分ない方かもしれない。でも、エクリースはどう思うのかしら？　それにしてもエクリースはなぜ戻らないの？　なぜ姿を見せないの！？

何かあったんだわ！　何かが……。

ベアトリスがハッと我に返ると、サミュエルの瞳がじっと自分に注がれ、そして彼は意味深に頷いた。

―サミュエル様は……何か知っている。そして何か企んでおられるのだわ！

☆　―　☆　―　☆

「おや！？　エクリース様とそのお供ではないか！　二人揃って何をしている！？」

扉が開くや、リカルドの声がその真っ赤な夕日に染まった部屋に響いた。こちらのエクリースとビクターは、愕然として壁際に退く。

「ぎゃっ！　リカルド様！　こ、この二人、俺の手下達が転がっておりまする！」

山賊のお頭の叫び声にも、リカルドはチラッと亡骸を一瞥しただ

けだった。それよりも、リカルドはスラリと長い剣を抜くと、それで空気を切り裂いた。

「やはりただ者ではないと見えるな、王子。こんな虫けらどもに、やすやすと捕まるはずが無いと、わたしは見ていたが、その通りだったとは！　だが、わたしからは逃げられないと心せよ！！」

エクリースとビクターは、そのリカルドの野太い声に顔を見交わすだけだった。

8

8

リカルドと山賊のお頭を見つめていたエクリースは、深い息をつくと自分の身体を前に押し出した。ただ身に纏っているといっただけのエクリースの服がみすぼらしいが、燐とした有様はリカルドを不安にさせる。殺せと命じられたものの、なぜか振り上げた腕が自然と下がっていく……。まるで重力に従っているかのように。

「お前は誰に命じられたのだ!?　わたしを殺せだと!」

「それは言えぬ」とだけリカルドは言った。「王子よ。確かにお前を殺すのは忍びない。けれどもこれもわたしの仕事なのだ。お前に恨みは無いが、命じられるままに施行しなければならないのだ。許せ!」

その時エクリースは微かに含み笑いをした。

「お前には人は殺せない」

「なにぃ!?」

「お前の目は澄んでいる。とても人殺しの目には見えぬ」

「わたしはこれでも百戦錬磨の兵士だ!　敵も何人も殺してきた。よってお前のような青二才を殺すのは訳は無いぞ!」

「そうかな……」とエクリースは言うと、一歩前に進んだ。するとリカルドは一歩退く。

「エクリース様!　どうか危ない事はやめて下さい!」

とビクターが震えながら取りすがったが、エクリースはドンと片腕でビクターを突いた。

「どくのだ、ビクター!」とエクリースは顔を動かさずに怒鳴った。ビクターは黙り込んでしまう。

「お前はわたしの時計を持っているだろう？　それを返すのだ。それは兄上から貰ったもの。お前のではないぞ」
　図星なので、リカルドは大いに焦った。するとポケットの中の時計の針が急に動き出したではないか！
「やっぱり」とエクリースは言った。
「わたしはこれ以上、自らの暗黒な部分を使いたくは無いのだ。お前を傷つけるのも嫌だ。誰かは知らぬが、お前に命じた者にも危害は加えたくない。
だからどうか考えてくれ。わたしは、自分の意志とは関係なく、人を殺めてしまうのだから。透き通った瞳のお前を危ない目には合わせたくないのだ」
「何を世迷いごとを言っておる！」とリカルドは叫んだ。けれども持っている剣はまるで石の様に重くなり、段々腕は下りていく。そしてそれを止める事は出来なかった。

　そしてもっと恐るべき事が起こった。リカルドのポケットの中の時計が勝手に飛び出し、床に転がったのだった。そして床に打ち付けた鈍い音がした。
「うわわわわ～！」とまずお頭が叫んだ。「リカルド様！　と、時計が勝手に……」
「なるほど。お前はリカルドという兵士なのか」
とエクリースは静かに言うと、転がってきた時計を素早く拾い上げた。その途端、動いていた針がピタリと止まる。
「ほら、これはわたしの物だ」とエクリースは言った。「さあ、リカルドと言う者よ！　去るがいい！　そしてお前に命じた者に向って、今の事の顛末を言うのだな！」
　リカルドの心臓は恐怖で激しく打ち、手は鉛のように重くなってビクとも動かない。
「王子！　お前は……魔法使いなのか？　それとも、デスティの化

身……？」
「わたしはデスティではない！」とエクリースはキッパリと言った。
「だが、自分でも制御できぬものを持っている。悲しいことに……」
「リ、リカルド様！　こいつは化け物ですぜ！　さっさとずらかりやしょう！！」
とお頭が悲鳴に近い声を上げた。リカルドはなおも得体の知れない力に抗っていたが、やがてそれにも限度が来た。
「分かった。今のところは去ることにしよう」
とリカルドが言ったとたん、今度はリカルドの剣が床に落ちた。暗闇が少しずつ辺りを包み、不気味さが増していく中、二人はジリジリと後退りをすると開け放たれた扉から弾かれたように飛び出していった。
　やがて馬のいななきが聞こえ、蹄の音が少しずつ遠ざかっていった。あとは漆黒の闇夜に、星がちらほらと瞬くだけの夜になっていた。

「彼らは去りました、エクリース様……」とビクターが呆然と言った。「わたし達もここから出ましょう。わたし達の馬二頭がまだあるはず。そして早くこの忌まわしい場所から去るのです！　そしてベアトリス様がお待ちの森へと急がねば」
「そうだな」とエクリースは破れた服を掻き抱きながらぼんやりと言った。そして横のビクターが自分のことを怖れているのを、暗闇の中でも察すると少し悲しくなる。
「一体どなたがこのような恐ろしい企みを命じたのでしょう！？王子を亡き者にしようとするとは、神をも恐れぬ輩ですね」
「わたしには分かっている」とエクリースは短く言った。
「え！？」
「その者は……近しい。残念だが」
　そう一言だけ言うと、エクリースはふらふらと外に出た。そして二頭の馬の方に近寄って行った。その手には、動きを止めた時計が

握り締められているのを、ビクターは微かな光によって気付いた。
それはまるで生き物のように、ビクターには見えた。

9

9

「サミュエル様は、礼儀正しいお方ですね。品があるし、血統も申し分ないし、おまけに美貌の持ち主。ま、その点だけはエクリース様には負けるかも知れませぬが」

とアンネットはベアトリスの寝支度をしながらそう言った。

「気を引くようなことは言わないでよ、アンネット！」

とベアトリスの言葉はいつになく厳しい。

アンネットは慌てて片手でお喋りな自分の口を塞ぐと、ベアトリスの髪を梳きだした。

「あ、済みません、ベアトリス様。エクリース様がまだお戻りで無いのにこんなことを言ってしまって。けれども、もうご両親は、ベアトリス様のお輿入れ先をお決め手になっている模様ですわねぇ」

「まだわたし１３歳だというのに……早過ぎるわ」

「いいえ。貴族のお嬢様方は、皆この年頃に婚約なさるのですわ。わたしに言わせて頂ければ、所詮エクリース様とはご縁が無いのでございますよ、ベアトリス様は」

「なぜなの？　どうして？　言ってよ、アンネット！」

「エクリース様は……ええっと、もしかして、将来王に成られるかも知れないお方だからです。幾ら今現在不遇の身をかこっているとは言え、いずれ近い内に王宮に召されることでしょう。なんと言っても、今では一番長兄であらせられるからですわ。そうとなると、お相手も限られてきますものね」

「わたしでは不足だというのね」とベアトリスは淋しげに答えた。

「いえ、そういうわけでは」

「そういうわけなのよ！」とベアトリスは言うと、堪えきれずに両

手を顔に当てて泣き出した。

「わたしは所詮、田舎貴族の娘だと言いたいんでしょ！」

ベアトリスは叫び、頭を激しく振ったので、せっかく梳いた髪が再びバラバラになる。

「そうではありません。けれど、わたしはベアトリス様がご不幸になるのを見るのは、嫌なのです！　耐えられませんわ！」

「どうしてわたしが不幸になると！？」

「エクリース様のお近くに居る方々は、今までことごとく不幸になられました。それがわたしには……怖いのでございます……お許し下さいませ、このような事を申し上げてしまって。けれどもわたしは、幸福なベアトリス様をずっと見てさし上げたい……」

「分かりました。あなたの願いはしごく当然だし、ありがたいと思います」

そう言うと、ベアトリスは唾を飲み込んだ。そして涙を拭くと、真っ直ぐに鏡を覗き込んだ。その鏡の中には、不幸をまだ知らない初々しい少女がこちらを見ている。

「結婚は、愛だけでは勤まりませんわ、ベアトリス様」

「もういいの」とベアトリスは静かに遮った。「明日の朝は、サミュエル様と共に遠乗りをするはずだったわね。早く寝なければ」

「分かりました。乗馬のお支度をしておきます」

けれどもその夜、ベアトリスはほとんど眠る事ができなかった。

☆　―　☆　―　☆

朝靄がいつもの朝より重く漂い、辺りがほとんど見えない翌朝、サミュエルは既に遠乗りの支度をして、馬場の近くで待っていた。馬の臭いやいななき、蹄の音が騒々しくする馬場での待ち合わせだが、今のサミュエルにとってはそれも楽しみの一つとなっていた。

ベアトリスがどのような格好で、どのように馬を操るのか、想像

するだけでなぜかうきうきしてくる。
その時軽い足音がして、靄の中からふいにベアトリスとアンネットが現れた。ベアトリスは、緋色のマントを着ており、その緋色が彼女の青白い顔を益々映えさせる。美しい……とサミュエルは感じた。

「遅れまして申し訳ございません」とベアトリスが挨拶をした。「靄がなかなか晴れなくて」
「ほんに、こんな朝にご乗馬とは狂気の沙汰ですわ」とアンネットが不平を言ったが、もとよりベアトリスが聞くはずが無いのを知っていた。
「いいえ、わたしが付いているのでご心配ご無用です」
とサミュエルは如才なく答えると、ベアトリスにさっと手を差し出した。
「ベアトリス嬢、さあ行きましょうか」
「ええ、ありがとうございます。わたしの我がままに付き合って下さって」
「いやいや、わたしも王子の行方が気がかりでしてね」
とサミュエルは心にも無いことをスラスラと言ってのけた。
「それではサミュエル様、宜しくお願い致します。けれども昼までには、お戻り下さいと伯爵様の仰せでございます」と礼をするアンネットに、
「分かりました。お任せあれ」と頼もしく答えるサミュエル。

ベアトリスが自分の馬に乗ろうとするのを、サミュエルが支えようとした時、カーテンのように重なる靄の中から、幽鬼のようにふいに現れた人物。ボロボロに破れた衣服に、額にかかる黒髪、そして大理石よりも青白い顔……。
「あっ！」と先に見つけたアンネットが叫んだ。その声にベアトリスはさっと振り向く。

「……エクリース？……あなたなのね！？」

エクリースは何も答えられなかった。チラッと端に写るサミュエルをしかと認識する前に、ベアトリスが両手を広げてエクリースに抱きついたからだった。ベアトリスの茶色の髪がマントからはみ出し、エクリースの裸の肩にハラリとかかった。

「エクリース！　待っていましたわ！　きっとお帰りになると……」

その柔らかい頬の感触を、エクリースは味わい、それからゆっくりとベアトリスの背中を抱いた。

「待たせて済まない……ベアトリス」

サミュエルは少し離れて、複雑なざわざわした心を必死になって抑えようと努力しつつ、目の前の、明らかなる恋人同士をじっと見つめていた。

10

10

酷い有様で戻って来たエクリースと続いて現れたビクターのせいで、ベアトリスとサミュエルの遠乗りは中止になった。その日と次の日は、エクリースは皆の前には姿を現さず、ただひたすら自室に篭っていたので、ベアトリスの苦悩はいや増すばかりだった。

サミュエルが話しかけようとしても、ベアトリスは全ての会話を拒み、エクリースに何があったかを知りたいと願っていたが、もとよりエクリースは自室から出て来なかった。

けれども心配したアンネットが、ダイニングに食事を取りに出たビクターにさっと擦り寄り、早口で囁いたのだった。

「ビクター、一体何があったの!?　昨日ふいに戻って来たあなた方の様子は酷く変だったわ。エクリース様の服は裂けていたし、あなたも何も言わずむっつりしたままで……」

「疲れているんだ」とだけビクターは答えた。そしてアンネットの方は見ようともせず、銀のお盆に盛ってあったパンと苺だけを黙々と取り分けている。

「疲れているのはわかるけど、でも……」

「疲れていると言っているだろ!」とビクターは癇癪を起こして叫んだ。

「わ、分かったわ。ごめんなさい、色々詮索して」

「そっとしておいてくれ。僕達を、今しばらく。けど……アンネット、怒鳴ったりして済まない」

「いえ、いいのよ。エクリース様には、ごゆっくりお休みするようにとベアトリス様が……」

「分かった。伝えておく」

そう短く答えると、ビクターは皿を捧げてそそくさと階段を登って行った。

呆然と佇むアンネットは、暫くして首を振りながら台所に戻って行った。その有様の一部始終を、サミュエルは物陰から眺めていた。

「何かあったな？　けれども、どうやら王子とあのお供は運が良かったらしい」

今晩の晩餐には多分出てこないだろうという大方の予想が外れ、晩餐が始まる少し前には、エクリースがビクターと共にダイニングに現れた。けれどもその様子は、ずっと以前“物言わぬ王子”と言われていた時のように、むすっとして表情は硬い。

ベアトリスはハッとしてエクリースを盗み見たが、エクリースの視線は虚ろにさ迷っていた。

「まあまあ、エクリース様ではないですか！　もうお身体は宜しいのですか？　少しは食欲も出て参りまして？」と奥方が、取り繕ったような甲高い声で言いかけた時、エクリースは一瞬だけ奥方の方を向いて儀礼的な言葉を発した。

「ありがとうございます。もう大丈夫です」

「まあ、そうですか！？　ならいいのですが……わたしどもも我が娘も、エクリース様のことを心配しておりましたのよ。おっほほほほほほ」

「もう心配はご無用です」とエクリースは、それと分かるほど素っ気無く言った。

ベアトリスは、いつもとは明らかに違うエクリースの有様に、胸が張り裂けそうだった。以前のような明るい笑顔と、キラキラした黒曜石のような眼差し、そのどれもが今のエクリースからは消え失せていた。まるで大切な物をどこかに置き忘れてしまったかのように、エクリースはただ一人孤独で、何も持っていない少年のようだったのだ。

明らかな狼狽と苦悩を顔に出しているベアトリスの様子を、サミュエルはチラッと伺っていたが、けれども何食わぬ顔で料理を食べていた。その指先はとても優雅で、肉を裂く手付きもパンを口に運ぶ手付きも、何もかも洗練されている。それだけは、エクリースも真似できないほどに。

「さぁて、ちょうど宜しいわ、無事にエクリース様もお戻りの事ですし、重大な発表をしなければなりませんわ。ね、あなた！」

と奥方は、油で汚れた手先を水の入ったボウルで洗いながら告げた。そして同時に、肘でドリアン伯爵を突く。

「あ・な・たっ！」

「ああ、そうだったな」と伯爵は、如何にも忘れていたかのように取り繕った。

「皆が揃った所で、告げなくてはならぬことがあるのだ。実はな……ええっと……」

伯爵は咳をした。

「ベアトリスは近い内に、ここにおられるイデット妃の義弟サミュエル・グールデュール殿と婚約する予定でな」

居合わせた人々は、実はうすうす知ってはいたのだが、一応驚いた顔をし、パチパチと膝や手を叩いた。

ベアトリスは、そっと斜め前のエクリースの顔を伺ったが、エクリースは大理石の彫像のように無表情だった。一方、サミュエルはにこやかに微笑み、静かに頷きながら目で挨拶をしていた。

「ありがとうございます！　このように事がなって、我が姉も喜んでいることでしょう。わたしも、この美しいベアトリス嬢と一緒になることが出来るとは、何と言う幸福なことか！」

「エクリース様、あなたのお考えは？」と奥方は、顔をエクリースの方に向けると、取って付けた様に促した。

エクリースはゆっくりと首を廻し、少しやつれた顔をこちらに向

けた。整い過ぎた顔は余りにも蒼く、そして余りにも無機的だった。
「それは素晴らしい事ですね。心よりお祝い致します」
ベアトリスはこのエクリースの言葉に、我が耳を疑った。まさかそのような言葉が出るとは、夢にも思わなかったからだ。幾らこのような場とは言え、少しは心の動揺を見せてもいいのではないのか!?　エクリースには自分の気持ちが分からないのだろうか……？
ベアトリスの鼻がツンとし、制御できない涙が溢れる。
「おめでとう、ベアトリス」とエクリースは短く言った。けれども脳裏には、占い女アンジェラの忌まわしい予言が渦を巻いていた。

―　これでいいのだ、これで……。

エクリースは再び心を閉ざした。

第八章　駒鳥の歌　1

1

イデットが秘密の間と呼ばれている、隠し扉のある狭い部屋に入ると、そこにはリカルドが跪いていた。イデットは一人だけにするように供に告げた。供が居なくなると、

「又しても、しくじったとな!?」とイデットは高飛車に言った。

「はい」と答えるリカルドの声が小さい。

「あの小童(こわっぱ)一人に、何をモタモタしておるのじゃ」

「いや……あの王子はなかなか侮れませぬ」と辛うじてリカルドはそう述べた。

「何です!?　お前も、エクリース王子の呪いとやらを信じているのか？」

「以前は信じておりませんでした。けれども、今は……」

「何っ、お前までもが、幾たびの戦火で勇猛果敢に戦ったそなたまでがそんなことを言うのか」

腹立たしげなイデットの声が、甲高く木霊する。

そこでリカルドは、今まであった経緯(いきさつ)を成るだけ感情を交えずに述べた。けれども、時々言葉が途切れがちになるのは、あの時の恐怖を思い出したからだ。

リカルドが全てを語り終えると、さすがのイデットも、暫くは腕組みしたままで言葉を発しなかった。

「なるほど……それは不思議な出来事であったの」

「思うに、あの王子はやはりデスティではないかと、わたしは思いましたが」

「デスティか！　お前達この国の者達は、デスティという馬鹿げた神話を今でも怖れているようじゃの！」
「然るに、イデット様……」
「もうよい、役立たず！」とイデットはヒステリックに怒鳴りつけた。「下がれ！」
　リカルドは上目遣いにチラとイデットを見上げると、黙ったまま隠し扉から下がった。
「ん～～～、全く役に立たない者達ばかり！　この国の者達は、みな弱虫と見える」
　イデットは腹立ち紛れに、絨毯を靴のヒールで蹴り上げた。

　それからイデットはやっと落ち着いたのか、懐から手紙を取り出し読み始めた。
『……あの日以来、エクリース王子は再び寡黙になり、ベアトリスと話もしなくなりました。そして道中何が起こったのか、誰にも話しません。
ベアトリスは言葉こそ出しませんが、わたしには彼女の悲しみが嫌と言うほど分かります。ベアトリスの心は未だわたしの方には向いておりません。けれども、諦めが徐々に彼女を支配しているようです。
　……わたしとベアトリスは、事あるごとに色々話をしております。ベアトリスは、わたしが考えていたよりもっと聡明で素晴らしい女性であることに、最近改めて認識した次第です。このままでは、本当にベアトリスに恋しそうな気すらするほどに……』

「ふん。サミュエルもあの小娘に幻惑されていると見える！」とイデットは苦々しく呟いた。「だが、ベアトリスという小娘も、なんとかエクリースから引き離すことが出来るだろう。再びエクリースは孤独になっている様子だし……」

『姉上、わたしはもう二、三日でこちらの屋敷をあとにして、王宮で婚礼の支度をしようと存じます。そして夏の終わり頃、ベアトリスの誕生日に再びこちらへと戻ってくることにしようと思いますが、如何でしょうか』

「勝手にするがよい！」

この捨て台詞と共に、イデットはサミュエルの手紙を暖炉に投げ入れた。

☆　―　☆

―　☆

サミュエルが去った後の北の森の屋敷は、急にシーンとなった。側に居ると気付かないが、サミュエルは辺りを明るくする術と雰囲気を有している若者だったのだ。

エクリースは居るか居ないか分からないほど、音もなく暮らしており、一緒に食卓を囲んでいても、誰もそれと気付かない。まるで、気配はするが実体の無い幽霊のような存在になっていた。エクリースの周りには、どことなく暗い影が落ち、彼自身を隠しているようなのだ。

ある日の夕刻、

「今年の夏は暑いですわね」と奥方がドリアン伯爵に向って言った。

「ベアトリスの婚約の支度をしなくてはならないのに……こう暑くては、やる気がおきませんわ」

「１４歳の誕生日の直ぐ後にとは、ちと早かったのでは？」

と伯爵は浮かない顔で答えた。

「１４歳はもう立派な大人です。それに……月のものもございましたし……。誕生日には、クリフもサミュエル様と共に来るそうですわよ！」

「実はな」と突然伯爵が身を乗り出した。
「何ですの？」
「王から手紙が来た」
「まあっ！　それって……？」
「来春、雪解けの頃、我々はここでの隠遁生活を終えて、王宮に戻れるそうだ」
「ええっ、何と素晴らしい！」
奥方は、座っていた椅子から、喜びの余り飛び上がった。
「エクリース王子も、ようやっと王宮に戻すそうじゃ。けれども王子は王宮の一番東の端にある別邸に住まわせるそうじゃな。王は共に暮らすのを良しとはせぬご様子。我が甥のジョーダンは助かったものの、片足が不自由になった。身から出た錆とは言え、かわいそうなことをしたものよの」
「王はきっと恐れておいでなのですわ」と奥方は言い継いだ。「あの、呪われた王子を！」

2

ビクターは毎日溜息ばかりだった。せっかく朗らかで英明な王子になりつつあると思っていたのに、例の不思議な事件のせいか、エクリースは元の寡黙極まりない王子に戻ってしまったからだ。

エクリースの身に本当に何が起こったのか、地下室に居たビクターは知らなかったし、又エクリースもアンジェラのことや、自分の痣から出た不気味でかつ恐ろしい黒い霧については黙っていた。例え自分達を弄ぼうとした憎い山賊ではあっても、得体の知れない恐怖にのた打ち回って死んだ二人の山賊達の姿が、常に脳裏から離れない。

そしてもっと恐ろしいこと……アンジェラから聞いたベアトリスの運命のこと……。その事を考えるたびに、身の毛がよだつのだった。それは決して誰にも言ってはいけないこと、例えビクターにも言えない事だったのだ。

自分はなるだけ早く、ベアトリスから離れなければならない。そしてベアトリスの心から、自分への愛を消さなければならない！思うのはそのことばかりだ。

そんな頃、父王から手紙が来た。秋には別邸が建つので、やっと王宮にエクリースを迎えることが出来るという旨の内容だった。エクリースはすぐさま、返事を書き、早くここから離れたいという嘘を書いた。

ここから一刻も早く去るべきなのだ……。ベアトリスの側から離れること。なぜなら、ベアトリスは決して自分の花嫁にはなれず、あまつさえベアトリスを不幸にしてしまうだろう！　腸（はらわた）が煮えくり返るが、けれどもベアトリスはあの高慢なサミュエルと一緒になる

のが一番なのだ。サミュエルは確かに自分より大人っぽく、南国特有の明るいブロンズ色の肌に、一見して端正な顔立ちと高貴な趣きを備えている。

そういつも自分自身に言い聞かせていると言うのに、ベアトリスの沈みきった横顔を眺める度に心がキリキリと痛む。ベアトリスの茶色の瞳は、エクリースをチラッと一瞥するたびに、悲しみに曇っていくのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

「久し振りの雨ね」と、雨脚が激しい庭を見つめながら、ベアトリスがアンネットに言った。

「今年の暑い夏には、この雨は恵みの雨ですわね」

とそつなくアンネットは答える。

「でも、わたし、雨は嫌い」とベアトリスは言った。「ところでアンネット、一体何を縫っているの？」

「まぁ！　これはベアトリス様のお誕生日の衣装ではありませぬか！　ほら……今年はばら色の布にしましたのよ。もう直ぐご婚約などもありますし、今年は思い切り華やかにしませんと！　何しろ、この夏でもう最後なのですわ、ここにこの陰気な森の中に住むのも。来年の夏は、王宮に帰っているのですから」

「嬉しそうね、アンネット。でもわたしはちっとも嬉しくない……」

「あらま！　ベアトリス様は、サミュエル様がお嫌いなのですか？」

「嫌いじゃないけど……でも」

「いいですか、ベアトリス様！」とアンネットは針を止めて、顔をキッとあげた。

「もうエクリース様のことは、お諦めなさいませ」

信頼する侍女のこの言葉に、ベアトリスは突然錐で胸を突かれたように感じて振り返った。

「どうか、お諦め下さいませ」ともう一度アンネットは厳しく言った。「わたしは姫様が幸福になられることが、一番の望みなのでございます。この薔薇色の服のように、幸せな花嫁となられ、幸福な一生を……」

「やめて！」

そう叫ぶとベアトリスは立ち上がって、扉に手をかけた。

「わたしちょっと外に……」

「では、わたしも」

「あなたはいいの！　わたしは祈祷所に行って祈ってきますから。付いて来ないで」

「あ……はい」

立ち上がりかけたアンネットは、静かに又座りなおした。

扉を開けて廊下に出たベアトリスは、突然しゃがみ込みそうになり壁際に背をもたせかけた。誰にも見せなかった涙がとめどなく流れ落ちる。

やがてベアトリスはハンカチで涙を拭くと、おぼつかない足取りで祈祷所に続く回廊に出た。激しい雨が中庭を叩き、その飛沫（しぶき）が回廊にまで跳ね返り、回廊は濡れていた。

その回廊の柱に身を持たせている影があった。その影が振り返り、一瞬だがその黒い瞳が真っ直ぐベアトリスを射抜いた。

「あ！　……エクリース……」

呼びかけられたエクリースは、けれどもさっと目を伏せ、向こうに去ろうとした。その黒髪が雨の飛沫で少し濡れ、キラキラと宝石のように輝いて見えるのはなぜだろう？

「エクリース、待って！」とベアトリスはエクリースの背中に叫んだ。去ろうとしたエクリースは、不思議な引力に引っ張られたかのように、歩みを止めた。まるで自分が石になったかのようだ。

「エクリース……」と呼びかける切ない声に、この時、逆らうこと

が出来るだろうか？

エクリースはゆっくりと振り返り、久し振りにベアトリスと向かい合った。ベアトリスは言葉もなく、エクリースの胸に飛び込んだ。

3

3

暗い祈祷所で、エクリースとベアトリスは並んで壁際の石造りの椅子に座っていた。

「昔……二人でここに座っていたことがあったね。あれはまだ僕が12歳になるかならずの頃だった……」と静かにエクリースは語り始めた。

「そして、いつか別の日に、君を必ず幸せにすると約束した。君は花のように笑って、それに答えてくれた。

けれども、今は！　今はもうそれは反故（ほご）にしなければならないんだ！　今降っている雨のように、地面に流れて消えていく定めなんだと……」

エクリースの声音は、外に降る土砂降りに負けず劣らず激しかった。

「エクリース！　どうしてそんな悲しいことを言うの？　そうだわ……心変わりをなさったのね。もうわたしを愛してはいらっしゃらないのね。だからずっと目を背け、わたしから去ろうとなさっている、、、何も言わずに。

でもそれはいや！　理由を言ってちょうだい。何を言われても、わたしは怒らないし恨むことも無いのだから」

「理由は言えない」とエクリースは素っ気無く答えた。「でもこれだけは確かだ。君の幸福を願ってのことなのだから。愛しているから、君から離れなければならないんだよ」

「以前、遠乗りの時に、わたしとずっと一緒に居るって、言って下さったのに！」

「あの時はあの時だ」

エクリースは真っ直ぐ、くすんだステンドグラスを見上げながらキッパリと言った。自分の意志がぐらつく前に、それをはっきりとベアトリスに告げておきたかったのだ。

「そう。人間の心は変わっていくのだわ」とベアトリスはつぶやく。「時が移り変わるように」

「分かって欲しいとは言わない。けれどもベアトリス、君はサミュエルと結婚した方が良いのだ！　いや、して欲しい！　遠くに居ても、君が幸福で居ることが僕にとって一番なのだから。

君との数々の思い出は、僕の支えになるだろう。そしてこれからの君の存在は、僕の希望に変わるはずだから」

「それは、言葉の綾に過ぎませんわ。わたしには欺瞞にしか聞こえません」とベアトリスは淋しげに言った。「あなたから見捨てられたのは、事実ですもの」

エクリースは未練を振り切るように、すっくと立ち上がった。遠くで雷鳴が轟く。

「ベアトリス、もうこれ以上言い訳はすまい。僕は父に手紙を書いた。君の誕生日の前に、僕はここを離れて王宮に戻るつもりだと」

ベアトリスはエクリースの瞳を見つめようと虚しくさ迷わせたが、エクリースの視線は別にあった。

「もうすぐ去らなければならない。そして以後、もうわたしとは会わないほうがいい」

「わけも仰らず、わたしから去って行かれるのね、エクリース！　もうこれっきりと言いたいの！　今までの数年間の思い出は、もう失せてしまうのね」

「いいや、ベアトリス、その思い出はずっと続いていく。自分の中ではね」

その声は、心なし淋しげだった。ベアトリスは初めてエクリースの本心を、幾ばくか垣間見た気がした。そう言えば、エクリースは自分をさらけ出すことは余りなかった。いつも、どこか何かをひた

隠している……そんなミステリアスな雰囲気を持っていたのだ。

「さようなら、ベアトリス。君が15歳になったら、もう僕のことは忘れ果てて欲しい。例えそれが出来なくとも、もう僕には二度と逢わない事だ。それが君の一番の幸せになるのだから。あ、それから」とエクリースはハッと振り返り、ベアトリスを見下ろした。

「あの歌は、歌わないでくれ。もう二度と」

「あの歌？」

「ああ、君が12歳の誕生日に歌った歌だよ」

「それって……『待ちくたびれた駒鳥』の歌かしら？」

「それだ！」

そう叫ぶと、エクリースはふいに襲ってきた震えに冷や汗をかいた。

「お願いだから、それだけは永遠に封印して欲しい」

「なぜなの、エクリース？」

「それは……自分でも分からない」

「そう。又秘密主義なのね。あなたは最後まで、わたしには何も仰らないのね。そして、何も告げず去ってしまわれるなんて……。でも、でも！　あなたを忘れることなんて、出来っこないじゃないの！　それなのに……」

エクリースは耐えられない情熱に一瞬だけ身をゆだね、ベアトリスに身をかがめると、その赤いふっくらした唇に口付けをした。サミュエルに、この最初のキスの味だけは奪われたくなかったという単純な嫉妬心もあったかもしれない。

ベアトリスは突然のキスに、びっくりし戸惑っていたが、けれどもベアトリスも情熱には勝てなかった。長い間、二人はじっと口付けをし続けていた。

けれどもやがて、二人はどちらともなく唇を離した。

「君にしてあげられるのは、これしかなかった。神の御前だと言う

のに……許してくれるね」

ベアトリスは、エクリースから初めて異性の持つ何かを、胸苦しくドキドキと波打つ何かを感じ取って、頬を染めて横を向いた。けれども、それを感じた時、それがエクリースとの最後の逢瀬なのだということも知っていた。

ベアトリスが何か言う暇もなく、エクリースは雨の回廊に走り出ると、濡れるのもかまわず中庭を横切って遠くへ行ってしまった。ベアトリスは、自分の初恋が終わった事に気付いた。けれどもエクリースの中では、ベアトリスへの初恋はまだ終わってはおらず、それは絶え間の無い責め苦となって、彼をいつまでも苦しめていたのだった。

4

4

「お母様」と突然入って来たベアトリスの言葉に、居間の弓形をした窓辺でうとうとと昼寝をしていた奥方は、ハッと目覚めた。
「あら、なに？　ベアトリス」
と奥方は涎を慌てて拭くと、居住まいを正した。まだ頭がはっきりとはしていないが、ベアトリスの様子がどこか変なのに気付いた。
「わたし……わたしは……」
「何なの、ベアトリス？　はっきり言ってちょうだい」
「サミュエル様のお申し出を、喜んで受けるつもりでおります」
「え！？　そ、それはまことか？　つまり、あぅ～、わたし達がお前を無理強いしているのではないと？」
「ええ、お母様。わたしも心積もりを決めました。少し早いけれど、あの方以上のお方は居ないって思って」
「まあ、ベアトリス！　嬉しいわ！」
今こそ奥方の頭は怜悧になり、両手を広げて愛する娘を受け入れたのだった。

「でも、お前……」
「何でしょう、お母様」
「あの……エクリース様のことは……もう……」
「元からわたし達、何もありませんもの！」とベアトリスは嘘をついた。「ただ兄と妹のように仲良く過ごしていて、情が移りはしておりました。けれども、あの方は王子。わたしのような者を相手になぞしてはおりませんわ」
「そう、そうかも知れませんね」と奥方は、少しだけ罪が咎めて言った。「それに最近は、あちらからお戻りになって以来、わたし達

とは口も利きませんしね。きっと王子としてのプライドがおありなのかしら……どこか傲慢にも見えますし」
「それにもう直ぐ、戻ってしまわれる」
と言うベアトリスの声には、奥方にでも分かる諦めがあった。
「これで良かったのです」
「そうね、ベアトリス。これで良いのです」
もう一度、母は娘を抱き締めた。チラッと心の奥底に、寂しさを覚えはしたものの、奥方はニッコリと微笑みかけた。
「サミュエル様の領地に行って、１５歳になったらもう二度とエクリース様とは会わないことです。それが一番良いのです、お前にとって」

―変ね。お母様もエクリースも同じことを言うのだわ……。わたしが１５歳になってからは、エクリースに会わない方がいいと。

ふと思ったものの、けれどもベアトリスはそれ以上は何も考えないようにした。そして、いそいそと帰り支度をしているエクリースを、ただ遠目に見ているだけだった。なぜならエクリースはあの雨の日以来、食事も別に取っていたからだ。
「これで良いのだわ」とベアトリスは一人呟いた。

☆　―　☆　―　☆

一方、王宮の奥深く、隠遁したハラレの元に、密使からある手紙が来ていた。
「やっと来たか。全く、セシルは今まで何をしておったのやら」
とブツブツ不平を言っていたが、直ぐにその老いたる瞳は爛々と瞬きだした。

『ハラレ様

今までの不躾な空白期間、お許し下さいませ。けれどわたしは決して自分の使命を忘れてはおりませんでした。今まで、他国から来た高貴な侍女という役柄に嵌るように努力していたせいもあります。何しろ、こちらでは皆わたしのことを直ぐには受け入れてくれませんでしたから。

けれども、今やっとわたしは使命を果たせそうにございます。

例のお方の件でございますが、わたしはラウール様の乳母をなさっていた方から、色々自慢話を聞かされておりました。そして遂にある日、その乳母から決定的なことを聞きだしたのでございます。

ラウール様とイデット様は、子供の頃に親が決めた許婚でございました。そしてお二人は、その約束に違わず良い仲になり、二人で行動することが多かったと言います。乳母はイデット様が、政略結婚の道具になったのを嘆いておりました。王との婚姻が決まった日、イデット様は狂ったように泣き喚いておられたとのことです。そして一言、「わたし達は既に、契りを結んでしまったというのに！」と乳母に報告したというのです。けれども乳母は、その事実は黙っているようにとイデット様を諭されたのですわ。

『それでは、今のあの国の王子サイラス様は、ひょっとしてラウール様のお子では？』とわたしが尋ねますと、乳母はわたしに耳打ちしたのでございます。

『多分、そうであろう』と。

わたしは大いに驚きました。全くハラレ様のお考え通りだったからでございます。けれども、残念なことに証拠がございません。ラウール様は度々イデット様へと今でも手紙を出されている由。ゆえに、イデット様は必ずやラウール様からのお手紙を大切に保存していらっしゃるはずです……』

「でかしたぞ、セシル！　ふん思った通りよの、あの女狐めが！　がしかし、セシルの言った通り、証拠がない。サイラス様は、イデット様似で生き写し。成長されなければ、どちらに似ているか皆目

分からない。不義の証拠を見つけるのは、こちらの方が大変じゃな」
ハラレは狡猾そうな皺だらけの目を細めた。
「さて、どうしようかのぅ……」

5

エクリースは王宮への帰り支度をしていた。ここで過ごした三年間の思い出が、一つ一つの物に宿っているのだ。古臭い三階建ての館、背後のうっそうとした北の森、少し離れた厩、天上の高いくすんだダイニングに、木目のあるダイニングテーブル、壊れた噴水付きの小さな池、そしてベアトリスとよく遊んだ前庭……それから回廊の端にあるひっそりとした佇まいの小礼拝堂……。

そして最後に決まって思い出す、ベアトリスと過ごした約１００日の日々。それらは、紛れも無い宝のようにエクリースには思われた。暗い森もそれは自由の象徴であったし、古びた館も、ベアトリスが笑えば天国の園のように感じたものだ。

陰気でだだっ広い居間も、ベアトリスが居れば、そこは薔薇色のパラダイスと化した。

けれどもそれも今は全て過ぎて行った、蜻蛉（かげろう）の命のような日々に過ぎない。エクリースはそっと銀色の時計を取り出した。今こそ分かる。時の残酷さを、何者も犯すことも止めることも出来ない、過ぎ去っていく時間を……。

エクリースは気を取り直すと、再び旅支度に没頭した。今回の帰郷は、この間の恐怖の体験を踏まえて、騎士ウーリッヒがかなりの数の兵士と共にエクリースを迎えに来るということだった。例え忌み嫌われていようとも、今のエクリースは王国の跡継ぎで、第一の王位継承者。王は仕方なく、ウーリッヒにエクリースを堅く守護するようにと命じたのだった。

かくしてウーリッヒは7人の兵士と共に、もののものしくドリアン邸にやって来たのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

明日はいよいよエクリースが王宮に向けて出立するという、その為の晩餐会が開かれたときのこと。席にはエクリースを真ん中に、放射線状にドリアン家の人々、ウーリッヒが座っていた。

実はその気が全くなかったのだが、ドリアン伯爵夫人は思い切り贅沢な料理の数々を並べて見せた。いよいよ憎い忌まわしいエクリースが去るというので、奥方はウキウキしていたのだ。

けれどもベアトリスは張り裂けそうな心を隠して、嫌々ながらその席に就いていたのだった。胸が一杯で、何も食べられない。そしてエクリースを正視する事すら出来ない。初恋が破れたと言って一度は諦めてみたものの、エクリースの姿を見ると再び三年間の思いがわき出てくるのだった。じっと見つめる皿が涙で滲んでくる……。

その姿を、ウーリッヒは何気ないふりをしてじっとベアトリスを凝視していた。けれども、エクリースは真っ直ぐ真正面を見たまま、粛々と食べているのだ。時々ドリアン夫妻からの言い掛けに答えながら、無難にこなしていた。

人生経験豊富で老獪なウーリッヒから見ても、エクリースがベアトリスに心を奪われているとはとても見えない。そしてエクリースも又、とても呪いに満ちた運命の少年には見えなかった。

「それではわたしはこれにて」と言いつつエクリースが立ち上がると、座っていた人々も又立ち上がった。

「それでは王子様、明日はお早いのですね」と奥方がニコニコしながら言うと、ドリアン伯爵はさすがにぐっと胸に迫るものがあったのか、珍しく感情を露わにした。

「王子、お気をつけて。いずれ来春、わたしどもも又王宮に戻りますゆえ」

「ああ、その時は又。伯爵殿……今までわたしをこちらに置いて下さり、ありがとうございます」
そう言うと、エクリースはチラッと頭を下げた。
「いやいや王子、そこまでして下さいますな。我々は王に命じられたことを果たしたまで」
「ではこれにて、皆様。そして……ベアトリス嬢」
言われたベアトリスはハッと顔を上げた。エクリースはその手をサッと取ると、恭しくマナーに乗っ取って口付けして離した。
「ベアトリス嬢、それでは。どうかいつまでもお元気で」
「わたしを忘れないで下さいませ、エクリース様」
するとエクリースは顔をベアトリスの方に向け、その漆黒の瞳でベアトリスをじっと見つめた。
「忘れるはずはありません、あなたのことは」
ベアトリスはその言葉を信じたいと思った。そしてその瞬間、エクリースの言葉が真実であると確信した。
「わたしも永遠に忘れませんわ、王子様」
エクリースはさっと目を逸らすと、あとは振り返らずすたすたとダイニングを後にした。その背後を、ビクターが灯りを掲げて付いて行く。その影が見えなくなるまで、ベアトリスはじっと見つめていた。そしてエクリースに口付けされた掌の温もりをじっと味わっていた。
―　さようなら、エクリース様。わたしも忘れませんわ。忘れられるはずがありません！

6

6

エクリースはビクターを下がらせると、自室のベッドに横になった。そして灯火を吹き消すと、何度も寝返りを打ちながらも、なかなか寝付けず暗闇をじっと見つめることしか出来なかった。今までの思いを打ち消したいと思ったが、それも出来ない。又、これから先の将来を考えようとも思ったが、それはもっと難しかった。

―何を考えるというのだ!?　先のことなど、誰も分からないじゃないか。もうあれこれ思い悩むのはやめよう。今まで、いつだって自分の思い通りになったことなどないのだから。

エクリースは深い吐息をつくと、ふと視線を窓越しの暗い闇夜にやった。すりガラスの向こうは、星も無い漆黒の闇だ。いや？　闇のはずだった。

けれども、誰かがそっと自分を覗いているような気配を感じて、エクリースはガバっと跳ね起きそうになった。全身に鳥肌が立ち、血の気が引いていくのが分かる。それなのに身体はビクとも動かない。

「誰だ！　誰か居るのか!?」と叫んだような気がしたが、その声は声にならず、喉元からヒューヒューと息だけが漏れていくだけだ。

―これは夢だ。あれこれ考えすぎて、夢を見ているらしい……。

「いや、夢では無いぞ、エクリース」

と響くその声は、この世の者とは思えない今まで聞いたことのない響きを有していた。窓が少し開き、そこから何かの影が揺らいでい

ると感じる前に、その影は既に人間の姿になっていた。
それは男だ！　若いのか年寄りなのかも分からない不思議な容貌で、窓から半分だけ姿を現している。まるで空中に浮かんでいるかのようで、余りの恐怖でエクリースは凍りついた。それはおそらく、山賊に襲われた時も、大蛇に遭遇したときにも感じたことの無い、底知れぬ恐怖だったのだ。
ただ一つだけ気付いたことがある。その男は、恐らくエクリースが見たことの無いほど怜悧な美しさを有していた。
「もしや……！？」
「そうかも知れぬ、エクリース。お前の脳裏に今浮かんだ言葉が、もしもそれならば」
と声が響いた。けれどもそれが外から来ているのか、自分の内から出てきているのかすら分からないのだ。
なぜなら、その美形の男の唇は全く動いていないのだから！

「デスティ……？」
「お前がそう感じたなら、それでよい。むしろ名前などどうでも良いのだ」
「デスティ！　やはり、存在していたのか！」
「存在と実存は違うがな」とその美しい男は言うと、少しだけ微笑んだ。というより、口角が少し上がっただけなのだが。
「それでは、僕はデスティではなかったということか……良かった！」
「そうだ、お前はただの“人間”に過ぎぬ。自惚れるでない、人間よ」
「けれども、僕の運命は呪われた残酷なものだと他人は言っているし、僕だって今までの運命は欺瞞に満ち、そして皮肉で悲しいものばかりだった」
「本当にそうなのかな？」と男は言った。「お前はただの人間なのに、そんな運命ばかりを背負っているはずが無い。なぜなら、お前

は人を愛しているし、又愛されもしている。憎しみばかりの世の中に住んでいるのではないぞ、エクリース」

「ああ、教えて欲しい、デスティよ」とエクリースは言った。

「あなたは、僕の守り神なのか？　それとも疫病神なのかを」

「それを決めるのも、お前だな」とデスティは述べた。「ある時は、わたしは恐ろしく、又ある時はわたしは甘味だ。お前だって知っているはず。その上、お前には何かを見通す能力が備わっている。ある時にはそれは厭わしく、又ある時には、それがお前を救うだろう」

美しい男は、エクリースが知っている姿を取った。金色の髪、そして蒼い純な瞳……。

「兄上！」

「そう見えるのなら、そうかも知れぬ。けれどもわたしはそのどれもでもない。ある時はデスティ、ある時はブライト、そして又ある時には、おまえ自身にもなり得る者。

けれども、わたしはわたしだ。お前でもなく、ブライトでもない存在。それが何か、それを捜し続けるが良い。これから何が起ころうと、何をしようと、わたしは存在し、けれども又存在しない」

最初に恐ろしいと感じた感覚は、次第に親しげで温かい何かへと変わっていくのが、エクリースにも分かった。

「お前がしたことは正しいのだ。ベアトリスを救う為に、お前がしたことは！」

最後に言ったのはこの言葉だった。

エクリースはハッと目を開けた。

「夢か……」

けれども一陣の風が吹き、窓が少し開いているのに気付く。

「現実だったのか？　いや……どっちでもいい」

と呟くと、エクリースは窓を閉めに立った。今しも夜空には月が出ており、懐かしい庭がぼんやりと白々と光っていた。

「僕のしたことが正しい……。それさえ分かれば、もうそれでいい」
エクリースの心の中に、今までに無い平安が訪れていた。

7

7

翌朝早く、エクリースとビクター、そして騎士ウーリッヒと7人の兵士達は、ドリアン伯爵夫妻の見送りを背に、いよいよ王宮に向けて出立することになった。

やはりベアトリスは、見送りには出て来なかった。それは予測していたことなので、エクリースもビクターもさほど驚かなかったが、どちらかというとビクターの方ががっかりしているように見受けられた。ビクターは辺りをキョロキョロ伺っているのだ。

「エクリース様。こちらに来られる時には大変だったご様子。今回は、我々兵(つわもの)が、エクリース様をお守りいたしますゆえ、どうか心置きなく旅をお楽しみなさいませ」

とウーリッヒが恭しく言うのを、エクリースは黙って聞いていた。

今朝のエクリースは、事のほか物憂い優雅な雰囲気を漂わせていたが、それは昨晩見た夢か幻か分からない不思議な出来事のせいだったかも知れない。けれどもエクリースは、そのことについては誰にも一言も漏らしていなかった。

少なくともウーリッヒには、エクリースがこの地とベアトリスから去るのが悲しいせいではないか、と思われた。

ウーリッヒは思い出していた。三年前、ここにエクリースを連れて来た時のことを。あの時のエクリースは、兄をうしなった悲しみゆえか、一言も喋らない自閉的な少年だったのだが、今は少し趣が違う。洗練され、知的で優美で、王子という地位の品格に相応しい少年へと成長していた。

「それでは！　出〜発〜！」と号令をかけつつ、全員が馬に乗り込

んだと見るや、玄関口からアンネットが息せき切って、駆け寄って来た。
「エクリース様ぁ！」
エクリースより前に、ビクターが振り返る。アンネットは駆け寄ると、ビクターの方に手を差し出した。二人の視線が空中で交差するのを、エクリースはじっと見つめていた。
「こ、これを、ベアトリス様がエクリース様に渡して欲しいと」
と、手にした白い花をビクターが受け取った。
「分かりました。お渡し致します」
「ビクター……様……」とアンネットはやっとのことで言った。「これでお別れですね」
「その内に、又お会いできますよ」とビクターはわざと明るく言った。そしてさっと背を向け、エクリースにその可憐な花を手渡した。
「これを、ベアトリス嬢よりと……」
エクリースは無言のまま、その花を受け取るとさっと自分の懐に入れた。そして目だけで、アンネットに謝意を伝えた。アンネットはその声なき声を受け止めると、微かに頷いた。
一行は南の方向へと馬を向けると、あっと言う間に走り去って行った。
「とうとう、行ってしまわれた……」とアンネットは呟いた。その背に、二階の自室に立ち尽くすベアトリスの視線を感じながら。

☆　―　☆　―　☆

エクリース一行が峠を越えている時、向こう側から登って来たものものしい別の一行が見えて来た。その旗の色によって、こちら側は向こうが直ぐに分かった。
「どうやら、サミュエル・グールデュール様のご一行かと存じます」とエクリースの馬のよこに並走しながら、ウーリッヒが耳打ちした。
「多分ベアトリス様の誕生日のお祝いと、ご婚約を兼ねていらした

のでしょう」
「そうか」とだけエクリースは、表情も変えずに言った。ビクターはそんな様子のエクリースを、心配そうにチラッと見つめたが、直ぐに先頭を切って下って行った。

向こうからの一行は、やはりサミュエルだった。人数もほぼこちらと同数ぐらいで、真ん中にサミュエルを囲むようにしてやって来る。傍から見れば、どちらが王子なのか分かり難い。
けれどもサミュエルは、エクリースとすれ違う時には、深く頭を下げて挨拶した。やはり、悔しいがエクリースの方が位はずっと上なのだ。
「エクリース様、今から王宮へお戻りですか？　なかなか良い別邸を、父であられる王様はあなた様の為に建てられたよし。これからは、いよいよ王宮でお住まいになられるのですね」と柔らかい遜った口調で言うサミュエルに対し、エクリースはやや尊大な視線を投げかけた。
「そちらこそ、いよいよお祝い事ですか。ベアトリス嬢がお待ちしているはず」
「それはそれは、エクリース様、ありがたいお言葉でございます」とサミュエルは年上らしく如才ない言い方だ。
けれどもサミュエルは、すーっとエクリースの横に馬ごと身体を寄せて囁いた。
「お気をつけ下さい。例のジョーダンが、あなた様を恨み狙っているという良からぬ噂がございます」
この言葉は、エクリース以外には誰も耳にしなかった。エクリースはギョッとしてサミュエルを凝視したものの、それ以上の身振りは取らなかったからだ。

サミュエルは優雅に別れの礼をすると、後も見ずにギャロップで峠を越えて行き、彼を追う様に慌てて部下や兵士達が後を追って駆

けて行ったのだった。
エクリースは暫くサミュエルの後姿を目で追っていたが、やがてビクターとウーリッヒに凛として告げた。
「それでは、急ごうか」
やがて、二つの若者の一行は、北と南に分かれて離れて行った。

8

8

サミュエル達一行は、その日の午後遅くにドリアン伯爵邸に着いた。真っ先に出て来たのは奥方で、彼女は両手を差し出しながら、未来の花婿を迎えたのだった。その後ろを、控えめにベアトリスが立っているのを、サミュエルは認めて微笑んだ。

淡いピンクの衣装のベアトリスは微笑みこそしないまでも、どこか諦観をたたえながら静かにサミュエルに歩み寄り、

「ようこそ」と言いつつ、優雅にお辞儀をしたのだった。

「お元気でしたか、ベアトリス嬢」

「はい。サミュエル様もご息災であられますようで」

「まあ、そこそこ元気ですよ。ましてあなたのその姿を見れば、更に力がわき、疲れも吹っ飛びました」

「まあ、ご冗談を」とベアトリスはレディらしく上品に言い返す。その一見穏やかな有様は、すっかりエクリースを諦めきった姿だったが、アンネットは騙されなかった。

奥方はこの若い二人のやり取りを、微笑みながら嬉しげに見つめていた。

「さあさあ、サミュエル様。どうぞ中へ。夫が居間でお待ちしておりますわ。じきに晩餐を始めましょう。さぞやお疲れのことでしょうね、美味しいお料理を用意致しておりますわ」

奥方は本当に心から喜んで、サミュエルを迎え入れたのだった。

☆　―　☆　―　☆

サミュエルはここに来る前にイデットに呼ばれ、不可解な難問を

突きつけられたのだった。それは“ベアトリスが歌いたくない歌を所望せよ”と言うものだった。イデットはずっと昔、乗馬教師でありかつスパイでもあるプラットが書いていたことを、決して忘れてはいなかった。（注：第五章の1参照のこと）

それは、エクリースによって禁じられている歌だということだった。以後、ベアトリスは決してその歌は歌わないのだという。その意味するところは不明で、又その題名すら分からないが、イデットはその歌が何らかの不吉な意味を持っていることを感じていた。

それを探りたくもあり、又秘かにエクリースやベアトリスの不幸を願っていたイデットは、何も知らないサミュエルを利用することにしたのだ。卑しい身分の出の母を持っていたサミュエルは、今ではイデットの操り人形に過ぎない。ただし、イデットはさすがにサミュエルの心境の変化には気付いてはいなかったが。

それは“愛”という気持ちであり、以前には持つはずもなかった“愛情”を、サミュエルはベアトリスに感じているという事実だった。

今又ベアトリスに再会したサミュエルは、数ヶ月の間にも大人になっていくベアトリスの色香に、くらくらとしていた。そしてただそれだけではなく、ベアトリスを守りたいという気持ちも感じて、我ながらたじろいでいたのだ。

今のサミュエルは、なぜエクリースがベアトリスに心許したのかをやっと理解することが出来た。ベアトリスの持つ、可愛げな容姿だけではない利発さ、賢さ、思いやり深さと激しい情熱……それらを、サミュエルは感じ取ることが出来るのだ。そして、それを愛しいとまで思い始めていた。

氷のようだったエクリースの心まで溶かし、そして辺りを明るくする何かをベアトリスは持っていた。まことベアトリスは、自分に相応しい相手なのだとサミュエルは確信していた。

田舎料理のご馳走の後、サミュエルは例のバルコニーにベアトリスを誘った。既に外は暗いが、月明かりに満ちた夜の大気は澄んでいる。その中に、ショールを肩に掛けたベアトリスは、長い茶色の髪を垂らして、夜風に晒すままにしていた。

以前に比べ、ベアトリスの様子は穏やかに感じられる。それは、諦観なのだろうか？

「ベアトリス嬢、わたしと婚約して下さる事を感謝申し上げます。よくぞ決心して下さった」

「あなたは良い方ですもの」とベアトリスは俯きながら答えた。

「今はただそれだけですか？」

「……」

ベアトリスは躊躇いつつ、何かもごもごと言っただけだった。

「わたしは……あなたを愛しいと思っているのです。それは心から感じている気持ちです。以前には無かった、不思議なざわざわする気持ちを」

「ありがとうございます」とベアトリスは答えた。「でも、今晩はこの辺で。誕生日の支度もありますし」

「ああ、済みません。あなたをこんなら遅くお引止めして。けれども」

とサミュエルは何かを思い出して言った。

「何でしょう？」

「あ……それは……」

サミュエルは、しばし躊躇った。けれども、イデットの催眠のような命令には負けてしまうのだ。

「つまり、あの……以前、エクリース王子から禁じられた歌を、一度聞きたいと思いまして」

「え！？」とベアトリスは立ち尽くした。「『待ちくたびれた駒鳥』の歌ですか？」

「ああ、それのようです。いや、それです！」とサミュエルは叫んだ。

「わたしは、それが聞きたい。お嫌ですか？　エクリース王子は既にここには居ません。わたしの為に、それを是非！　ステキな歌だと聞いておりますゆえ」

ベアトリスは、じっと立ち尽くしていた。ベアトリスの前には、暗い闇夜が広がっていた。けれども、ベアトリスは暫くしてゆっくりと答えたのだった。

「分かりました。あなたの為に、歌いますわ」

その時、エクリースは森の野営地で眠ろうとしているところだったが、突然襲ってきた激痛に身体を捩りながら、悲鳴をあげて地面を転がりだしたのだった。

9

9

今まで出したことのない甲高い悲鳴を上げつつ、地面を転がり回るエクリースをビクターは決死の思いで抱き止めようとした。けれども、全身を激痛に苛まれているエクリースは、ビクターを振りほどくと胸を掻き毟りながら絶叫しているばかり。

余りの苦悶の有様に、ビクターは恐れおののいて手を離した。休んでいたウーリッヒもビクターに近寄り、呆然とエクリースを見下ろしている。

「こ、これは！？」

「ウーリッヒ殿！　何とかできないでしょうか」

「ビクター、この有様は一体何だ？　物の怪でも憑いたのか？　それとも……」

「分かりません。ただ、かようにお苦しみのご様子は、初めて見ました。もうどうして良いか、分からないのです」

ビクターは絞り出すように言った。

「何が起こったのであろうの？」

とウーリッヒも言ったが、あとの兵士達はただおどおどと狼狽して、何も出来ないでいた。

「ベアトリス……ベア……トリス……」

切れ切れに聞こえて来るのは、その言葉だけだったが、ビクターには思い当たる節があった。

「やはり、ベアトリス様とは、普通の仲ではなかったのかも……」

「馬鹿を申すでない！」とウーリッヒは叱責した。「ベアトリス様と良い仲であったなどと、絶対に言ってはならぬ！」

「あ、はい」とビクターは慌てて答えた。「でもこのお苦しみよう

は尋常ではありませぬ」

その時背後で、奇妙な音がした。それは獣か鳥の鳴き声にも聞こえ、又絶叫のようにも聞こえる。その音が消えた瞬間、エクリースはバタバタ動かしていた手足をピタリと止め、ガタッと身体を弛緩させるとそれから動かなくなった。

「エクリース様っ！」と叫びつつ、ビクターが近寄るとエクリースは憑き物が取れたような不思議な目付きでビクターを見つめたのだった。

「大丈夫でございますか、エクリース様！」

「ああ……ビクターか……。わたしは大丈夫だ」

けれどもそう答える言葉には、力が無かった。ビクターはウーリッヒと二人でエクリースを運び上げると、冷たい地面にゆっくりと横たわらせた。エクリースは深い息をつきながら、呆然として何も言わない。けれどもその顔には、幾らか血の気が通い始め、かなり落ち着いてきたのが見て取れた。

「ああ良かった！　もうわたしは仰天してしまって、どうしていいか分からず……心配致しましたよ」とビクターはほっとして言いかけた。

「済まない、ビクター」とエクリースは答えた。

「エクリース様、何が起こったのでございますか？」

と一人冷静なウーリッヒが、静かに聞いたが、ビクターはその手を払い除けた。

「今しばらく、エクリース様をお静かにさせてあげては如何でしょうか」

「いや、よい」とエクリースは力なく言った。「全身が突然の激痛に襲われたのだ。なぜだか分からないが……ベアトリスの姿が脳裏にチラッと浮かびはしたが」

そこまで言うと、エクリースはふいに黙り込む。

「ベアトリス様なら大丈夫ですよ。今頃は、サミュエル様があちらにお着きのことでしょうし。何も心配することはありません」
「なら、よいが」とエクリースは消えかかった言葉を発した。「そうだな……その通りだ」
「嫉妬のゆえなのかな、ビクター？」
とウーリッヒがさり気なくビクターに囁くと、ビクターかキッと目を釣り上げた。
「何を仰います！？　そのようなお心を抱く方ではございません！　きっと、別の何かがあったのでしょう」
「いや、なに」とウーリッヒは慌てて打ち消した。「ならいいのだ」
「ですが」と突然兵士の内の一人が、やっと人心地がして口を差し挟んだ。
「何だ？」
「ウーリッヒ様。……実は」
「何だ！　早く申せ」
「なぜ駒鳥の声がしたのでしょう？」
「駒鳥？」とビクターはエクリースに分からないような小声で尋ねた。
「わたしの村では、よく駒鳥が鳴いていました。けれども、鷹や鷲に狙われて絶命するときに、駒鳥はああいう音で鳴くのであります」と兵士は几帳面に答える。
「なにぃ！？」
ビクターは目を剥くと、横になっているエクリースを見下ろした。今エクリースは普段の状態に戻って、うとうとしているところだ。ビクターは不吉な予感に震えながら呟いた。
「それは！　もしや……」

10

10

その後は何事もなく、エクリース一行は王宮に着いた。ビクターもウーリッヒもやれやれと胸を撫で下ろしていたが、エクリースだけは得体の知れぬ不安に苛まれ、悶々としていた。

けれども、煌びやかな王宮では、全ての憂いが、王宮の持つ華やかで輝かしいものに覆われて見えなくなってしまう。

王とイデット妃の二人は広間で待ち構えており、やっと来たエクリースを迎えた。イデットは、エクリースの悪運の強さに驚愕していたが、けれどもそれを巧みに隠しており、王は王で、厄介者が来たと思ったもののそういう素振りはおくびにも出さなかった。二人とも、とってつけたようなにこやかさを保ちつつ、両手を広げてエクリースを迎え入れた。もっともそれは、その広間に居る大勢の臣下達の手前もあるのだったが。

けれども一人だけ純粋にエクリースを迎えた者が居た。それは異母兄弟のサイラスだった。この第3王子は無邪気にエクリースの足に抱きつき、頑なエクリースの心をも幾分和ませてくれる愛すべき男の子だった。

エクリースは思わず少し微笑むと、この華奢な義理の弟を抱き上げた。サイラスはニッコリと笑いかけ、その有様を見ていたイデットの気分を害した。イデットは我が子がエクリースと仲良くなることを、本能的に拒んだのだ。見たくない、と思ったがそれも出来ず、お愛想笑いを浮かべることしか出来ない。

その後の歓迎の晩餐会では、エクリースは何事も無かったかのように振舞った。居並ぶ人々は皆エクリースの一挙手一投足に注目していたが、そのマナーといい優雅な振る舞いと言い、欠点のつけよ

うが無かった。
「あの“呪いの暗黒の王子”が、かくも立派な少年になられたとは！　あんな鄙に居たと言うのに、驚きですわね」
「むしろその田舎が、王子様を純朴に育て上げたのかも知れませんことよ」
「王子様を育てたドリアン伯爵には、さぞや広大な領地が与えられることでしょう」
と、貴婦人達は口さがなく噂し合った。

夜遅くお開きになり、やっと解放されたエクリースは王宮の西の端に建設された別邸に案内された。そこは別邸と言うよりも、まるで塔に近く、王宮とは細い回廊で繋がっているだけで、一緒に案内されたビクターには、まるで瀟洒な牢獄のように感じられた。
この建物を見るだけで、王が本心ではエクリースに心を開いていないのは明らかだった。窓は小さく、入口は一つだけ。もしも王がエクリースをここに監禁しようとすれば、いとも容易いことなのだ。
けれども、エクリースの部屋は、確かに豪華に作られていた。ペルシャからの奪略品だと思われる見事な絨毯、花鳥風月が織り込まれた見事なタペストリーの側には、天蓋付きの豪勢なベッドに、繻子の掛け布団……。その他全てが美麗にしつらわれ、さすが王子の部屋だと思わせられる。
けれども、勘の鋭いビクターには、そのどれもがどこか胡散臭く感じられるのだ。

「今日一日は、色々ありましたゆえ、ゆっくりお休み下さい。わたしは隣室に待機しておりますゆえ、何かありましたら直ぐにもお申し付け下さい」
「何かあると？」とエクリースは皮肉っぽく問うと、そばのソファに腰を下ろした。
「いや……ただそう言っただけで。父王様ご夫婦のこの度の歓迎振

りでは、何も起るはずも無いでしょうが……念のために」
「お前は、昨日のあの事を言っているのか？　僕が無様にのた打ち回った、あの事を」
「いや、それは」とビクターは頭(かぶり)を振った。
「けれどもわたしは心配なのです」
「お前は心配性だな。だが、ありがたいと思う。けれども心配するな。お前こそゆっくり休め」
「はい、それでは」
忠実な部下ビクターは、一礼すると下がった。

深い吐息をつきつつ、エクリースは初めて疲れを覚えてソファにぐったり横たわった。
あっという間に、三年の月日が過ぎ去った。そして、将来を約束していたはずの、初めて愛した女性との恐らく永遠の別れを、再び思い返していた。
「結ばれるはずもなかった……」とエクリースは一人呟く。「けれども、ベアトリスを愛していたことは確かだ。いや！　今も愛している！　それも、今は空しい……」
エクリースは、胸の胴衣のポケットをまさぐると、今はもうクシャクシャになった、ベアトリスからの白い花を取り出した。
「これを捨てよ、というのか！　出来ない、僕には出来ない。けれど、彼女の幸せのためだ」
エクリースはその花を暖炉にくべようとした。が、一瞬躊躇するとその花を近くにあった分厚い本に挟み込んだ。
「ギリシャ悲劇か……。けれども、燃やしてしまうのだけは出来ない。ベアトリス……どうか、幸せになってくれ」
エクリースが本をパタンと閉じると、闇夜で何かが不吉に鳴いた。

11

11

アンネットは、ベアトリスの１４歳の誕生パーティの日だというのに、当のベアトリスが浮かない顔でいるのが気になっていた。アンネットはこの日の為に、特別念入りに衣装を縫っていたのだった。その衣装は、薔薇の花の刺繍のあるベージュの布に白い糸でペイズリーの文様があるという凝ったものだったのだ。

それを、アンネットはベアトリスを一番美しく見せるように巧みに縫い上げていた。遠くの国から買っていたという白いレースがあちこちに縫い付けられ、こんな田舎に居るとは思えない姫君に見せること請け合い……いや、仮に王宮の舞踏会に招かれたとしても、そん色ない出来栄えだった。

アンネットはその服をうっとりとして眺めていたものだったが、いざそれを着る段になっても、ベアトリスの表情は冴えないのだ。アンネットは知っていた。ベアトリスが真から喜んでいないのは明らかだと。

「ねぇアンネット。わたし、気が進まないのだけど」

と言いかけるベアトリスに、アンネットはそれ来た、と身を寄せた。

「何でございますの？」

「わたし……」

「エクリース様のことでございますね」

「いいえ、そうではないの」とベアトリスはピシャリと言った。

「え！？」と当てが外れたアンネットは、小首を傾げる。

「実はね、アンネット。わたし、サミュエル様から、歌を所望されたのだけど」

「それは良いことではありませぬか！　是非歌って差し上げれば？

何しろベアトリス様のお声は澄んで綺麗な声ですもの」
「でも」とベアトリスはしばし言いよどんだ。
「その歌は……エクリース様がお嫌いな歌なの。いえ！　絶対に歌うなって……言われて」
「ほら、やっぱりエクリース様のことですね」
とアンネットは皮肉っぽく答える。「姫様は、いつまでもエクリース様のことがお忘れになられないのですよ。でもいちいちお歌のこまで指図なさる権利は、今のエクリース様にはございませんわ。既にベアトリス様から、遠く離れられたお方ですよ」
「そうよね」とベアトリスは物思いに沈みながらそう自分に言い聞かせるように呟いた。

「むしろ、サミュエル様を喜ばせることが一番ではありませぬか、ベアトリス様？」
「そうね、あなたの言う通りかも知れないわね」
と、やっとベアトリスは微かに微笑んだ。
「じゃ、わたし歌うわ。『待ちくたびれた駒鳥』よ」
「ああ……それですか……」
急にアンネットの胸が、ギュッと締め付けられたのはなぜだろう？
「アンネット、あなたもその歌、嫌い？」
「い、いいえ、滅相もございません。けれど……」
「けれど？」
「いえ、良い歌ですわよ」

――でも、歌詞が不吉だわ……。

「その歌は、確か以前エクリース様が、舞踏会で『やめろ』と叫んだお歌では？」
「そうなの。それがわたしにはどこかひっかかる」
とベアトリスは正直に言った。「歌っちゃいけないような気がする

のよ。例え、将来の花婿となられるお方が所望されたとしても……でもそれって杞憂かしら？　それとも、わたしの我がまま？」

「さぁあ？」とアンネットは曖昧に答えた。けれども同時に、ベアトリスに自分の縫った衣装を着せている内に、そんなことはどうでも良くなっていた。アンネットは自分の気持ちよりも、その衣装に夢中になっていたのだ。

「まあ！　ベアトリス様にピッタリでございますこと！」

「そうね」とベアトリスも服の方に気をとられてしまっていた。「綺麗だわ」

「そうですとも！　ベアトリス様は、本当にお綺麗ですわよ！」

「違うの、この衣装が綺麗だって言ってるのよ」とベアトリスは嬉しそうに微笑む。

「それじゃ、お髪を結い上げましょうね」

そう言うと、アンネットは今度はベアトリスの髪を梳り出した。

「きっとステキな晩になりますわね、今宵は」

「そうね」

「サミュエル様は、最初気位が高く少し嫌味っぽくて、わたし好きではありませんでしたが、最近のサミュエル様を拝見致していますと、まことにベアトリス様を愛しておられるようですわ。わたしの目に狂いはございませんわよ」

「まぁっ」とベアトリスは恥ずかしそうに微笑んだ。

―　あなた様のお幸せのためなら、わたしはなんだってやりますわ、ベアトリス様。

麗しいこの姫を抱き締めたいと思いながらも、一方ではアンネットはふとビクターの面影を追っていた。

12

12

華やかに、そして雅（みやび）に、ベアトリスの１４歳の誕生パーティが始まった。彼女の側には、サミュエルが居る。薄黄緑のやや地味なチュニックが、サミュエルの金髪に映えてよく似合っていた。

１４歳と言えば、この時代では、まさに女子の成人式のようなもの。以後は、もう立派な大人の女性として扱われるのだ。

少し離れて、ドリアン伯爵夫人が、誇らしげにそして安堵しながら、娘を見つめていた。その眼差しはいつもと違って柔和で、まさに母の眼差し。そして、いつもはきつい面立ちが和らぎ、奥方はまだ齢（よわい）３０歳に過ぎない、案外美しい女なのだと思わせられる。

「わたし、ほっと致しました」と珍しくしんみりと奥方は言った。

「あの、不吉な王子が居なくなり、ベアトリスを立派な若者に嫁がせることが出来るのですもの」

「お前は、なぜかあのエクリース様を嫌っておったな。いや、訳は聞かぬ。それが母心と言うものだろうからな」

「かも知れません」と奥方は、じっとベアトリスの横顔を見つめながら答えた。

☆　―　☆　―　☆

宴会もたけなわになり、ベアトリスとサミュエルの踊りも始まった。二人は誰が見ても、理想的なカップルに見えた。ベアトリスも最初の浮かない表情は消え、このひと時を楽しんでいるように傍からはそう見える。

事実、ベアトリスはサミュエルに対して、以前に無かった気持ち

を少し持ち始めていた。サミュエルに見つめられると、頬がポッと火照り、胸がざわめく。それをいけないことと恥ながらも、けれども乙女心は偽れない。

踊りが終わると、ドリアン伯爵が奥方に促されて立ち上がった。そして両手をあげて、皆の喧騒を鎮めた。

「皆さん、今宵我が娘ベアトリス・ドリアンの14歳の誕生日の宴に、遠路遙々よくぞ来て下さった！　我が娘は、ようやく一人前の娘になり申した。今まで見守って下さった神と、周囲の方々に、感謝に堪えない面持ちでござる！

さて、皆様方！　祝い事はこれだけではなく、もう一つあるのです！　実は……ベアトリスは、ここにおられる、イデット妃の義弟サミュエル・グールデュール殿と、婚約あい整いまして……」

そこまで語ると、人々から祝福と驚きの拍手が起こり、伯爵はつまってしまった。

「ありがとう、皆さん！」と、伯爵は感激して礼を返した。「わたしも妻も、まことに嬉しい限りでござる！　そして娘もまた、同じ思いであろう」

「さ、ベアトリス！　お辞儀と御礼を！」と奥方がベアトリスの肩を叩いて急かした。ベアトリスはやっとの思いで立ち上がると、何か言おうとした。けれどもその直前、サミュエルが、絶妙のタイミングでベアトリスの手を取ると、その掌に口付けしたのだった。

並み居る客人は、サミュエルのその優雅な振る舞いに、わっと賞賛の声をあげた。

「なんて、ステキなお方なのでしょう！　お若いのに、レディの扱いをご存知とは！　ベアトリス様も、良いお方と婚約なされたものですわね」

と、ある貴婦人が扇の陰で、隣の婦人にそっとささやいた。

ベアトリスは、落ち着いた様子で皆の拍手を受けた。

「皆様、ありがとうございます」とベアトリスは、言う。「いずれこの方の妻となる私は、幸せでございます」

その言葉は、半分は嘘だったが、残り半分はあながち偽りでもなかった。人々は嬉しそうに、ベアトリスを迎える。奥方は感涙にむせんでいた。

その後も賑やかな宴は更に華やかに、続いていった。が、やがてお開きになる直前、

「ベアトリス、例の歌を！」とサミュエルが促した。その時、冷ややかな何かをベアトリスは感じたが、サミュエルの魅力的な微笑みに抗うことはできっこない。

ベアトリスは、広間の真ん中に立ち、楽師達に『待ちくたびれた駒鳥』の歌を告げた。すぐに楽師達は、そのうら淋しい前奏を奏で始めた。サミュエルは、瞬間ドキリとして、「やめよ！」と告げたくなった自分に驚いていた。ちょうど、昔エクリースがしたと同じことを、自分がやろうとするのは……。けれども、冷や汗が出るのは、なぜだろう？

再びリュートの前奏が物悲しく奏でられ、ベアトリスは歌い始めた。

ああ　駒鳥よ　お前の愛は　いつまで耐えられるのか
待ちくたびれた　駒鳥よ
日々　毎月　そして毎年　お前は待ち続け
そして　ある日　朽ちていく
さえずる樹の枝から　はらりと落ちて
地面に横たわるまで……

「お待ちを！」とサミュエルは突然叫んだ。「もう、それだけで充分でございます、我が愛しき許婚よ！」

「でも、あと少し残っていますわ」とベアトリスは、狼狽しながら歌を止めて言った。

「一番大切な歌詞ですもの」
そう言うと、ベアトリスは再び歌いだした。

お前は　待ち続ける
愛しい　人を　いつまでも

☆　―　☆　―　☆

遠く離れた王宮の自室に寝ていたエクリースは、ガバッと飛び起きた。冷たい悪寒が全身を覆い、その日以来激しい苦痛と高熱で、エクリースは数日間寝込んでしまったのだった。

12（後書き）

東日本大震災で被災された皆様、大丈夫でしたか？私も又被災者の一人ですが、けれども家は無事、多少の停電を除けば、何とか生活していけるようになりました。

あの恐怖は想像を絶するもので、家々が倒れなかったのがむしろ不思議なぐらいです…。あのツナミの惨状は、小説を超えるものでした。けれども、後片付けをしつつ、ガソリンが皆無の状態ですが、なんとか又書き続けようという気持ちになりました。

家族をなくされた方々や、お怪我をされた方々、そして心に傷を負われた方々、どうか気持ちを一つにして、希望を持っていきましょう。

第九章　閉じ込められて　1

1

エクリースが王宮に戻って、もうすぐ一年が経った。

エクリースは、既に１５歳になっていたが、ビクターが懸念していた通り、王宮からは避けられ遠ざけられていた。エクリースが王宮に行くことができるのは限られた日だけ、それも半日もしない内に、別邸へと追いやられる。

エクリースは跡継ぎであって、跡継ぎではないという奇妙な立場のままだった。そして自由は与えられていなかった。

エクリースが外出する為には、王宮を通過しなければならないが、一本の回廊を伝ってでしかそこへは行けないような構造に成っている別邸は、言わば“別邸”とは名ばかりで、それは体のいい“監禁場所”だった。

エクリースはこの場所から一人で出ることは叶わず、外出には王の許可が要るが、もちろん王は首を縦に振ったことは一度も無い。ほぼ一年間、エクリースは王宮の奥に建てられた、監禁場所で過ごしていた。

そこに来ることが出来るのは、やはり限られた人々だけ。ビクターと少数の従者、そして教師が数人と、騎士ウーリッヒ、それにシスリー長老だった。

ところがもう一人、そこに来る事が出来る女性が一人居た。それは、亡き王妃ドロテアの侍女だった、ハイラその人。ハイラは既にかなり年老いて杖をついてはいたものの、相変わらず鋭い目付きと、鋭利な頭脳、そして狡猾な心を有していた。

☆ ― ☆ ― ☆

ある暑い夏の日、ハイラはやって来た。回廊の入口には、兵士達が見張っている。

「やれやれ、たかが一人の年若い王子に、この物々しい兵士とは！」とハイラはわざと皮肉っぽく言うと、忍び笑いをしつつ中に入った。

「おお、ハイラ様！」と奥からビクターが、笑顔で迎えた。「いつもいつも、気に掛けてくださって、ありがとうございます」

「まことに、エクリース様は不遇よのう。王位第一継承者だというのに、この有様。ドロテア様が生きていたら、さぞ嘆かれることじゃろうて」

「さようですが……ま、致し方ありませんね」とビクターは苦笑しつつ答えた。

「エクリース様のご様子は如何かの？」

「この境遇にもめげることなく又不平不満も言うこともなく、健やかに過ごしておられます。ただ……口数は少のうございますが」

「当たり前じゃ！　このような陰気な所に住まうとなれば、面白くもなんともなく、又お若いのに気晴らしもなく、言葉数も少なくなるのは当たり前」

とハイラは言った。

「いえ、エクリース様は、中庭で剣術の稽古をし、教師からはラテン語の書物の読み書き、又数学を習ったり致しております。そして詩や音楽にも優れておいでです」

「それは良いことじゃの」

二人が並んで歩いて行くと、

「ハイラ！　ハイラか！」と叫びかける少年が、駆け寄って来た。

ハイラはその姿を見ると、頭を下げてお辞儀をする。

「エクリース様！　お健やかでおられますな」

「ハイラ！　そんなに仰々しくするな」
と言うエクリースは、如何にも辺りをパッとさせる輝かしいオーラを放っていた。一年前より背が伸び、ずっと大人びている。そして房々した黒い巻き毛が艶やかに肩に垂れ、白く肌理（きめ）の細かい肌は、まるでアラバスターのようだ。
　何よりも、その笑顔が眩しく、ハイラでなくとも自然と頭が下がってしまう美少年になっていた。
「もう二ヶ月ぶりだな」
「そうでございますか。王様がわたしになかなか許可を与えませんゆえに、ここに来るのが遅くなりまして」
「そうか。だが良く来てくれた」
「はい。わたしとて、早く来とうございました。けれども、あの横に座るイデット様が、王に讒言いたしておる次第では、なかなかここには来られませぬ」
と言うハラレの瞳には、他人には分からぬ憎しみがあった。

「イデット様か」とエクリースは呟いた。「サイラスはどうだ？この間会ったのは、僕の誕生日だったが、もう数ヶ月は過ぎた。元気でいるのか？」
「はい。サイラス様はお元気ですとも。むしろ、元気すぎましてよ」
　ハイラは暑そうに、手で顔を扇いだ。
「涼しい部屋に行こう。何か飲み物でも？」
「はい、ありがとうございます。ところで、エクリース様。この度、ドリアン一家がこちらに揃ってやって来ましたわ」
「ドリアン一家！？」とエクリースは言うと、少しだけ顔を曇らせた。
「はい、さようで。ベアトリス様もご一緒に参りましてよ」
「そうか……」
　それだけ言うと、エクリースはつと顔を背けた。
「お元気そうでした」とハイラは意地悪く言った。「そして、大層

お綺麗におなりですわ」
けれども、エクリースはその言葉を聞かず、ハイラに背を背けたまま、ずんずん先に歩いて行った。
「その言葉は禁句だと、わたしが申し上げたはずです！」
とビクターが咎めると、
「まあ、わたしとしたことが、とんだ粗相を」とハイラは扇で口元を隠して嗤ったのだった。

2

2

ハラレは案内された、美麗だが、どことなく陰気な部屋に通されると、やっこらしょとソファに腰掛けた。

「エクリース様、歳をとるのは嫌ですのお。わたしのように歳を重ねますと、もう先行きはあの世しかございませんし、身体も不自由になってきております」

そう愚痴ると、けれどもハラレは出された飲み物を飲んだ後、抜かりない目付きで、辺りを見回した。

「まこと、こちらは出口というものがございませんね。四方を高い壁に囲まれておりますし……王様のご仕打ちは、酷いものですわね。一体何を恐れておいでなのやら。又イデット様は、エクリース様をサイラス様と一緒に遊ばせはしないご様子」

「いいえ、明日わたしはサイラスの元に行きますが」

とエクリースが言うと、ハラレはつと顔を近付けた。

「あら？　そうですか……お珍しいこと！」

「サイラスが泣いて、僕と遊びたいとせがむのだそうです。ですから、一月に一度はサイラスと共に遊びます。僕も弟が可愛くてしかたないのです」

ハラレはふふふっと微笑んだ。

「エクリース様」と身を正しながら、ハラレは言い始める。「サイラス様と遊ばれる時に、何かお感じになりませんこと？　エクリース様は、勘が鋭いお方とお聞きしておりますが」

エクリースはじっとこの老獪な老女を見つめた。

「それは、なぜ？」

「何だかわたしは、サイラス様が王様と全然似ていないような気が

致しますゆえ」
　果物を運ぼうとしたビクターは、ハッとしてその手を止めた。
「それはどういう意味でしょう」とエクリースは相変わらず穏やかな表情で聞き返す。
「いえね……これはわたしの老人ゆえの邪推かとも思いましたが、サイラス様は年々益々王様の面影とは違ってきておりますから……」
「それでは誰の？」
「それはエクリース様、あなた様もお感じになっているはずでございます」
と老女はピシャリと言い放った。

「考えてもご覧遊ばせ。第一王位継承者がこんな場所に、言わば閉じ込められておるという非常識な事態。それなのに、王とは違う容貌のお子が、この国の未来を司るとは！　それこそ、神をも畏れぬ一大事でございましょう！　そうではございませぬか？」
　エクリースはその大きな黒い瞳でじっとハラレを見つめていたが、ややあって言った。
「背後に何かが確かに見えますが……それは父ではない誰かです。けれども誰かは分かりません。サイラスを抱いていても、父の臭いは感じられない……それは確かです」
「やはり！！」と、ハラレは叫んだ。
「まさか、サイラス様が王様のお子ではないと仰るので！？」
と驚いて聞くビクターを、ハラレは睨みつけた。
「下男風情が、このような一大事に口を差し挟むとは！」
「いや、ビクターは僕の兄と同じですよ、ハラレ。隠し事はしたくありません」
　けれどもハラレは不審な視線をビクターに送りつつ、囁く。

「エクリース様、ご用心なさいませ。あの女狐に！　サイラス様の実の父が誰か、知りたくはありませぬか？」

「けれども、証拠がないのでは……」
「それを見つけ出すのでございます。真の王位継承者はあなた様以外ございませぬ！　あの女狐が産んだ不倫のお子を、この国の王にしてはなりませぬぞ！！　それこそ、この国に大いなる災いが訪れましょう！」
ハラレの視線とエクリースの視線がバシッと合った。

「それはそうと」と一瞬後にハラレはにこやかに言う。「ベアトリス・ドリアン様のご結婚式は、１０月と決まりました。ベアトリス様が１５歳になられた後に、許婚のサミュエル様とご婚姻なされるそうですわ」
ハラレはパタパタと扇を扇ぐ。
「お二人の仲はそれはそれは睦まじく、本当にお似合いのカップルだと、もっぱらの評判なのでございますよ」
「そうか」とエクリースは短く言った。
「妹のようにお育ちになったベアトリス様のご結婚式に、エクリース様は招かれるのでしょうね」
「恐らくそれは無いだろう」とエクリースは淋しげに笑った。「ここから出してはもらえまい」
「あらま！　そうでしたわ、わたしとしたことが、この酷い状況を忘れ果てておりました。とにかく」と再びハラレはエクリースの耳元に近寄った。
「サイラス様と遊びつつ、何とかしてイデット様の部屋に入り、どなたかからの文を見つけ出すのでございます。実はイデット様には、ラウールという騎士の恋人がございまして」
「ラウール？」
一瞬後、エクリースの脳裏には、凛々しい若い騎士の姿が浮かんだ。サイラスの持つ快活さを備えた魅力的な男性だ。
―　心苦しい行為だ。だがやらねばならないようだな。僕の為では

なく、裏切られた祖国と父の為にも。可哀想なサイラス！　……弟はどうなるんだ！？

「少し考えさせてくれ」とエクリースは囁いた。

「分かりました。エクリース様にお任せ致します」と老女はニンマリと嗤いながら言い、そしてそれから直ぐに出て行った。

「わたしはどうも気に入りませぬ、あのお方を。腹に一物あるお方のようですから」

と後でビクターがエクリースに告げると、

「本当に喰えないお人だ。実は僕にも、ハラレの本心は分からない」

エクリースも同意したのだった。

3

3

イデットは、溺愛する息子サイラスがエクリースを慕うことが我慢できなかった。けれども、母イデットの心とは裏腹に、遊び友達に飢えた孤独な三番目の王子サイラスは、エクリースをいつも求めていた。ちょうど、昔幼いエクリースが亡き兄のブライト王子を慕ったように。

１２歳も違うこの腹違いの兄弟は、大人の思惑とは別に非常に仲が良かった。孤独だったエクリースは同じような境遇のサイラスを可愛がり、そしてサイラスも自分とははるか年上の兄に、この王宮には無い“何か”を感じていたようだ。

☆ ― ☆ ― ☆

月に一度、弟のサイラスに会いに行くエクリースは朝からそわそわして楽しげだった。手作りの木の玩具を手にして、まだ三歳のサイラスと何をして遊ぼうか、とそれを想像するだけで、この陰鬱な境遇も何も感じなくなる。

サイラスはサイラスで、その時を心待ちにしていた。冷たい目つきのイデットの母心を無視する権利が、幼いサイラスは既に有していた。なぜなら、サイラスは五歳になると、直前にあった王族達の会議により、皇太子になることが決まっていたからだ。

イデットはそれを知って小躍りし、ほっとしたものの、けれどもエクリースが王宮に訪れる度にやはり憎しみは消えない。いつかこの王子が、サイラスに取って代わるのではないかと、気が気でないのだ。別邸に監禁状態だというのに、それでもイデットの猜疑心は晴れなかった。

特に、しげしげとエクリースを訪ねる、前王妃ドロテアの侍女だった老獪なハラレには、常に気を配っていた。ハラレの伏せられた皺だらけの瞳に、何かが宿っていることに気付かないイデットでは無い。彼女はハラレを見る度に胸が締め付けられたように感じ、蛇蝎のように嫌っていた。

「どうも気に入らぬ、あの老女めが」と、エクリースがサイラスに会いに来る朝、イデットはマルゴットに囁いた。「あの老女、何か企んでいるのではないだろうか？」

「何をでございます、イデット様。確かに余り感じの良くない老女ですが……亡きお妃様の威光を笠に来て、未だにこの王宮に巣食っていますとは」

「巣食っている！？　おほほほ、なかなか良いことを申すのぅ、そなたは」

とイデットは歪んだ笑いをもらした。

「確かに、王はあの者を放擲せぬばかりか、未だにここに住むことを許しているのは解せぬ」

「亡き王妃様の思い出ゆえでしょうか？」

「それだけではなく、あの者の曲者ぶり、そして狡猾さゆえだろう。何か良からぬことをエクリースに吹き込んでいなければよいが……」

イデットがここまで言った時、ドアが開きサイラスが駆け込んできた。

「お母上様～！」と言う声は鈴のように響き、まだ汚れを知らぬ愛らしい幼児そのものだ。けれどもイデットは、日に日にサイラスが愛人のラウールに似て来ている事を敏感に察していた。

サイラスは無邪気に母親に抱きつきながら言った。

「ねぇねぇ、早く兄上に会いたいよぅ」

「まあ！　サイラスはそんなにエクリース兄上がお好きか？」

「はいっ」とサイラスははっきり答えた。「だって優しいし、いつ

も来る度に僕に面白いオモチャを持ってきてくれるんだもの」
「エクリース様は、大層手先が器用なのでございます」
と慌てて追い駆けて来た乳母が、付け加えた。「それに本当にサイラス様を可愛がっておられますわ」
「それは、本心でとな」
「もちろん！　……ええ、本心だと思いますが」
「乳母よ」と言うイデットの顔が、一瞬邪気を秘めた。
「あの王子から目を離すでない、分かったな。何をしでかすか分からぬゆえじゃ」
「ええ……はい」と乳母は慌てて答えた。イデットを怒らせては、何が起るか分からないからだ。
「じゃあサイラス様、遊戯の間で兄上を待ちましょうね」
「うん」
そう乳母に頷くと、サイラスは弾けるように出て行った。その金色の巻き毛が麗しい。

サイラスが出て行った後、イデットは近くの椅子に座り込んだ。
「どうしても……わたしには安心できぬのじゃ。例え王宮から隔離されているとは言え、決して油断できぬ！」
「イデット様のご心配は、よぅく分かりますわ」
「あの王子は呪われているのじゃ。けれども、どうすることもできぬ。今までの企てはねことごとく外れてしまって……わたしはなぜか不吉な予感がしてしまう。だから、あの王子を、絶対にこの世から抹殺しなければならぬとな！」
「お妃様っ！　声がお高うございます」とマルゴットはシーッと人差し指を立てた。
「山賊ですら倒してしまったお方です。あと残っているのは……毒！」
「毒か！　……なるほど」とイデットはニンマリした。
「考えてみようかのぅ」

4

4

エクリースは王宮の奥の『遊戯の間』に通された。イデットは決してここには来ない。エクリースを亡き者にしようとして、山賊を雇っていたことを知っているエクリースとビクターは、イデットには注意していた。

けれども、イデットは決して尻尾は出さない。それを見つけるのは、ハラレの言ったように隠密裏に行動しなければならないようだ。スパイのようなことをするのは嫌だったが、それも仕方なかった。

『遊戯の間』には、エクリースとサイラスの他には乳母とビクターしか入ることが出来なかったし、外の扉には二人の兵士達がものものしく見張っていた。壁には大きな本棚、真ん中に丸テーブルと端にもう一つテーブルがあり、飲み物と果物が置かれているだけの、質素な部屋だ。

エクリースが入ると、待ちくたびれたようなサイラスが飛び掛ってきた。

「兄上～！　僕、待ってたんだよ！」

「そうか、そうか、遅れて済まない」

とエクリースはにこやかに微笑みながら、鞠のようなサイラスを抱き止めた。瞬間、いつものように、凛々しい見知らぬ騎士の姿がサイラスの後ろに浮かぶ。その男の陰が、ハラレの言っていた“ラウール”という騎士なのだろうか？

けれども直ぐに、サイラスの愛らしさにめろめろになってしまう自分が居た。サイラスは、唯一の何も疑ってこない身内なのだ。例えその母がイデットで、父が自分の実の父の王ではなくとも、エクリースには貴重な、そして大切な自分の弟なのだ。ただし、そうと

なれば、血が繋がっていないということになるのだが。

「ねえねえ、今日は何を持って来てくれたの？」

「う～ん、これだよ」

そうもったいぶって言うと、エクリースは胸元から小さな木作りの玩具を取り出した。

「なになに、それ？」

「これはね、天秤さ」

「て・ん・び・ん・って？」

「どちらにも同じように、平衡を保っているオモチャ」

「分かんない」

「それじゃ」とエクリースは、木製の天秤をテーブルに載せた。それは、ぐらぐらと揺れたものの見事に平衡を保っていた。

「凄い！」とサイラスは、その小さな手を叩いて笑う。「どっちにも転ばないんだね」

「そうだよ」とエクリースは少し得意そうだ。それは、王子ではなく、ただの少年の姿だった。

「サイラス様は、いつもお兄様のエクリース様を首を長くして待っておられますのよ」

と、退屈した乳母がそうビクターに囁きかけた。

「ところで……わたしは面白い話を知っているのですが」

とビクターは言うと、身を乳母に近付けた。乳母とは言っても、まだまだ若い彼女はビクターの方に身を摺り寄せる。

そのちょっとした隙に、ビクターは乳母の飲み物に何かを入れた。

ビクターはそれとなくエクリースに目配せをした。

「喉が渇きませんか？　わたしが話をする前に、さあ、乾杯といきましょう！　今日は暑い日ですね～」

先にビクターがゴクリと飲むと、乳母もつられて自分のコップを飲み干した。

「美味しいラズベリーのジュースだわ」
「ですね」
エクリースはちらっと乳母とビクターに一瞥を与えると、少しサイラスとその天秤で遊んでいた。そして乳母がこっくりこっくりし始めると、サイラスを抱き上げ囁いた。
「さぁて、この遊びにも飽きただろ？　何か他のことをする？」
「でも、オモチャは全部僕の部屋にあるんだよ」
「お母上の部屋にも無いの？」
「あるある！」と無垢なサイラスは叫んだ。「幾つか置いてある。見事な木馬もあるんだ！」
「じゃそこに行こうか」
「でも」とサイラスは躊躇った。「今、母上は父上の所に居るけど……でも兄上を入れちゃいけないって」
「そうか。じゃあ遊びはこれまでだな」
そうエクリースは素っ気無く言った。

「待って！　実はね、この部屋からこっそりそこに行ける扉があるんだよ」
「へえ」とエクリースは少しびっくりしながら言った。「一体どこに？」
「ここにある本棚の裏は、実は秘密の廊下なの」
「そうか！　じゃあ、サイラスはいつもそこから出入りしているんだね！」
「うん！」
ふと乳母の方を伺うと、乳母は完全に眠りに落ちていた。
「あとひと時は大丈夫です」とビクターは機械的に答えると、向こうを向いた。
エクリースはサイラスを抱き上げて肩車すると、その本棚に近寄った。
「どうしたら、開くの？」

「ええっと、あのね、一番下の右端の本を引くの」
「ふぅん、そうか～」
何気ない素振りでエクリースが、その本を取ると、それは本ではなく鉄製の精巧な偽物だということが分かる。エクリースがそれを引くと、本棚がスルスルと開き、ポッカリと空間が現れた。
「なるほどね」と、エクリースはサイラスに微笑みかけた。「とても良く出来ている！　面白いね」
「でしょ？」とサイラスは無邪気に答えたのだった。

5

5

秘密の廊下に入る前に、エクリースはチラッとビクターに目配せをした。

「お任せ下さい」とビクターはいつになく不敵に言った。

エクリースは、目で『頼んだぞ』と告げると、サイラスを肩車にしたままその奥に一歩踏み入れた。暗い廊下はかなり長く感じられたが、やがて明るい日の光溢れる部屋に着いた。いかにも高貴な女性の部屋と思われる、高価で美麗な家具調度品の数々がさり気なく置かれてある。

エクリースは、こんな部屋を今までに見たことも無かった。第一、成人した女性の部屋にこっそり入ったことなど、今までに一度も無い。エクリースの心臓は、期待と不安でバクバクしていたが、それでもサイラスに対しては柔和な兄の姿に徹していた。

「綺麗な部屋だね！」と叫ぶエクリースの感嘆は、あながち嘘ではない。

「母上の部屋の一つだよ。僕はいつも、ここで母上と遊んだりするんだ。食事する時や寝る時は、又別の部屋だけど。そうそう、母上がお洒落する部屋も又別にあるんだ！」

「母上は、お妃だからな」とエクリースは呟いた。

エクリースがサイラスを下ろすと、サイラスは窓際にあった一際美しい木馬にまたがって揺すり始めた。その側には木の箱があり、ありとあらゆるオモチャの類が入っている。それはまるで玉手箱……エクリースの幼少時には無かった物ばかりだ。

「素晴らしい！　こんな所で遊べるサイラスは、羨ましいな～」

これは本心から出た言葉だった。

「そう？　兄上はこんな部屋では遊ばなかったの？」
「え？　ああ、そうだね。僕は……」
そこまで言うと、ジュリアとグライスと暮らした貧しく粗末な小屋を思い出した。なぜか胸がきゅんとするのは、それは憧憬だろうか？　それとも、これが妬みと言うものだろうか？

「こんな部屋じゃなかったよ。サイラスは幸せだね」
「うん、僕、幸せぇ」とサイラスは正直に言った。
静まり返った、主の居ないこの場所は、エクリースにはどこか侘しく感じた。けれども直ぐに、自分の取るべき行動を思い出すと、彼の瞳はキラリと光る。
「サイラス、ちょっとそのオモチャで遊んでて。僕は、君のお母さんの部屋の美しさを堪能したいから……いや、この部屋の匂いを嗅ぎたいからね」
「分かった」
そう無邪気に言うと、サイラスは一人遊びを始めた。まだ三歳のサイラスは、何一つ疑うことを知らないのだ。そういうサイラスを見ていると、エクリースの胸はチクリと痛んだが、それも一瞬だけ。すぐに、別の自分に変わっていく。

エクリースは、イデットの美麗な机や椅子、見事な刺繍の施した薔薇色のソファなどを見回した。見ていると、目が眩む。あやうく自分の果たすべきことを、忘れてしまいそうだ。
見たところ、こんな場所には大事な物が置いているようには見えなかった。ただ机の上の香水の瓶の下に、何か手紙のようなものがある。少し広げてあるという代物は、イデットにとって大切な物とは思われない。
けれども、エクリースは近寄ってそれをじっと見下ろした。ふと、不快な感じに襲われ、エクリースの心臓は波打ち始めた。その字には確かに見覚えがあるのだ。綺麗な洗練された字面と、横一直線の

几帳面な文字の並び……。

「これは……これは！　あの時の筆跡じゃないか！　ニセの手紙で僕とジョーダンをおびき寄せ、無駄な決闘をさせたのは、この字の筆跡の手紙だったのでは！」

そしてエクリースは、その手紙の真下の署名を見た。サミュエル・グールデュール！

「あ！」と思わずエクリースは叫んでいた。サイラスがふと振り返り、どうしたの、というように小首を傾げる。エクリースは、わざとニッコリ笑い返して誤魔化した。

けれども次の瞬間、貪るようにその手紙を読んでいた。

『……ベアトリスと僕は、この一年間お互いを尊敬し、そして愛を育んできました。もう直ぐベアトリスが１５歳になれば、僕の愛しい妻となります。僕達二人は、愛し合いいたわり合う理想的な夫婦となるでしょう。

義姉上、その時には僕達を祝福して下さい……』

エクリースの頬はカッと火照り、言い知れない憤怒に突き動かされた。

もしもこのような場所ではなかったら、エクリースは間違いなくこの手紙を取り上げ、ナイフでぎざぎざに切り裂いただろう。けれども、今はそれは出来ない。

エクリースは両手の拳を、どうすることも出来ずにその机に突きつけ、暫く自分の気持ちを落ち着けようと試みた。探しているのは、サミュエルのこのようなでれでれした文（ふみ）ではなく、イデットの愛人からの手紙なのだったが。

けれども、もうエクリースは平静では居られなくなっていた。

「サイラス！　お母上が戻って来られるかも知れぬ。もうここから出ようか」

とエクリースがやっとの声を振り絞りながら言うと、

「そうだね」とやや不服そうなサイラスの声がした。けれども、根が善良で素直なサイラスは、直ぐにエクリースの元に来てその手を握り締めた。
「どうしたの？　ぶるぶる震えてるよ」
「ちょっとした冒険は、武者震いさせるものさ」とエクリースは平静を装って答える。
「ねぇ、サイラス。このことは絶対に黙っていて。僕達兄弟の“秘密”だからさ」
「うん、分かった！」
「冒険って、楽しいものだからね」
そう言い掛けたエクリースの脳裏に、にこやかにベアトリスの手を取るサミュエルの姿がはっきりと浮かんだ。そのサミュエルは、エクリースの脳裏では、鵞ペンを持ちエクリースを陥れる手紙を書いている姿に変化していく。それは、妄想でも幻でもなく、鮮明に浮かんだ現実そのものだった。
エクリースは生まれて初めて、“嫉妬”というものを感じた。そして、憎しみも。
「そうだったんだ」とエクリースは、廊下で呟いた。「そうだったのか！　あいつが、あの手紙を……」
―　そうだ、エクリース。やっと分かったと見える。
どこかで、デスティの声がしたような気がして、エクリースは振り返った。けれども何もない空間に、秘密の廊下の端が見えただけだった。

6

6

サイラスと別れ、再び閉ざされた自分の別邸へと入って行きながらも、エクリースの中にはサイラスに対する申し訳なさと後悔、そして言い知れぬ腹立たしさのこの二つの心が、せめぎあっていた。

そして一度は諦めたと思っていたベアトリスへの思いは、実は今でも存在し、いやもっと生々しくエクリースの胸に迫って来るのだ。

事の真相を幾らか知ったところで、それはエクリースを慰めるばかりか、もっと苦悩させるものだった……。

「ビクター」

「はっ」

「ベアトリスは……今は幸福なのだろうか？」

突然聞かれて、ビクターはハタと立ち止まった。後ろに護衛していた、というよりも見張っていた衛兵が不審そうな目つきになる。

「立ち止まるな、ビクター」

「あ、はいはい、そのようですね。ベアトリス様ですか～？　う～ん、それはなんとも……」

「あのサミュエルは油断ならない奴！　あんな者にベアトリスは嫁いでしまうのか！？」

その言葉は、まるで吐き捨てるようだ。

「まぁ、あの方は評判は宜しいようですな。イデット妃の義弟でもありますし、冨と権力は思いのままになりましょう。恐らくベアトリス様は、一生喰うには困らず、栄耀栄華の内にお暮らしなさることでしょう」

「だが、あいつはイデットの手先でもあるだろう」

「義弟ですから、仕方ありますまい」とビクターは無難に答えた。

エクリースが別邸に入ると、背後で思い扉がバタンと閉まり、蝶番のガチャリという音が不快に響く。

「ベアトリス様が嫁ぐ前に、一度お会いになりますか？」

「それだけはできぬ！」とエクリースはきっぱりと言った。「もう二度と会わぬという約束だ」

「ではあちらがお会いしたいと、言ってきましたら？」

「それでも、僕は会わぬ。というより……会えないんだ」

―だけど、会いたい！　会ってみたい、もう一度だけ……。けれどもそれは許されない行為、そしてベアトリスの為にもならないとは！

「実は、ベアトリス様の誕生日の宴の招待状が来ておりました」

「なに！？」とエクリースは振り向いた。

「けれども、王様はもちろんここから出るのをお許しにはなりませんでした。実はこの事は言わないつもりでしたが」と、ビクターの声はうろたえ気味だ。

「いいのだ」

そう疲れたように言うと、エクリースはソファに寝転がった。夕闇が迫ってきて、辺りはほの暗い。

「例の手紙等は見つけられましたか？」とビクターが小声で囁くと、

「まさか！　見つかるはずはあるまい」とエクリースは力なく答えた。

「そうですか……確かに、そんな大切な物を、簡単な場所に置いているはずは無いでしょうからね」

「だが、思わぬものを見つけたぞ」

そう言うと、エクリースはサミュエルの筆跡の手紙の話をした。

ビクターはただただ驚いているばかり。

「あのサミュエル様が！」

「いや、義姉のイデット妃にそそのかされたのかも知れぬ」
「王様に、お告げになっては如何で？」
「証拠は何も無いということを忘れるな！」
とエクリースは手厳しく言った。「僕がいい加減なことを言っているとしか、父上は思わないだろう。悔しいが、今は何もできぬ」

☆　―　☆　―　☆

「おや？」と、イデットは例の部屋に入った瞬間、奇妙な意識に捕われた。全てが以前と同じだが、何かが違うような気がしたのだ。
「これ、マルゴット。この部屋には誰も入れておらぬだろうな」
「もちろんでございます」
「誰かが入ったような形跡が……」
「お気のせいでは？」とマルゴット。
「サイラス！　今日ここに誰か入ったのか？」
「いいえ、母上」とサイラスは、エクリースに言われた通りの嘘をついた。
「乳母と僕だけ」
「考え過ぎなのかも知れぬ」とイデットは呟いた。
「さあさ、サイラス。もう寝るのじゃ、可愛い我が子、キスをしましょう！」
「うん」
そう言うとサイラスはイデットに飛び掛った。瞬間、今日はエクリースが来た日だと、イデットは悟った。
「今日は楽しかったかえ、サイラス？」
「はい、母上様。ステキな冒険をしたんです」
「冒険か……なるほど」
一瞬イデットの瞳がギラリと光ったものの、すぐに優しい母の目になってサイラスを抱き締め、そしてキスをした。

サイラスが乳母と共に寝室に消えると、イデットはマルゴットを近くに呼んだ。
「あのエクリース王子、案外曲者かも知れぬ。毒は早く手に入れた方がよいな」
「はい、確かに」
「それも、直ぐに効く毒は怪しまれてしまう。徐々に効いてくる毒はないものかの？　少しずつ衰弱していくという奴がいい」
「分かりました。兄、リカルドと相談致します。しかる後に、手に入れて参ります」
薄暗い室内に明かりも灯さず、二人はひそひそと密談を重ねたのだった！

7

7

あの日以来、エクリースは懊悩に支配されていた。

ベアトリスへの思慕、サミュエルの筆跡、讒言したくともどうにも出来ないこの檻のような館、真実を誰かに打ち明けたいが、けれども誰もそれを信じないだろう。

なぜなら、そもそもその手紙はイデットの私室にあったのであり、それを見たという事は自分が秘かに忍び込んだと言う事を白状するようなもの、そして、仮に誰かが信じたとしても、その証拠がなければ、単にエクリースが嫉妬に狂ってサミュエルを誹謗したとしか思われない。どっちに転んでも、自分にとって何も益が無いばかりか、益々窮地に立たされるのがおちなのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

夏の終わりのある晩のこと、盛大な宴会のざわめきが、この淋しい捕われの王子の元にも響いてきていた。歌舞音曲、そして人々の楽しげな笑いさざめく声、、、、それらはこの陰気な別邸を、真逆にもっと暗くしていくようだ。

エクリースは灯火の元で読んでいた本を、パタリと閉じた。

「王宮は何やら騒がしいな……楽しげでもあるようだ……」

「はい、それは」と控えていたビクターが言いにくそうに告げた。

「サミュエル様の許婚、ベアトリス様の１５歳の誕生日を祝う宴と思われますが」

ほんの少しだけ、エクリースの眉根が険しく絞られたが、直ぐにエクリースは短く答えた。

「ああ、そうだったな……」

ビクターは、その声音にエクリースの良くも悪くも万感の思いを感じて黙り込んだ。
「僕は呼ばれなかったか……。いや、それは正しい。僕が出席しては、全てが台無しになるからな」
それからエクリースは、ビクターの方をじっと見つめた。
「アンネットには会ったんだろう？　だから知っているんだな！？　違うか？」
図星なので、ビクターはうろたえて、頬を真っ赤に染めた。
「何をそわそわしている！？　お前達がこっそり会っているのは気付いていた。愛する人に会いたいという思いは、僕にだって理解できるぞ」
そう言うと、エクリースは少しだけ笑い出した。それは苦悩を隠した笑い……直ぐに闇夜に消えていく儚い笑いだ。
「僕はもう寝よう。お休み、ビクター。宴の後、又だれかさんとこっそり逢引でもするのだろうな？」
そう悪戯っぽく言うと、エクリースは寝室へと一人で入って行った。

寝室へ入ったエクリースは、しばらく閉じた扉の板を背にして、立ちすくんでいた。やがては来るベアトリスの婚姻の日、その直前の誕生日の宴。それらは全て覚悟していたはずなのに、いざとなるとやはり悔しさと愛おしさが胸の奥底からフツフツとわきいてで来るのだ。
「本当に呪われていないのなら、運命はなぜこんな目に僕を合わすんだ！？　僕がデスティでないのなら、なぜこんな狭い場所に閉じ込められているんだ！
父王を含め、人々が僕を恐れているからこんなことをするんじゃないか！　なのに僕は、ただ黙って今の運命を甘受するというのか！？

ああ！　もしも自由が手に入るのなら、王位など早くサイラスに譲って、ここから出て行きたい！　もしもそれが出来ぬというのなら……闇夜で鳴くナイチンゲール（夜鳴きうぐいす）のように、ここから飛んで行きたい！

あの時は、山賊を倒したというのに、今の僕は何も出来ぬ。この四方の石壁を突き破ることも出来ない。なぜだ!?　僕は一体何者？」

それからエクリースは、寝室に置かれてある重たい本を開けると、その白い押し花をそっと手に持った。

「ああ、もうこの花の残り香は消え果てた。ねえ、ベアトリス。僕は何者……？」

遠くから微かに、人々の笑い声が風に乗って聞こえてきた。その声の中には、ベアトリスの歓声も入っているに違いない。そして、盗人のように自分から大切な物を奪い去って行くサミュエルの笑い声も、又女狐のようなずる賢く残酷な心を持つイデットの、勝ち誇ったような嗤い声も……。

エクリースは耳を塞ぐと、崩折れるようにベッドに倒れ込んだ。長い間眠れず、やがてその内にお開きになったのかざわめきも聞こえなくなっていったが、それでもエクリースは暗い闇夜を見つめていた。

☆　―　☆　―　☆

何処かは知れない、まるで廃墟のような灰色の沼に流れて来た、ほの白い木作りの棺……それはやがて、エクリースの佇む岸辺の目の前で止まった。まるで早く開けてくれと言わんばかりに。

エクリースは抗う力もなく、震える手でその棺の蓋を取り上げ、覗き込んだ。白いベールの掛かった美しい女性の顔が、静かに横たわっている。びくともしない、その長い睫毛の顔を縁取る豊かな茶

色の髪……。

「あああああ～～～っ！　君は……ベアトリス！！」

大声で叫んだ途端、朝の光が窓辺に差し込んでいるのがうっすら見えた。けれども、エクリースの額は大粒の汗にまみれていた。

8

8

サミュエルは、誕生日の宴を終えたベアトリスを王宮の出口まで送った。

ベアトリスはかなり疲れていた上、宴の最後に、サミュエルが皆に告げた言葉に衝撃を受けていた。

サミュエルはこう大声で告げたのだった。

「皆さん、我が麗しい許婚のベアトリスは、一ヵ月後にはわたしの愛しき新妻となります。

そして然る後、わたしと妻はただちに、わたしに与えられた土地へと赴く所存です。それは、我が義姉イデット王妃より命じられたものですが、隣国との堺の領地クレヴィアンへと向います。

クレヴィアンは肥沃でかつ温暖な土地でもありますゆえ、わたし達はそこで領主として過ごす事になるでしょう。これは、又王のご意向でもあるのです」

皆は一瞬シーンとなった。てっきり王宮か、王宮近くの領地に赴くものと思っていた人々は、この思いがけないサミュエルの言葉を聞いて、唖然としていたのだ。

特に、今までにこやかに応対していたベアトリスは、サミュエルの言葉に信じられないように身を震わせた。そしてドリアン伯爵夫人も又、その土地がここからかなり離れているのを知って、顔を曇らせたのだった。

「皆の者、クレヴィアンは我が祖国が以前持っており、今は昔の戦によりこちらの国に譲り渡されし土地。けれども、そこはこの世のパラダイスとも言うべき、素晴らしい土地なのです。

そこの領主には、わたしの義弟サミュエルが一番相応しいと、我

が夫の王と共に相談致し決定致しました」
とイデットが補足した。
「そして然る後に、我が忠実なる義弟サミュエル・グールデュールは、爵位を頂くことにあいなりましょう！」

このイデット妃の言葉に、人々はやっと納得した。そして歓声をあげ、二人を祝福したのだった。
ベアトリスはやっと微笑んだものの、それは苦しい偽物の笑いだった。今の今まで、クレヴィアンに行くとは聞いていなかったのだから。

☆　―　☆

―　☆

「サミュエル様……今のお言葉は、本当なのですか」とベアトリスが出口の辺りで聞くと、サミュエルはベアトリスの腰を引き寄せ、その頬にそっとキスをしながら囁いた。
「そうだよ、ベアトリス。今まで黙っていて済まなかった。けれども」
とサミュエルは、その甘い声で続ける。
「その土地では、誰にも邪魔されず、わたし達の愛の巣を築きあげることができる。毎日が平穏でそして我々の愛に満ち、花々と澄んだ空気とそして虫達だけが邪魔をすることが出来るのだ。
わたし達だけ！　わたし達は思う存分、愛し合い、そして可愛い子供をもうけることができるのだよ。わたし達はそこでは自由なのだ！　分かるね、ベアトリス」
「え、ええ」とベアトリスは、まだ納得が行かずに曖昧に答えた。けれども、直ぐにその薔薇のような微笑を浮かべ、その頭（こうべ）をサミュエルの方にもたれてうなずいた。
「分かりましたわ、サミュエル様」

「あと少しで、君はわたしだけのものになるのだ！　わたしだけの……」

そこまで言うと、サミュエルはやっと身を離した。

「おやすみ、ベアトリス。今宵も安らかに！」

「ありがとうございます」

そう答えると、ベアトリスはやっとドリアン一家の馬車に乗り込んだ。

乗り込むや否や、奥方がガバッとベアトリスを抱き締めた。

「よもやあんな土地にお前を行かせるとは！　それは聞いてはおりませぬ！　ねぇあなた、これは一体どうなっているのです！？」

言われた伯爵は、困惑したように口元をもごもごさせていたが、もうすっかり少年らしくなってきた１１歳の弟のクリフだけは、明るい快活な瞳を姉のベアトリスに注ぎかけた。

「大丈夫だよ、姉上。あの土地はとても温暖だというし、人々も穏やかだ。少々僻地では有るけど、いつか王宮に戻って来られることもあるさ。それに……田舎は姉上も慣れているでしょう？　それよりも、サミュエル様に爵位が与えられたら、姉上は一生苦労はしないですむよ。ね？」

「でも、隣国との堺というのが気になりますわ。もしもその国と、又戦争でも起りでもしたら」

「お前は、苦労症過ぎるぞ」とドリアン伯爵が、奥方をたしなめた。

「元々、サミュエルが夫に相応しいと喜んでいたのは、お前ではないか！」

「それはそうですけど……」

「もういいのよ、お母様！　そしてお父様も。もう喧嘩はやめて下さい。わたしはもう覚悟しているのですから。わたしは、以後どこにでもサミュエル様に付いて行きますわ」

とベアトリスが、声を張り上げた。

「そうね」とやっと奥方は諦めたように呟いた。「もう婚礼の支度も整っていることだし、どうしようもないことを言ってしまって。生きてさえいれば、又いつでも会えるものを、わたしったら！」

「お母様！」

そう叫ぶと、ベアトリスは奥方に抱きついた。そのベアトリスの脳裏に、ただ一つの願いだけがあることを、今は誰も知らなかった。

9

9

「最近、エクリース様のお顔色が悪いようだ」
と、アンネットと逢引していたビクターが囁いた。
「えっ」
「最初は、ベアトリス様のご婚姻が近付いたせいだと思っていたが……どうやら違うようだな」
「ビクター、それって精神的なものではないと？」
「そう。確かにベアトリス様のことでは、エクリース様は随分お悩みだった。けれども、最近のご様子はちょっと違う。絶えず、得体の知れない頭痛に襲われ、寝汗も尋常ではない。腕の皮膚が少し爛れているし……何かひっかかる」
ビクターは握り締めていたアンネットの手を、そっと離した。
「せっかく君に会っているときに、こんなことを言って済まない」
「いいのよ、あなたがエクリース様に対する思いは、特別ですもの。わたしですら、犯す事の出来ないほどに」
そう言うと、アンネットは少しだけ妬けて来て淋しく感じていた。けれども、ビクターはそれには気付かず、ハタと手を打ったのだった。

「アンネット！　ひょっとして、毒なのかな!?　それを考えると、怖くなって来るのだよ」
「まさか！　……いえ、何があってもおかしくないのね、ここでは」
「昨日、僕はエクリース様の食べている物を、猟犬に与えてみた。けれども、なんともなかった。僕の勘ぐりすぎだろうか？」
「いいえ、エクリース様のこと、気をつけてちょうだい」

「それじゃ、これで」
「そうね。愛してるわ、ビクター」
二人は軽く口付けすると、別れていった。暗闇だけが、この恋人達の味方だ。

☆　―　☆

―　☆

ベアトリスの私室には、目も眩むばかりの金糸銀糸で刺繍してある、豪華な婚礼衣装が隅に掛けられていた。ベアトリスは一日にそれを何度か撫でていたが、その度に喜びと微かな不安に襲われている自分に気付いていた。
それは、花嫁となる喜び、サミュエルの新妻となる初々しい嬉しさであり、反対に永遠にエクリースと別れてしまう寂しさでもあった。
確かに、サミュエルは極めて紳士的で、ベアトリスに対する接し方も優しい。サミュエルの囁く愛の言葉は、エクリースの告げた率直な愛の言葉に比べいつも洗練されていたが、けれども、エクリースよりもサミュエルを愛しいと思ったことは一度もなかった。
「これは愛なのかしら？　でもお母様の言うように、女は結婚して新たな愛に目覚めていくのかも知れない……。荒々しく抱かれ、そして身体を開かされる。それで気付く愛もあるのだと、お母様は言った。確かに抱かれたいという思いはあるわ！　だけど、それはエクリースに抱かれたいと言う思いの方がより強いのよ！　ああ！　わたしはまだ少女で、ホンモノの女ではないのかも知れない……」
あと3日で、ベアトリスは名実共にサミュエルのものとなるのだった。
けれどもその日、ある一言が、ベアトリスの運命を変えた。
「一度、エクリース様にお会いしたいの。それはいけないことなの

かしら？」
と、ベアトリスはアンネットに呟いたのだった。
「何を仰います！？　今更エクリース様に会おうなどと！」
「分かっているわ。けれども婚姻の式にも呼ばれていないエクリース様と、もう二度とお会いすることはできないのね。あんなにわたし達、仲が良くいつも一緒だったのに！　ただ思い出だけで終わるなんて！」
「いけませぬ！」とアンネットは厳しく言った。「どちらにとっても、良いこととは思われませぬ」
　否定されれば、それだけ反発したくなるのがベアトリスの性格だった。

「何も言わなくてもいいの。ただチラリとだけでも！」
「ダメですわ。何を仰っているのです、ベアトリス様は！　サミュエル様に対しても、失礼でございましょう」
「そうかしら？　まだ、結婚したわけではないのよ」
「淑女なら、身をお慎むべきですわ」とアンネットはピシャリと言った。
「それに、エクリース様の具合は最近宜しくないと聞いております」
「具合が良くない！？」
　そうベアトリスは叫ぶと、座っていたソファから立ち上がった。
アンネットは、自分が余計なことを言ってしまったのに気付いたが、それも遅い。
「エクリース様のご体調が宜しくないと？」
「ええ、ああ、はい」とアンネットは曖昧に答えた。「多分、気の病かも知れませんが」
「もしかして……毒？」
「まさか！　色々考え過ぎでございますわよ」とアンネットは苦笑する。

「いいえ、違うわ。アンネット、昔、わたしの親戚に類稀な美貌の姫君が居たの。そのお方は、日に日に具合が悪くなっていったと言うわ。皆がそれは病気だと考えていた。けれども、違うのよ！　それは毒！　少しずつ弱っていく毒だったの！」

「そんな……」とアンネットは絶句した。「それからそのお方はどうなっておしまいに？」

「下痢、頭痛、吐き気、皮膚の爛れや赤い斑点、発熱色々あった挙句、亡くなられた。その後、そのお方の姉妹がその方の美貌を妬んで、毎日少しずつスープに入れていたということが判明したの」

「何を、でございます？」

「砒素よ！」とベアトリスは一声叫んだ。

10

10

「おお！　恐ろしい！　まさかそのようなことが、エクリース様の身に起こっているとは、信じたくありませんわ」とアンネットは恐怖に身を震わせると、ゾッとしたベアトリスが続けた。

「それに、誰がそんなことをすると言うのかしら!?　でも、エクリースを妬んでいる者や、忌み嫌っている者は王宮には必ず居るはずよ！」

「忌まわしいことです」とアンネットは慄きながら呟いた。

「ねぇアンネット、わたしは是非ともこの事をエクリースに伝えなくてはなりません！　エクリースと会わせて！　お願い！　あの方のお命を救いたいの」

「それは、ちょっと」と、アンネットは困惑した表情で遮った。「エクリース様の、今の状態をご存知でしょう？　まさに隠遁とは偽りの言い方。真実は、監禁なのですもの！　四方八方、石壁で囲まれた侘しい別邸……いや、別邸とは名ばかりですわね、そこにビクターとただお二人でいらっしゃるだけ。おまけに、常に数人の使用人と、兵士達が見張っておりますわ」

ベアトリスはそれを聞いて、うな垂れた。そっと淋しげに、窓際に寄る。けれども、直ぐに瞳を煌かせた。このベアトリスの独特な表情は、何かを思いついた時だと、アンネットは知っていた。それも、結構大胆な思い付きを……。

「アンネット！」と、案の定ベアトリスは朗らかに呼びかけたので、アンネットはゾッとしつつも、「はい、何か？」と何気ない振りを装って言った。

「あなたは、ビクターと密会しているでしょう、アンネット？」

「あら……そうでしょうか」と頬を染めてしまう正直な侍女だった。
「言い訳はよしなさい。エクリースのご様子も、ビクターを通じて知ったのね？」
「え、ええ……まぁ……」
「今度はいつ会うの？」
アンネットは無言でベアトリスを見返した。そこには、ただベアトリスの意志的な視線がアンネットを射抜いているだけだ。
「今晩でございます。だって、わたしどもも、もう再び出会えるかどうか分かりませんから」
「まあ、アンネット！　あなたの苦悩は、わたしにも手に取るように分かるわよ。愛する人と会えなくなるのは、悲しいことなのだもの。でもね」
とベアトリスは、主人らしくピシャリと言った。
「わたしに協力して欲しいの。これは命令よ」
アンネットはしばし黙り込んでいたが、スカートを摘んで丁寧に静かに頭を垂れた。
「仰せのままに致しますわ」
「ありがとう、一生恩に来ます」とベアトリスは答えた。

☆　―　☆　―　☆

「ビクター、考えてみれば……」と少しやつれたエクリースが、ビクターに向って、ふいに言い始めた。
「は？　何でございましょう？」と、水差しを持ったままのビクターは、何か考え事をしていたのだが、エクリースの方に首を巡らした。
夕日が、豪奢な居間を照らしており、テーブルの上の小さい林檎の上で光を少し照り返している。
「ハハハ、ビクター。何を思案しているのだ？」
「いいえ、別に何も」

けれどもそれは嘘だったのだが。
「考えてみれば、僕はここに監禁同様になっていて良かったと思っているのだ」
「なぜでございましょうや？」とビクターは不思議そうにエクリースを覗き込んだ。
「なぜなら……ベアトリスと会わずに済むから」
「え！？」
「何もベアトリスが嫌いとか会いたく無いとかいうことではない。むしろ、それは逆だ。結婚前の、ベアトリスと会いたいとは思う。あれだけ仲の良かった二人だものな……。けれども、彼女の幸せを願うなら、絶対に会ってはならぬのだ！」
「それは、またどうしてでしょうか？」
「それは……言えぬ」
そう答えると、エクリースは青い林檎を手に取った。

「最近、どうも食欲が無い。前には、この林檎を幾つも食べていたのと言うのに」
「それでございますが」と今度はビクターが言い始めた。
「何だ？」
「明日から、食事はわたしがお作り致します」
「どうして？　お前に食事が作れるのか？　料理女が居るではないか」
「いえ！　わたしが下手でもお作りをして差し上げます」
エクリースは林檎を手にしたまま、訝しげにビクターを見つめた。何かがエクリースの中で弾け散った。それは、暗闇のような恐怖！
「お前、まさか……？」
ビクターはヒタとエクリースを見つめて頷いた。
「そうです、エクリース様。あなたはご病気ではないと、わたしは思うのです。つまり……」
「毒か！？」

「はい。もしかすると」
エクリースの手から、林檎が床に落ちて転がっていった。
「そうか……僕も迂闊だったな。わたしを亡き者にしたいのは、お父上なのか？　それとも……イデット王妃！？」

11

11

暗闇に紛れて、一人の女性が女官のマントに身を包み、足音もなくエクリースの別邸の入口までやって来た。と同時に、奥からビクターが現れ、入口を見張る兵士にそっとコインを渡した。
「我が恋人だ。今宵一晩の逢瀬を許せ……いつものように」
「はっ」と兵士は、握り締めた銀色に鈍く輝くコインの感触を確かめながら、敬礼する。
「夜半に、恋人は戻す」
「はいはい。ビクター様、今宵も、甘い一夜を！」
「ふん、まぁな」とビクターは言い捨てると、女官の手を引いた。そして、暫くすると急いでその手を痛いほど引っ張って行く。
程なくして、ビクターは別邸の端にある自室に彼女を入れると、やっとホッとして肩で息をした。
「本当にドキドキ致しました。あなた様をここにお連れしたことがばれたら……」
「大丈夫ですわ、ビクター、ありがとう。恩に来ます」
女官は、頭に掛けていたマントをハラリと落とした。ベアトリスのろうたけて麗しい顔が現れた。その顔は僅かばかりの灯火の下でも、魅力的な美少女だという事が分かる。

「ほどなくして、ここにエクリース様が参ります。一旦寝たふりをして、それからアンネットからの贈り物があると言って、ここに来て下さるように申しました。何も疑っておりませんでした。実はこのような偽りを告げたのも、エクリース様は実はあなた様にお会いするのを、頑なに拒んでいたからです」
「わたしと会うのを、嫌がっていたと！？」

と、ベアトリスはショックを受けた。「エクリース様は、わたしがサミュエル様と婚約したのを、きっと恨んでおいでだったのね」
「いや、そうではなく」とビクターは慌てて遮った。「エクリース様は、理由は決して申しませんでしたが、あなた様をお嫌いになられたわけではないのです。むしろ本当は会いたがっておられました。けれども、本当のことは絶対に仰られず……。エクリース様は、身近なわたしから見ても、謎の多い方なので」
「謎の多い方……。そうね、わたしも時々そう思ったことがあったわ。ある時は朗らかなのに、時にふっと暗い顔をしたことが多々あって、わたしも狼狽したことがありました。他人の入り込めない内面を、持っていらっしゃるのね」

「お！　足音がしてきました。わたしは窓から外に出ておりますから、どうかベアトリス様の思いのたけをお伝え下さいませ。残念ながら、これがお二人の最後の逢瀬とあいなりましょう」
そう言い残すと、ビクターはさっと疾風のように窓から闇夜に消えた。
居残ったベアトリスは、マントを被りなおすとじっとしてエクリースの現れるのを待っていた。

☆　―　☆

―　☆

エクリースは、残念ながらビクターの伝えたことを疑いもしなかった。普段ビクターという人物は、あくまでもエクリースに忠実であり、主人を誑かすとは思えなかったのだ。
最近、エクリースの体力が弱ったせいか、未来を予知する能力や、不可思議な力が出てくることもなかったのだ。エクリースはすっかり油断していた。あの魔女と呼ばれているアンジェラの言葉を信じていたエクリースは、二度とベアトリスには会わないでいようと堅

く決心していたのだ。けれども、忠実な僕（しもべ）は、得てして主人の意を汲まないばかりか、反対のことをしてしまうことがあるものだ……。皮肉なことに、その忠実心のあまり。

エクリースがビクターの部屋に入って行くと、乏しい灯火に照らされたマント姿の女性の背中が見えた。

「アンネットか？　何かわたしに渡すものがあるとか」

女性は黙っている。

「もしかして、ベアトリスからの物とか……」

「そうです。これがプレゼントですわ」

その声を聞いた途端、エクリースの背筋に氷のような冷気が走った。くるりと振り返ったその人は、やはり紛れもなくベアトリス本人！　エクリースはさっと身を引いた。けれども、もう一瞥してしまった以上、どうしようもない。

そのベアトリスは、相変わらず愛らしい。そして暫く見ない間に、その愛らしさに成熟した女性の色香が漂い、益々美しい女性へと変貌を遂げている。これでは、サミュエルが本気になって愛していたとしても、不思議ではない。

「ベアトリス……」

「そのお顔色の悪さは、やはり本当でしたか！？　エクリース、あなたはもっと逞しく男らしく、そしてハンサムになっていったわね。でも、あなたの身体は蝕まれているのよ！　それを告げにきたのですわ」

それを聞くと、エクリースは横を向いた。もうベアトリスを正視できない。アンジェラの不吉な予言が成就しないことを祈るばかりだった。けれども、現実にはエクリースの脳裏に、川を流れ行く棺が見えていた。

「ああ、だめだ……だめだ……」

エクリースは手を額に置くと、よろめいた。ベアトリスがさっと

近寄って、エクリースを抱きとめる。そのベアトリスの吐く甘い吐息がエクリースの頬にかかったが、それは針で刺された様な痛みを伴う。

「あああああ！」とエクリースは叫んだ。それは絶望の叫びであり、愛する者を再び失うことの恐ろしさからだった。けれども、ベアトリスはそのことには気付かずに必死に囁いた。

「エクリース、よく聞いて！　もう決して料理女の作ったものは食べないで！　毒が入っているのです、砒素という毒が！　料理女を遣わしたのは誰か……それはイデット様ですわ」

非情な時計が、エクリースのポケットから床に落ち、そしてエクリースもその場に倒れた。精神と肉体共に打ち砕かれたエクリースの意識は、奈落の底へと遠ざかって行く……。

第十章　疫病　1

1

王宮の大聖堂では、サミュエルとベアトリスの結婚式が行われていた。大多数の出席者の中に、もちろんエクリースは居なかった。もともと招待されてはいなかったが、エクリースは絶望と毒のせいか、ベアトリスと会って以来ずっと寝込んでいたのだった。

鐘の音だけがエクリースの部屋にまで響き、うつらうつらしていたベッドで横たわるエクリースにも聞こえていた。けれどもそれは祝福の音（ね）ではなく、悪魔の叩く鐘の音にしか聞こえない。エクリースの瞳には、悔し涙が浮かんだ。ベアトリスの運命を変えることが出来なかったばかりか、それをただ指を咥えて見ているだけで何も出来ない無力な自分に、腹がたってもいたからだ。

すぐ側にビクターが心配そうに座り込んでいたが、エクリースの様子は、ただ失恋した若者としか写っていなかった。

「結婚式が終わったようだな」

「そうですね」とビクターは、やっと言葉を発することが出来たエクリースに答えた。

「あの時、ベアトリス様はびっくりしてわたしの名を呼んだので慌てて来て見ると、あなた様が床に倒れ、その横に時計が落ちていたのです。ご覧下さい。不思議なことに、時計が時を刻んでおります」

「その刻む時が何を意味するか、お前には分からないだろう……」

とエクリースは弱々しく呟いた。エクリースには分かっていた。刻まれる時は、ベアトリスの命の時間なのだと。

「パン粥は如何です？　わたしがお作り致しましたので、不味いと

は思いますが」
「いや、食べよう」とだけエクリースは言った。

☆　―　☆　―　☆

「何と申す!?　エクリース付きの料理女が外された!?」
と、サミュエルとベアトリスの婚姻のその宴の晩、イデットはそう告げられ飛び上がった。髪に差した羽飾りがビクッと震えている。
「そうでございます」とマルゴットは、イデットの前に平伏しながらそう告げた。
「では誰が料理を?」
「どうやら、従者のビクターのようでございますわ。あの、イデット様、これはひょっとして……」
「企みがばれたと申すのか?」
「多分」とマルゴットは言いにくそうに答えた。
「信じられぬ。このようなことがばれるとは!　又してもあのエクリースめ、おめおめと生き遂(おお)せているとは!」
「何をやっても、ダメではないでしょうか、イデット様。やはりあの王子は人間ではなく、ひょっとして“デスティ”の化身か、それともそれに護られている者かと」
「馬鹿を申すでないっ!」とイデットは喚いた。「呪われし王子だの、“デスティ”の化身だの、色々言われているけれども、結局あの者はいつも幸運に恵まれているではないか!　あらゆる企みをくぐり抜け、のうのうと生きておる。
　その上、可憐な乙女から好かれ、一体どこか呪われた者だというのか!?　わたしにはそうは思えぬ。むしろ、幸運な王子としか……だから怖いのじゃ。愛するサイラスの座を脅かすのではないかと、それが心配でならぬのじゃ」
　イデットは珍しく、わなわなと身を震わせた。
「怖いのじゃ……わたしは……」

マルゴットは、そううめく、氷の心を持つイデットを、じっと見つめていた。

☆　―　☆　―

☆

南へ向う、煌びやかな四頭立ての馬車の中では、幸せな若夫婦が乗り込んでいた。サミュエルは、新妻の肩を抱き、絶えずキスをし続ける。昨晩の初夜の余韻が、サミュエルをまだ燃え立たせていた。腕をベアトリスのスカートの下から差し入れ、やっと手に入れた獲物を可愛がるように、サミュエルはベアトリスの若い肉体を貪っていた。

ベアトリスは、それでも嫌がらず夫サミュエルのなすがままに身体を預けている。昨晩の出来事は、ベアトリスにとっては初体験だったが、サミュエルの手馴れたそれでいて優しい導きのままに、名実共に妻になったのだ。

微かに罪悪感を抱きつつも、ベアトリスはサミュエルを愛し始めていた。いや！　それは、錯覚だったのかも知れないが……。

「もうお止めになって」とベアトリスが初めてそう抗うと、サミュエルはやっとその手を止めた。

「済まない、我が妻よ。君が余りにも愛しいゆえに、わたしの気がどうにかなってしまいそうで……。だが、もうやめるよ、愛しい君。おや？　その涙は……？」

「これは……歓びの涙ですわ」とベアトリスはポツリと言ったが、それが嘘らしいのをサミュエルは感じ取っていた。

「もう疲れました、わたし」

「そうか、先は長い。寝るが良い、ベアトリス」

サミュエルはベアトリスの頬に軽くキスをすると、その身を離した。

窓から飛び行く景色をぼんやり見つめながらも、ベアトリスの脳裏には3日前のエクリースの様子を払拭することが出来なかった。

エクリースは、自分を見ると飛びずさり、目も合わさず、奇怪な叫び声を上げて倒れてしまったのだ。その真意は不明で、ベアトリスには何が何だか分からなかったが、慌てて駆け込んで来たビクターの導くままに、その忌まわしい別邸から逃げたのだった。

―　エクリース様。今頃、どうしていらっしゃるの？　わたしが、本当にお嫌いになってしまわれたのだわ！　それなのに、厚かましく現れたわたしに、激しい拒絶反応を示されたに違いない。でなければ、なぜあのような獣じみた叫び声など上げられたのか！？　すべてわたしが悪いのです。どうか、許して！　そして、決してお食事には手をつけないで下さいませ！　わたしにもう願うことは、そのことしかありません。エクリース様が、ご息災であられること…

…それしか。

けれども、世にも恐ろしいことが迫っているとは、誰もが想像もしていなかった。

2

2

亡き先の王妃ドロテア付きの侍女で、今でも王宮に主（ぬし）のように留まることを許されているハラレは、腹心の部下セシルの手紙を読み、不吉な予感に慄いていた。セシルは、ハラレの命でイデットの祖国、南の国に高名な侍女として使わされていたのだが、実際はスパイに他ならない。

そのセシルが、震える鵞ペンで書き記された文面は、確かに人を不安に陥れるものだった。

『……今、この国では得体の知れない疫病が流行りつつあります。もっと南方では、大方の貴族や金持ちが、その邸宅を捨てて山に逃げ出したとか！　どうやらこの恐ろしい病は、船乗りを通して、遠い国からやってきたようです。

ここ宮廷でも、加持祈祷や仰々しい祈りが盛んで、既に宮廷から脱出し北へ北へと逃れている者も出る有様。さすがに、ここの王、イデット様のお父上とそのご家族は去ろうとはなさいませんが、他国やよそ者を厳しく制限し、それに反した者達を見せしめに処刑する有様。

わたしも、何だか怖くて仕方ありません。もしハラレ様が宜しければ、わたしもこの任務を終えて、そちらに戻りとうございまするが……』

「ふん、何を申す！？　この弱虫めが！」

そう吐き捨てると、ハラレはその手紙を暖炉にくべた。もう秋も深まり、ほとんど冬に近い気候だ。

「高熱、悪寒、胸の痛み、激しい咳、そしていずれ呼吸が出来なく

なる……。以前にもそのような病が、冬場に流行ったことがあったな。わたしがまだ若い頃だったが、あの時は助かったが、今度それに罹患すれば、わたしも助からぬやも知れぬ」

めずらしく、強気なハラレも弱気に陥った。

「人は必ずいつかは死ぬが、わたしももう歳。今年の冬、乗り切れるかどうか……」

その時、侍女の一人が駆け込んで来た。

「ハラレ様！」

「なんじゃ、騒々しい」

「王様が、国境沿いの街道を全て閉鎖なされました！」

「なに！？　それは戦争でも起こったのか？」

「いえ！　もっと悪い事かも知れません。疫病でございます！　南からの旅人達は、一人だにこの国に入れては成らぬとの仰せをお出しになりました！！」

「いよいよ来たのか」とハラレは呟いた。

「もっと恐ろしいことには、通りで人々が南からの者達や吟遊詩人達、旅芸人達を殺しているとの噂でございます！　ああ、恐ろしや！　病だけは、国境がありませんですから」

「目に見えぬ敵は、手怖いもの」

とハラレは、落ち着いて答えた。「神に祈るしか手は無さそうじゃな」

ハラレが心配した通り、瞬く間にその疫病はこの国に猛威を振るい出したのだった。

☆　―　☆　―

☆

その頃、エクリースは見事に体調を回復し、毎日の不味い食事を除けば極めて健康的に暮らしていた。相変わらず表情は淋しげだっ

たが、それでも若い身体だけは正直で、月一度のサイラスとの遊びも復活した。

そんなエクリースを、イデットは複雑な気持ちで眺めていたが、それ以上どうすることも出来ない。

それよりも、イデットはやはり疫病の方が心配になっていた。

「あなた、わたしとサイラスを、もっと北方の別荘へと行かせて下さいませ。近頃は何かと、嫌なことが多過ぎて、心休まることもございません。その上、サイラスはまだ小さい子供。そして、あなた様の跡継ぎでございますわ。安全な場所に隠遁させるのは、世の習いではありませぬか」

「そうだな……」と、王は思案した。自分は、民を捨てて逃げ出すことはできないが、愛息子を無事安全な場所に移動させるのは、この場合致し方ないかもしれない。敵には立ち向かえても、病には歯が立たないのだ。

「良かろう。直ぐ支度せよ」

「はい」と、イデットは明るく答えた。

そのイデットが足も軽々と部屋に入ると、マルゴットが何やら手にして立ち尽くしているではないか。

「イ、イデット様……お手紙が……ラウール様のお姉上からでございます。なにやら至急の」

「なんじゃ！」

マルゴットは無言で、その手紙を渡した。イデットはさっと目を通した。その直後、イデットのは彫像のように動かなくなり、視線は何処かをさ迷っている。

「イデット様？」とマルゴットは、静かに問いかける。「何か」

そしてマルゴットは気付いた。氷のような姫君、冷酷な王妃イデットの瞳から、涙がこぼれ落ちていることを。

「もしや！？」

それを聞くと、イデットはごくりと涙を飲み込んだ。その塩辛い

味は、又悲痛な味でもあった。イデットは機械的に答えた。
「ラウール様が……疫病で、お亡くなりになられた」
「ええっ！？」
「ラウール様……ラウール……どうして、わたしを待って下さらなかったのか！？　わたしの為に、生きては下さらなかったのか？　なぜじゃ？　なぜぇぇぇぇぇぇぇ～～～～！！」
イデットは激しい嗚咽に身体を曲げると、その拳でテーブルを打ちつけた。
「なぜ？　なぜじゃ！　あの者が生きているというのに……なぜ、ラウール様が死なねば成らぬ！？　息子、サイラスを一目見ずして、あのお若さで」
それからイデットはカッと目を見開いて言った。
「許さぬ！　エクリース！　あの者、今度こそ亡き者にしようぞ！」

3

サミュエルは焦っていた。自分の祖国で流行り出した疫病が、この国境にまで迫ってきていたからだ。

一週間前、サミュエル・グールデュールの館で晩餐会を開いたのだが、その数日後三人の出席した貴族と奥方達がバタバタと倒れたという話を聞くや、サミュエルは遂にこの屋敷を出て、もっと人里離れた山間部に行くことにした。義姉イデットが激怒しそうだったが、そんなことはどうでも良かった。愛する妻ベアトリスと自分の身が心配になったのだ。

この疫病は、罹患しない者も居ると言うし、罹患しても全員死んでしまうわけではない。けれども、この時代罹患すると、半数は死に至る恐ろしい病だった。（＊インフルエンザだと思われます）

サミュエルはベアトリスを急かし、取る物もとりあえず、山へ行く馬車に乗り込もうと準備していた。けれども、一人の従者が血相を変えてやってきて伝えた言葉は、全てを変えてしまった。

「サミュエル様！　大変でございます！　奥様がお倒れになりました！　ご準備中でしたが、突然気分が悪くなられて吐き、びっくりした侍女が抱き起こすと、凄い高熱で……」

「なにぃ!?」とサミュエルは飛び上がった。「まさか、、、、疫病か!?」

「さあ、分かりませんが今医者を呼んでおりまする」

「分かった、直ぐ行く。妻は寝室だな。山に篭るのは暫く延期だ」

「はい、承知致しました」

そう答えた従者も実は内心慄いていたのだ。ベアトリスの病が疫病であるとしたら、この屋敷に居る人々もはなはだ危ない。

「早く、ここを出るのだった」とサミュエルは後悔しながら、ベアトリスの寝室に入った。アンネットがその側に控えていたが、表情はかなり狼狽し、おろおろしていた。

「あ！　旦那様……」

「ベアトリスはどうだ！？」とサミュエルは、上から下がるベッド周りのベールの奥に横たわっている、ベアトリスの横顔を覗きながら聞く。

「非常なご高熱で。わたしは心配なのでございます。今まで、一度だってこのような重篤なご病気になったことのない、健康で溌剌としたお嬢様でございますのに！」

「昨日まで、なんともなかったし、食卓では山に行くことを楽しみにしていたな」

「はい。お嬢様は、山育ちでしたゆえ、とても楽しみにしておりました」

サミュエルはその言葉も聞かず、ベールをたくし上げて、ベッドに近寄った。

「旦那様！　お近くに寄ると危ないのでは」

「構わぬ！」とサミュエルは怒鳴った。そして、直ぐ近くまで寄ってきて、愛妻の額を触った。焼けるように熱く、息は荒い。その若々しかった頬は熱の為にどす赤く、苦しげな有様だ。

「ベアトリス！　ベアトリス！　わたしだ、分かるか？」

「今はまだお眠りになっております」

「いや、目を覚ましたぞ」

その通り、ベアトリスは目を少しだけ開け、まだ１９歳になるかならぬかの若い夫を見上げて、けれども苦しげに微笑んだ。サミュエルは、白い枕に散らしたその茶色の長い髪を撫でた。

「大丈夫か、ベアトリス。わたしはずっとここに居るぞ。お前はまだ若いから大丈夫だ、心配するな」

「はい、あなた」と、ベアトリスは擦れた声を振り絞った。「済み

ません、せっかく出かける所でしたのに、こんな時に足手まといになってしまって」

「何を言う！？　お前は大丈夫だ。ゆっくり寝ていると良くなる、きっと良くなる。わたしが治してみせるから、安心して寝ておればいいのだ」

「はい……ありがとうございます、あなた」とベアトリスは苦しそうにぜいぜいと答えた。サミュエルはその瞬間、ベアトリスが遠く果てに逝ってしまうのではないか、と感じてぞっとした。

けれどもそのような不吉な気持ちを追い払うと、その場に座り込んで看病し始めた。

やがて医者がやってきたが、医者の見立ては余り楽観できるものではなかった。

「サミュエル様、まことに言い難いのですが、奥方様は助からないかも知れませぬ」

「なにぃぃぃぃ」とサミュエルは医者に掴みかかる。「何を言うのだ！　妻はまだたったの１５歳だぞ！　それもいつも健康な女だった。それなのに……」

「もちろん、奇跡というものはございます。と言うより、あなた様の身も危ないと」

「黙れ、黙れ！　わたしは妻の側に居る。例え病にかかっても、わたしは後悔はしない！」

「それでは、くれぐれもお体おいたわり下さいませ」

サミュエルはがっくりとその場にへたり込んだ。

これは、イデットから命じられた政略結婚だった。けれども、今はサミュエルにとって、ベアトリスはかけがえの無い妻だ。陰謀や策略の渦の中で、ただ一度平安な時を持てたのだ。たった、数ヶ月だったが、この時を失いたくない！

「ベアトリス！　生きてくれ！　生きてわたしとずっと一緒に暮ら

すのだ、いいな」
　意識の無いベアトリスが、少しだけ頷いたような気がした。
「ああ、ベアトリス」とサミュエルは優しく言いかけた。けれども次のうわ言は、サミュエルを完璧に打ちのめしたのだった。
「エ……エクリース……わたしを嫌いに……ならないで……」

4

4

ベアトリスの部屋から悄然と出てきたサミュエルは、居間でぐいっと強い酒をあおった。酒が全てを忘れさせてくれるわけでもなく、いや、むしろもっと気持ちが荒む。

愛するベアトリスは、懸命の介抱も空しく既に瀕死の状態。それなのに、そのベアトリスの口から出るうわ言の数々は、ただただエクリースとの思い出だけのようだった。悲しみ、そして悔しさの涙がサミュエルの瞳を潤ませたが、けれどもそれが段々怒りに変わっていくのに、そんなに時間は必要ではなかった。ベアトリスを憐れむよりもずっと、エクリースに対する怒りが湧き起こるのだ。こんなにまでベアトリスの心を支配していたとは、サミュエルには思いもよらなかった。サミュエルは、自分がひと時優越感に陥っていたが、それが偽りだと悟ったのだ。

ベアトリスが心底愛していたのは、やはりエクリースだったとは！　サミュエルの拳は、テーブルに押し付けられ、乱れた髪が彼の蒼白で整った顔を覆う。

けれども、息を切らした従者が入って来たので、サミュエルの懊悩と嫉妬は止まった。

「サミュエル様！　奥方様が……奥方様が……」

ガバッとサミュエルは顔を上げた。従者の顔は引きつり、無念の様相を呈している。

「ベアトリス……！？」

「どうか、奥方様の所に行ってさし上げて下さいまし。もう奥方様は虫の息でございますゆえ」

サミュエルは従者の言葉を手で制すと、のろのろと立ち上がった。掻き雀られるような胸、震える心。このような恐怖感を、サミュエルは今まで味わったことがなかった。

「分かった。今行く」

そう短く答えると、サミュエルは最後の杯を飲み干した。

☆ ― ☆ ― ☆

バタバタとエクリースの別邸に入って来たのは、ビクターだった。

「何だ？　騒がしい」

「エクリース様。王宮中の者達が、迫り来る疫病にもうすっかり怯え切っております。皆、王宮を捨てて田舎に逃げようとして、見苦しい限り。さすがに王様はお逃げにはなりませんが、イデット様とサイラス様が、逃走の準備をなさっているとか……民を見捨てて」

「何が言いたい？」

そう静かに言うと、エクリースはやっと振り返った。手に持っているのは鈍い銀色の時計。

「おや、それは！　時を刻み始めた、兄上からの時計ですか」

「もう動いてはおらぬ」

その声は、限りなく虚無的だった。そしてその静かな声は、けれども余りにも静か過ぎた。

「え！？」

「少しずつ時の刻む音が小さくなっていったが、先ほど僕の手の中で、それは止まった」

エクリースは、その時計をテーブルの上にそっと置いた。

ベアトリスが死んだ。死んだのだ！　エクリースには、はっきりと分かっていた。遠くに居ても、彼女がどういう状態であるか、その時計が教えてくれていたのだ。けれども今それは、もう動かない。

「エクリース様？」とビクターは訝しがりながら、尋ねた。「それは……その意味するところは」

「ベアトリスはもうこの世には居ない」とエクリースは、簡潔に述べた。何の感情も交えずに……少なくとも、ビクターにはそう見えたが……。

「残念なことだがね」

既に知っていたのだ……15歳のベアトリスが自分に会った以上、こうなることは。

「しかし、あちらからは何のご連絡もございませんが」

「僕には分かる。僕にだけは！」

語尾が強く響き、初めて生の感情がどどーっと噴出してきていた。

「彼女のことが分かるんだよ。これ以上、失うものは無いという程に！　こんな苦しみは、無いという程にだ！　そして、アンネットが……彼女が泣き伏している様が、脳裏に浮かぶ。心から愛してくれていた、ベアトリスに仕えてくれていた、優しいが厳しい侍女、アンネット」

ビクターは暫く声が出なかった。エクリースは今までも、己の感情を余り表には出さなかったが、その悲痛な眼差しは始めて見たからだ。

「けれども、あなた様は……生きねばなりませぬ！」

と言うと、ビクターは魂の抜けたようなエクリースの肩を揺すった。

「皆、見えない敵に怯えて逃げて行きまする。あなた様も、ここから脱出すべきなのです！」

「それが出来るのか！」とエクリースはふいに怒鳴った。「父上が、わたしをここから出すはずが無いではないか！　ここに居て、その見えない恐ろしい敵を迎え撃たなければならないのだ、それが僕の運命だという事が分からないのか！！　怖気づいたのなら、お前だけ逃げるが良い」

それを聞くと、ビクターはムッとした。そして両手を離した。

「そんな事をわたしがするとでも！？　エクリース様、愛するお方を失って、あなたは気が動転しておられるのですね！　エクリース様らしくもないことを仰せとは！」

エクリースは、顔を上げた。その美麗な顔が歪み、口元まで涙がこぼれ落ちているではないか。ビクターは恥じた。

「ビクター！　ビクター……」

そのまだ少年らしい首をビクターに預けると、エクリースは激しく嗚咽を上げて泣き出した。ビクターはエクリースを抱きとめ、そしてその背中をいつまでも撫でていることしか出来なかった。

5

5

明日はイデットとサイラスが王宮を去り、遠い田舎に出立するという日、サイラスの我が儘な要求で、エクリースと会うことになった。

虚ろな表情をしているイデットは、愛人のラウールが死んだ衝撃が抜けずに悲しみの日々を送っており、ついうっかりサイラスの要求を呑んでしまったのだ。もちろんサイラスは喜び、しばしの別れの前に、大好きな“義兄エクリース”に会うのを楽しみに待っていた。けれどもイデットは、サイラスの身が心配で堪らず、早くここを出たかった。おまけに、忌まわしいエクリースが来るというので、もっと気が重くなる。

反対に無邪気なサイラスは、待ち遠しそうに廊下に出てエクリースを待っていた。その横顔がラウールに似ており、イデットはハッとする。

向こうからエクリースが足早にやって来たのは、その時だ。かなり長い王宮の廊下には、円柱の柱が何本か建っていたが、サイラスは思わず駆け寄ろうとした。

「いけませぬ、サイラス。エクリースを待つのです。将来の皇太子であるお前が駆け出すなど、おかしなこと。相手は父上から幽閉されている方ですよ。威厳を持ちなさい！」

「幽閉って？」

「お前には難しすぎます」

サイラスは愛らしい小首を傾げた。けれども、サイラスを見つけたエクリースは、遠くからニッコリ微笑んだ。毒も抜け、如何にも

健康そうに見える。それを見たイデットは目を背け、そっとその場を立ち去ろうとした。

けれども、

「待て！！」という、どこかキチガイじみた叫びが起ったとみるや、一本の円柱から誰かが飛び出してきたのだった。手には、長剣を持って。

サイラスは身体を強張らせ、思わずイデットは息子を掻き抱く。けれどもその主は、サイラスには目もくれず、真っ直ぐにエクリースに突進していた。近くに居たイデットの侍女達の悲鳴があがり、向こうからやって来ていたエクリースはハッとして目を見開くと立ち止まった。

「サミュエル……」

「そうだ！　妻は死んだ。お前の呪いにより、死んでしまったのだ！」

とサミュエルは廊下の真ん中で悲痛に吠えた。

「まぁ！　あの娘が……ベアトリスが」と、さすがのイデットの顔も青ざめる。

サミュエルは長剣をかざすと、対決の姿勢に入った。

「さぁ、エクリース！　妻の仇だ、かかってこい！」

「何を馬鹿なことを！」とエクリースも怒鳴り返した。「お前だけが悲しみに暮れていると思っているのか！　その悲しみはお前だけのものではないぞ！」

「なぜ？　なぜ、その事を知っているのだ！？　それこそおかしいではないか。わたしはまだ誰にもその事実を告げてはいないのに」とサミュエルは叫んだ。

「やっぱり、お前は悪魔だ！　そうでなければ、呪われている者なのだ！」

エクリースは黙り込んだ。後方から駆け寄って来たビクターは、

やはりエクリースが告げたことが真実だったと知った。けれども猛り狂ったサミュエルは、剣を下ろそうとはしない。

「さあ、ここで妻の名誉の為に決闘だ！　剣を抜くのだ、エクリース！　わたしは喜んで、亡き妻への愛の為に戦う」

「エクリース様、なりませぬ！　相手の挑発に乗っては、なりませぬぞ！」

とビクターが背後からエクリースを抱き止めようとしたが、エクリースはマントでパッとその手を払い除けた。そして静かに、自分の剣を抜く。短い装飾用の剣で、明らかに歩が悪いと分かるが、今はそれしかなかった。

侍女達が悲鳴を上げて、逃げていく中を、イデットだけはニタリと嗤っていた。

―　面白い！　わたしの代わりに、あの義弟がエクリースを倒してしまえば、事も全て終わる……。

侍女達の金切り声で、衛兵達が駆け込んで来た。

「寄るな！　わたし達は、双方合意のもとで決闘をしているのだ！」とサミュエルが怒鳴ると、エクリースも「その通り！」とだけ答えた。衛兵達は、周囲を取り囲んだが、ピタリとその動きを止めた。

「エクリース様、愚かなことです！　お止め下さい！」

とビクターが制したが、エクリースの心を止めることはもはや出来なかった。

「お前は呪われた王子だ、エクリース！」とサミュエルが怒鳴ると、エクリースは静かに応答した。

「それならば、お前は大嘘つきのペテン師だ、サミュエル。お前の亡き妻の従兄ジョーダン・ドリアンに送った手紙を、わたしと偽って書き、焚きつけたのはお前だな！　わたしは見たぞ、お前の筆跡を。ジョーダンに書いた手紙と同じだった！」

―なぜ、王子はその筆跡をご存知なのか！？

イデットと同時に、サミュエルもそう思った。けれどもサミュエルは、直ぐに行動に移した。素早い勢いで、エクリースに突きかかったのだ。エクリースは瞬間的に身をかわし、逆の立場になった。そして再び二人はがっしりと、剣を合わせた。火花が散り、互いの怒りと悲しみが辺りを巻き込む。

その時ビクターは気付いた。黒い霧が、どこからか現れて二人の若者を包んでいくのを。衛兵も又、少しずつ二人の姿を捉えることができなくなった。

「どうしたのだ、こ、これは！？」

衛兵が叫んでいる。イデットは言葉もなく、その場に立ち尽くした。サイラスは余りの恐怖に身を硬くして、イデットにしがみついていた。

6

黒い霧に包まれたエクリースとサミュエルの戦いは、続いていた。サミュエルはその霧がどこから出てきたのか知らなかったが、そんなことは今はもうどうでも良かった。サミュエルの義憤は、ただエクリースを倒すこと、それしかなかったのだ。

けれども、エクリース自身はその霧の正体を知っていた。それは自分の肩にある痣から出ていると言う事を。アンジェラは、これは“心の闇”を表す、と言った。その通りかも知れない。今のエクリースの怒りの全ては、今まで押さえに押さえていた自分の悲しみの発露に他ならないからだ。

この二人の若者達は揃いも揃って二人とも、相矛盾する愛憎によって、戦っていたのだった。そしてその戦いは、深い黒い霧の中。誰にも見えないところで。

廊下にひしめく衛兵達、ビクター、そしてイデット母子と侍女達は、その霧の正体が分からず、ただただ恐怖に包まれていただけだった。時々、剣と剣の打ち鳴らす音しか聞こえない。

「どうか、二人を引き離して下さい！　衛兵達、どうかこの霧の中へと！」

とビクターが懇願するのだが、衛兵達は恐れに支配されて金縛り状態になっていた。

「王様に知らせなければ」と誰かが言うと、廊下を急いで駆けて行く者があった。というより、逃げる口実で急いでいたのかも知れないが。

霧の中では、最初はひ弱そうに見えたエクリースの方が、その内

に段々優位になっていた。サミュエルは相手が自分より年下なのだが、優れた剣の使い手であることを悟った。

そして遂にサミュエルの剣が霧から飛び出し、床に転がったので、こちら側はワッと声をあげた。

エクリースは、サミュエルの喉仏すれすれに短剣を突きたてた。あと数ミリで、喉を掻き切る事が出来る。そしてサミュエルは、氷のように冷ややかにその剣を受け止めた。エクリースは息を切らしながらも、ピタリと止める。

「サミュエル、僕は君を殺したくない。けれども、あの悪意ある手紙を書いたのは、確かに君だな。そうだろう!?」

サミュエルは黙っている。

「君の意志ではなく、恐らく義姉イデット妃の命令なのだろうな」

「早く殺せ！　突きたてるがいい、この哀れな、妻を失くした夫であるわたしを！　お前は、わたしがベアトリスを奪ったと言いたいのだろう。けれども事実は違う。ベアトリスは、お前を愛したがゆえに亡くなったのだ！」

「恐らくそうかも知れない」とエクリースは答えた。「けれども、それは呪いなんかじゃない。それは……彼女の運命だったとしか今は言えないが……。僕はその運命を変えようとした、避けようとした。けれども、どうしてもそれは出来なかったんだ！　僕だって、ベアトリスを失いたくはなかった！」

サミュエルは、エクリースの言葉の中にある真実を感じ取った。不思議な共感が、サミュエルの心に芽生えて行く。

「済まない。わたしは、その手紙を確かに書いた。姉上からのご命令だったが……しかし、信じてくれ！　わたしはそれを書くのが嫌だったのだ！　けれども、逆らえなかった。本当だ」

エクリースはその言葉を聞きつつも、切っ先をサミュエルの喉元にじっと当てたままだ。

「信じよう。けれども、愛する人を失ったことには変わり無い。け

れども、もういい。君の言葉を聞くと、君は最後までベアトリスを愛していたんだと確信した」

「お前の怒りが解けないなら、このままわたしを殺せ！　そしてベアトリスの元に行かせてくれ！」

けれども、エクリースはスーッと剣を下ろした。いつの間にか、黒い霧が晴れていたことに、二人はやっと気づいた。周囲には、驚愕している人々が立ち尽くしている。

―　エクリースは油断している。今こそ、殺るのじゃ、サミュエル！

イデットは心の中で命じたが、サミュエルはうな垂れたまま立ち上がった。

「復讐は空しい……。例え何をしても、妻は帰って来ない」

その時、カツカツという足音がして、王がやって来た。そして二人の若者が、血だらけで突っ立って居るのを見つめた。床には、二棹の剣が落ちている。

「王様！　どうかわたしを捕らえて下さい。あなたの王子を殺めようと致しました」

とサミュエルが跪くと、イデットが叫んだ。

「いいえ、あなた！　悪いのは、エクリースでございますわ！　お聞き下さいまし、あなた。我が義弟サミュエルの妻、ベアトリスが亡くなったのです！　ここに居られるエクリース王子の呪いによって！」

「確かに、黒い不気味な霧がかかりました」と衛兵も付け加えた。

王は、エクリースに一歩近付いた。

「確かに、お前の周りには死者ばかりだな、エクリース」

「いいえ！　王様、それは違います。我妻は、疫病の毒牙にかかったまでのこと。王子に咎はありませぬ」とサミュエルが言うと、

「サミュエル、お前はエクリースをお庇いか？」とイデットがゆっ

くりと尋ねた。
「いいえ……庇うなど……」
「そうであろう。あなた、このままでは我が息子サイラスやわたしにまで、エクリースの呪いが降りかかるかもしれませぬ。是非とも、エクリースに罰を！　それとも……名誉の死を？　いかが？」
「処刑はできぬ」と王はきっぱりと言った。けれども、その顔には苦悩が滲む。
「衛兵！　直ぐにエクリース王子を、地下牢の最も深い場所へ。そこで、鉛と鉄で出来た格子の牢のなかで、両手両足に足枷を付けて放り込むように！」
「王様！　なにゆえ……」とビクターは悲痛に叫んだ。
「仕方ないのだ。王子が魔力を使えぬようにする為には」
「わたしは魔力など使っていない。けれども、咎はわたしにあるのかも知れません」
と静かにエクリースは言って、頭を下げた。

7

7

イデットと息子サイラスは、惨劇の翌日、早々に去って行き、王宮には王唯一人と忠誠を誓う従者達と兵士だけが残った。そして、エクリースに負けたサミュエルも又、悄然として居残っていた。サミュエルには、軽いが幾ばくかの怪我もあり、ベアトリスの亡骸しかない領館に戻る勇気が出なかったのだ。

そして、深い後悔もサミュエルを苛んでいた。己の憤怒のせいで、エクリースを牢に閉じ込めてしまったのだ。エクリースは亡き妻ベアトリスの“恋敵”だと見ていたが、今はもう空しさの残り香が微かにあるだけ。エクリースに対する怒りも、憚きも、憎しみすらも今は消え果てていた。

やがて、ベアトリスの葬儀に戻って来るよう従者に促されて始めて我に返り、南に戻る支度をし出した。一晩中かかって遠乗りをした疲れ切った馬を捨て、新たなる馬を探しに厩に来た所で、バタリとビクターに出会った。

ビクターはサミュエルを見るとさっとお辞儀をしたが、その瞳には何とも言えない怨念があるようにサミュエルには見え、彼は立ち止まった。

「ビクターか……一言話があるのだが」

「お話でしたら、もう結構でございます」

とビクターは従者とは思えぬぞんざいな返事を返した。

「いや、話ではなく……何と言うか……謝らなくてはならぬ」

「お謝りですと!?」

そう言うとビクターは顔を挙げた。その瞳には悔し涙が溢れそうになっていることに、サミュエルは気付き、思わず顔を俯けた。ビ

クターの気持ちは既に従者のそれというより、肉親の情に近かったのだ。それ程までにエクリースを慕うビクターが、今のサミュエルには羨ましくもあり、かつ妬ましい。

けれどもそれは又、エクリースが“呪いの王子”だけではないことを示していた。人から愛され、慕われ、そして涙される相手として……。そしてベアトリスも又、エクリースを秘かに愛していた。悔しいが、自分と結婚後もまだ忘れ切れずに。

それは何を意味するのだろうか？　それは、エクリースが愛されていたという事実に他ならない。闇の王“デスティ”なら、他人からそのように愛されるだろうか！？　次の瞬間、サミュエルは真実を知った。エクリースは、絶対に呪われた人間ではないことを。

「ビクター……済まなかった。わたしは、愛する妻を失って、気が動転していた。そして、何も考えもせず、全てをエクリース王子のせいにしてしまった。それと言うのも、わたしの気持ちが狭量で短気だったせいだ。人間が出来て居なかった……。

済まぬ！　本当に……」

「サミュエル様。エクリース様は、この先どうなるか分かりません」とビクターは震え声で答えた。「王様次第では、死罪になるのか、それとも拷問されてしまうのかどうか。まだ僅か１５歳の少年に過ぎませぬのに！」

「それはの、ビクター。王族たるもの、上に立つ者の宿命なのだ。残念だが……全ての責めを負わねばならぬときもあろう。

けれどもわたしは信じる。エクリース王子を。あの方は正しい方であり、絶対に呪わしい人物ではないと。魔法のような、忌まわしい雲の中でもわたしは確信したのだ。奇妙な……つまり“友情”のような、親しげなものをな。だからベアトリスは、彼を慕っていたのだなと悟った」

「では」とビクターはやっと顔を挙げた。その瞳が、幾分柔和に変化している。

「あの方をお信じになると」
「ああ」
そう答えると、サミュエルは淋しげな微笑を微かに浮かべた。
「わたしはこれからベアトリスの葬儀に南に戻る。けれども、わたしはエクリース王子のお味方だ……今、この瞬間から！　わたしは王子をお助けしようと思っている」
「それでは、それでは……」と言うビクターの声は、涙に震えた。
「エクリース様をお助けして下さるので」
「努力してみよう。その前に、わたしが疫病で倒れないように祈ってくれるのならば」
「お祈り致します！」とビクターは、ほとんど叫び声を上げた。
「神様が、あなたをお守り下さいます様に！」
それにはサミュエルは答えず、少しだけ笑みを浮かべただけだった。
「それでは、わたしは新しい馬を頂く。お前も、暮々も用心するようにな。王子が晴れて戻ってくるまで、辛抱してくれ」
「はい」とビクターは、塩辛い涙を飲み込みながら答えると、一礼した。
「ベアトリス様は、まことに残念でございました」
「ああ……そうだな。運命はむごいものだ」
そうひと言言うと、サミュエルは数人のお供の者と共に、厩に消えた。ビクターは長い間、頭(こうべ)を垂れたままだった。

☆　―　☆　―　☆

水滴の落ちるピシャピシャという音が、僅かに聞こえて来るだけの、光も通さない深い地底の牢では、エクリースが捕われていた。
王が命じた通りの、鉄と鉛で出来た格子の牢に、硬い木の手枷と足枷がエクリースの自由を完璧に奪っている。

鉄と鉛という相反する金属は、“魔術”を通さないと言われており、その昔魔女や魔法使いを疑われた囚人達が捕われていたと言う。そこでは、一体何人の人々が言われなき罪を着せられて、苦しみもがいていたことだろう。

エクリースは、時間の感覚が分からず、ぼんやりと、ほとんど一本の松明でしか見えない暗い牢内を見回していた。ここには、多分誰も来ないだろう。恐ろしい拷問道具を抱えた牢吏以外は。

そして、案の定誰かの足音がしてきた。上の方からこちらへと少しずつ下りて来る。エクリースは身構えた。今まで、実は本当の恐怖と言うものを知らなかったかもしれない。けれども今こそ、身を強張らす本物の恐怖に襲われて。

8

「あの駒鳥の歌は……きっと何かを暗示していたに違いない。僕には分かっていたんだ！　だのに、ベアトリスの運命を変えることが出来なかった。誰よりも愛しい人だったというのに……僕は無力だった。

剣ではサミュエルに勝ったが、その他の点では大敗だ。負けたんだ、全てに……負けてしまった。そして今、誰かが僕を苦しめにやって来る。誰だろう？　イデット妃か？　いや、そんなはずは無い！　だとしたら」

エクリースは悟った。それは男の足音ではなく、たった一人の女性の足音だと。疫病の畏れをもものともしない、それは密やかで残酷な足音。そして、とてつもない悲しみと憎悪を秘めた足音……。

それにしても、牢の番人は何をしているのだろう？　女性であろう人物を通すとは。

やがて、その足音はヒタヒタと身近に近付いてきて、遂にその姿をぼんやりした灯りの中に現した。その人物はガチャガチャと鍵を差し込み、スルリと中に入った。黒っぽいマントに包まれた顔は分からず、エクリースから少し離れてピタリと壁際で立ち止まると、その暗いマントの奥からエクリースをじっと見つめていた。

けれども、人物がやっと声を絞り出して初めて、それが誰なのかエクリースには分かった。

「エクリース王子！　わたしをお忘れでは無いでしょうね」

「ああ……ドリアン伯爵夫人では！」

「まこと、その通り。わたしはあなたをしばし逗留させた者でございます。けれどもそれが不幸の始まりでしたが」

その奥方の声は怖れと憎しみで震えていた。
「それがなぜここに？」
「あなたを殺しにですわ」と奥方は、静かにけれども不気味に述べた。エクリースはけれどもさほど驚かなかった。と言うより、この状態では何をされても、何の反抗も出来ないことを知っていたからだ。か弱い女性でも、今のエクリースを殺すのは、虫を捻りつぶすのと同じことだ。

「理由は何なのです」
「お黙りなさいまし、王子よ！　その理由はあなたこそが一番ご存知のはずですわ！」
「ベアトリス……」
「その通りよ！」と、奥方は我慢がならなくなって喚いた。「あの娘は、亡くなりました。疫病の毒牙にかかったのです。いいえ！　いいえ……そうではない。それは、あなた様のせいなのです。
なぜなら、わたしとクリフも又疫病に掛かりましたが、けれども病は治りました。なのに、わたしよりも若いベアトリスが……まだ１５歳になったばかりのあの若さ！　そして、初々しい花嫁が、わたしよりも先に亡くなるなど、なぜそういうことが起こるのでしょう！」
「それが定めだと、僕が言ったとしても、あなたはそれを信じるはずがないでしょうね」とエクリースは、一呼吸置いて答えた。「僕とても、その悲しみに打ち克つことは、未だ出来ていないというのに、母親であるあなたの悲しみは如何ばかりか」
「お黙りなさいまし、王子！　もう我慢ができませぬ！　あの子は、あなたと秘密裏に会っていたのですね。グールデュール夫人となっていたのに、あなたと秘かに逢引していたとは！　それは、あなたが誘惑していたとしか考えられませぬ！　あの子は、そんなふしだらな子ではなかった」

ドリアン伯爵夫人は、さっとマントを下ろした。髪を振り乱した、妖気漂う蒼白な顔が現れた。その手には、鈍く光る護身用のナイフが握られている。エクリースが身じろぎした拍子に、手足の枷に付いた鎖の音が牢内に響いた。

「もう逃げられませんわ、王子」

と奥方は、奇妙なほど冷めた表情で言う。けれども次のエクリースの言葉で、奥方の顔色が変わった。

「あなたも、アンジェラというロマの者の占いを信じていたのか」

「何ですと!?　アンジェラのことを何ゆえ知っている?」

「僕も会いました」とエクリースは短く答えた。「やはりそうでしたか……」

「では」と奥方はぜいぜい言いながら続けた。「アンジェラの予言通りだと言いたいのですか!　あなたに責めはないのですか?　だって……ベアトリスと会っていたのでしょう?」

「あの方はふしだらなことはなさらない」とエクリースはキッパリと言った。

「毒で衰弱しつつあった僕を心配してのこと。ですから、こっそりとやって来て、ずっと避けていたわたしと出会ってしまった。けれども、その時のわたしの衝撃は、怖ろしいほどでした」

「毒殺ですって!?」

「そうです。がそれは置いておくとして、奥方様、どうしてここにやって来られたのか、それは何となくわたしには分かります。イデット妃に懇願したのですね。イデット妃がここの牢吏に言いつけ、鍵を渡したのでしょう」

奥方のそのナイフを持つ手がわなわなと震えだし、立って居られないほどになった。

「なぜ……そこまで?」

「母の嘆きにつけ込む事が出来るのは、やはり母である方しかあり得ないと、そう感じたまでのこと。やはり図星だったとは!　長年

に渡り、イデット妃のわたしに対する憎しみは、余程のことだと思い知りました。あの方は、あらゆる人の憎悪を利用してまで僕を殺したいのだと」

奥方は何かを言おうとしたが、口をパクパクしただけで開くことが出来なかった。そしてナイフを取り落とした。

「ああ！　わたしは何という罪深いことをしようとしていたのでしょう！」

そう言うと、奥方は両手で顔を覆い、泣き伏した。奥方は今こそ、目が覚め自分の卑しい心を認識したのだった。

9

9

自らの恐ろしい罪に泣きじゃくりながら奥方が去った後、エクリースは再び一人ぼっちになった。目の前には奥方の落としたナイフが転がっているが、けれども鎖が邪魔でとても取れそうに無い。仮に取れたところで、この鎖を切ることは到底無理だ。

――もしも取れたら……あのナイフは僕の喉を自分で掻き切る為にあるんだ。

エクリースは絶望の果てに、そう感じた。エクリースのお守りとも言うべき時計も取り上げられ、枷の嵌った両手両足に白いシャツとズボンだけの姿では、何一つ出来ることは無い。今度足音がしたら、それは拷問に来た牢吏だけだろう。

そう思いつつ、エクリースはうとうとし始めた。そして……誰かのシクシクと忍び泣く声を聞いて、ガバッと飛び起きた。

目の前には、ボロボロの服を着た一人の若い女が泣いていたのだ！

「そんな！　ここに誰かが居るなんて！」

その叫び声で、若い女がこちらを向いた。そしてエクリースは悟ったのだった。その女の一部分が霞んでいることを！

「君は……だれ？」

「今はもうこの世には存在しておりませぬが、魂だけは未だにこの牢獄に捕われているものでございます」と女は答えた。その声は、木霊のようにか細く響く。

「わたしは無実の罪を着せられて、ここで死んでいきました……エレーヌという者ですわ。もう遥か昔のことですが、けれども魂はず

っとこの地下から出られませぬ」
「エレーヌ姫!?」とエクリースは叫んだ。「聞いたことがある……」
それはずっと昔。ジュリアが話してくれた残酷な物語。夫を毒殺したという罪で、エレーヌという姫君が捕らえられ、獄死したというのだった。けれども、その姫は屈辱的に責められても、最後まで自分ではないと言い張っていたと言う……。
「あの姫君が！」
「お分かりなのですか、あなたは。わたしのことに気付いた囚人は、誰も居なかったと言うのに」
エレーヌ姫の亡霊は、すっくと立ち上がった。けれどもその姿は、絶えずゆらゆらしているのだ。
「あなたには、人の嘆きが分かるのですね」
「と言うより、わたしがその嘆きの数々を引き起こしてきたと言われている。まさにその通りだが」
「いいえ！　嘆きを知っている者は、決して無慈悲な者ではありませぬ。そうでなければ、わたしが見えるはずが無い」
「しかしながら、嘆きばかり見えて、今の僕には幸福は見えないのです。わたしは愛しい誰よりも大切な人を……失った。いずれ僕も、あなたのようにここで朽ち果てるだろう。僕を憎んでいるある方が居る限り、僕の存在は危うい」
「わたしはここで朽ち果てた囚人を数々見てきましたわ。ですから、もう二度とその悲惨さを見たくは無いのでございます」
「僕は祈ろう。あなたの為に。そして僕がもしも助かったら、あなたはここから自由になれると誓う。あなたの墓に花を手向け、汚名を返上すると」
「そのお心だけで、わたしの魂が少しは楽になりました。わたしは永遠の平安の内に在りたいのでございます。ただそれだけでよいのです。わたしは見たのです。夫を殺したのは、わたしの侍女でした」
「その名は？」

「ハラレ」とエレーヌ姫は思いがけない名前を告げた。
「ハラレ！」とエクリースが叫んだので、姫はふと振り返った。「ご存知で？」
「わたしの母の侍女だった者だ」
「では！　あなたはエクリース王子！？」
「うん」とだけエクリースは呟いた。

「ハラレはあなたの母上に、不幸を運んで来たのですね。あの女は、不幸を呼ぶ者なのですわ！」
「では、母上が亡くなったのは……」
「ハラレの悪しき魂のなすゆえでしょう、恐らく」
エクリースは今聞いた話で、目が覚めたような気がした。
「それでは、母が亡くなったのは、あながち僕のせいだけではなかったのか……。ああ、約束いたします、姫よ。あなたの汚名を注ぐと！　もしも僕が自由になれたら」
「なれますとも、王子よ」と姫は初めて微笑んだ。「わたしには分かりますわ」
「それじゃ、“デスティ”とは？」
「存在しておりますわ」と姫はキッパリと告げた。
「どなたの心の中にでも。あなたの心にも在るのでございます。そしてわたしにも在りました。でもハラレはそれには気づいておりませぬ。不幸なことに、悪を成す者ほど、それには気付かないのですわ。自分の中の邪悪さに」
エレーヌ姫は静かに言うと、ふっと消えた。

10

10

春になり、疫病がやっと終息した頃、イデット妃とサイラスが田舎から戻って来た。二人に無事再会できた王は非常に喜んだが、イデットはまだエクリースが牢内で生き続けているのを聞いて不快に陥り、王に抗議した。

「あなた！　なぜに王子を殺さないのです！？　エクリースは地下牢に入れられたおかげで、逆に疫病から逃れたではありませぬか！」

けれども王は困惑したように答えた。

「いや……これ以上王子を閉じ込めている意味が無いと、最近わたしは思うようになった。明日にでも、王子を牢から出そうと思っているのだ」

「牢から、出すですと！？」とイデットは怒り狂う。「何ゆえにですか？」

「エクリースにこれ以上の罪は見つからぬ。その上、サミュエルとドリアン伯爵夫人からも、助命嘆願書が来たのでな」

「なんと！　ドリアンの奥方からも！？」

イデットはのけ反るばかりに驚いた。“殺意”という黒い情念に犯されたドリアン伯爵夫人に、自らナイフを手渡したのは数ヶ月前のこと。それなのに、夫人は自分の殺意を止めたばかりか、エクリースの助命まで願い出るとは！

―一体、これはどういうことじゃ？　あの腹黒い、悲しみに沈んでいた夫人に何が起こったのか？　……ひょっとして、またまたエクリースは、あの女に魔術をかけて誑かしてしまったのかも知れぬ。

それに、あろうことか我が義弟のサミュエルまでもが、あの王子に加担したとは！　ゆ、許せぬ。許せぬ～～！！

イデットの顔が引きつったのが分かったのか、王は不審げに妃を見つめた。
「どうした、イデット？　何か不愉快なことでも」
「そ、そんなことがあるはずがございませんわ」
とイデットは誤魔化した。「やはり、王子は王子。エクリース様をこの辺でお許しになるのが、寛大なるあなた様の栄光の証しとなりましょう」
「うん、そうだな。その通りじゃ、王妃！　まこと、そなたの言う通り」
と王は深く頷いた。その顔に、隠してはいるが、明らかにエクリースに対する愛情を秘めているのをイデットは感じ取り、益々憎しみを募らせた。
けれども彼女はにこやかに言う。
「それが良いですわ。あなたの寛大さには、臣下の者達も人民達もひたすら感謝するでしょう。それはわたしの願いでもありまする」
そして、イデットは俯きながら秘かに舌打ちした。

☆　―☆　―　☆

翌日、王の命令を携えたビクターが地下牢の入口に来ると、中からボロボロになり汚れきったシャツ姿に、乱れた長髪のエクリースが、牢吏に支えられて現れた。
眩しそうに目をパチパチした後にビクターを認めたエクリースは、ただ黙ってそちらによろよろと近寄って行く。そんなエクリースを、ビクターはしっかと抱き締めた。
「ビクター……」とだけしか、エクリースは言えなかった。
「エクリース様！　よくぞここまで辛抱して下さいました。わたしは本当に嬉しゅうございます」
エクリースは堪えきれずに、ポロポロと涙を流した。けれども次

の瞬間、
「ビクター、お前婚姻したか？」と聞いたのだった。
「何ゆえ、そのような……」と仰天したビクターだったが、「はい」と正直に答えた。
「やはりな……お前の服からは、芳しい香りがするゆえに」
それから、エクリースは言った。
「おめでとう、ビクター。花嫁を大切に」
今度は涙を流すのは、ビクターの番だった。
「済みませぬ、エクリース様。エクリース様が、地下でお苦しみなのに、わたしがそのような幸せを得ていいのかと……随分悩みましたが」
「いいのだ、ビクター。アンネットとは末永く幸せに暮らせ」
そう言うと、エクリースは涙と泥でくしゃくしゃになった顔をやっとほころばせた。

「何もかも知っているのだ、エクリース様は」とビクターは悟った。やはり不思議な方なのだ、この王子は。知らないようで知っており、惨めなようでそうではないと。
「さぁ、エクリース様。今日は何の日かご存知で？」
「何の日だろう？」
「あなた様の誕生日でございますよ、１６歳の！」
しばらく沈黙の後、エクリースはポツリと言った。
「そうか……気付いていなかった」
「さ、これでございます」とビクターが差し出したのは、亡き兄ブライト王子からの贈り物の時計だった。
「これは、わたしがこの日の為に、しっかりお守りしておいたものでございます」
エクリースはその錆びた時計を受け取ると、
「ありがとう」と一言言った。その時、エクリースには、その時計の針が少しだけ動いた気がした。

「僕が知らぬうちに、時が経っていたのか」
「そうですね。いつの間にか、あなた様も少し大人になられたということです。さあさあ、さっさと身を清めて、真新しい服を着て、大いに祝おうではありませぬか！　１６歳というと、ここでは成人式でございますよ」
「誰も来ない成人式、だろうな」
「いいえ！　とんでもない。サミュエル様が、もう既にお待ちでございます。あの方のこちらのお屋敷では、腕をかけた料理が山盛りとの事」
「そうか。この姿ではみっともないな」
「ですよね」とビクターは嬉しそうに言った。けれどもエクリースの身が弱っているのは明らかだった。ビクターはそろそろとエクリースを支えつつ、王宮近くに建つサミュエルの館へと誘(いざな)った。

第十一章　弟殺し　1

1

サミュエルの館で催された、エクリース王子の16歳の成人式の宴に現れたエクリース本人は、明らかに痛々しく衰弱しやせ衰えていた。けれどもその蒼白な顔の端正さは少しも損なわれてはおらず、相変わらず錐のような美しさは健在で、サミュエルも客人もほっとした。

人数は少数だが、サミュエルやビクター、そして新妻のアンネット、その他気の許せる人々だけが、陰ながらエクリースを祝ったのだ。その席は和やかで、エクリースは久し振りにふかふかのベッドで、心ゆくまで安眠することが出来た。

その噂を聞いた弟のサイラスは、つまらなさそうに乳母に告げたという。

「兄上の16歳の誕生日の宴に、僕も行きたかったなぁ～」

その話を聞いたイデットの顔が曇った。

「馬鹿な！　サイラスは未だに、エクリースを慕っているとは！」

そう罵りつつも、イデットは自分がエクリースを牢に追いやったおかげで、エクリースが疫病にも掛からずにいたことを後悔していた。

「どこまでも悪運の強い奴よの！　それをわたしが心ならずも手助けしていたとは……なんたる皮肉！」

そして夏が来る前には、エクリースはサミュエルの館で丁重に扱われ、見る見るうちに元気になって行った。

夏が来て自分の領地に戻る前日、サミュエルはエクリースに心から謝った。偽りの手紙を書いたことも認め、そしてエクリースを生涯守ると言う事を、ベアトリスの墓に堅く誓ったことまで。

エクリースは、この縁はベアトリスがもたらしてくれたものだと言う事を知った。そしてサミュエルを許した。愛する者を失った二人の若者達は、失った何かに代わり、友情というものを手に入れたのだった。

☆　―　☆

―　☆

サミュエルが去った館には、エクリースとビクター夫婦だけが残された。サミュエルは、エクリースにいつまでもそこに住んでいいと、従者達に告げていたのだ。

エクリースは、やっと自分のしたいことを気兼ねなく実行することにした。それは、牢内で現れたエレーヌ姫の墓に参り、それから彼女の霊に誓ったことを実行する為。誰も知らない約束だが、エクリースはエレーヌ姫の無念さを、我がことのように感じていた。それは、二人の共通点でもあった。

けれども、エレーヌ姫の事件を探るのは容易ではなかった。誰もがその名前を言うと、さっと顔色を変えて去って行く。

やがて、エレーヌ姫とは、東の領地に住んでいた代官に嫁いだ、エレーヌ・フォンテーンだということを知った。若干２１歳で、エレーヌ・フォンテーンは、夫殺しの罪を着せられ、牢内で拷問死したという。

フォンテーン家は、けれどもそのことを不名誉と恥じてか、表沙汰にはしなかったらしい。そして確かに、ハラレという名前の１５歳くらいの侍女が、事件の後、王宮に奉職したというのだ！　エレーヌの霊の言った通りだった。今から、約５０年ほど前の悲しい事

件だった。

「ビクター、実はな、明日わたしは東の領地に出かけていく予定だが」

「え？　それは又なぜに？」

「訳は聞くな」とだけエクリースは言った。「お前が行きたくなければ、わたし一人で行くが」

「まさか！　エクリース様お一人で、そんな場所に行かれるなど、一体何が起こるかわかりませぬ。わたしももちろん参りますぞ」

「お前には、もう直ぐ赤子が出来ると言うがな」とエクリースは微かに微笑みながら言った。「それなのに、愛する妻子を放って行けるのか？」

「ま、わたしは確かに良き夫ですが、けれどもその前に、あなた様の従者でございますからな」

「勝手にしろ」とエクリースは笑いながら言った。「けれども、油断はするなよ、ビクター」

「もちろん！　なにしろエクリース様の周りでは、何が起こるか分かりませぬから、ゆめゆめ用心は越したことはありませぬ」

「まあ、わたしの剣術も少しは上達しただろうし。ただし、このことは内密だ。そして、あのハラレには絶対に言うなよ」とエクリースは声を潜めた。その強張った表情を察したビクターは、「はっ」と身を正しながら答えた。

こうして、二人は危険な旅に出たのだった。

2

エクリースとビクターの二人が旅に出た頃、イデットは一人悶々としていた。愛するラウールを失った今、イデットの望みと言えば、愛息子サイラスを皇太子とし、必ずやこの国の次期王とすることだった。

けれどもその為には、やはりどうあってもエクリースが邪魔なのだ。王はサイラスを皇太子にすると常々言っていたが、それはあくまでも口約束に過ぎない。ちゃんとした証文を書くことを、今でも王は躊躇っていたのだ。それはエクリースに対する愛情が邪魔していることを、イデットはヒシヒシと感じ取っていた。

イデットは最近では、王と褥（しとね）を共にすることを拒んでいた。それは、次のお世継ぎを産むためのものであることは知っていたが、イデットは王の子を跡継ぎにする気はなく、ラウールの忘れ形見のサイラスを必ず跡継ぎにしたいがため。王の子を宿す気など、はなからなかったのだ。

けれども、そのようなイデットの態度を批判する者達がやはり出てきた。次の子供が息子であれ娘であれ、やはり皆が期待していたからだ。イデットが王を拒否するのは、やはり何かあるのでは、と少しずつ疑われてきていた。

老いたりとは言え、シスリー長老がその不自由な身体を王の元に運び、度々その点を突いていたし、ハラレは蛇のような視線を常にイデットに注ぎ、あらぬことを周囲に言いふらしていた。

ある日、イデットが廊下を侍女達と歩いていた時、向こう側からハラレと数人の取り巻き女達がやってきて、この二つのグループが

すれ違った。周囲の者達は、ハラハラしながら見つめていたが、案の定ハラレがつと立ち止まって仰々しくお辞儀すると、イデット妃に言いかけた。

「あらま、王妃様。今日はサイラス様は、ご一緒ではないのですか？　常に愛する息子とは離れられないのではないかと、案じておりますの」

ムッとしたイデットは振り返った。

「要らぬお世話でございます、ハラレ殿。息子はもう一人で遊べますわ」

「それはそれは！」とハラレは恐れ入ったという振りをした。

「それはそうと……サイラス様は、余り王様には似ておりませぬな」

「わたしに似ていると？」

「いいえ。おっほほほほほ。そのどちらにも、余り似ておりませぬ」

「何を仰りたいので？」

「誰か、知らぬ方に似ているのではと、ふとそう思いましてな。サイラス様は、この国の者とは感じられない、ご風貌であられますゆえ」

「では、エクリース王子は元の王妃に似ていると！？　笑止千万。エクリース王子は、黒髪黒い瞳ですわ。奥方様にはとても似ても似付かぬとか」

「確かに。けれども、すこしずつ王様の面に近付いているような気が致します。誰かと違って、元王妃様は不倫などという不道徳なことは絶対になさいませぬから」

「それはどういう意味じゃ！」と突然イデットは叫び、辺りがシーンと強張った。ピリピリした空気が辺りを包み、冷たいものが人々を取り巻く。

沈黙が少し続いたが、ハラレのけたたましい嗤いがそれを突き破った。

「まあ！　わたしとしたことが、とんだことを言いましたな。王妃様がそんなことをなさるとは、とても考えられませぬし」
「そんなこととは何なのじゃ！？　なんと無礼な！　お前は一体何を言いたいの！」
「いいえ、王妃様、ほんの戯言（ざれごと）でございます。わたしの言葉など、どうかお捨て置き下さいまし」
　ハラレは少しも動ぜず、ゆったりとお辞儀をすると、老女とは思えない速さでスタスタと足早に去って行った。あとに残ったイデットは身を震わせて、罵った。
「なんと無礼な者よ！　あれがただの侍女ならば、切り捨ててくれようぞ」
「まあまあ、お妃様、興奮なさらず。所詮、老人の嫌味なのですわ」とマルゴットが囁いた。「あちらの挑発に乗ってはいけませぬ」
「けれど……あの物言い……何か知っているのではないか、ハラレは？」
「単なる憶測でございますよ」とマルゴットは静かに言い含めた。
「こんな所で醜態をさらさせるのが、あの者の企みなのでは？」
「そうかも知れぬな。わたしとしたことが……もっと落ち着かなくては」
　イデットは深い吐息をついた。

☆　―　☆　―　☆

　イデットから離れ、自室にもどったハラレは上機嫌だった。イデットのうろたえた表情で、自分の憶測が当たっていると確信したからだ。
「あの者、確かに動揺しておったの。やはりサイラス様は、王の子ではないかも知れぬ。もしもそうとなれば、イデット妃の罪は重い。王ではない血の子供を、この国の世継ぎにするとは、大罪ぞ！」
「はい、さようですわね」と、侍女のダイアナが同意した。

「ま、噂のラウールという騎士は、疫病で亡くなったとセシルから伝言があった。これも天罰じゃな。今は、ラウールという騎士の肖像画を捜して居る所じゃ」

「ところでハラレ様、今朝エクリース王子様がビクターというお供と共に、いずこかへ出かけたそうですわ」とダイアナが耳打ちすると、ハラレの顔色が変わった。

「ほうお？　どちらへ？　今エクリース王子は、サミュエル様の館の一つに逗留しておるのでは？」

「行き先は分かりませぬが……どうやら東の方角へと去ったとかでございます」

「東！？」とハラレは鋭い目付きで言い返した。「それはまことか？」

「はい、例のスパイ達が見張っておりまして。用心深く、ひっそりと出て行かれたとか」

「東、のう……」

ハラレの狡猾な瞳には、何やらもやもやした邪悪な狼狽が浮かんでいた。

3

3

「フォンテーン家は、今は没落した田舎貴族の一つに過ぎません」と、道々馬を駆りながら、ビクターはエクリースに告げた。
「どこに住んでいるのやらも、東の方と言うだけで誰も知らないそうですが」
「そうか」
「それはそうと、なぜフォンテーン家をお探しで？」
「昔獄死した、エレーヌ姫という方の実家だそうだ」
「それが？」
「いや……今は何も言えないが」とエクリースは言葉を濁した。エクリースのような、異能者にとって、自分の不可思議な体験を話したとしても、何も信じてもらえないのがおちだからだ。
けれども、ビクターの方ではエクリースの行動には、絶対に必然性があるのをとっくに気付いていたのだが、賢明な従者であるビクターはそれ以上何も言わなかった。

フォンテーン家は、数十年前までは結構名の知られた領主だったが、行く先々で人々に尋ねても、大抵「さあ」と言ったきり首を捻るばかりだった。唯一人、もうかなり歳を取った老婆だけが、歯の欠けたシューシューと息の漏れる声でこう述べたのだが。
「そう言えば……フォンテーン家は、何とか姫が殺人の罪で亡くなったあと、その兄弟一族は名を変えて、何処かへ消えたのじゃが……」
「名を変えた？　一体どんな名に？」とエクリースが覗き込みながら聞くと、その老婆は眩しそうにエクリースを見上げたものだった。
「お前様は、どなたじゃえ？　天使のような清らかさと、澱（おり）の様に

どす黒い何かの二つをあわせ持つお方のようじゃな。幸せと不幸せの間に、常に宙ぶらりんで居る相じゃな。けれども、お前様の美しさは全てを覆い隠すようじゃ」

と老婆は深い吐息を付いたのだった。

「この方は卑しくもこの国の王子だぞ！　失敬な」と言おうとして、ビクターは慌てて口に蓋をした。

「名は知らぬの、旅のお方々」と老婆は続けた。「けれども、その古い館の跡はこの森の先に残っているかも知れぬ。ただし、かなりの年月放っておかれたので、多分相当傷み廃墟と化しているじゃろうが」

「いや、ありがとう。それだけ分かっただけでもありがたい」

そうニッコリ笑いかけると、エクリースは銀貨を一枚その皺くちゃの手に握らせた。

「ただし、この事は誰にも言って欲しくないのだが……」

「何か曰く因縁がありそうじゃ。じゃがわたしには関係ない。誰にも口外しないと約束しますぞ」

☆　―　☆

程なく東にどんどん進むと、老婆の述べたような深い森が現れた。その森を見た途端、エクリースの背筋に、ぞーっとした冷たいものが流れ、思わず顔をしかめたので、ビクターは振り返った。

「エクリース様、何かお感じになるので？」

「いや……何かは知らぬが、毎回森と言うものはわたしを飲み込むような気がして」

「とんだ弱気を！　ただの森ではありませぬか！」とビクターは嗤った。

「まぁそうだな」とエクリースも苦笑する。

☆　―

その時、視力が極端に良いビクターが、森の入口に何か赤い物を見つけた。
「何かございますよ！　あれは一体……？」
「あの色は、服か何かかな？」
二人の若者は目を見交わすと、直ぐに馬を駆けた。

その赤い色は、やはり女性の服だった。そして服だけではなく、それを纏った若い娘が倒れていたのだ。その顔は殴られたような青痣があり、そして裸足の白い足がそのスカートからはみ出している。顔色は蒼白だ。
「誰でしょう？　村娘のようですがね」とビクターが言う。「生きているのかな？」
エクリースは無言でヒラリと馬から下りると、その娘の脈を取った。間近で見ると、ベアトリスとは又違うが、案外整った顔立ちの娘だ。エクリースはその娘の脈を撮った瞬間、何かを感じ取って、飛び退った。なぜか胸が高鳴る。ベアトリスの時とは違う、何となく別の感情だ。
彼女は、ううんと呻いて目を開けた。深遠な湖のような碧い瞳が、エクリースを捉えた。
「あ！　わたしは……」
「動かないで」とエクリースは言った。「足が折れているか挫いているかのようだから」
とエクリースは優しく言いかけると、娘はうろたえた様な恥ずかしげな風情を見せた。ただの村娘にしては、どこか素振りがおかしい。
「君の名前は？」
「コレットと申します。あなたは？」
「エ……エリスだ」とエクリースが偽名を言ったので、ビクターは目を丸くした。
「エリス様、あなたはどこぞの騎士様でしょうか？」
と、まだ怯えの余韻を残したまま、その娘コレットが尋ねた。

「まぁね」とのみ、エクリースは答えた。「そう、騎士エリスだ」

4

4

コレットという娘は、一見してどこか普通の村娘という風情ではなかった。かと言って、貴族やお金持ちの娘という感じでも無い。歳の頃はベアトリスよりも少し上、17歳くらいで、少し上を向いた鼻筋や、碧い瞳、そして口角がかなり上がっていてそこが又魅力的でやや大人っぽい。そして着ている服も又、かなりケバケバしいのだ。

けれども、そのようなどこか風変わりなナリをしてはいるが、ハッとする美しさが男達を虜にするのは請け合いだった。

事実、ビクターはアンネットという妻がありながら、このコレットという娘の乱れたスカートから出ている白い脚を思わず生唾を飲み込みながら一瞥していた。

けれとも、エクリースの様子はどうも違うようだ。彼はコレットの脚を取ると、かなり機械的に右に左に動かし、やがて立ち上がると事務的に告げたのだった。

「コレットという者よ。脚は大丈夫のようだが、どこか殴られているようだな。若い女性に随分乱暴なことをした輩は一体どんな奴らなのだ？」

「お若い騎士エリス様」とコレットは媚を含んだ目付きで哀れっぽく言った。

「あちらの村の老人達ですわ。わたしが、若い男を誘惑しているというのです。そして逃げているわたしをここで捕まえ、あらぬ限りの乱暴狼藉をしたのです」

最後は、嘘かまことか涙が少し浮かんでいる。その潤んだ瞳は、男心をくすぐらざるを得ず、老人達がコレットを何となく危険視し

ている気も、あながち嘘ではないようだ。
「とにかく、君の家に連れて行こう。歩けるかな？」
「わたしの家は村にはありません。逆の方、森の近くなの」
と甘く囁くコレット。「騎士様……あなた、お綺麗ね」
「これ！　エク、エリス様に馴れ馴れしくするな！」とビクターは叱り付けた。
「分かりましたわ」とコレットはふくれっ面で答えると、立ち上がった。背が高く、今のエクリースと余り変わらない。そのくせ、胸の膨らみは一人前だ。

「では、騎士様。わたしを連れて行って下さるの？」
「馬に乗せて行こう」とエクリースが言うと、ビクターはその袖を引っ張った。
「こんなことをして、油を売っていいのですか？　それも見ず知らずの娘の家になど！？」
「いいではないか。そろそろ夕暮れだ。腹も減ったし」
とエクリースが微笑むと、
「そうこなくちゃ」とコレットは言った。「でも、騎士様。ご恩は忘れませんわ。粗末な家ですけど……兄も居ますし、お泊りになるなら一部屋開いていましてよ」
「お金なら払う」とビクターが慌てて言った。
「それじゃ行こう。家までの道を教えてくれ」
「いいですよ、エリス様」
エクリースが腕を引っ張って乗せると、コレットはさっとその馬に乗り、素早くエクリースの腰に手を回した。

―　ちっ、こいつ、男を誑し込む術を完璧手中にしておるな。

ビクターは舌打ちした。
「あの森に向って！」

「あの森……どこか奇妙な森だな」とエクリースが言うと、コレットの顔色が変わった。
「そうよ。あの森……“人食い森”と村人は言ってるわ」
「なるほど……“人食い森”か。道理で、何だか胸騒ぎがすると思った」
とエクリースは呟いた。

☆　―　☆

―　☆

「イデット様。オルゴール機械工、ゴメスを連れてまいりました」
マルゴットの声で、祖国で好んでいた飲み物、チョコレートを飲んでいたイデットは顔を上げ、
「お通しなさい」と告げた。
程なくして、一人の髭だらけの小太り男がやって来て、恭しくお辞儀をした。
「イデット王妃様。このゴメスを直々にお呼びに下さり、光栄にございます」
「ゴメスか？　この国では、並ぶものがないと言う、優秀なオルゴール職人だな、そなた」
「それは、格別なお言葉。痛み入ります」
「まあそう鯱張(しゃちほこ)るでない」とイデットは妖艶に微笑む。
「わたしに、何か作って欲しいという仰せとか」
「そうじゃ。そなたの腕を見込んでの、、、素晴らしいオルゴールを作って欲しいのじゃ」
「どういう物が、お妃様のお気に入りでしょうや？」
ふふふっとイデットは、嗤った。
「わたしの物ではないのじゃ。それは贈り物」
「はあ、それはそれは！　大事な方への贈り物と？」
「そう。わたしの最も嫌いな者へのな」

「え?」とゴメスは初めてじっと、その小さな目でイデットを見つめた。「それは……」
「その内容は……奥の部屋で話す。誰も居ない場所で」
「は、はい」
「その者を暗殺することが出来る、お前にしか作れぬ魅惑的な武器をな」

5

5

コレットがエクリースとビクターを案内した家は、森の淵に建っていた。この家もどこか風変わりな家で、馬の蹄の音で中から飛び出して来たのは、一人の若者だった。もじゃもじゃの赤い髪に、獅子っ鼻。けれども、一見乱暴そうな中にも狡猾で聡明そうな趣がある。

「コレット～！」と若者は両手を広げて叫んだ。

「ああ、兄さん！」と叫び返すコレット。

「あの男は、お前の兄なのか！？」とエクリースはコレットの耳元で聞いた。

「そうよ」とコレットはちらっとエクリースに振り返る。「騎士エリス様。兄は猟師をしているの。僅かばかりの畑と猟で、あたし達何とか暮らしていけてるの」

「そうか」とエクリースは事務的に答えた。

それから直ぐにコレットは、馬から飛び降り、兄に抱きついた。

「兄さん！　この方々がわたしを救ってくれたの。今晩泊めて上げてよ」

胡散臭そうに、兄はエクリースとビクターを眺めたが、妹が裸足でそして顔に痣が在るのに気付き、仕方なく片手を差し出した。

「俺はリアム。妹を助けてくれたそうで、ありがたい。今晩はここに泊まってくれ。食べ物も、鹿の肉ならあるからな」

「兄さん、この方々は騎士様とそのお供の方よ。もっと丁寧にね」

「ああそうか」とリアムは素っ気無く言った。「確かに、違えねぇや。お偉い方のように見えるしな」

ビクターは、兄リアムの粗暴な言い方にムカついていたが、如何

にも雨が降りそうな天気に、腹が立つがリアムの誘いに乗らざるを得ないようだと感じた。

エクリースは幾分笑いを含みながら、馬から優雅に降りて、リアムの手を握り返した。

「騎士様とは言え、まだほんの少年のようだな」と不躾なリアムの声がした。

「そう、わたしはまだ若干16歳でエリスと申します。宿を貸して下さるようで、とてもありがたい、リアム殿」

「ふん」とリアムは鼻を鳴らす。「まあいいや。粗末な家だが、泊まっていきな」

「兄の失礼な振る舞い、ごめんなさい」とコレットはエクリースに囁く。

「兄は人間不信なの。色々あって……」

「君がどんな目に合ったか知っているから、兄上の心配も分かるよ」とエクリースは言った。

「お前が、村の若い奴らに色目を使うからだ。村人達には近寄らぬようにと、あれだけ言っているのに！」と兄リアムは嘆いた。

「あら。色目なんか使っていないわよ、わたし」

とコレットは反論する。「ただ、村で祭があると聞いたから、ちょっと寄ってみたまでよ」

「それがいかんのだ！」とリアムは気色ばんで、妹を怒鳴りつけた。

「まあまあまあ」とビクターが割って入る。「遠くで雷が鳴っている。早く中に入らせて頂くよ」

「嵐が来そうね」とコレットは呟いた。「恐ろしい嵐のような気がする……」

☆

☆ ― ☆ ―

兄妹が予測したように、直に嵐がやって来て、激しい雨が窓や扉を叩いた。けれども室内は暖かく、コレットはリアムの獲った鹿肉を料理し、部屋にはプーンと良い臭いが満ちている。奇妙な兄妹だが、家の中にはどこか寛いだ雰囲気が漂い、エクリースは心地良い疲労感と美味しい料理に舌鼓を打った。王宮にも、ジュリアの家でも感じなかったスパイシーな美味しさだ。

「この料理は、珍しいな」とエクリースが誉めると、

「そりゃそうだ。俺達の先祖代々の料理だからな」

とリアムが得意そうに言った。

「先祖はこちらではないと？」とビクターが聞くと、リアムは頷いた。

「そう。この森の向こう側だそうだ」

これを聞いて、エクリースとビクターは互いに顔を見合わせる。

「森の向こう側？　……と言えば、フォンテーンと言う者の領地だった場所かな？」

とエクリースがさり気なく聞いた。

「あたし、聞いたことがあるわ、その名前！」とコレットが叫んだ。

「やっぱり」とビクターは一人呟く。

「あたしの父が、その名前をよく言ってた。昔の領主様だったんだって」

「え！　本当に！？」と思わずエクリースは身を乗り出した。その時、外では落雷が近くに落ち、物凄い轟音が響いた。

「ええ、本当」と落雷の直後、コレットは自慢げに答えた。「両親はそこで働いていたらしいのよ」

「それじゃ……お父上は？」

「死んだ。っつーかな、あの森に行ったまま出て来ない。もう三年も前の話だ」

と兄リアムが陰気臭く言う。

「死んだかも、って？」

「あの森は、以前も言ったでしょ。“人食い森”なのよ！」
コレットが恐ろしげに叫ぶ。
「“人食い森”か。面白いな」
「ねぇ騎士様、これは本当らしいのよ。村人達もそう言っているし、あの森から出て来た人は誰も居ないの。面白いなんて言っている場合じゃないわよ」
「じゃあ、あの向こうに行くには？」
「そう、森を通らず遠回りをするの。でもそこには、人間くらいの蛭（ひる）が居る沼があるって話よ。でも……大抵はそこを通って行くの。多分、両親もそこから来たんだから。沼にさえ近寄らなければ、何とかなるわよ。まあ、最低一週間は掛かるみたいだけど」
「一週間、か」とエクリースは溜息を付いた。

6

6

王宮の最奥の隠れ家のようなハラレの部屋では、今しもハラレがそのしなびた手で頬杖を突いていた。最悪な報告があったのだ。エクリース王子が東へと向かい、あちこちで“フォンテーン家”のことを尋ねているというスパイ達の報告があったばかり。ハラレは浮かなかった。

――あの王子。もしや、わたしの過去を探ろうというのではないだろうな？　あれはもう半世紀前のこと。もうはや、わたしでさえ忘れておったというのに……まさか、あのエレーヌ姫のことでは！？

まさかの！　あのことは誰も知らぬはずじゃったが。

けれど、エクリース王子は油断なら無いお方じゃ。あの涼しげな瞳とお姿で、何を考えているのやら分からぬ。どうやら、わたしには知らぬ何かの能力をお持ちと見えるし……。

いや！　考え過ぎであろう。あのことがばれる筈が無いではないか！　知ってるのは、もはやわたしのみ。けれどもなにやら胸騒ぎが……。

「ハラレ様！」と甲高い侍女ダイアナの声で、ハラレはハッと我に返った。

「何じゃな？　そんなに慌てた声で叫ぶとは」

「申し訳ございません、ハラレ様。けれども、セシル様より、亡きラウール様の絵姿が送られて参りましたゆえ、直ぐにでも……」

「おお、左様か！　それはそれは」

ハラレは作り笑いを浮かべると、立ち上がった。ダイアナは腕に何やら重たそうな物を持っている。それは赤い布で覆われてはいた

が。大きさはそれ程でもないが、肖像画としてはまあまあの大きさだった。

「直ぐにこちらへ！」とハラレは呼び込んだ。ダイアナは静々とそれを運び入れ、誰も居ないと見るや、ハラレはその布をさっと取り払う。そして直後、「おおっ！！」と叫び、ダイアナも又、声無き声を上げて生唾をぐっと飲み込んだ。

「サイラス様に、よく似ていらっしゃるのぉ、ダイアナ？」

「ですよね」とダイアナも同意した。

その肖像画には、見目麗しい南方風の若者が描かれていた。肩までの長い黒髪、夢見るような碧い瞳、そして斜交いに見つめるその色っぽい視線。どれを取っても素晴らしい。

「これでは、イデット様が夢中になられるのも無理は無いというものじゃな」

「エクリース様も比類ないお美しさですが、けれどもまだ少年の面影がお強く、成人した男性としての魅力はまだまだですわね」とダイアナもうっとりしながら言う。

「じゃが、運命は非情よの。既に死神がこの若者を黄泉の国へと連れて行ったとは」

「ほんに、お可哀想に」

「何を同情しておる！　この若者は、イデット様を我が物とした不貞の輩ぞ！　罰が下ったのじゃ！　サイラス様をこの国の跡継ぎと成そうとした罰じゃ。王の息子でもないのに、イデット様も、大胆不敵なお方じゃの。けれどもそうはいかぬわ」

とハラレは皮肉っぽく言うと、再び赤い布をさっと掛けた。さも汚らわしそうに。

☆　―　☆　―　☆

夜も更けて、エクリースとビクターは汚い一室に案内された。本

来なら、家来とは寝ないのだが、この最仕方が無い。二人は粗末な板張りのベッドに横になった。

「不思議ですね……ここの兄妹は」

とビクターが口を開くと、エクリースも「うん」と答えた。

「それに、両親がフォンテーン家に出入りしていた使用人の子供だったとは！　妙なめぐり合わせです」

「世間は狭いな」とエクリースがポツンと言う。

「聞くところによると、フォンテーン家は、約４０年ほど前に没落してしまったとか。それからはどうなったか、あの兄妹でさえ知らない……。せっかくいい所まで来たのに」

「そうだな」

「それに、“人食い森”だとは！　ああ、クワバラクワバラ」

「わたしは明日、その森に行って見る」

「ええっ!?」とビクターはびっくりして、エクリースを見つめた。

「遠回りしませんか？　そちらの方が……良いような」

「じゃあ、お前は、人間並みの蛭（ひる）の沼の方がいいのかい？」

と悪戯っぽくエクリースが聞くと、

「い、いえ……その、わたしはどちらも嫌いでね」とビクターは肩をそびやかす。

「大丈夫だよ、ビクター。最も怖いのは、人間さ。そのどす黒さにおいても狡猾さにおいても、又企みにおいても、人間を凌駕するものは居ない」

「ですが、わたしは魑魅魍魎も好きではありませぬ」

ビクターは呆れたように言うと、エクリースは微かに微笑んだ。

「わたしには、もう失う怖さは無い。ベアトリスを失ってからは、何も怖くなくなった」

7

7

オルゴール職人のゴメスが恭しく捧げ持つ品には、紫色の布が掛かっていた。侍女のダイアナは、さり気なくゴメスをイデット妃の部屋の奥の一室に案内する。そして辺りを確かめながら、ドアを閉じた。

「誰にも見られていませんね」とのんびり屋のダイアナとしては、珍しく念を押す。

「もちろんですとも！」とゴメスは答えた。

「それじゃ、イデット様がおいでになります」

そう言うと、ダイアナは下がり、入れ違いにイデットが現れた。

「どうじゃ、出来たのか？　随分早かったの」

「それはもちろんでございますよ。イデット様のお頼みとあらば」

「どれ、見せてごらん」と言うと、イデットはもどかしげにそれを手に取り、紫色の布を取り払った。

燦然と輝く宝石に彩られ、見事な彫金に飾られたオルゴールが出て来た。

「おお！　これはまこと素晴らしい品じゃ！」

「けれどもイデット様。決して直ぐに開けてはなりませぬ。横の鍵を廻してからでないと、大層危険でございますゆえ」

「ははぁ～、そうか」

イデットが納得すると、ゴメスは大切そうに鍵を廻し、ゆっくりと蓋を開けた。物悲しい音色が流れて来ると同時に、鋭い矢が少しだけ飛び出してきた。

「この曲は、『待ちくたびれた駒鳥』の歌じゃな」

「はい、さようで」

「まことに、エクリースの最期に相応しい曲じゃ。おっほほほほ」

とイデットは口元を手で優雅にかざすと、邪悪げに嗤った。
「この曲をご指名されたわけは？」
「それは聞くな、ゴメス！」と途端に険しい顔になるイデットだった。
「それにしても、素晴らしい矢だこと！」
「銀の矢にございます。今はこれだけですが、鍵を廻さずに蓋を開けると……」
「その矢は、開けた者に刺さるというわけじゃな？」
「はい。まことにその通りで」
「なかなかよく出来た細工じゃ。気に入ったぞ。褒美を取らす」
「けれども決して鍵を廻さずに蓋を開けませぬように！　それだけはご注意を」
「案ずるな。これを開けるのは、只一人だけじゃ。それまでこれは毒を塗って封印され、紫色のリボンで飾られる。そのリボンを開けたものは、もう二度と……ふっふっふ」
　イデットの脳裏には、その小さいが鋭い毒矢が刺さり、悶え苦しむエクリースの姿が浮かんでいたのだった。

☆　―　☆

―　☆

「本当に行くおつもりですか！？」とビクターがすがるように尋ねると、
「もちろん」とエクリースはダメ出しをした。翌朝のことだ。
「騎士様は冒険がお好きなのね」と、横で粗末な朝御飯の支度をしていたコレットが皮肉っぽく言うが、エクリースは全く意に介していないようだ。
「冒険がお好きなのではありませんよ！」とビクターはコレットに噛み付いた。「エリス様には、何か目的がおありのようなのです」

「正直な所、フォンテーン家の墓を探したいのでね」
とエクリースは遂に述べた。

「フォンテーン家の……墓……？」と兄のリアムがぼそぼそと呟いた。
「何か知ってるの？」とコレットが気負いこんで聞くと、
「ああ、呪いの墓の噂話は、父から少しだけ聞いたことがある。あれは、祖父ちゃんの頃の話だったようだ」とリアムはぶるっと震えながら答えた。
「そんな墓に、なぜあんたはそんなに興味を持つ？」
とリアムは目を細めながら、エクリースに向いた。「それも、まだ若い騎士様が」
「まあ、それはともかく」とエクリースは空惚けた。「このパンは美味いな」
「妹は料理の達人でね」とリアムが微笑みながら言う。
「だが、お若い騎士様だか何だか知らないが……あんた、秘密を握っているんじゃないのかな」
「秘密？」とエクリースは言う。「それを言うなら、あなた方だって……何かあるんだろう？」
言われた兄妹は、互いに顔を見合わせた。気まずい沈黙の後、突然エクリースの時計がポケットの中で飛び跳ね、鋭いベル音を響かせた。
「ど、どうして！？　兄上様の時計が！」
とビクターは椅子から飛び上がる。「止まっていたはずでは？」
「さあ、どうだろう」とエクリースは呟いた。
「どうやら、招かれざる客人のお出ましのようだな」
「あ！　兄さん！　村人達がやって来るわ！　手に手に、鍬やナイフを持って！！」

8

8

コレットの言った通り、村人達は手に手に斧や鍬、そして肉を切る鉈を持ってジリッジリッと近寄って来ていた。

「ちっ。又来やがったよ」とリアムが唸る。

「と言うのは、時々こういうことがあるのか？」

とエクリースは、壊れた窓から覗きながら問いかけた。なぜなら、こんな状況だというのに、この兄妹、どこか妙に落ち着いていたからだ。

「大体、お前達に対して何か恨みでもあるのかい？　あの手にした武器の数々は半端じゃないようだし」とビクターも続く。

「言ってみれば……恐怖よ」とコレットが答えた。「奴ら、怖がってるの。でもあたし達、何にもしていないのに」

「と言うのは？」とエクリースが振り返る。その時の苛立った様子のコレットは、ハッとする美しさがあった。ただ、着ているボロ服や、顔の痣がそれを邪魔してはいるが。恐らく、髪を結い上げ絹の衣装に身をつつみ、ちゃんとしたマナーを身に付ければ、誰にも負けないレディになることだろう。

だからといって、多分ベアトリスには叶うまいが。

「最近は飢饉が襲い、馬や牛などの家畜が死ぬ。又バッタやイナゴと言った害虫が、麦穂を食い尽くす。それはなぜだか分からないが、村人達は領主様達に税を払わなくちゃならん。最近の疫病で、村人達の家族が死んでいる場合も多い。

けど、我らの家畜はピンピンしているし、俺達は疫病にも掛からなかった。そんなこんなで、俺らを恨んでいるんだろ。その上、妹

は別嬪だからな。奴ら、食えないんで娘を売ったりしてた。恐らく、嫉妬や憎しみ、そしてあわよくば妹を奪って、人買いにでも売りたいらしいぜ」

今聞いた村人達の窮状に、エクリースは言葉も無かった。

――知らなかった……。僕は地下牢に居て、自分だけを憐れんでいたから、まさかそんな事体になっていたとは！　是非とも、お父上に知らせなければならない。

それにしても、この兄妹を襲う気だとは、幾ら自分達が困窮しているとは言え、人の心は濁りきっていくものだな……。ともかく、この兄妹を救わなければ。

「分かった。お前達に加勢しよう」

とエクリースが言うと、兄妹はふふふっと嗤う。

「お客人に加勢はいらねぇよ」とリアムが言った。

「そうよ。騎士様は、黙って見ていればいいわ」とコレットまでそう言うのだ。

「何なんですかね、この兄妹は！　村人も村人だが、これは一体……」

「黙って見ていることだな、ビクター」とエクリースは耳打ちした。

「不思議なのだが……わたしはあの村人の背後に何かを見ている」

「え！？　一体全体何者を？」

ビクターの問いかけに、エクリースは目を細めて遠く、村人達一団を見つめていたが、

「いや、分からぬ」と答えただけだった。「誰だか……ぼんやりと影がするのだが」

二人が言い合っている間に、リアムが何やら手に取りたった一人で出て行くではないか。

「リアム！　一人で大丈夫なのか！！」とビクターが取りすがると、

「放っておけ」とエクリースが言った。「あれを見ろよ」
「ええ？」
ビクターが振り向くと、リアムの持っている物は、石投げ器である事が分かったが、単なる道具ではなく、紫色の怪しい光を放っている。ビクターがそれを振り回すと、その光は段々大きくなって行くのだった。
「じゃ行って来るぜ」
リアムはコレットにウインクすると、ワワワワワ～～～～！という奇声を発しながら、扉を開け疾走して行った。

「何なんだ、あれは！」とビクターは驚愕の叫び声を上げた。
「まあ見ていてよ、従者さんっ」とコレットはケロリと言ってのける。
けれども、エクリースは「あっ」と言う叫び声を上げた。紫色の光の中にぼんやり見えて居たのは、あのエレーヌ姫らしき姿だった。その姿は、今は夜叉のように、キッと村人達を睨んでいるではないか！
「エレーヌ姫！」
このエクリースの声を聞くと、コレットの顔がサーッと変わった。
「なぜそのお方の名を！？」
「それは」と言おうとして、エクリースはもっと恐ろしい姿を目にしてしまったのだった。
村人達の一団の先頭に立っている、他人には見えぬ何者かの姿……それは、ハラレの生霊（いきりょう）！　まだ随分若い頃らしいが、それはまごうかた無きハラレ！　目をカッと見開き、エレーヌ姫を包む紫色の炎のようなメラメラした禍々（まがまが）しい光を、睨みつけているのだった。

9

9

薬を飲んでいたハイラが突然苦悶の表情を浮かべ、胸を押さえたので、側に居る侍女が慌ててハイラの元に駆けつけた。ハイラは既に老齢の身。何が起こってもおかしくはないのだったが、けれどもハイラはその侍女の手を払い除けた。

「ええい！　わたしは何ともないぞえ！」

「け、けれども……」

「何とも無いと言っておるではないか！　ただ」

「ただ？」

「いや……別に」

そう答えるハイラの目は、どこか遠くを見つめており、心もここには存在していないかのようだった。

今ハイラは自室には居るが、けれども実際はどこかにさ迷っているような状態にあった。自分の周りには、見知らぬ人々が鍬や鎌などを持って振り回しており、そして目の前には、忘れもしないエレーヌ姫が、髪を振り乱して自分をじっと虚ろな表情で見つめているのだった。そして、その横にはなぜかエクリースの姿が……。

「恐ろしや！」と思わず、強気のハイラもそう叫ぶと、両手を頭上に振り上げた。

「ハイラ様！　お気を確かに！　何があったのですか」

と侍女がぞっとして言いかけると、ハラレは振り返った。その瞳は老女とは思えないほどギラギラと瞬き、何やら不気味な雰囲気を辺りに漂わせているのだ。侍女は思わず後退りをした。

けれどもやがて、ハイラはハッと正気に返り、テーブルの上に突っ伏したのだった。やっと上げた目は元通りになってはいたが、額

からは冷たい汗を垂らしていた。
侍女は冷たい水で塗らしたハンカチを、ハイラの額に当てた。
「ハイラ様……一体何が起こったのでございますか」
「いや……何かの発作であろう……」
「医師を呼びますか？」
「ふん。この王宮の医師など、盆暗なヤブ医者ばかりじゃ。ドロテア様ですら治せなかった医師達が、何を出来ると言う！？　疫病の時すら、医師は真っ先に逃げていたではないか！」
とハラレは毒づいた。

けれども侍女を下がらせた後、ハイラは先ほど見た幻とも幻影とも白昼夢ともつかない体験を思い出し、物思いに耽っていた。
分かったことは、エクリースが自分が長年隠し通してきたエレーヌ・フォンテーンの秘密を知っており、そしてどうやらその為にここを出奔したということだった。自分の秘密を恐らく知っているであろうエクリースを、このままには出来ない！
ハイラは色々企みを巡らした。かくして、エクリースを狙う者は二人に増えたが、けれどもハイラはもっと老獪だった。ハイラは、イデットとエクリースの両方を滅ぼすことができないか、毎刻それぱかりを思案するようになった。
そして決心した。エクリースを、生前エレーヌ姫の住んでいた場所に辿り着く前に、何としてでも王宮に連れ戻すこと。そして、エクリースを葬り去ること。それだけに腐心していた。

☆　―　☆　―　☆

紫色の光に巻かれて突進するリアムの姿を見た村人達は、一旦は突き進んだものの、けれどもある時を堺に我に返ったのか、呆然として自分達が持つ鎌や鍬などを取り落とした。
「ほらね、いつもこうなの」とコレットが言う。「あの村人達って

案外弱虫でさ」
「違うな」とエクリースは反論した。
「何かがあの村人達を意のままにしているのだ、操っているのだよ。けれどもそれは今消滅した。すると、あの者ども自分の目的を忘れ去ったようだ。決してリアムの力ではない」
「そんな事ぐらい知ってる」とコレットはむくれて言った。「あの紫色の石投げ器のせいでしょ？　いつもそうなんだもの、あの石投げ器にかなう者はないのよ」
「確かに。だがコレットとやら、あの石投げ器はどこから手に入れた？」
「そ、それは」
そこまで言うと、コレットは岩のように口が堅くなった。

エクリースには見えていた。エレーヌ姫の幻が、勝ち誇ったように雄叫びを上げたのを。けれども、エクリースの方を見つめたその瞳には、底知れぬ悲しみが宿っていたのも。
やがてエレーヌ姫の幻も消え果ると、村人達は我先にと逃げ帰って行き、あとには意気揚々とリアムが引き上げて来たのだった。
「どうだい、今の有様を見たか？　凄かっただろ」
と得意そうにリアムがそう言ったが、エクリースとビクターは黙り込んだままだった。
「どうしたんだ？　俺の実力が分からないのか」
「兄さん」とコレットが咳払いをしながらたしなめた。
「この石投げ器は、どこから持って来たのかって、エリス様が……。この石投げ器の秘密を知っているらしいの」
「えっ！？」とリアムは絶句した。
「村人達が何者かに操られていることも、ご存知みたい」
コレットに言われたリアムは、今度は敵意むき出しでエクリースを見つめ、それからゆっくり尋ねた。
「一体お前ら、何者なんだい？」

10

10

ハラレは王と王妃イデットに謁見すると、恭しく額づいた。一見して品のある老嬢のような素振りだったが、イデットにはどこかハラレの様子が不自然に感じられた。第六感とでも言うのだろうか……？

けれども人の良い王は、前妃ドロテアの腹心の侍女だったハラレに、親しげに接した。

「何かあったのか、ハラレ」

「はい、王様」とハラレはお辞儀をしてから続ける。「実はエクリース様が、東側の境界線まで出奔なさったのはご存知で？」

「ああ、そのことか」と王の表情は曇る。「全く困ったものだ。勝手にお供一人だけを連れて、出かけるとは！　王子たる行動とはとても言えぬな」

「それも、東の境界ですって！？」とイデットも眉を潜めた。「あそこは、蛮族が以前支配していたと言われる下品な所。おまけに、魑魅魍魎が跋扈（ばっこ）しているという森や林、湖や沼などがあると聞いております。そんな怪しげな場所に何ゆえ王子ともあろう者が、王の断りなしに行くのでしょう！」

「そこでございます」とハラレは咳払いをした。「あの地は、王家への反乱を企てている者が多い土地柄とか……」

意味ありげなハラレの言葉に、王と王妃は互いに顔を見合わせ、横に立つシスリー長老は明らかに不快な顔つきだ。

「何が言いたいのじゃ、ハラレ」とシスリーが口を出すと、

「あら」とハラレは露骨に不愉快な表情になった。「あたくしは、王様に申し上げているのでございます。エクリース王子を嫌ってお

られるあなたに言っているのではありませぬ」
「もうよい！　ハラレよ、何が言いたい！」
と痺れを切らした王が大声を張り上げた。額には明らかに、井桁マークがある。

―　ふふふ、王はまんまと乗って来られたようじゃな。

ハラレはほくそ笑んだ。
「ですから、あの土地にこっそり参るという事は……明らかに反逆を企てているという証しではないかと、わたしは思うのでありますわ」
「反逆!?」と王とシスリーは同時に叫んだ。イデットだけが、不審の目付きでハラレを見つめてる。

―　こやつ、以前はエクリースのお味方ではなかったのか？　それなのに今は……。この老婆、一体何を企んでいるのやら。

「まあっ、わたしは何も王子を今、反逆者だと申しているのではありませんわ。ただ、あのような“不幸を呼び込む王子”ゆえ、早く捕らえてこちらへ戻さねば、と言っておる次第でございます。何かが起こる前に」
「う～む」と王は腕を組むと、何事かシスリー長老と相談していた。が、やがて、
「やはり、エクリースをこのまま野放しにはできぬな。然るべき兵を出して東に赴き、直ぐにでも王子を捕縛致そうぞ」と命じたのだった。
全てがハラレの思惑通りにことが進んで行った。

☆　―　☆　―　☆

「おかしい……？　何かが変じゃ」
長い回廊を渡りながら、イデットは思わず呟いていた。
「何をでございますか、イデット様」とマルゴットが返事をすると、イデットは口を歪め、
「何でもない」と言っただけだった。
美麗極まる自室に入ると、テーブルには紫色のリボンの付いた例の“殺人オルゴール”が載っていた。けれども直ぐ側にサイラスが居たので、イデットは血の気を失った。
「サイラス、何をしておるのじゃ！　そこを離れなさい！」
サイラスはふと顔を無邪気に上げると、鬼気迫る母親イデットの表情に凍りついた。
「は、はい」
「乳母よ！　もう二度と、このテーブルには近寄らせるな」とイデットは喚いた。乳母は縮こまっている。
「母上、僕はただこのオルゴールを見ていただけです。乳母を叱らないで」
サイラスは半ば泣き出しそうになりながらそう懇願した。さすがのイデットも、目の中に入れても痛くない我が子の訴えに、顔が和らいだ。

「サイラスや、このオルゴールはエクリース王子に差し上げる物。ですからお前が触ってはならぬ物なのです。お分かりか？」
「はい……分かりました、母上」
「それにお前は、女々しいオルゴールは嫌いだと言っておったではないか？」
「ええ、そうですが」とサイラスは躊躇っていたが、乳母が助け舟を出した。
「最近サイラス様は、お綺麗なものに興味を引かれまして」
「そうか！」とイデットはピシャリと言った。「だが、他者へ贈る物には手を付けるでない！」

「は、はい」と乳母はまたまた縮こまって答えた。
「サイラスや、今エクリースはどこかへ行ってしまっておるのだが、戻って来た折にはお前の手でこのオルゴールをお渡しなさい。きっとエクリースは心より喜んで受け取るであろうからのぅ」
「はい、分かりました！」とサイラスは顔を輝かせて答えたのだった。

11

11

「“エレーヌ姫の石投げ器”のこと……ご存知らしいわ」
とコレットがもう一度呟くと、リアムはそれを持ったまま、どっと粗末な椅子に座りなおした。そしてまごまごと繰言を言う。
「何でこいつらが……いや、騎士様が、エレーヌ姫の名前を知っているのか……」
「これはね、エリス様、わたしの祖父がただ一つだけ、フォンテーン家から持ち出して来たものなの。名前のいわれは分からないけど、物凄い威力だってことは証明済みよ」
と物知り気に、コレットが説明した。
「エレーヌ姫って……でも、誰のことかしら？　わたし達、祖父からも父からも何も聞いていないのよ」
「姫の姿は知っている？」とエクリースが尋ねると、
「分かるわけないじゃない！　昔の人だって言うから」
このコレットの返事を鵜呑みにする限り、この兄妹はエレーヌ姫の本質を知らないらしい。

腕組みしたエクリースをビクターは心配そうに見つめていたが、やおら、
「それじゃ、どう致します？　出かけますか、あの“人食い森”へ」
と聞いた。エクリースは一言も喋らず、ただ首を横に振っただけだったが、暫くして呟いた。
「何かが近付いているような気がする。どす黒い黒雲、闇、言い知れぬ不安、そして陰謀とか……」
エクリースのポケットの時計がピクリと動いた。

「何かの運命が……変転していく……誰かが……逝く……」
「や、やめて下さいよ、エク、いやエリス様！　そのような恐ろしい予言めいたことを言うなんて」
　ビクターはぶるった。エクリースが妙なことを言い出したりした時には、必ず何かが起こるのだ。

「ビクター」と突如エクリースは、ビクターを見透かしたかのように名前を呼んだ。
「は、はい」
「お前は何かに怯えているな。だが無理も無い。……ところでこれはわたしの願いでもあるのだが、お前はわたしと離れて先に王宮に戻れ！　そして何があっても何事も無い振りをしているのだ。いいな」
「何が、あって、も？」とビクターは尋ね返す。「それは何を意味するのでしょう？」
「ビクター、しばしお別れだ」
「え！　何を言われるのです、エクリース様」
　言ってからビクターはしまったと思った。けれども、エクリースはただ静かに微笑んで、ビクターを抱き締めた。
「わたしと居ると、よくないことが起るんだよ、ビクター。分かってくれ。君は、自分の愛しい人の元へ帰るんだ」
　ビクターは黙り込んでいたが、エクリースの懇願に意味があることを察知し、頷いた。

　こちらの兄妹は初めて、重大な事実を知ることとなり、お互いに顔を見合わせている。
「それじゃ……騎士エリス様って……嘘なのね！　王宮とか何とかって」
「ああ、済まない」とエクリースは可憐な娘に向って謝った。「わたしは、エリスではない」

「それじゃ何様？」
「王子……エクリース王子だ」
「王子様って！？　うそ！」
「本当だ、娘よ。この方は、正真正銘、王国の王子であらせられる。プリンス・エクリース様だ」
「むしろ、プリンス・エクリプス、日食の王子と言われていると言った方が、通りがいいだろうね」
　エクリースがそう言い換えると、コレットはハッとして手を形の良い唇に当てた。

「プリンス・エクリプス……聞いたことがある。村人達が言っていた。不幸を呼ぶ闇に生まれた王子だってことを！　もしかしたら、デスティかもって！？」
「えええっ！」と兄のリアムも叫んだ。「そんな輩が我が家に来ていたとは！　ちっくょう！　この家はどうなるんだ」
「心配するな、わたしも出て行くから」とエクリースは穏やかに言い含めた。
「その前に、この従者を先に出してやりたい。さ、ビクター！　しばしの間、さらばだ！　行け、早く！」
「それでは、エクリース様、あなたのお言いつけのままに」
　ビクターはキビキビした動作で支度をすると、ヒラリと自分の馬に乗った。そして一目散に西に向って駆けて去って行った。

　ビクターの姿が豆のように小さくなり、やがて見えなくなると、今度はエクリースが旅支度を始め出した。
「一夜の宿、ありがたかったぞ。お礼をしたかったが、今はそれも出来ないでこのわたしは去らねばならぬ。無事でいたかったら、わたしの事は他人に口外するな。それでは、お二方、ありがとう。さらば！」
「待って！」とコレットが、背を向けたエクリースに向って叫んだ。

エクリースは振り返ると、不可思議な幻影をチラッと見た。直ぐに消えたが、それは……コレットの着ている服が燦然と輝き、房々した長い髪にはティアラのような冠があったのだ！

「お気をつけて、王子様。又いつか、お会いできますよね？」

真剣なコレットの碧い瞳に向って、エクリースは答えた。

「う～ん、多分ね。そうありたいものだが。それでは」

エクリースは後も見ずにドアから出ると、自分の馬に飛び乗った。けれどもエクリースは悟っていたのだ。数キロ先に、自分を捕らえに来る兵士達の一団がこちらに向って駆けて来ていることを。

12

12

エクリースの予感通り、間もなく向こうから来る兵士達の一団が群れを成して駆けて来た。そして対面からゆっくり来るエクリース一人を見つけると、瞬く間にぐるりとエクリースを取り囲んだ。

「なんだ、物々しい！」とエクリースは叫ぶ。「わたし一人に、この一団とは！　誰の命令なのだ！？」

「エクリース様でございますか。恐れ多くも、王様のご命令にて王子様を迎えに参りましてございます」

と先頭の男が凛とした声を張り上げた。それは、なんと騎士ウーリッヒだった。ウーリッヒは嫌な役目だとは思ったが、やはり王の命令には背けないのだ。

「分かった」とエクリースは一言。「それにしても、ただ迎えに来たにしては、仰々しいな。それにここに居ると、なぜ知った？」

「それは、ハラレ様のご意向とか」

「ふん、そうか。やっぱり……」とエクリースは忌々しそうに呟く。そして、殺気だってピリピリしている兵士達を見回した。

「心配するな、わたしは逃げはせぬ。縄をうつまでも無いぞ。そなた達と共に王宮に戻る予定だ」

落ち着いたエクリース王子の口調に、兵士達は気圧されて黙り込んだが、ウーリッヒが恭しくエクリースにピタリと近寄り、語りかけた。

「王子、この度はまことに心苦しいのですが、このようにしなければなりませんでした。お許し下さいませ」

エクリースはチラッとウーリッヒを見ると、柔らかい微笑を投げかけた。けれども、その瞳だけは決して笑わず、哀しげだった。

「わたしの将来は、暗雲に翳っているのはもう知っている。けれども、それから逃れることは出来ないだろうな……。だから、ウーリッヒ、お前が許しを請うことは無いのだ」

それからエクリースはウーリッヒの肩をポンポンと叩いた。

「さ、行こうか。何かが渦巻く王宮へ」

ウーリッヒは黙ったまま頷くと、一行はエクリースを取り巻くようにして一路王宮に向ったのだった。

☆　―　☆

王宮では、イデット妃もハラレも緊張しつつ、エクリースの到着を待っていた。どちらも、心に暗い企みを抱き、怨念に支配され、何一つ良いことは考えてはいない。

イデットは例のオルゴールを渡すタイミングを計りかね、そしてハラレはエクリースがエレーヌ姫の秘密を知る前に捕縛されたのを知って、内心胸を撫で下ろしていた。そして二人とも、最後の仕上げは、どちらもエクリースを葬り去ることだけ。

恐らく二人の今の情念を具現化するとしたら、醜い妖怪にしか見えなかっただろう。

そんな時、デスティは暗闇の天空の果てで唸る。

お前達の心こそ、デスティではないのか、と。

☆　―

やがて、遠くから兵士達の一団が見えた、と塔の見張りから連絡があり、各々様々な思いを抱きつつ、エクリースの到着を迎えることになった。

エクリースは、大勢の中に居ても、一際目立っていた。特に豪華な服を着ているわけでもなく、それほど背が高いわけでもない。け

れども、誰でも一度見たら忘れられないという人物が居るように、エクリースも又強烈なオーラを放っているので、直ぐに分かるのだ。

王宮の玄関口で待ち受けていたイデットは、妙な胸騒ぎを覚えながら、エクリースを見つめていた。サイラスはここには居ず、自室で遊んでいるはずだ。直ぐ横には王が立っていたが、ハラレの姿は見えない。ハラレはどこかで、エクリースの帰還を見守っているのだろうか？

エクリースは直ぐ近くまで来ると馬から降り、父王の前で跪いた。

「申し訳ありません、父上。勝手に王宮を飛び出してしまい、王子にあるまじき振る舞いだと反省しております。けれども、このような仰々しいお出迎えをなさらなくとも宜しいのに」

その言葉は丁寧だが、どこか毒を秘めていた。

―エクリースよ、そなたの小生意気な素振りも、もう直ぐ終わりなのじゃ。

イデットは心に邪悪な本心を巧みに隠して、エクリースに手を差し伸べた。

「本当に、わたし達を心配させるものではありませぬよ、エクリース。よくぞ無事でお帰りを！」

「ありがとうございます」

エクリースはイデットのその手を取ったが、途端に焼けるような痛みを感じて引っ込めた。

「済みませぬ、母上。無礼な振る舞い、お許しあれ」

「仕方なかろう、我が子よ。だが、以後このような勝手な振る舞いは慎むよう。そうでなければ、わたしはそなたをいつか疑うことになろう……本気でな」

王の目がキラリと光った。

―　☆

その頃、ハラレはエクリースの帰還もどこ吹く風と、サイラスの部屋に居た。乳母は金貨で手なずけて去らせ、ハラレはいよいよ自分の企みを実行しようとしていた。

けれども、ふとテーブルに置かれてある紫のリボンのオルゴールに目が留まる。それは、小さな子供には相応しくない代物なのだ。

「まぁサイラス様、いつもお可愛らしいこと！　でも、このオルゴールはお母上から頂いたのでしょうか？」

「ああ、それはね、僕のじゃないの」

「へぇ、それは又なぜに？」

「戻って来た時に兄上に渡せって言われたの。だから触らないでね」

その時、ハラレはイデットの姦計を見破ったのだった。紫は、イデットの国では「死」の色であることを。

☆　―　☆

13

13

「エクリース、実はサイラスがお前を待っておるのです。例の『遊戯の間』で。あなたに是非是非手渡したい物があるとかで、うきうきしておりましたわ」

とイデット妃は、王宮の中に入ったエクリースに耳打ちした。

「けれども、この汚れた服装では……」

「服など後で代えればよろしいではないですか！　そんなことより、サイラスに早く会いたくはないの？」

「会ってやれ、エクリース。サイラスは待ちくたびれておるぞ」

と王までが急かしたので、エクリースはここは素直に「はい」と答えた。

けれども、突然ポケットの時計が蠢き出し、りりりりという音まで発してきたのだった。イデットはさっと身を引き、エクリースも奇妙な胸騒ぎに襲われだした。時計はまるでエクリースに訴えかけるように、なおも鳴り続ける。

「失礼！　では直ぐにサイラスのところに行って参ります」

エクリースには、サイラスの身になぜか危険が迫っているような気がしていた。

最初は歩いて、次に急ぎ足で、それから駆け出しながら、エクリースは陰気な王宮の回廊を走り抜けて行った。

その後姿を見つめながら、イデットはもう二度と生きたエクリースを見なくて済むと安堵した。けれども直後、心臓が張り裂けそうに打ち始め、イデットもエクリースの後を追ったのだった。

―　おかしい。何かが狂っている……。全ての計画が、ひょっとし

て……！？　おお、サイラス！

☆　―　☆　―　☆

サイラスは、紫色のリボンの付いた美麗なオルゴールを手に取ると、眺め回した。先ほど、母のイデットからきつく言われたのを思い出していたのだった。

「サイラス！　これはエクリースへの贈り物なのです。蛮族の地から無事に戻られたそのご苦労を労っての、ご褒美なのですよ。いいですか、サイラス！　これを、あなたからの贈り物としてエクリースに手渡すのです！　絶対それ以上のことをしてはいけませぬ。絶対に、開けてはなりませぬぞ！　卑しくも王子たるお前は、そういうマナー違反などはしないと信じてはいるが、けれどもこれは母の命令です。お分かりか、我が愛するサイラスや？」

サイラスは、母親の瞳に何かが光ったのを知ったが、けれども元来素直な王子であるサイラスは、「はい、分かりました、母上」と誓ったのだった。

けれども今、その誓いは反故にされようとしている。直ぐ近くまでにじり寄ったハラレが、気味の悪い猫なで声でサイラスにこう囁いたからだ。

「サイラス様、あなたこそ、この国を継ぐまことの跡継ぎの王子でございます。それなのに、こんな宝石で輝くオルゴールの音を聴かずに、兄上にお渡しなのですか？」

「うん、そうだよ」と、四歳のサイラスは辛うじて魔の声よりも、自分の理性を働かす。

「でもその中の曲を知りたくはないのですか、サイラス様？　そのリボンはわたしが後で結び直しておきましょう。故に、サイラス様はその事をお母上に黙ったままで宜しいのです。誰も気付きはしませんわよ、おほほほほ」

「どんな曲なんだろうな……」
とサイラスは、悪魔の誘惑に負けかかりながら呟いた。
「少しだけ、蓋を開けてみませんこと？」

― 果たしてこの中には、何が入っているのやら？　恐ろしい毒か？　それとも、エクリースの精神を壊してしまう“何か”の香りか？　いずれにせよ、あの異国の女狐の企むことは、こちらには考えが及ばぬが、きっと何らかの悲劇を呼ぶはずじゃ。

サイラスは暫く躊躇していた。けれども、向こうから走ってくる足音でその可愛い首を上げた。
「あ！　もしかして、兄上かも」
「それなら、尚更、兄上が到着なさる前にチラッと開けてみましょうぞ。そして直ぐに閉めればよいのでございますよ。兄上の喜ぶお顔、見たくはないのですか？」
ハラレは老獪な言葉巧みに、この幼く純真なサイラスの心を誘導していく。その時、デスティは哀れな子供を冥府へと連れて行かんとして、待ち受けていたのかも知れない。

「さあさあ、サイラス様」とハラレはもどかしく紫のリボンを解いて、オルゴールをサイラスの目の前に差し出した。「早くなさいませ、サイラス様！　世継ぎの王子よ！」
この言葉を聞いた途端、サイラスは魅入られたようにアメジストで装飾されたオルゴールの蓋を開けた。『待ちくたびれた駒鳥』の物悲しい歌が流れた直前か直後か定かではないが、短く鋭い毒矢がサイラスの白くあどけない頬を突き刺した。
サイラスが崩折れるのと、扉が開いてエクリースが入って来たのとはほぼ同じだった。その時ハラレは、マントで自分の顔を覆うと、さっと半開きの扉の陰からスルリと出て行った。マントに隠れた口元は、醜く歪み、漏れ出てくる歓喜の嗤い浮かべて。

「サイラス！」

とエクリースは叫んだ。「遅かったか……」

エクリースは床に倒れているサイラスを抱き上げた。サイラスは少しだけ目を開け、エクリースを見つめる。その頬には、細く鋭い銀色の矢が刺さり、エクリースの時計は狂ったように鳴り響いていた。

「あ、兄上、さま……ごめんなさい……」とサイラスは、ほとんど聞き取れないような小さな溜息のような声を発した。

「何を言う、サイラス！　この頬の矢はどうした！？」

「この矢は……」

サイラスはこと切れた。床には、オルゴールが落ち、『待ちくたびれた駒鳥』の曲が無情に流れていたが、やがて消えた。

「サイラス！　サイラス！　サイラ～ス！！！！」

エクリースが必死で叫んでいるその後ろで、イデットの衣（きぬ）を裂くような悲鳴が起った。

「サイラス！！　ああ、我が子よ！！！！！！　ああ、呪うがいい、天の御神！　呪われしエクリースを地獄へと！」

14

14

イデットの悲鳴を聞きつけた人々は、バタバタと『遊戯の間』に駆けつけたが、そこで見たものはおぞましいシーンだった。

エクリースは弟サイラスを抱き締めながら呆然とし、近くではイデットが余りの驚きで、ヒステリックに喚き散らしている。王妃の印しのティアラも床に落ち、髪はクシャクシャ、蒼白な顔のまま、

「ああ！　サイラスが！　サイラスが！　何とかして、あの暗黒の呪われし王子エクリースを！　あやつが、わたしの息子を殺めたのだわ！」

と天に向かって叫んでいたかと思うと、どっと崩れ折れた。侍女達かが慌ててイデットを抱き起こすと、イデットは泣き喚いた。

王と従者達はその悲劇を見つめていたが、やがて騎士ウーリッヒがエクリースに近寄った。

「エクリース王子！　一体これは……？」

「見ての通りだ、ウーリッヒ」と呟くと、エクリースは涙に濡れた顔を上げた。

「わたしが来てみると、既にサイラスは倒れ、わたしの腕の中でこと切れたのだ……」

「嘘よ！」とイデットが金切り声で遮る。「大嘘つき！　息子を殺したのは、お前よ、エクリース！」

―　いいえ、殺したのはわたしなのかも知れない。サイラスは、エクリースに渡す前に、あのオルゴールを開けてしまったのだわ！

神様！　ああ、天罰が降りたのね、このわたしに！

でも、いやよ！　罪は着たくない。罪はエクリースに全て被せてし

まおう。この際、憎きエクリースを葬り去るのだ……。

「ではなぜ、サイラス様が？」と合点のいかないウーリッヒが再度尋ねると、

「分からない。けれども、頬に刺さった毒矢が致命傷かも知れぬ」とエクリースは悲痛に答えた。「ああ！　わたしがもう少し早く、ここに来ておれば」

「何を茶番を言っているの、エクリース！　お前が殺したのよ、この子を！」

「なぜなのです、イデット様。なぜわたしが愛する弟を、殺したと仰る？」

やっとサイラスを静かに優しく離しながら、エクリースは立ち上がった。

「だって……お前は、サイラスが皇太子になるのが嫌だったはずでしょ。自分がこの王になりたかったんだわ！　跡継ぎを殺して、自分の天下にしたかったのよ。サイラスが邪魔だったんでしょう！」

エクリースはじっと、そして鋭い視線でイデットを射すくめた。ことは読めていた。ここに置いてあるオルゴールからは、『待ちくたびれた駒鳥』の曲が流れていた。こともあろうに、ベアトリスの運命を示していた不吉極まりない曲を！

そしてこのオルゴールは、恐らく自分への贈り物だったに違いない。サイラスは、なぜかそれを自分に渡す前に自ら開けてしまったのだ！

――でも違う！　サイラスは、そんなことをするはずが無い！　サイラスは誰かにそそのかされたのだ。そしてそれは、イデットではない。イデットは愛する息子を手にかけるはずが無いからだ！

それにこの嘆きは本物だ。イデットの苦しみは、子を失った母の苦しみそのもの。自業自得だが、やはり悲しみだけは本物……。

イデットはもはや何も言えず、サイラスの亡骸を抱き締めると頬を摺り寄せていた。
「おお！　わたしのサイラス……愛する息子！　なぜお前がこんなことに！？」
その場に居る人々は、全てもらい泣きしていた。王だけは不気味に沈黙したまま、じっと末息子の亡骸とイデット妃、そして呆然と突っ立つエクリースを交互に見つめていた。
けれどもやがて、王は口を開いた。
「エクリース」
呼ばれてエクリースは振り向く。蒼白な王が、震えているのが分かった。
「悲しいことだが……お前しかサイラスを殺す者が居らぬ。イデットはサイラスの母。そしてサイラスは誰からも愛されていた無垢なる王子だった。サイラスを排除したいのは、お前だけだったはず」
「父上……」とエクリースは唖然として言った。「何ゆえ、そんな……」
「残念だが、お前を捕らえなければならぬ」
「そして死刑よ！」と突然イデットが喚いた。「最も残酷な殺し方をして下さい、あなた」
「わたしはサイラスを殺していない！」とエクリースは叫んだ。
「わたしは……殺していません、父上、どうかお信じになって下さい」
「残念だが、エクリース、わたしは信じられない」
と父王は白髪交じりの頭を悲しげに振った。
「分かるか、エクリース。わたしは愛する前妃を失い、嫡男ブライトを、そして末の王子までも失くしてしまったのだ！　この国の将来を任せる者は今は誰も居らぬ。その上、殺人者までがわたしの血を引いているとは」

「父上！　わたしは何もしていない！！」とエクリースは血を吐くように叫んだ。
「信じて下さい、わたしを。せめて一度だけでいいのです、わたしを信じて……」
「出来ぬ！」と王は毅然として否定した。
「兵士達、エクリースを縛って牢に入れるがいい！　詮議の後、然るべき刑を言い渡す！」
「父上……」
愕然として言葉も無いエクリースを、兵士達は忽ちの内に縛り上げた。
「もう二度と、“父上”とは呼ぶな。わたしはもうお前を息子とは思わない。お前の命運も尽きたな、エクリース」
血の気の失せたエクリースの耳元で、何かが狂ったように笑った気がした。

１４（後書き）

これで第一巻は終わりです。
しばらく間を開けた後に、新しく第二巻をスタート致します。

第二巻　第一章　新たなる苦しみ　1（前書き）

第二巻が始まります。舞台は、王宮から異国へと移り、又幼い少年時代の第一巻の少しメルヘン調とは趣が違い、よりリアルな青年期へと時が移っていく予定です。剣と魔法は相変わらずですが…新たな恋もあるかも？

この巻も、応援して下さい。

第二巻　第一章　新たなる苦しみ　1

1

遠くから弔いの鐘の音が陰気に響く。夕暮れ時の、うら寂しい時刻にその鐘の音は、まるで誰かを責めている様に感じるのだ。

遥かに高い塔の上で、エクリースはその鐘の音を聞いた。それが、最愛の弟サイラス第三王子の葬儀の合図である事を、エクリースは知っていた。なぜなら今まで、エクリースはその鐘の音を無数に聞いた気がしたからだ。

事実、兄のドリアン第一王子、育ての父トロイ、それから最も愛したベアトリス！　その人々は、自分の元をすり抜けて行き、もう冥府に行ってしまったのか、二度と会うことも無いのだ。

今までも、肉体と精神の苦しみは幾つかあった。そしてそれを乗り越えてきたエクリースだが、今回だけはどうにも乗り越えられそうも無い。助ける人は誰も居ず、そして今回の苦痛は激烈だったからだ。

何よりも『弟殺し』といういわれなき汚名を着せられ、無実の罪を被せられている。そしてそれはエクリースにも、謎の事件であり、彼にとっても確たる犯人像は無かった。

と言うより、多分エクリースを殺そうと、毒矢が仕掛けられたオルゴールを開けてしまったサイラス自身の責任でもあり、犯人が居ないのは当たり前だった。

強いて言えば、犯人はサイラスの母イデット妃その人であり、そそのかした誰かであり、そしてそれを貰うはずだった自分でもあったので、エクリースも責任の一旦を担っても仕方なかったのだ。

がしかし……エクリース自身が殺したのでないことは明らかなのだ。けれども、イデットはエクリースが殺したのだと言い張り、自分の罪を覆い隠す為か、エクリースが矢を刺したところを見たとまで偽証した。

公に裁判は行われず、エクリースはただ「自分は無実である」ことしか言えなかった。

そして今回ばかりは、父王も又他の人々もイデットの言う事を信じたのだった。

「あとは、エクリースが自白すれば、確実に彼は死刑。それも最も残忍な、八つ裂きか火炙り！　是非とも我が子、サイラスの無念を晴らしたいのです！」

とイデットは絶叫した。人々は我が子を失った“悲しみの母”イデットの狂ったような有様に同情し、涙した。

そして、誰もエクリースの言い分は聞いて貰えなかった。

―もうこれ以上、愛する人を失いたくは無かったのに！　ああ、サイラス……お前は良き可愛い弟だった。愛していた……大好きだった……なぜ、あのオルゴールを開けたりしたんだ！？

辺りが薄暗くなってきた頃、下から足音がしてきたので、エクリースは緊張して待っていた。すると、重い鉄製扉が開き、外から入って来たのは、騎士ウーリッヒと数人の兵士、そしてシスリー長老だった。長老は、長い階段のせいか喘いでいる。それでもやって来るのは余程のことだろうか？

「エクリース様」と騎士ウーリッヒが渋々と言葉を発した。

「あなたを、サイラス王子殺害容疑で審問致します」
「殺害容疑……？　まさか、ウーリッヒ、お前までもがわたしを疑っているのか」
ウーリッヒは答えず、目で兵士達に合図した。兵士達はすぐさま、エクリースを縛り上げると、上部にある梁からぶら下げた。きりきりとした痛みが、肩から腕を襲い、エクリースは苦痛に喘ぐ。
「まことに申し訳ないのですが、王子、これは父王様のご命令なのです。白状なさればそれで済みます。苦痛も短く……」
「何を言っている！？」とエクリースはショックを受けて反論した。
「わたしがサイラスを殺すはずが無いではないか。あんなに愛していた可愛い弟を」
「さようですか……では、致し方ない」
ウーリッヒはチラッとシスリー長老に目配せすると、エクリースのシャツを引き裂いた。それから一歩下がり、長い鞭を手にした大男の兵士に冷たく命じた。
「やれ！」

鞭がうなり、エクリースは今までに無い激痛に叫び声を上げる。その耐え難い悲痛な響きが、小さい小窓を経て外にもれ出て行ったのを、塔の真下に立つイデットは聞き分けた。
「苦しむがいい……王子よ。お前の命運ももはや尽きたのじゃ……」
悲鳴をあげ、何度も気を失っては又打たれ続けたが、エクリースは決して嘘の自白はしなかった。

2

2

拷問吏が戻っていった後、エクリースは身体中から流れる血のおぞましい臭いと再現の無い肉体的名苦痛に包まれて、石作りの壁にもたれ、遥か天井にただ一つある小窓から差し込む微かな夕暮れの光が石畳に差すのを、そしてそれがやがて消えていくのをじいっと眺めていた。

一筋の光は、まるで希望の光のように見えたが、けれどもそれは直ぐに夜の闇の中にすっぽりと埋まってしまう。闇は絶望を呼び、エクリースは苦悩にのたうつ夜を過ごし続けていた。

それが終わる朝になると、僅かばかりの食事が鉄の扉の窓から差し出され、そして又拷問吏がやって来る……。その繰り返しだった。

着ていた服は、元々粗末な物だったが、今では形をとどめなくなった単なるボロに過ぎなくなり、エクリースの持つこの世とも言えない美貌も陰を潜め、既に破れきった雑巾のような有様になっていく。

拷問吏以外には誰もやって来ない。そして詰問はいつも「殺したのかどうか」であり、エクリースの答えは常に「違う」だった。それが続く限り、この地獄も続くのだと悟った時、エクリースは初めて生を放棄しようという気持ちになっていった。

エクリース自身は、真っ正直に生きてきた者らしく、今度も偽証することは出来なかった。

「楽になりたくは無いか、王子様よぉ」と拷問吏はいつも言うと、ヒヒヒヒっと嗤うのが常だ。「そうだと言えば、この苦しみは終わるんだぜ、かわゆい王子様」

そしてエクリースの身体を眺め、背中や肩に付いた血を舐めまわ

す。その時のぞっとする感触が、エクリースを今までに無く発狂しそうにさせる。

ある日、もう何日経ったか分からない頃、違った足音がして魅惑的な、けれども邪悪な匂いがした。全身真っ黒の喪服を着たイデットだった。

イデットは壁から下がっている半裸のエクリースを、上から下まで眺め回しながらふふふっと小さく嗤った。

「苦しいか、王子？　けれども、お前の苦痛など、サイラスの死に比べれば如何ほどのこともない。わたしは何もかも失ったのじゃ。もっとも愛する者をな。本来ならお前が死ぬはずだったのに……悪運強い奴よの。

けれどもそれももう直ぐ終わる。お前が自白すると、直ぐに火刑か八つ裂き。既に城下広間には、その台が作られているぞよ。その槌音、そなたにも聞こえるか、王子？」

イデットは指先で、エクリースの傷をなぞっていく。

「わたしは、そなたが苦しむのを見るのが何よりのサイラスへの供養と思っているのじゃ。お前の苦痛にのたうつ姿を、サイラスが天上より見ておるであろう。そうして初めて、わたしの心もいくらかは晴れよう」

そして、暫くするとエクリースから一言も無いのに気付き、腹立たしげに一周した。

「どうしたのじゃ、エクリース。なぜ何も言わぬ？　苦痛がそなたの口を閉ざしたのか、それともわたしには何も言いたくないのかえ」

「あなたが……」とエクリースはかなり経って口を開いた。けれどもそれは切れ切れであり、かなり苦しそうだったが、言葉ははっきりしていた。

「あなたが、サイラスと言う、愛しい我が子を殺したのです。わたしではない……。幾らあなたが詭弁を言っても、真実はあなただけ

が知っているはず……わたしではないと言う事を。
あなたは自分の罪を認めたくないだけだ。何と哀れな母親！　己で殺しておきながら、ここではしゃあしゃあとしている。だからあなたの悲しみは決して癒える事が無いだろう。
わたしは今まで正直だけが取り柄だった。それで人を傷つけたこともある。けれども今は……最後まで正直でいたい」

この言葉を聞くと、イデットはハッと飛び退った。そしてわなわなと身体を震わせたのだった。
「ベアトリス……わたしはもうベアトリスの元に行きたい……」
「ベアトリスは死んだのよ！　決してあの娘と会うことは出来ないわ！」
「ならイデット妃、あなたも決して息子と会うことは無いだろうな」

この言葉に衝撃を受けたイデットは、拷問吏から鞭を取り上げると、思い切り又狂ったようにエクリースを打ちつけた。

3

二度と会うことは出来ない……。

その言葉は、王妃イデットを蝕んだ。今までは復讐と怨念の虜になっていたせいか、愛する亡き息子サイラスのことを、本当に悲しんでいたのではない気がする……。

けれども、エクリースに言われて初めて、イデットはもう二度とサイラスには会えないのだ、と悟った。そしてそれを引き起こしたのは、誰あろう、イデット本人！　憎きエクリースを排除しようと画策した挙句、結局残っているのは、愛するサイラスの骸（むくろ）と形見だけ。

イデットはサイラスの部屋に入り、少し前までサイラスが遊んでいた遊戯道具やオモチャ、鉛の兵隊の人形などを撫で回し、そして胸に抱いた。それらにはサイラスの匂いが微かに香り、以前に遊びながら屈託無く笑っていたその小さな姿が目に浮かぶ。

けれども、それももはや幻に過ぎず、彼方に過ぎ去った残り香でしかない。サイラスとはもうこの世では二度と会うことは叶わないのだ。

「ああ、サイラス、サイラス！　お前はなぜここに居らぬ？　何処へ行ったのじゃ？　可愛い息子よ」

イデットが、サイラスが生前大好きだった熊の縫いぐるみをヒシと抱いていた時、突如何処かからオルゴールの音が鳴りだした。それも『待ちくたびれた駒鳥』の曲……。

イデットはガバっと顔を上げ、周囲を見渡した。けれども、不幸を呼んだオルゴールは既に処分され、ここにあるはずが無く、そし

てその曲もどこから流れて来ているのか分からない。
「あの、オルゴールさえ作らなければ……今頃サイラスはまだ生きていたはず！　あのオルゴールさえ」
そこまで思考がいったイデットは、突然閃光の様に頭を打たれた。
「それを作らせたのは……わたし！？　わたしだというのか？　わたしがそのオルゴールを作らせた。あの憎きエクリースを斃す為に。そしてエクリースは、わたしの願い通りもう虫の息。
思いは遂げつつあるが、でもそこにサイラスはもう居らぬではないか！　人の不幸を願ってはいたが……けれども、その結果がこれじゃ！　呪いは遂げられた！　でもそれはエクリースにではなく、我が子、サイラスに対して遂げられたのじゃ！！」
イデットは自分の髪を掻きむしった。
「サイラスが居らぬでは、この世は地獄。わたしの願いは、結局自分のところに来てしまったではないか……！　おお！　呪われたのは、エクリースではなく、わたしだったとは！　今気付いた。だがもう遅い……」
イデットが嘆きつつふと顔を上げると、そこにはこの世とも知れない美形の男が、オルゴールを両手に捧げ持って立っていた。随分長い間立っていたのか、それとも、今現れたのかそれも分からず、けれどもイデットはその男の発する毒々しいまでの青い光を見た。
「だ、誰じゃ、そなたは」
「誰でも良かろう」と男は言ったが、けれども口元は全然動いてはいない。イデットの全身に鳥肌が立ち、身体がガクガク震えだした。けれども、イデットはその場を動くことも、叫ぶことも出来なくなっていた。
「自らの作ったオルゴールで、そなたの子供が死んでしまうとは、それは嘆かわしいこと。いや、それは“殺人”に過ぎぬ。息子殺しの母親は、永遠に苦しむであろうな」

「わたしは息子など絶対に殺したくは無かった！　生かしてそして次の王にしたかっただけじゃ！」
　イデットは口も効けないのに、そう叫んでいた。
「殺したかったのは……あのエクリースだったのじゃ！！　それなのに……」
　美形の男は、声も立てずに大笑いした。

「後ろを見るがよい、哀れな母親よ」と男は凍れるような口調で言う。イデットがハッと振り返ると、そこには王、シスリー長老、そして騎士長のウーリッヒが立っているではないか！
「な、なんと……」
　再びイデットが男の居た場所を見ると、もうそこには誰も居なかった。青い光も、オルゴールも消えていた。

「わたしは息子など絶対に殺したくは無かった！　生かしてそして次の王にしたかっただけじゃ！」
「殺したかったのは……あのエクリースだったのじゃ！！　それなのに……」
　今イデットが叫んだ言葉が、木霊していくのを、王達三人は無言で聞く。
　イデットは初めて、ことの次第を悟った。あれは“デスティ”だったのだと……。

「王妃よ……今叫んだことは本当か？」と、悲しげに王が尋ねるのを、イデットは絶望に包まれて聞いた。
「ま、まさか……わたしがそのような……」
「イデット様、わたしも聞いておりましたぞ」とシスリー長老が静かに、そして不気味に続ける。
「イデット様。実はオルゴール職人ゴメスという者が、己の罪の重さに堪えかねて、我らに告白したのでございます。まことに残念な

がら、イデット様の罪は明らかかと。そしてエクリース様には罪が無いものと、今確信致しました」

そう言い継いだウーリッヒの言葉を、イデットは妙に冷静に聞いた。

けれども一瞬の隙をつくと、イデットは三人をすり抜け、近くの窓に突進したのだった。

「わたしはこの世ではサイラスには出会えぬという！　それでは、向こうでサイラスに会うのじゃ！　サイラスよ、待っておくれ！　今母が参りますぞ！！！！」

絶叫と共に、イデットは窓ガラスを割って、遥か階下に飛び降りて行った。

4

4

衝撃的なイデットの死、そして罪を認めてしまった言葉を聞かれたことで、イデットの罪は明らかになった。

けれども、事はそう簡単には運ばない。なぜなら、王子サイラスの死、それからその母イデットの死は、王宮の人々にも一般の民衆にも“不可思議”な印象を与えた。よって、すぐさまエクリース王子を放免することも出来ず、王や臣下達も悶々とした日々を過ごしていた。

ビクターも又エクリースの将来を案じていたし、南の領地クレヴィアンに居たサミュエルも同じように思い悩んでいた。

日夜ベアトリスの肖像画に向かい、両手を背中に組むと、愛妻であったベアトリスの肖像画を長い間眺めては、どうしていいか思案し続けていた。けれども、どちらも良い方法を見つけられないまま、イデットの葬儀が粛々と行われ、“悲劇の母子”として愛息子サイラスの墓の隣に葬られた。

よってイデットの罪は、うやむやなままだった。聖職者や諮問官達がその場に居なかったことも、エクリースにとっては災いとなっていた。

そして唯一人、ほくそ笑み高笑いしていたのはハイラその人のみ。

ハイラは、自分の罪を知っている者はエクリースだけで、けれどもエクリースに免除はないと感じ、そして憎んでいたイデットが死んだことで、もう怖いものは無くなったと信じた。

☆ ― ☆ ― ☆

そういう事とは露知らず、エクリースだけは唯一人蚊帳の外だった。

イデットの葬儀の鐘が響いていたが、エクリースには一体誰の葬儀なのかすら知らされず、そして又エクリースももうそういうことはどうでも良くなっていた。

ただ、毎日来ていた拷問吏がピタリと来なくなり、変だなという気はしていた。けれども今のエクリースは、ボロを纏っただけの惨めな汚れ果て傷ついた若者でしかなく、段々生きる気持ちも失せてきていたのだった。

事実、エクリースはここ数日食事を摂らなかった。自ら食事を絶ち、この苦しみから逃れようと言う妄想に、少しずつ陥るようになっていた。

「もう生きていても仕方ないんだよな……わたしは……そうだろ、ねぇソラリス？」

とエクリースは、最近しげしげとやって来る一匹の小ネズミに喋りかけた。この薄汚いドブネズミは、ちょろちょろとエクリースの周りを廻ると、彼が手を付けないパンなどをかじったり、水を飲んだりしていたのだ。そのネズミに、エクリースはソラリスと言う厳(いか)つい名前を付け、いつの間にか一番の友として接していた。

「わたしを訪ねてくれるのは、今はもう君だけだよ、ソラリス」

そう言い掛けると、なぜかネズミはチラッとこっちを見たような気がした。手を差し伸べると、その子ネズミが乗ってくるではないか！　けれどもエクリースは汚いとは思わなかった。自分の今の姿も余程汚いのだから……。

「わたし達は同類だよな、ソラリス？」

ネズミはうんうんと頷く。

「変だな、このネズミ。ネズミが頷いたりするのかな？　いやいや、

わたしの目ももう霞んできたし、今何月の何曜日かさえ分からない有様になっているんだ。世間で何が起ったかも分からないし、今が春なのか夏なのかも知らない。

以前持っていた不思議な力も、もう何も使えなくなった。助かる見込みはもう何も無い。

分かっているのは、見捨てられたことだけ。そして君という友達が出来たってことだけ。

ああ、ビクター、お前は今どうしているのかな？　それから、サミュエル……あの、奇妙なコレット達兄妹とか……。でも、わたしはもう直ぐ、兄のブライト王子や弟のサイラス、そしてベアトリスの所に行くだろう。だからもうどうでもいいんだけど……。

わたしを産んで亡くなったお母さん……もう直ぐ彼岸で会ってくれますか？」

小ネズミのソラリスがチュッチュッと鳴いたので、エクリースは大切そうに両手で抱えると、その汚れた不潔な口元にキスをした。ソラリスはエクリースの両手でしばらくバタバタしていたが、最後は大人しくなった。

ところが！

黒煙が出て来たのと、ソラリスが居なくなったのは同時だった。

「ソラリス！」とエクリースは叫んだ。「どこに行った！？」

「ここじゃよ」と言うだみ声がしたと思うと、コンコンと咳こむ声が聞こえた。

「だれ？　黒煙で見えない！」

「ここじゃと言っておる」

そう咳き込みながら黒煙から現れたのは、年齢がかなりいったよぼよぼの爺さんだった。

「ソラリスと言う名を付けてくれて、ありがとよ、王子」

「え！？」

「わしはな、この２００年余り、わしとキスしてくれる者を探しておった。できたら、若い美女が良かったんだが……まあ、大抵昔話では、美女がキスしてくれると、わたしは習ったもんじゃが、まあ若い男でもだれでもいい。わしをこのドブネズミの檻の中から解放してくれさえすれば、な」

そう言うと、ソラリスはニカーっと笑った。

5

この黒煙がどこから出ていたのか、エクリースはやっと悟った。以前もそうだったが、自分の肩にある丸い黒い痣からなのだった。あの時は、黒煙は盗賊達を殺したが、今回は逆に働いたようだ。

それにしても、この爺さんは、だれ？

ゲホゲホが納まると、ねずみ色の服の爺さんはエクリースの側に座り込んだ。

「いゃあ、お若い王子よ、改めてお礼を言いますぞ。わたしはソラリスと申す博士。いや、昔はそういう名ではなかったが、２００年経つともうすっかり耄碌（もうろく）して忘れ果ててしまったのぉ」

「あなたが……さっきまでここに居た、ドブネズミ？」

とエクリースが恐る恐る尋ねると、

「いかにも」とソラリスは確信を持って答えた。

「でも今のあなたは、昔は立派な博士だったとか」

「その通り、そしてもっと若かったぞよ。占星術、錬金術の博士だったのじゃ。それも今は昔のこと……呪いをかけられてこの方、キスをしてくれる者を探しておったが、とうとうこの牢に住み着いての……死ぬことも許されず、永遠にネズミのままかと思っていたが……王子よ、ほんに済まぬの。ありがたいことじゃ」

ソラリスは鼻をすすって、涙目を拭った。

「良かったですね、ソラリス博士！　少なくとも、わたしが最後にお役にたって」

「何と言う、王子よ！　そういうことを言うでないぞ！　諦めるの

は早いというものじゃ。このわしを見よ！　２００年も待っていたのじゃぞ！　そして、やっと救われた！　ばんざ～い、じゃい！」

確かにソラリス先生、相当楽天的なお人柄らしい。

「でも、もうわたしは生きていたくないのです。それにもう、飢餓がすすみ、あとは黙っていても、近々骸（むくろ）になるでしょう」と悲観的なエクリース。

「ほんに痩せたの、王子。じゃが今日から腹一杯食べるのじゃ」

「腹一杯って！？　もともとそんな食料を与えられて居ないし」

とエクリースは思わず笑った。

「よく見るが良い、王子よ」

ソラリスはそう言うと、またまたニカーっとしてあちらを指差した。キラキラした光の中から、ぷい～んと美味しそうな匂いがするではないか！

「この匂いから逃れることができるかな、王子よっ？」

「ええっ？」

エクリースが驚いていると、光が消え、見事な料理の数々が皿に載っていたのだった。

「豚の腸詰のソーセージ、牛のサーロインのロースト、エンドウ豆の煮込み、じゃがいもとベーコンを焼いたものに林檎のシブースト、その他お菓子諸々」

「ううう、涎が……」

「垂れてきたじゃろ？　一緒に食おうではないか、王子よ。わしもな、２００年ぶりのごちそうでな～。祝宴を挙げよう！」

「こっちは祝宴って感じではないんだけど、まあ、いいか」

「いいのじゃいいのじゃ、食おうぞ！　祝おうぞ！」

「あなたの為になら、お祝いしましょう」

ソラリス先生は嬉しそうにエクリースの肩を抱くと、共におご馳走を食べだした。エクリースも仕方なく手をつけると、今まで我慢

していた胃袋が美味しい料理を欲していたと見え、少しずつ食べ始めた。
　美味しいものを食べると、人間、幸せに感じるものだ。ソラリス先生は楽しげに食べ、遂には「ラ～ラ♪」と歌まで口ずさむ有様。
「王子よ、人生はまだまだ始まったばかりじゃよ。そんなに陰気臭くなるな。人生は楽しいぞ！」
「ですが……」とエクリースは、そっと肩に置かれた手を除けた。
「わたしには、もう生きる目的がありません」
「何を言うのじゃ、王子。そなたには、この王国を継いでいくと言う立派な使命があるではないか」
「この王国を継ぐ！？」とエクリースは皮肉っぽく言った。「わたしには無理です」
「そんな事は無い。今はもう跡継ぎの居ない王国じゃ。誰があとを継ぐという？　お前しか居らぬでは無いか、王子よ」
「それはそうと……なぜあなたは２００年間も、ドブネズミにされていたのです？　それに、これらのご馳走はなぜ現れたのですか」
「ああ、そのこと？」とソラリス先生はのたまった。「実はな、これには深い因縁があってな」
　そう言うと、ソラリス先生はやっと食べる手を止めた。
「わたしは、アンジェラという魔女の祖母に当たる者と賭けをやったのよ。それで負けてしまってのぅ」
「アンジェラ！？」とエクリースは思わず叫んでいた。「では……あのアンジェラの……」
「そうよ、王子。あのアンジェラじゃ、今はどこに消えたか分からぬが、今度会ったらわしは彼女の祖母の仇を打つつもりなのじゃよ。かかかかかかかっ」
とソラリス先生は笑ったが、エクリースは沈痛な面持ちになっていった。ソラリスが出てきたのは、実は偶然ではなく必然だったのかも知れないと。

あの時、アンジェラは言ったのだ。

『お前の持つ運命は、再び皆既日食の日に結ばれる女性を見つけること。それ以外に方法は無い。

そしてそれは、いつ起るか分からぬが、少なくともここ数年ではないという卦が出ておるのじゃ。残念だが、その相手と言うのはベアトリスではない』

（＊第一巻第七章「未来の花嫁」６参照）

6

6

エクリースの手が止まった。ロマの女占い師アンジェラが予言した言葉を思い出し、戦慄が走り、震えが来る。
「どうしたのじゃ、王子？　もうお腹一杯かの？」
「いや、そうではなく……ええ、もう一杯です」
「はっきりせんのぉ」とソラリス先生、頭を傾げる。
「アンジェラが、そなたに何か告げたのかな」
その通りだったので、エクリースはパッと顔を上げた。

「やっぱりの……」とソラリス。「アンジェラは、祖母プレティスの血を引き、ろくなことは予言しないらしい。他人の不幸を喜ぶ血筋でな。ま、それは真実でもあるのじゃが」
「プレティスって？　それがアンジェラの祖母？　先生を罠にはめ、きちゃないドブネズミに変えたという？」
「きちゃない、は余計じゃ。結構可愛いネズミじゃっただろう？　ま、わたしも昔は若く、そなた程じゃないが、結構のイケメンでな」
「昔のことです、誰も知らないでしょ」
「ほんとじゃよ！　けれど、今はもうすっかりジジイになってしまってな」
ソラリス先生が、ぷちんと指を鳴らすと、見事な料理は跡形も無く消え果てた。

「プレティスにどうやって騙されたのですか、先生？　で、なぜこんな料理などを出せるのでしょう？」
「王子よ、わしは“錬金術師”じゃ。様々な物を変えることが出来るのじゃよ。ま、金を作り出すことだけはできなかったがな。例え

どんな魔術を使っても、な」
「あなたは、魔術士？」
「ん～～、まぁ、錬金術士は魔術師でもあっての……」
あとはむにゃむにゃだ。

「それにしても、プレティスのやり方は汚かった！　プレティスはの、どうしても金が作れずに懊悩していたわしに、『もしも金が欲しければ、一度ネズミになって王室の金庫に入ればいい』と言ってくれたのじゃな」
「ところがどっこい、それは嘘だった、でしょ」
「その通り！　わしはプレティスの魔法を受け入れ、見事ネズミになった。けれども、戻る為には、“美しき者のキス”が必要じゃと、あとで聞かされての。あ～あ、愚かなわしじゃったな！　プレティスは綺麗だったので、てっきり彼女がわしにキスしてくれると、信じていた！　ところがじゃ、プレティスはキスするどころか、わしのケツをぶっ飛ばし、わしの立場を乗っ取ったのじゃ。
プレティスは栄耀栄華に暮らした……。わしは、その姿を見ながら、ただ指を咥えて見ている事しか、出来んかった。悔しかったのぉ～～！　うわわ～～～ん！　今でも悔しゅうて悔しゅうてならんわい。
けどな、プレティスの悪運も尽きたのじゃ。魔女として東に追われ、そこでフォンテーン家の者に取り入って……」

「なに!?　フォンテーン家!?」
「知っておるのかね、王子よ」
「え？　あ、ああそうです。成る程、どこかで何かが繋がっているような気がする。で？」
「ああ、プレティスはフォンテーン家に取り入り、そこで占い師となり、娘を産み、そしてその娘もまた娘を産み……それが、アンジェラじゃな」

「そうだったのか！」
「がな、アンジェラの根性はもっと曲がっており、フォンテーン家を追われ、さる森に隠れ住んでいるのじゃよ。わしは、その間探し回るのが嫌になり、この牢に入り浸りになっておった。結構、もう諦めておったのじゃがな……そなたのおかげで、又この世に戻れたのじゃ！　ああ、ありがたや！」
　ソラリス先生は、再びエクリースの肩をヒシと抱いた。

「先生っ、わたしは結構汚れているんですが……」
「大丈夫っ、王子、その服も何とかしてやるぞよ。そなたの美しさを再び呼び覚まし、ここから出るのじゃ」
「出る、って？　ま、まさかぁ」
「わしを侮るでないぞ、王子。さっきの料理を見たであろう？」
「まあ……で、そのアンジェラがわたしに言った事がありますが、それは真実なのでしょうか？」
「ああ、さっきの話か。どうぞ」
　それでエクリースは、アンジェラから語られた事をソラリス先生に包み隠さず告げた。ソラリスは「う～む」と腕を組んでいたが、やおら顔をあげ、そして厳かに言った。

「残念だがな、王子、その通りじゃ。そなたの運命は、次の日食の日に結ばれる娘に掛かっておる。そしてベアトリスと言ったかな……その娘は本当に残念じゃったな」
「やっぱり、そうか」とエクリースはガッカリしながら言う。
「あれから大分経ちますが、次の日食は何時なのでしょう？　占星術博士の先生なら、ご存知では？」
「いや、ああ、あれ？　まあな～つまりぃ」
「何でしょうかね？　一体いつ？」
「分からぬ」とだけソラリス先生はのたまうと、またまたニカーっと笑ったのだった。

7

7

その時、ズボンのポケットの奥が何かもぞもぞし始めた。
「あれ？」
「それは、多分時計じゃよ」とソラリス先生は至極のんびりと告げた。
「え？　でも時計は……てっきり」
「違うな。そなたの時計は取り上げられてはおらんかった。そなたがそう思い込んでいただけじゃな。多分時計は、どさくさに紛れてポケットの破れからどこかに引っかかっていたんじゃろ」
言われたエクリースは、慌ててポケットをまさぐった。確かにポケットの一部が破れ、その先に鎖が引っかかっている。無理して取り出すと、ポケットは完全に破れたが、けれども大切な、亡き兄ブライト王子からの時計は取り出せた。

その時計は、嬉しそうにベルを少しだけ鳴らし、その表面は鈍い銀色に輝いている。
「これはわたしの守り神だった。てっきり失っていたと思っていたのに！」
「早合点はいかんよ、王子」とソラリスはしたり顔で諫める。
「そなたは早合点が多すぎるでな」
「そうでしょうか。でも、ソラリス先生」とエクリースは食事したせいで、幾分元気になっていた。「わたしのせいで、色々な人々が不幸になったのです。ですから、今のこの惨めな境遇も当然だと、わたしは信じていますが」
「誰が不幸になった？」と問いかけるソラリス。

「例えば……最初は、母上」とエクリースは暗い顔で答えた。
「母上はわたしを産んだせいで亡くなった」
「それは不幸なことじゃっただろうが……けれどもそれはそなたのせいなのかな？」
「え？」
「人は誰しもその胎内から生まれて来るとき、胎内を持つ者を傷つけてしまうものじゃ。人の命をかけた出産によってしか、人は生まれぬ。だから、誰しもその危険は犯しているのじゃ。
王子よ、それは自然の摂理。そなたのせいではない。他の多くの母親達は、自分の命を身代わりにして、新しい命を生み出す。それは摂理じゃ、運命ではない。
けれども、そのことに感謝せねばならぬぞ。それさえあれば、母上も浮かばれるのじゃ。悲しいことじゃがな」

「自然の摂理、か」とエクリースは呟く。「そう考えたことはなかったな」
「残念じゃが、そうやって人は生まれ、そして死んで行った。けれどもその道理の中で、人は今でも息づいておる」
ソラリス先生は、エクリースの傷だらけの背中を優しく撫でた。
「おまえのせいではないのじゃ」
エクリースの瞳から、欠片のような涙がこぼれ落ちた。
「その涙こそ、逝ってしまった母上の魂を浄化するのじゃよ。自分を責めるのはもうお止め。むしろ、感謝して生きるのじゃな」

「先生……」とエクリースはかすれ声で言った。「今まで、心の奥に澱の様に堪っていた何かが、涙と共に出て行った気が致します」
「そうか、それでいいのじゃ」
なぜかエクリースの心が、幾分スーッとし、肩から重い荷が下りていくのを感じた。

「けれども、まだまだあるのです」とエクリースは続ける。
「わたしを育ててくれた厩番の一家を破滅させました。トロイと言う育ての父は、余り好きではなかったけれど、でも育ててくれた人でした。
　そのトロイがわたしの時計を盗んだのですが……今になってみると、わたしはその頃余りにも馬鹿正直で嘘がつけず、トロイが盗んだことを認めてしまったのです。たった一言、わたしが『違う、時計はあげたのだ』と嘘を言えばトロイは無残にも処刑されなかった。少なくとも、所払いはされたかも知れませんが、あの優しいジュリアや義兄弟のグライスから、父親を取り上げるようなことはなかった……。
　トロイを殺したのは、わたしのような気がするんです。嘘も方便という言葉は、今になって分かったのですが、もう遅すぎた！」
　エクリースは時計をぎゅっと握り締め、俯いた。

「それが罪の意識なのかな、王子よ」
「そうです。トロイを生かすも殺すも自分の言葉次第だったのに！」
「よ～く、考えるがいい、王子よ。一体誰が一番悪かったのかを」
「わたしでは……？」
「違うな」
　そう言うと、ソラリスはゆっくり首を横に振った。
「まだ子供だったそなたから、一番大切な物を盗んだのは、他ならぬトロイだった。もしもトロイが本当に良い人間じゃったら、可愛い子供の持つ物を取り上げたりするだろうか？
　大人はの、幼子を大切に育てる義務があるのじゃ。それが実の子であろうと、他人の子であろうと、王子様であろうと関係ない。大人はの、幼子を悲しませてはならぬのじゃ。そして、盗んではならぬのじゃ、何物をもな！」

「それでは盗んだトロイの自業自得だと？」

「そうじゃよ、王子。そなたが、イエスと言おうと、ノーと言おうと、罪は罪。酷いことじゃったが、それはトロイの支払わなくてはならぬ、罪の代償じゃったのじゃ」

何かがエクリースの頭にドカンとぶっつけたような衝撃が走った。

「罪……」

「そうじゃ、罪なのじゃ。そなたのせいではない。罪とは支払わなくてはならぬもの。だからこそ、罪なことをしてはならないのじゃな、人間は」

エクリースは初めて、何か重い石ころが解け去って行くのを感じた。

8

8

ビクターが意を決してサミュエルの館の門を叩こうとした時、偶然中からサミュエルが現れた。二人は鉢合わせになり、互いに訝しく相手を見つめているばかり。

「何をしに参られたのだ？」とサミュエルが問うと、

「あなた様こそ、血相を変えてこんな所にお戻りとは！」とビクターも言い返す。

「ああ」とサミュエルはバツが悪そうに受けた。

「我が領地クレヴィアンはしばし代官に預けてきた」

「それでは、何ゆえ？」

「考えはそなたと同じことじゃないのかな」とサミュエルは意味深に言ってウインクした。

「では、あなた様もエクリース様のことを！」

「もちろんだ。これから、急ぎ嘆願に行くつもりだ、王の所へとな」

「サミュエル様！」と、感激しつつビクターはサミュエルの両手を握った。

「ありがたいことでございます」

「まぁまぁ、よせよそんなことは」とサミュエルは答えた。

「噂では、イデット妃が息子サイラス王子を過って殺してしまったと言うではないか。それならば、いつまでもエクリースを塔に閉じ込めるのは良くないことだ」

「聞くところによると、エクリース様は最近断食を始めたとか！このままでは、餓死なされます。それはエクリース様の意志ということでしたが」

「なぜ、誰も真実をエクリースに伝えないのだろうな？」
とサミュエルは門の前で腕組みしながら言った。
「エクリースに罪は無いと言えばいいものを！　エクリースのことだ。全ての責任は自分にあるとでも思いこんでいるのだろう。誰も伝えなければ、せめてわたしだけでも、と思ったのだが。その許しを貰いに、王に会うつもりで出ようと思っていたところに、君が現れたとはね」
「これは単なる偶然とは思えません」とビクターは同意する。
「わたしも微力ながら、お力になりたいと思いまして。ですが、果たして単なる従者に過ぎないわたしの言うことなど、王様はお聞き届けになるのでございましょうか？」
「分からんね」とサミュエルは顎を撫でた。

「ただし、最近王はめっきり弱られたと聞く。確かに、第３王子を亡くされ、それも実の母親であるお妃様が犯人とあっては、気がめげない方がおかしいが。
　その上、王はもう随分歳を取られたものだし、この国のお先も暗いものだ」
「エクリース様をお世継ぎにすればいいのですよ！　さすれば、全て解決なのに」
「それだけは無理だろうな」とサミュエルは浮かない顔だ。
「未だに王は、前妃ドロテア様やブライト様の死が、エクリースのせいだと思っておられる。根強い“デスティの生まれ変わり”説をも、どこかで信じておられるようだしな」
「王様も、可哀想なのですね」と一旦は言ったものの、直ぐにビクターは、
「ですがね！　そういう偏見を捨てなければ、この国の未来はありませぬ！！」
と叫んだ。

「まさか、第3番目のお妃をお考えでは無いだろうな」
とサミュエルは嫌な顔をして言い継いだ。
「最後の賭け、ですかぁ」とビクターは残念そうだ。
「あり得るよ」
サミュエルはしたり顔で答える。
「だがね、とにかくわたしの馬車ですぐさま王宮に向かおう。こんなことしている間にも、エクリースは餓死しかかっているのだぞ！」
「はいっ、サミュエル様！」
こうして二人は急いで馬車の支度をしたのだった。

☆ ― ☆ ― ☆

ただし、餓死しかかっているはずのエクリースは、今はもう満腹状態だった。
「どうじゃな、エクリース王子よ。己れだけ罪の意識を持つのはやめたかね」
とソラリス先生がのたまっている所だったが、エクリースはいま一つ釈然としていなかった。
「いやいや、まだまだ懊悩は尽きませぬ」
「まだあるのか！　やれやれ」
「例えば、この時計をくれた兄上です。兄上は、類希なものばかりを身に付けた素晴らしい人でした。それなのに、わたしを助けようとして溺れてしまった。天はどうして……？
あ、分かりました。それは、グライスのせいだと先生は言いたいんでしょう？　確かにわたしを川に突き落としたのは、グライスです。けれども、グライスをそのような気にさせたのは……やっぱりわたしでは？」

ソラリス先生は深い溜息をついた。
「空が青いのも、朝になって東から太陽が昇るのも、雨が降るのも

全て自分のせいだと言いたいのじゃね、王子」
「いえ、まさか……だけど」
「王子よ、そなたのひがみ根性は、なかなか治らぬな」
「それって、ひがみ根性でしょうか！？」
とエクリースは初めてぶーたれた。

「王子よ、確かにグライスは気の毒じゃった。けれども裏を返せば、自分がやったことは、復讐でも何でもなく、ただ母ジュリアを一人ぼっちにさせただけではないのかな？
あの時グライスがやるべきことは、生きて母ジュリアを護ることだったのじゃ。歪んだ復讐心のせいで、母を悲しませ、そして麗しいブライト様をもこの世から消し去ってしまった。それはそなたのせいと言えるかな？」
問われたエクリースは、ただ黙り込んでいるだけだった。

9

もとドブネズミのソラリス先生は、エクリースの運命は自分のせいでは無いと、ことごとく論破した。けれどもエクリース自身は、どうもしっくり来ないのだ。

今は何も言っていないが、何よりも最愛のベアトリスを亡くしてしまっている。それもまた、それは彼女の持つ運命であってエクリースの呪いとは何の関係も無い、と言い張るのだろう。

―自分のことではないから、そんなのんびりした事が言えるのだ。２００年間もドブネズミで居たから、神経がおかしくなってしまったか、鈍感になったか、それとも……人間の感情より、ドブネズミ根性が強く出ているのかもしれない。

大体こんな人物が、博士だなんて聞いて呆れる！

エクリースは、最初に抱いた歓喜が次第に失せていくのを感じて、深い溜息を付いた。どっと疲れと拷問による傷の痛みが押し寄せ、冷たい石の壁に寄りかかった。

「どうした、王子？」

「もう疲れました」とエクリースは正直に答える。「あなたの御託は沢山です。例えそうであったとしても、時間は後戻り出来ないし、亡くなった人はもう返らない」

「その通りじゃよ、王子」とソラリスは言った。

「話題を変えようか。つまりこの恩、どうやって返そうかのう？」

「ここから出して下さい！」とエクリースは癇癪を起こして喚いた。

「どんなに美味しい料理があっても、僕の罪の贖罪を延々と述べ立

てても、こんな所に居る限り、僕は何も出来はしない。
僕にはすることがあった。あのハラレの罪を暴く為に、又無実のエレーヌ姫の霊を彼岸に送る為に、やることがあったのに！　そうしていると、ベアトリスのことがせめて忘れられるんです。そして、ベアトリスとは決して結ばれなかったという事実を、納得させることが出来るというものですよ」
エクリースの言葉には“皮肉”という毒が含まれていた。

「そもそもベアトリス以上の女性が僕の前に現れるとは、到底思えない。今度の皆既日食に結ばれるだの何だの……そうやって、僕を慰めているとしか思えないじゃないか。一体何年先なんだか……」
「王子よ、自棄（やけ）になるな」とソラリス先生は優しく言った。
「その時は必ずやって来る。それはそうと、ここを出たいと申したな。それでは何とかして、ここから出してあげよう」
「ふん」とエクリース。「先生は料理は出せるが、こんな高い頑丈な塔から、どうやって脱出させると言うんです！？　そこまで出来るとは、とても信じられませんね」
「わたしを馬鹿にしておるな」とムッとしたソラリス。「卑しくも、わたしは２００年も生きておるのじゃよ。その間、色々な動物達と仲良くなった。わたしを追いかけていた猫どもとも、な」
「猫が、なんですって？」とエクリースは嘲笑する。
「あ～あ、バカバカしい。聞いて損した」
エクリースはクルリと背を背けた。

「実はな、その中にわたしと仲が良くなった鳥が居てな」
「ふうん」と素っ気無い返事。
「ま、手のひらサイズの小鳥じゃがね」
「手のひらサイズ、ね」
「わたしがピューッと口笛を吹けば、その鳥はすぐさまやって来るのじゃ」

「ドブネズミと鳥が、何語でしゃべるんです！？」と馬鹿にしたようなエクリースは、今ではすっかり人が変わっていた。肉体の痛み、喪失感などは、人を自暴自棄にさせ、何でも小ばかにしてしまう傾向があるのかも知れない……？

「その鳥とは色々話し合っては、互いに慰めておった。その鳥はただの鳥では無いぞ」

「じゃどんな鳥？　まさか、鶏とか」

エクリースはぶぶぶぶっと嗤いだす。ソラリス先生は哀しそうにエクリースの背中を見つめた。孤独な王子の心は荒み、誰からも顧みられない心は絶望に沈む。それは、以前若き自分が味わった悲哀だった。

けれども客観的に見ると、少し滑稽にも見えるのはなぜ？

「ま、呼んでみようかの」

「どうぞ、どうぞ。お手並み拝見ですよ」

「もう直ぐ夕暮れじゃの。それまでに何とかせねばならぬ。そうでないと、王子、そなたは肉体よりも先に、その純粋な心が死ぬ。……いや、もう死んでしまったかもしれぬの」

不貞腐れたようなエクリースの背を見つめながらソラリス先生は呟くと、急に凛々しく立ち上がり、今まで聞いたことの無いような不思議な音色の口笛を吹いた。

しばらくは何事もなく、エクリースはもう完全に白けている。

その時、パタパタという可愛い羽音と共に、たった一つだけ開いている高窓から、一羽の真っ白い小鳥が飛び込んで来た。

10

10

サミュエルがビクターを伴って王の居室に案内されると、王は長椅子に半分横たわり、隈の付いた窪んだ瞳を閉じ、横には更に歳をとったシスリー長老が立っていた。

サミュエルとビクターは慌てて跪くと、王は目を開けてぼんやりと二人の若者を見つめた。

「そなた達、なにゆえ……？」

その声は疲れきり、絶望しきっている。

「恐れながら王様、何とぞ王子エクリース様を塔からお出し下さりませ。エクリース様は、我が義姉イデットの仕業を知らないのです。このままでは、最後のお世継ぎであるエクリース様も死んでしまわれますぞ！」とサミュエルは懇親の力を込めた声をあげた。

けれどももう王はどうでもいいといった、投げやりな表情だ。

「その話か……もうその話はよい」

「は！？」と驚きのサミュエル。「そんな……」

「もうわたしには何も残っては居らぬ。先の妃、長男ブライト、そして三男サイラス、それから二番目の妃イデットも失った。この世にわたしほど酷い運命の王は居るまいて」

そう言うと、王は手を頬に当てて泣き伏した。こちらの若者二人は、びっくりして王の弱気な有様を眺めているだけだ。

「そなた達の気持ちは察するぞ」とシスリー長老が代わりに述べた。

「けれども、王様におかれましては、もうエクリース王子のことは忘れたいのじゃ」

「そんな馬鹿な！」とやや後ろに控えていたビクターが叫んだ。

「王様！　エクリース様もあなたの様のお子でございます！」

「エクリースはもう我が子ではない！」
と王は顔を上げ、キッとした鋭い表情で言い返した。

「わたしはもう老いた。よって、三番目の妃を娶るのにも疲れ果てた。わたしは……ドイル・アンギヴィル公爵に、王位を譲りたいと思う。ドイルの母はわたしの妹。致し方ないと言う物だな、これも神のご意志であろう」
「……！！」
二人は声もなく跪き続けている。
サミュエルは思い出していた。あれはベアトリスの館でのこと。デブのオリビエとひそひそ話していた、陰険で狭量な少年だったその人。ベアトリスを卑しい目付きで品定めし、そのくせ彼女を本当には愛していなかった……。
そんな人物が、次の王位を継ぐとは！

ビクターは顔を上げ、必死の形相で王に迫った。
「王様！　よくお考え下さいませ。わたしはエクリース様に長い間おつかえしていた者でございますが、エクリース様は一見陰気で無口に見えて、真実のお姿はそうではありません！　気持ちの優しい、思いやりの深い、そして大層聡明なお方なのです。その麗しいお姿通りに、心も美しい方なんです。
けれどもご自分の良い所を、なかなか表に現そうとはなさいません。そこで色々誤解を招いていらっしゃるのです。日食に生まれてしまった為に、『闇の王デスティの化身』などと呼ばれたり、『呪いの王子』と囁かれたりと。それを知っている王子様は、どんなにお苦しみだったか。
そして王様からの愛を求めていらっしゃいます。何も仰らなくとも、わたしには分かります！　王様！　ですから……」

忠臣ビクターの懇願も、今の放心状態の王には何も響いていない

ようだった。
　王はゆるりと顔を上げると、シスリーと何ごとかを囁き合っていたが、やっと口を開いた。
「分かった。わたしはエクリースを抹殺することはやめる」
「おお、ありがたや！」とビクターは両手を合わせた。
「けれども、エクリースを王位に継がせることだけは決して出来ない。もしもエクリースが王位放棄の書面に署名するならば、わたしはエクリースを許し、あの塔から自由にする」
「ありがとうございます」とサミュエルも感涙に咽んで頭を下げた。けれども次の王の言葉は、余りにも……。

「がしかし、わたしはエクリースにこの王宮には二度と入らせない。領地もやれぬ！　我が息子としての縁も切りたいのじゃ。二度とわたしの前に姿を現せるな！　それが条件だ」
　王のその言葉に、シスリーも頷きつつ言った。
「わたしももう１４５歳。この国の将来を見届けることはもう出来まい。であるから、少なくとも、王に相応しからざる人物はここから排除したいのじゃ。分かるな、お二人方」
「王には相応しくないと！」とサミュエルは叫び、ビクターは俯いた。
「けれども、それが条件だとしてもわたしはエクリースを助けたい。あなた方が救いの道を絶ったとしても、わたしの領地クレヴィアンにエクリースを迎えることは出来る」
「それはそなたの勝手だ」と王はくぐもった声で言った。

　それから王は夕暮れの茜色に染まる窓際に立つと、大窓から遥かな奥に建つ塔をじっと見上げた。
「わたしも辛いのだ……。だが助命の書類は直ぐに書く。それを持って、塔の王子の所へ行ってやってくれ」
「分かりました。エクリース様は、わたしが責任を持ってお預かり

致します」
とサミュエルはキッパリ言い切った。

11

11

エクリースの塔の部屋に飛び込んで来た白い鳥、白鳩は目をパチクリして辺りをキョロキョロと眺め回していたが、直ぐにソラリスに気付いたようだった。

「わたしじゃ、鳩よ、わたしっ！」

「ひょっとして……ドブネズミ？」と鳩が喋ったので、エクリースは腰をぬかすほど驚いた。

「な、なんで、鳩とネズミが……」

「言葉が分かるのはな、王子、そなたの持っている魔法のおかげじゃ。他人からは、ただクックークックーとしか聞こえんのじゃよ」

「僕は魔法使いじゃない！」

「けれども、今までどれだけその力で自分の身を護ったものやら、じゃな」

と、もとドブネズミのソラリス先生は、皮肉っぽく言った。

「確かに」とエクリースは腕組みしつつ首を傾げた。「色々危ないことが起ると、不思議とどこかから力が出て来たり、黒い雲が現れたりしていたな……」

「そなたは、何かに守られているのだよ、王子。自信を持つことじゃな」

「じゃなぜここから出られない！？」

「ん？　ま……それはじゃな……試練は必要、ということかも知れんな」

「それじゃ説明になってない！」とエクリースは怒鳴った。

「とにかく、王子」と小さな声で振り返ると、そこには例の白鳩が

黒い目を輝かせていた。
「ここを出たいなら、お早く」
「ああ、出たいよ、だけど君の身体ではな」
「この身体は自分の物では無いんです」と鳩は言った。
「ああ、じゃあなにか……まさか、君もなんかの博士とかじゃないだろね」
「いいえ～、わたしは鳥の中の鳥、いわゆる王、なんですよ」
「馬鹿らしい」とエクリースは一蹴した。「こんな小鳩が鳥の中の王、だと!?」
「まあまあまあ、王子、彼の言う事をよく聞き、そして彼本来の姿を取り戻させて下さい」
とソラリス先生が取り成す。「この鳩のいう事は事実なんです。古(いにしえ)の魔法により……」
「鳩にされた」とエクリース。
「仰るとおり!」と鳩は羽を広げてギャーギャー騒ぐ。

「だけどどうやって、その鳥の中の王、とやらに出来るんだ、この僕が」
「王子、この鳥の本質だけを見てあげて下さい。さすれば、この鳥がどういう姿をしているか、分かるはずです」
「分からないね、先生」とエクリースはつれなく言った。「単なる、鳩にしか見えないよ」
エクリースは急にバカバカしくなって、どっと疲れを覚え、その場にへたり込むと目を逸らした。
「結局の所……脱出なんて不可能なんだ。大鷲でも居ない限り。それも、この石壁を壊すほどの巨大な大鷲が……」

夕暮れの光が、鳩の上に落ち、鳩の黒い影が石壁に映っている。
「そう、それぐらいの巨大な大鷲とか居ればなぁ～」
「居るじゃないですか」とさり気なく言うソラリス先生に、カッと

してエクリースが振り向くと、そこには……確かに！　確かに、大鷲が居るではないか！！
「えええ～～～っ！？　まさか」
　エクリースが疲れや痛みを忘れるほど驚愕していると、大鷲は羽根を広げて、首を伸ばした。その羽根は牢の中の壁に当たるほどだった。

「王子よ」と呼びかけるその声は、さっきの小さな可愛い声とは明らかに違う。威厳がある重々しい低声。まさに鳥の中の鳥、王の鳥の声音だ。
「わたしを元の姿にもどしてありがたく思うぞ」
「ひゃ～～～っ！　あんたは元々はそんな姿だったのか！」とソラリス先生も叫んだ。
「待ってよ。僕は何もしていない。魔術を使ったわけでもないし、今回は僕の痣からも何も出なかったし」
「いやいや」と大鷲は遮った。「さっきお前は、『大鷲でも居ない限り。それも、この石壁を壊すほどの巨大な大鷲が……』と言ったな。その願いが、わたしの元の姿と同一だったのだ！」
「では、王子は知らない内に、あんたの元の姿を頭に浮かべていたというのじゃな」
「その通り」と大鷲は我が意を得たりとばかり、頷いた。

「知らない内に……か」とエクリースは呟いた。「少なくとも、僕は何もしなかったけど……でも、元の姿に戻って良かったことは確かだ」
「当たり前だ、王子。感謝するぞ。して、王子、そなたの求めていることを実行してあげよう」
「ここから……逃げる！？」
「もちろん」と大鷲は言った。「わたしの背中に乗りたまえ。一人ぐらいなら、運んであげられる」

「それじゃ、わたしはどうなる？」とソラリス先生は喚いた。
「王子がお前の姿を戻してあげたのだ。お前みたいなバッチいドブネズミに口づけするとは！　そんな人間はもう誰も居らぬぞ！　あとは自分で考えるのじゃな、その奸智で」
「奸智とは、そりゃ又失敬な」とソラリス先生はブツブツ。
「分かったよ。わたしは何とかする。が、王子をどうやってここから脱出させるのじゃね」
「こうするんだよ」
そう言うと、大鷲は鋭い鋼鉄のような嘴で、塔の石に突進した。
幾つかの石が、物凄い音を立てて、地面に崩れ落ち、ポッカリと穴が開いたのだった！

12

12

サミュエルとビクターが、王の許可書を持って塔の壁面の螺旋階段を登っている時、一番上の方からガラガラという大きな騒音が聞こえた。二人は互いに顔を見合わせ、それからは出来るだけ早く階段を登り始めた。

けれども、例え彼らが若くとも途中で息が切れ、膝もガクガク、心臓バクバクで立ち止まった。二人は膝を折ってハアハアと言う苦しげな息を整えるのに、少し時間が掛かった。

「さっきのあの音は何でしょう、サミュエル様」

とビクターがゼイゼイ言いながら問うと、

「さあ……知らんね」と、サミュエルも途切れ途切れ答える。

「物凄い音でしたね。何かが壊れていくような、何かが落ちたような」

「だな。それにしても、この塔の一番上はまだあと3階分ほどある。余程、エクリースが恐ろしかったのだな。馬鹿げたことだが」

「とかく人間と言うものは、理解出来ないものに対して、恐怖感を抱くものなのでしょうね」

「さ、ビクター、あと少しだ！　早く登ろう！」

「分かりました。後少しで、エクリース様も自由になられるのですね、そしてあなた様の領地で憩えられる！」

「行くぞ！」

直ぐに若い二人は息を整えると、勇んで登り出した。けれども直ぐに、恐るべきことを知ることになる。

☆　—　☆　—　☆

二人がやっと塔の一番上に到達すると、その部屋にはポッカリ大穴が開き、あと少しの日没の光の中に、一人のしなびた老人、つまりソラリスがポツンと座り込んでいただけだったのだ。
「あっ！　エクリースは？　エクリースはどこだ！？」
とサミュエルは、大穴の近くに来ると叫び声を上げた。
「居ませんね、どうしてでしょう？」
「と言うか……ここに居るご老人は何者だ？」
とサミュエルは怒気を含んで、今度はソラリスの方に向き直った。

「あ……皆様方はどちらのお方で？　わたしはドブネズミ……いや、ソラリスという者でございます」
「何だと！？　ネズミ？　ソラリス？　馬鹿を申せ！　ここにはエクリースという王子が捕われていたのだ、お前のような腐り果てたような老人では無い！　エクリースはどこに行った？　なぜここに居ない？」
噛み付くようなサミュエルの言葉に、ソラリスは縮み上がった。

「お若い方々、どうか落ち着いて下され。エクリースという囚人は、大鷲に乗って何処かへ飛んで行きましたのじゃ。ほんの少し前でしたかの」
「何だと！？　この大嘘つきめが！」
もう少しで掴みかかるところを、ビクターが背後から止めた。
「サミュエル様、相手はご老人ですよ」
「そう、こう見えてもわたしは、まだ３１歳じゃったのだ……２００年前はの」
「何を言っている！？　このジジイは」と吐き捨てるようなサミュエル。
「まあまあまあ、お静かに、お若い方々。わたしは魔法でネズミになっていたのを、ここに居た王子に救われたのじゃ、、、、、ま、

魔法でな」
「では、やはり、エクリース様は、又しても魔法を使って……」
とビクターは僅かに身を震わせた。

「魔法を使えるのは本当じゃ。ただご本人には、それを上手く御することが出来ぬが」
「じゃ……エクリース様は、“デスティ”と言うのは本当か？」とビクター。
「そうではないじゃろう。良いお方じゃよ。だが自分に自信がなさ過ぎるようじゃ」
と静かにソラリスは述べた。そしてポッカリ開いた大穴を見つめた。
「王子はの、大鷲と共にここを去った。もう未練は無いと申しての。大空を嬉しそうに舞って……それから片手を挙げて、去って行ったよ」
「遅すぎた！」とサミュエルが嘆いた。「あと少し待っておれば！　せっかくお父上からの、許可書を持って来たと言うのに！　あと少しで自由の身になれたと言うのに！　悔しい」
サミュエルは許可書を持ったまま、膝を付いた。

「王子には、ここに残り王位を継ぐ意志などなかったのじゃよ」
「ソラリス……殿、どちらの方角に行かれたのです？」
「サミュエルと言うお方かな……どちらへ向われたか、それは大鷲の心のままじゃな」
「エクリース！」
サミュエルは床に拳をぶつけると、悔しげにすすり泣いた。ビクターはすっかり闇に包まれた穴から、星空を見上げていたが、やがて、
「さ、参りましょう、サミュエル様。エクリース様の行く末は、自ずと知れるでしょう。少なくとも、王子は自由になられたのですから」と告げた。

「そうだな」とサミュエルはポツンと言う。「エクリースは自由になったのか……。それでは戻ろうか。ソラリスとやら……宜しければ、わたしの館においで下さってもよいのです。喜んでお迎え致します」

「そうか！」とソラリスは嬉しそうに叫んだ。

「わたしは、錬金術と占星術の博士じゃったのじゃ。あなた方立派な方々のお役に立てれば、２００年もドブネズミで居た甲斐があったというものじゃな。ありがたくお受け致しますぞ」

三人は、松明の光の元、そろそろとその呪われた塔から降りて行った。

第二章　見知らぬ土地で　1

1

一晩中、エクリースを乗せた“鳥の中の鳥の王”大鷲は、星の瞬く闇夜を飛んでいた。

「こんなにも、星の数が多いとは！　今まで僕はちゃんと夜空を見上げたことがなかったなぁ～」とエクリースが必死に大鷲の背中の羽根にしがみつきながら呟くと、大鷲はそれを聞きつけて尋ねた。

「それは不幸なことですな、王子。ところで王子、あなたはどちらに行きたいので？」

「さあね～」とエクリースは物憂げに答えた。「もう生まれたあの国には行きたくはないが、さりとて、ベアトリスとの思い出一杯の北国の山地に行くのも嫌だな。……できたら東の方角かな？　そこで僕がやらなくてはならないことがあるのでね」

「やらなくてはならないこと？」

「そうだね」とエクリースは、エレーヌ姫の霊と、思いがけなくコレットを思い出しながら、そっと言った。

「いいでしょう、あなたのお望みのままに。けれども、東の方は奇妙な人々が多い土地。あなたのような人の行く場所ではない、とわたしは思うんですが」

「大鷲！　僕の言う通りにしてくれ！　約束したんだ。それにもう故郷では、僕は誰からも見捨てられ……あとはただ死ぬだけだった」

「分かりました」と大鷲は溜息をつきながら、頑固なエクリースの希望に答えた。

「じゃ進路を東に変えましょう！」

「いざ、行け～～～！」と、久し振りに朗らかになりながら、エク

リースは雄叫びを上げたのだった。

けれども夜空はもう寒い。いつのまにかエクリースはかじかんだ腕で大鷲に抱きつきながら、うとうとと眠ってしまっていた。その夢の中では、エクリースは子供に返り、ベアトリスやグライスと共に、野原で遊んでいたのだ。

けれども、渦巻く激流の川に着くと、エクリースは夢の中だと言うのに震えだしたのだった。

「ベアトリス……兄上……僕はこれからどうしたら……？」

とブツブツ寝言を言うエクリースを乗せ、大鷲は大きく羽ばたきながら、遠く遠く故郷から離れて飛んで行った。

それから大鷲は、ある場所でヒラリと降りると、まだ眠っているエクリースをそっと地面に下ろしたのだった。そこは、何も無い荒地。

「王子や、ここまでだ。わたしもかなり疲れた。ここがこの国の東の最果て。あとはご自分の力で進んでいくが良い。又会うこともあるだろうが、その時までさらばじゃ！　黙って去ることを許せ」

今までの蓄積された疲労に泥のように眠っているエクリースを残すと、大鷲は再び羽ばたき、果てしない暗い夜の闇に溶けて行った。

☆　―　☆　―

☆

エクリースが脱出したという事実は、王宮を混乱に陥れた。

王は複雑な表情で真一文字に口を結び、シスリーは苦虫を噛み潰したような渋面を作り、騎士ウーリッヒは残念な面持ちで拳を握り……そして、ハラレも又ギリギリと歯軋りしていた。

今回はどちらに行ったかも判明せず、エクリースの行方は遥として知れなかったが、ハラレには何となくエクリースが東の方角に行

ったような気がしていた。
「けれども、あの森は『人食い森』……例え東に行こうと、結局はあの森で食われてしまうだろうて。それに、エクリース王子は、もう王位にサヨナラしたいようじゃな。二度とここには現れることは無いだろう」
ハラレは、ニヒヒヒと嗤った。

そして又、今度は南に旅立つ一行があった。サミュエルとビクター、身重の妻のアンネット、それから例のソラリス（いんちき）博士達だ。ビクターはエクリースの不在の間、サミュエルに仕えることにし、ソラリスはいつか黄金を作り出す、とサミュエルに約束した。
「何しろ、食べ物を出現させたわたしじゃ。いつかはサミュエル様に、黄金を作りだしてさし上げましょうぞ！」
「ハハハハ、まあ、その時をゆっくりと待つかな」とサミュエルは本気にしていない。
実はソラリスの出した食べ物すら、エクリースの秘めた魔力のせいだとは気付いていなかったのだ。

そう言う人々の様々な思惑も知らず、朝までエクリースはハラハラ舞い落ちる枯れ葉の中にうつ伏せになって横たわっていた。
そして遥か遠くから、二頭の馬の蹄（ひづめ）の音がエクリースに迫って来ていたのだった……。

2

2

昏々と眠り続けるエクリースは、半ば枯れ葉に埋まっている。そこから少し離れた所に、二頭の馬は止まった。

「お兄様、あれは……？」

そう控えめに尋ねたのは、派手さを押さえたベージュ色のボンネットを被った若い女性。ボンネットからはみ出す見事な金髪の後れ毛に包まれた小顔は、大理石のような白さ、そして深い湖のような澄んだブルーの瞳だった。

尋ねられた方の青年は、やや薄い金髪を肩まで垂らし、同じく白いが幾分日に焼けているようだ。その耽美的な風情の面立ちは憂いを秘めて麗しいものの、どこか野卑なところがあった。

共通しているのは、どちらも田舎には相応しく無い素晴らしい衣装を着ており、高貴な雰囲気を漂わせていることだ。

「人間のようだな」と青年は呟く。

「行きましょうか？」

「放っておけ。所詮、行き倒れだろう」

「でも」と若い女性は、なおも躊躇う。そして言った。「わたし、行って見て参ります」

「お前もすき者だな」と兄と呼ばれた青年は素っ気無い。

「好奇心があるのかも知れませんわ」

そう言うと、若い女性はパカパカと馬をエクリースに近付けた。

「ソフィア！　気をつけるんだぞ！」と青年はじっとしたまま叫ぶのを、ソフィアはつと振り返って微笑んだ。

「大丈夫ですわ、ご心配なく」

そう答えたソフィアは、エクリースの直ぐ近くまで寄った。
「まあ！」という悲鳴が、その形の良い口元から出る。
「お兄様！　人が倒れております！　まだお若いみたい……少年のような……そして酷い傷よ！　早く来て！」
妹の懇願に、兄は渋々近寄って来た。白い汚れたシャツが半裸の身体に纏わりついているだけのエクリースを、二人は馬上から見下ろした。

「お助け致しましょう！」
「もう死んでいるのではないのかな」
「それじゃ、わたしが降りて見て参ります」
「いや、わたしが行く。どうせ無駄だとは思うがね」
そう皮肉っぽく言うと、兄は馬から降りた。その優雅な素振りで、この青年がどのような境遇なのか一目瞭然だ。

彼は一歩一歩エクリースに近寄り、その顔を覗き込んだ。最初の憮然とした表情は、エクリースの横顔を見ると一変し、ソフィアには分からない卑しい笑いが浮かんでいる。
「ほぅお！　なかなかの美少年だな。服は粗末だが、容姿は素晴らしい。どこかから逃げて来た奴隷なのかな？　どちらにせよ、この辺の者達の顔じゃないぞ」
「お兄様、どう？」とソフィアが背後から言いかけると、青年は振り返った。
「まだ息があるみたいだ。逃亡奴隷かそこらだろうね」
「まあ、可哀想に！」とソフィアが嘆息する。
「かなり傷を負っているようだ」
「助けてさし上げて！」
「そうだな……ま、いいか。我が家は広いし」
「神様のお導きなのですわ、きっと」と信心深そうに、ソフィアは呟いた。

青年がエクリースを抱き上げると、その黒髪が蒼白な顔に掛かり、少しだけ目が開いた。
「あ」
「黙って。もう大丈夫だから」と、青年が優しく言いかけるが、その中にどこか猫なで声のような響きをエクリースは感じ取った。けれども、もう何も言えないほど、エクリースは消耗していたのだ。
「よいしょ。ふん、軽いな～、何も食べていないの？」
「あ、はい」
「名前は？」
「名前は……エ……」
「ん？」
「エリス……」
「あ、そう。わたしはアレクセイ。アリョーシャとも呼ばれているけどね」
そう言うと、アレクセイは微笑みかける。その中に、舌なめずりするような妖気をエクリースは感じてぞっとした。

「心配要らないよ。わたし達の館に連れて行くからね」
アレクセイはエクリースを抱かかえて、ソフィアのもとに連れて来た。
「まあ！　案外綺麗な顔をしているのね」とソフィアは素直にそう言った。
「是非、助けてさし上げなければ」
「そうだね」とだけ、アレクセイは答えた。

3

3

エクリースは、アレクセイに抱かかえられるような格好で、長い間馬上に居り、馬の規則的な蹄の音を聞いていた。全ての体力を失い、衰弱しきっていた身体は、少しのことでも抗うことすら出来なくなっている。

ただ、この兄妹の思われる二人の身体から香が漂い、喋り方からかなり東方、そして上品極まりない響きを感じていた。

やがて三人は、途方もなく広い敷地に建つ、白亜の屋敷に辿り着いた。これに比べれば、ベアトリスの館など、使用人のそれにしか見えないほどだ。

二頭の馬が着くと、中からバラバラと使用人と思しき人々が急いでやって来た。

「若様、お帰りなさいませ」

と一人が頭を下げたものの、「おや？」と首を傾げた。

「その者は、一体……？」

「行き倒れていたの、森の端で」と代わりにソフィアが答えた。「凄く傷を負っているみたいなの」

「どうやら、逃亡した農奴か、それとも何か曰くがある者かも知れないな」

と、サラリとアレクセイは言う。

「誰かこの若者を手当てしてやれ！　ああ、森番のドミトリとその妻がいいな。そいつの所に、この若者を連れて行け」

このアレクセイの素っ気無い言葉に、どこか意味深なものをエクリースは感じ取った。そして又、同じことを感じている人物が居た。ソフィアだ。

彼女はエクリースをチラリと見て、明らかに憐憫の混ざった視線を投げると、今度は兄アレクセイの方を、違和感のこもった目つきで一瞥したのだ。それは奇妙な振る舞いだった。

―　ソフィアというこの綺麗な女性は、兄を好きではないようだ……。

けれども、そんなエクリースの思いも知らず、誰かがエクリースをドミトリの所に運んでいった。

☆　―　☆　―　☆

暖かいが粗末な家……この雰囲気は、ジュリアの家に似ている。けれども、建て方から調度品から、何から何まで異国的でエクリースの今まで居た国とは違っていた。ひょっとしたら、大鷲は東の国境を越えてしまったのかもしれない……。

「あらまあ！　誰なの、この若者は！？」と叫ぶ声がした。大柄なお上さんだ。

「若様から頼まれたんだ。行き倒れた少年だそうだよ」

とやはり太った中年男のドミトリ。

「綺麗ね～、だけど酷い傷。拷問でもされたのかしら？　蚯蚓腫れに、紫色の痣が全身を覆っているわ」

「手酷くやられたようだな。だが、若様が人を救うなんざ……珍しいことだわい」

「それはね、この子が綺麗だからよ。エキゾチックで、傷がなければ本当にステキな子だもの」

「若様は……なにしろ」

そこまで言うと、ドミトリは黙り込んだ。

「とにかく、お手当てしなくちゃ」
「きっと逃げ出した異国の奴隷か、それとも南方の農奴なのかな？　まあそんなことはどうでもいい。俺たちゃ、せっせとこの子の介護をして、ちゃんとした姿に戻さなくちゃならんぞ」
「名前は、あんたの？」と上さんが問うと、エクリースは擦れた声で、
「エリス」とだけ答えた。
「どこから来たかは聞かないわ。でもいずれ、あなたは若様の奴隷となるのよ。そうでなければ、若様はあんたのような行き倒れを拾ったりはしないもの。例え逃げおおせたと歓喜しても、それはいずれ涙に代わるの」
「え！？」
「そこまでにしろ、アンヌ！　余計なことは言わなくていい！」
連れ合いの剣幕に、お喋りアンヌは黙った。
「でもしばらくはここに居て、ゆっくり静養するといいわ」
そう言うと、アンヌはウインクした。
――この人からは、暖かい人柄を感じるな……。
そう感じながら、やがてエクリースは眠りに落ちていった。

4

4

それから長い日々が過ぎて行った……。

春になるまで、アレクセイも又妹のソフィアも、エクリースには会いに来なかった。自分の国よりももっと寒い凍えるような冬の間、少しずつ快方に向かったエクリースは、ドミトリとアンヌの手伝いをしながら、失った故国と同じく遠い彼方に置いて来た思い出を、少しずつ忘れ去ろうとしていた。

ここでは、もうエクリースは王子ではなく、ただの下男。いや、もっと卑しい存在としかみなされていなかったかもしれない。けれども、ドミトリは気のいい男であり、アンヌはお喋りだけはうざいものの、あとは暖かい心のお上さんだったので、エクリースの毎日は楽しいものになっていった。

けれども、それも春が来るまでの間だったのだ。

ある日、それは雪解けの為にぬかるんだ土の下から、ユキワリソウが目を出した頃だったが……アンヌが慌てて外から家に入って叫んだのだ。

「エリス！　エリスは居る！？」

「はい、ここに」と既に17歳になったエクリースは、薄暗い小屋の端の方でチーズを作る為に、壷のミルクを混ぜながら答えた。毎朝の乳搾りはエクリースの役目だったし、今ではアンヌ直伝のチーズやバター作りを教わっていたので、かなり腕を上げていたのだ。

「早く、ここに来て！」

「はい」

そう素直に言うと、エクリースは明るい窓辺に姿を現した。アン

ヌはハッとして、エクリースの全身を改めて見つめる。エクリースは粗末な布地のシャツに、分厚い継当てのある上着を着ていたが、その姿は見惚れるほどになっていた。

「エリス……とうとうこの日が来たわ」

「何のことでしょう？」

「あんたが、お屋敷に上がる日がってこと」

「お屋敷に？　ここでずっと働くのではなかったのですか」

「とんでもない！」とアンヌは頭を振った。

「今朝がた、わたしがお屋敷に上がって台所仕事をしていると、ふいにアレクセイ様が現れたのよ。そしてこう仰った。

『わたしが預けていた、あの行き倒れの奴隷はどうなっている？』

とね。

それでわたしは、『もうそれはステキな若者になっておりますわ』と答えたの。すると若様は、あんたを至急お屋敷勤めにしたいと仰って」

「それは……何時から？」

「今夕からですって」とやや淋しげにアンヌは言った。「でも、それが定めなのよ。わたし達、ただあんたを預かっていただけなんだから」

「ああ、アンヌおばさん！　ずっとここに居たかったのに。ここほど居心地の良い所はなかったんですから！」

「ありがとう、エリス……でも命令には逆らえないのよ、わたし達って」

そう言うと、アンヌは手に下げていた袋から、紺色と白の服を出した。

「お下がりなの。以前居た誰かのかも知れないわ……」

その表情が曇ったのを、エクリースは感じ取った。そして暗雲が押し寄せてくるのを、見たような気がした。

「ぼ、僕はお屋敷で何をしたら……？」
「あなたは、アレクセイ様やそのお父上のご主人様、そしてお嬢様のお小姓として働く予定よ。ただの下男よりもずっと良い生活だと思うけど、でも」
「でも？」
「いいえ、何でもないわ。あんたなら立派に勤まるから大丈夫」

それからアンヌは黙り込むと、その衣装を着せた。その服はピッタリとエクリースに合った。
「よく似合っている……綺麗よ、エリス。今まで居たどのお小姓より、更に美しい。あなたは、本当は農奴じゃないかも知れないわね。何だかそんな気がしてたの。
まるで……どこかから来た王子様みたい！」
“王子”……その言葉を聞くと、エクリースの身が強張った。そして過去の苦い、そして甘い思い出が蘇えって来る。忘れているようで忘れられない、数々の思い出が。

「まさか、そんなはずが無いじゃないですか！　嫌だな～そんな」
「そうよね。でもそれだけあんたが他の人とは違うってこと。だから、アレクセイ様から目を付けられ、じゃなく、目を掛けられたのね」
「おお！　なんて凄いんだ！　さすが若様が拾ったことだけあるな！」
その野太い声は、外から戻って来たドミトリだった。
「別人みたいだよ、エリス。ま、これからはせいぜいお屋敷で働くんだな。ここに比べれば、軽いもんさ」
けれどもドミトリのその言葉は、とってつけたような響きがあった。

―　なんだろ？　この不安な気分は……。

「さ、行ってらっしゃい。気をつけてね。もうわたし達、あんたとは自由に会えないかも知れないんだから」とアンヌがわざとらしい笑みを作りながら言いかけた。
「時間よ、エリス」
「ありがとうございます、お二方。とても楽しかった……今迄で一番」
「……」
黙りこんだアンヌの瞳に、涙が浮かんでいた。

5

5

森番ドミトリとアンヌの小屋からかなり離れた場所に、燦然と建つお屋敷。まるでお城と見まがうばかりの白亜のお屋敷に向って、エクリースは歩んでいた。すると、彼を見つけたのか、それとも待ちわびていたのか、中から様々な人々が出て来た。

「まあ、ステキ！」と一人の若い侍女がエクリースを見て叫んだが、

「所詮、若様の餌食となるのよ」と隣に控える古参格の中年の侍女が、その侍女にそっと耳打ちする。

「そうね……結局、いつも」と若い侍女も口ごもった。

そうとは知らないエクリースは、出迎えた者達に少し驚いていた。

「お待ちしておりました、エリス様」と恭しく老人が頭を下げる。

「わたしが、ここのご主人様、ワシリー様の執事イワンでございます」

「執事？」

「あなた様は、下男ではなく、ここのお小姓なのですから、下働きなどはご無用でございますよ」

そう言うワシリーの表情は、どこか狡猾で、相手に対する侮蔑がかすかに感じられた。

――この老人、どこかシスリー長老に似ているが、けれどももっと卑しい雰囲気だな。

「さあさあ、こちらへ」とワシリーは卑屈に頭を下げながら屋敷の中へと案内する。

広大な敷地に建つお屋敷の中は、やはり中も見事なものだった。

煌びやかなシャンデリアのもと、アーチ型の中階段のある広間には、珍しい調度品の数々が置かれてあり、窓には真紅のカーテン、そして壁には様々な肖像画が。

けれども一際目を引くのは、正面の長椅子に座って居る、黄金色のマント姿のアレクセイと、横に座るソフィアだった。あのときには分からなかったが、アレクセイは不遜な美青年で、ソフィアは自分が覚えていたよりももっと美人だ。歳は、エクリースより一つか二つ年上かも知れないが。

兄妹はじっとエクリースに視線を注ぐ。

「おお、見事だな！　これはこれは、まるで見違えたぞ！　あの時の行き倒れた若者とは思えぬ麗しさだ。その彫刻のような面立ち、立ち姿……どれも申し分ない。ドミトリには褒美を使わそう」

とアレクセイは両手を打ち鳴らせながら、そう叫んだ。

「だろ、ソーニャ？」

「ええ、本当に見間違うほどです」と妹の、ソーニャと呼ばれたソフィアが相槌を打った。

「綺麗な若者ですね……黒い瞳は珍しいわ、ここでは」

けれども、その声は明らかに沈んでいた。そしてエクリースを見つめる青い瞳は伏せがちだ。

「あの……僕はどうすれば？」

「ただわたし達に付いているだけで良いのだ。飲み物、食べ物、様々な世話をして欲しい。そして黙ってわたし達の言うことに従うだけで、お前は楽をして暮らせるのだよ」

その甘い言葉には、棘があった。紺色ベルベットのズボンのポケットに入れていた銀の時計が、微かにぶるぶる震えているのが分かる。

「楽をして？」

「そうだ。手始めに、今夜の晩餐の時の間、ずっと立っていてくれ。それだけでいいのだ。楽だろう？」
「楽で……しょうか？」
「当たり前だ、お前みたいな奴隷に、これ以上楽な仕事なんてあるものか！」
アレクセイは癇癪を破裂させた。
「奴隷に感情なんて要らない。分かるだろ？」
「感情は要らない……？　はい、分かりました」
「お兄様、エリスを恐がらせないで」
と突然ソフィアが介入する。「少し震えているようですから」
「ま、そこもまた可愛いんだがね」とアレクセイは言い放つ。けれども又少しだけニヤリとした。「分かったらお辞儀しろ、エリス」

側に立つ大勢の使用人達は、その間棒の様に突っ立ち、黙ったままだった。そしてチラチラとエクリースを盗み見るばかり。
エクリースは言われるままに優雅にお辞儀をした。ホーっという溜息があちこちから聞こえて来た。
「こんな優美な若者が又、若様の毒牙にかかるなんて」と若い侍女が呟いた。ソフィアはただただ目を伏せている。
鐘が鳴り、夕餉の合図がした。
「さ、行くかな」
そう言って立ち上がったアレクセイの後ろの壁に掛かっていた、古めかしい絵の中の女性の絵姿……それは。
「あ、エレーヌ・フォンティーン！」
思わずエクリースは小さく叫んでいた。

6

6

エクリースが思わず口走った、“エレーヌ・フォンテーン”の名前。それは、居並ぶ者達に小波のような恐慌を与えた。けれども、一番驚いたのは、エクリース本人だった。この見知らぬ異国の館で、まさかエレーヌ姫の肖像画があろうとは……。

立ち上がろうとしたアレクセイは、再び座り込みじっとエクリースを凝視する。

「この肖像画の女性の名前……お前はなぜ知っているのだ」

「その絵の下に、題名が書いてあります」

エクリースは咄嗟に言い訳した。確かに、小さな字で何ごとか書かれてあるが、目の良い者でもなかなか見えないほどの小さな字面だ。そして、古めかしく装飾された字でもある。

「確かにな」と確かめつつ、アレクセイは言った。

「お前の視力は、鷹並みと見える」

「恐れ入ります」

「けれども、なぜこんな古めかしい肖像画に対して異常な興味を抱くのだ!?　他にも色々肖像画は置いてあるだろうに」

「お美しいと思ったのです。そして、とても哀しげだと」とエクリース。

「その通りですわ」と突然今まで黙っていたソフィアが口を差し挟んだ。

「わたしも以前から常々そう思っておりました。このお方は、もともとこのロマネフスキー家の者だったのですが、遠くフォンテーン家に嫁がれたと聞きます。そしてそこで……悲しい最期を迎えられ

たとか」
「ソフィア、もう御託は沢山だ！　さあ、もう晩餐にしよう」
とのアレクセイの鶴の一声で、人々は無言のままぞろぞろとダイニング・ルームに向って行った。

☆　―　☆　―　☆

見事な半円形のテーブルに付いたこの屋敷の人々。けれども当主であるワシリー・ロマネフスキーは見当たらないようだ。
テーブルに付くのは、アレクセイとソフィアとその客人と思しき者達だけ。あとは後ろに下がって、ご主人達がご馳走を食べるのをじっと見つめている。時々給仕達が、次々と料理を運んでいるだけで、この家族の者達は黙ったまま食べていた。
料理は美味しそうでも、彼らのマナーは最低だな、とエクリースは後ろに控えながらそう感じていたが、招かれているらしい貴族の内の一人が、肉を床に落としてしまったのだ。そこからエクリースの屈辱の時が始まる。

「エリス、それを」とアレクセイが傲岸に言いつけた。
「はい」と言いつつ、エクリースがそれを拾おうとすると、
「そうじゃない！」とアレクセイの癇癪が破裂する。「それを食うのだよ、お小姓は」
「え！？」とエクリースは絶句した。
「ここで食べている方々が落したり捨てたりしたのを食べるのが、お小姓の役目です」
とエクリースの側に立っていた侍女が囁いた。
「けれども、それって……」
「そうでなければ、ずっと飢えることになりますよ」
「ですが」

「こんなご馳走、わたし達はただ黙って見ているだけです。食べられるだけましだとお思いなさい！」とその侍女は腹立たしそうに言いつけた。

ふと視線を感じると、ソフィアの青い大きな瞳がこちらに向いていたが、一瞬後それは伏せられる。

―ここでのお小姓って、一体何だ！？

「ここでは、あなたは犬と同じなのです」と侍女は言う。「そうしなければ、あとで若様のお仕置きが待ってますわ、早くなさい！」

エクリースは仕方なく、不承不承その肉の破片を拾って口に入れた。実際は美味いのだろうが、それは気味の悪い不愉快な味しかしない。

「そうすればいいのだ、これからずっと」

とアレクセイは満足そうに言うとニタリと微笑んだ。

けれども横のソフィアの瞳は明らかに翳り、その横顔は限りなく悲しそうに見える。食べてはいるものの、その味もろくに味わっていない様子だった。

それからも、エクリースは客の落としたおこぼれだけを食べた。最後に、アレクセイはポーンと菓子を床に放り投げるとこう言い付けた。

「ほら、エリス！　デザートだ、食え！」

エクリースは無言のまま、その半ば潰れた林檎のパイを食べた。汚れた醜い歪んだ形のパイを。従者達は当たり前のように、エクリースの様子を伺っている。

「よく出来たぞ、エリス」と満足そうなアレクセイの声がした。

「これからは、お前の意志など、ここには存在しない。分ったな」

7

7

明らかにアレクセイは狂っているか、途方も無い我がままで歪んだ性格かどっちかだ……エクリースはそう確信した。けれども、誰もそんなことは言わない。その内に、やっと屈辱的な晩餐は終わりを告げた。

アレクセイとソフィアと客達は、隣の居間に移動すると、和やかに歓談し始めた。そしてエクリースも一緒に付いて来るように命じられた。

しばらく彼らは喋ったり飲んだりしていたが、アレクセイの視線がエクリースに注がれると、その瞳が陰惨にキラリと光る。

―　今度は何なのだ？

「今度拾ったわたしのお小姓は、綺麗でしょう？」とアレクセイは客達に自慢し始めた。

「どうやら南の方の農奴らしいのですがね、こいつは何も言いません。恐らく酷い主人に散々痛めつけられたと見えますよ。それをわたしが可哀想に感じて、助けてあげたのです」

「それは素晴らしいお人柄ですな」と客の一人が褒め上げた。

「いや～、ありがとう」とアレクセイ。

「こいつの身体には鞭の痕、殴られた痕が無数にあるのです。せっかく綺麗な肌だというのに、本当に嘆かわしいものですな」

それからアレクセイは目を細めるとこう言った。

「見たくはないですか、皆さんは」

「お兄様！」とソフィアが制した。「何てことを仰るの！　悪趣味よ」
「いいじゃないか。こいつは瀕死だったんだよ、それを助けたのはお前だろ、ソーニャ」
「ええ、それはそうですが……」とソフィアは口ごもった。
「そんなにひどい傷なんですか」と太った中年の貴族の夫人が扇で口元を押さえながら問う。
「そうですよ、マダム。それはひどい傷で。こいつの昔の主人の残酷さが分かろうと言うものです」

ソフィアはじっと兄を見つめた。『残酷なのはどっちなのかしら？』とその言葉が聞こえたように、エクリースには思った。
けれども、その夫人は直ぐに、
「見て見たいわ、わたし」とはっきりと言った。
「わしもじゃな」と又一人。
「それじゃわたしも」とまたまた一人が言うので、アレクセイは微笑んだ。
「でしょ？　皆様にお見せしたいものですよ」
それからくるりとエクリースの方を射る様に見つめて命じた。
「服を脱いで、この方々にお見せしろ。きっと同情されるぞ、エリス。そしたらここに住んでいるのを幸いだと感じるだろうな、も・っ・と」

―　僕は、こいつらの見世物なんだ！　そうだったのか……お小姓って言うのは、仮の名だったんだ……。ああ、ドミトリとアンヌ！　あなた達と共に、ずっとバターやチーズを作っていたかったのに！

「お兄様！」とソフィアだけが必死で反対している。
「こんなこと、いけませんわ。お小姓だと言っても、ちゃんと心はありますもの。それを」

「農奴には、自分の意志など必要ない。でしょ、皆様方も？」
とアレクセイは意に介さない。この国では、逃亡した農奴は主人の意のままらしいということに、初めてエクリースは気付いた。

「エリス、真ん中に来て服を脱ぎ、皆様にその傷をお見せしろ」
アレクセイの冷酷な声が響き渡り、俗物の客達は固唾を飲んで、面白い見世物を見ようと注視している。
少なくともエクリースは、今までこのような侮蔑的な状況に合ったことはなかった。今までも辛いことや淋しいこと、悲しいこと悲痛なこと、苦痛を伴うことは数々あり、そしてそれを乗り越えてきたが、こんなに恥辱を感じたことは無い。
エクリースの頬は真っ赤になり、心はズタズタに破れていく。そして、せめてソフィアにだけは、自分の酷い有様を見せたくないと感じた。溢れ出る屈辱の涙は初めてだ。

「可哀想な農奴！」と太ったご夫人は感極まってハンカチで鼻をかむ。内心はドキドキしつつ、実際は美しい若者の裸身を見たいと切望し、そして老いた貴族は若者の恥辱的な姿に対して、奇妙な嫉妬と興奮を覚えていた。
「こんなに綺麗な若者に対して、むごいことをするなんて！」
皆は哀れんでいるようで、実は残酷な見世物を切望していた。そしてそれをアレクセイだけは、知り尽くしていたのだ。

けれどもただ一人、ソフィアだけはつと席を立ち、
「わたくし、ちょっと気分が優れませんのでお先に失礼致します」
と言うなり、出て行った。少なくともエクリースはホッとしたし、そのソフィアの後姿に感謝した。この俗物の塊の中に唯一つ澄んだ宝石が有るとしたら、ソフィアだけだと。

8

8

アレクセイとその下品な客達の見世物となってしまった後……エクリースは外に出ていた。荒れ果てた裏庭。けれども星々が瞬く秋の冴えきった夜空が、エクリースの屈辱に満ちた心と体を、幾分慰める。

どうしてこんな場所に来てしまったのか、なぜ大鷲はここまで運んで来てしまったのか、どうして自分は東に行こうとしたのか……後悔ばかりが押し寄せる。

塔に捕われていた時は、そこから逃れたいと思っていたのに、そしてソラリス先生が見事にドブネズミから本来の姿に戻った時には、あれだけ喜んだのに……。考えることはそればかりで、自分の浅はかさを恥じた。そして今のこの状態がいつまで続くのか分らない状況は、エクリースを底知れぬ悲しみに陥らせる。

夜空を見上げるエクリースの黒い瞳は、更に闇夜のように黒く瞬くが、直ぐに涙で曇った。

けれどもその時、

「あの」という躊躇いがちの声に飛び上がると、エクリースは振り返った。月の光の中、ボーっとした人影がある。けれども、その声には聞き覚えがあった。

「あなたは……ひょっとして？」

「ソフィアでございます」と沈んだ声音が応えた。

「やっぱり」

ソフィアは頭からスッポリと、美しい布で織られたショールを被っていた。けれども、そこから金色の髪がはみ出し、月の光がソフィアの青白い肌を益々妖しく美しく見せている。エクリースはしば

し己の悲しみを忘れ、ソフィアに見とれていた。
けれども直ぐ、自分の今の立場を思い出し、跪いた。

「ソフィア様、ですか。なぜこんな場所に」
「シーッ」とソフィアは制した。「小声でお願いしますわ」
「あっ」とエクリースは小さく叫ぶ。
「兄に見つかったら、大変なことになりますもの」
「どうして、ソフィア様が？」
「お話があるのでございます」
と語るソフィアの言い方は上品で、けれども哀しげなのは相変わらずだ。
「わたしのような、お小姓に、ですか」
「あなたは……本当は、農奴ではないのでしょう？　違いますか」
このズバリとした質問に、しばしエクリースは絶句したが、
「済みません、ソフィア様、けれどもこのことは、今は答えられません」
と率直に言った。「けれどもお話とは何でしょうか」

今度はソフィアが黙り込む番だった。勇気を持って来たものの、言うのははばかられるようだ。
「兄のことでございます」
「兄上？　アレクセイ様ですか」
「わたしと兄は、実は腹違いなのです」
エクリースはふと、腹違いの弟、サイラスを思い出した。悲しい思い出だが……。
「そうですか」
「聞いて下さい！　兄はわたしよりも、２０歳は年上なのですわ」
「えっ！？　けれどもアレクセイ様は、２０代では？」
エクリースは真から驚いた。どう見ても、アレクセイは２５、６にしか見えないのだ。

「お驚きになられるのも仕方ないと思います。けれども、それは真実なのです」
「それではなぜ、兄上はあのようにお若いので……？」
「それは」とソフィアは俯く。その横顔の美しさ可憐さに、ベアトリスには無いときめきをエクリースは初めて感じた。
「わたしにも分かりませぬ。でもこれだけは言えますわ。あなたでお小姓は三人目なのです。でも、最初の二人は死にました。一人は湖に浮かび、一人は大火傷の末、お屋敷の上から飛び降り自殺を致しました」
「……！！」
「ですからわたし、怖いのです。今度もまた、そうなるのではないかと。だって以前の二人も、綺麗な子でしたもの。でもいつも、辛そうな何かに必死で耐えている目付きでしたわ。
お小姓とは言え、どちらも兄のオモチャでした。ペットでした。それも可愛がられるペットではなく、残酷に扱われるオモチャに過ぎなかった。
その上、二人とも段々力を無くしていったのです。最後は、骨の髄まで憔悴しきっていました。最初の美しさも果て、残ったのは無残な外見だけ。わたしはまだ年端も行かぬ少女でしたが、見ていてとても辛かった。そして何も出来なかったわたしが……自分でも嫌でした。ですからわたし……」

ソフィアがそこまで言った時、遠くから「エリス！　エリスはどこだ！」と呼ぶアレクセイの声がした。ソフィアはさっとショールを被りなおすと、無言の内に小走りで去って行き、あとにはエクリースだけが残ったのだった。

第三章　新しい世継ぎ　1

第三章　新しい世継ぎ

1

ドイル・アンギヴィル公爵は、今絶頂の極みにあった。母サスキアの兄でもある王から、「次の王に」と言われたときの、あの天にも上る心地！　父を早く亡くした母の、あの驚愕と狂ったような喜びようは！

そして、明日は『立太子』式の日なのだ。世継ぎの皇太子として、王が亡くなるか退位した途端、自分はこの国の王になる……思いもかけず、王になるのだ！

もちろん、ドイルが次の王になると知った者達の中で、苦虫を噛み潰したような者も多々居ることは居た。

シスリーは巧みに本心を隠してはいたが、確かにドイルを見る目はきつかったし、ウーリッヒはあからさまに嫌な顔をしてそっぽを向いた。

そして、サミュエルとビクターは渋面を作り、ドイルを苦々しく思っていた。

特に、アンネットとの間に息子をもうけ、父親となったビクターは我慢がならぬようだった。立太子式の為、久し振りに王宮に出向いた時のこと、ドイルはキンキラキンの下品な衣装に身を纏い、廊下を闊歩していた。その不遜な態度に、以前のドイルを知っているビクターは、反吐が出そうなほど不快になった。

ドイルはまあまあの容姿なのだが、歩き方、振る舞い、態度、マナー、その全てが下卑ており、到底王の器とは思えないが、弱気に

なった王はやはり妹の息子を跡継ぎにしてしまったのだ。
それ以来、ドイルの母サスキアは、それまで端を歩いていたのに、廊下のど真ん中を歩くようになったらしい。

ドイルが近寄った時、お辞儀をするのもムカツいたが、けれども仕方なくわざと仰々しくお辞儀をすると、ドイルは足を止め、気取った様子でビクターに近寄って来た。
「おや？　お前は、あのエクリース王子の召使いだった者では？」
“召使い”という言い方にも腹が立ったが、けれども大人のビクターは恭しく答えた。
「はい、さようでございます」
「あの時、ドリアン公爵邸では、色々あったな～。とにかく寒くて、ボロっちくて、侘しい館だったがね」
「あれはもう、数年前のことでした」
「そうだな。サミュエル・グールデュール殿の奥方だった……確かぁ～～～、べ、べ」
「ベアトリス様でございますが」
「ああ、そうであったな！　ベアトリス嬢の誕生日か何かにご招待されて行ったものだな。ま、奥方は不幸なことになってしまったが……」
「はい、まことにそのようで、サミュエル様のお悲しみは深く……」
「元々、エクリース王子が居たせいなのではないのかな。ぐぁっふぁはははは」
ドイルの馬鹿笑いを、ビクターは歯噛みしながら聞いた。胸がむかつく。
けれども程なくして、ドイルは真紅のマントを翻しながら、去って行った。

☆　―　☆　―　☆

忌々しい思いを抱きつつ、ビクターは先に来ていたサミュエルの館に出向き、その話をしたところ、サミュエルは渋面を作ったまま、しばらく無言だった。

が、やがてサミュエルは口を開いた。

「ベアトリスをこけにした不敬の輩だったのに、今ではもうすぐあいつが皇太子か！　全く、世も末だな。もうすぐこの王国も、終わりになるかもということだ！」

「サミュエル様、何とかしてエクリース様をお探ししませんと」

「もう遅いぞ、ビクター」とサミュエルは悔しそうに言い放つ。

「明日になれば、あの糞野郎が皇太子となる。そして、その母サスキアは皇太子の母として、権勢を振るうだろう。今まで日陰の身に甘んじてきた女が頂点に立つとなれば……エクリースを探し出すどころか、もしも見つければ、葬り去ることもできる立場だ」

「母と言うものは、息子の為とあらば、何でも致しますな、イデット妃のように。そして我が妻アンネットにもそのケがあるようで」

「ハハハハ。アンネットもうすっかり母親か！　……それにしても、エクリースはどこへ行ったのだ？　そしてベアトリスは、とうとう母になる前に、逝ってしまったとは」

サミュエルは再び黙り込んだ。

「お二人方、如何なされた？」と言う声は、ソラリス先生。相変わらず、ただの鉛を金に変えることが出来ない、ぐーたら錬金術士だったが、毎日しごくのんびりと暮らしていた。

「ああ、ソラリス先生でしたか」とビクターが言うと、ソラリスはニタリと笑う。

「わたしの勘では、エクリースは確かに東方に行ったはずじゃが……だが、先ほど大鷲がわたしに言ったハナシによると」

「言った!?」と同時に二人。

「嘴で示したのよ」

「はあ？」
「それがの……大鷲は、北東に飛んで行ったそうじゃ」
「北東！？」と二人とも大声を上げた。「北東と言えば……別の国。あの寒い国では？」
「やばいですのぉ、あの国とこの国とは、国境争いのせいで国交が無いのじゃ」
う～むとサミュエルは腕組みして、考え込んだ。

2

2

北国の遅い夏がやって来た。

母国の世継ぎが、あの少し頭のいかれたドイルとは知らないエクリースは、相変わらず気ままで我がままなアレクセイの格好のオモチャとなって日々暮らしていた。再び自分というものを無くし、滅私奉公をするというのは、エクリースにとっては、牢や塔の中に閉じ込められているよりも辛いことかも知れなかった。

そんなエクリースに対して、ソフィアの注ぐ視線は、時に痛々しく時に優しく、そして時に恥じらいを持つようになっていった。

ある日の事、エクリースは大柄な侍女タチアナから、一緒に付いて来るように言われ、今まで来たことの無い部屋に通された。それは迷路のような屋敷の中の、更に奥まった薄暗い、けれども美麗な部屋で、どこをどう来たのか、エクリースもよく覚えてはいない程だ。

タチアナが去り、エクリースがそこで苛々しながら待っていると、壁のある部分が静かに開き、その隠し扉から薄いブルーのベールを被ったソフィアが現れた。

「ソフィア様！」とエクリースは慌てて跪く。

「いいえ、立って下さい、エリス」とソフィアの鈴のような声が、その奇妙な部屋に木霊した。

「でも」

「いいのです。ここでは、あなたは召使いではありませんわ」

そう言うと、ソフィアはブルーのベールを取り去った。金色の輝くばかりの長い髪が表れ、ソフィアの肩に降りかかる。

エクリースはボーっとして、ただソフィアの素振りを見つめてい

た。

「ソフィア様、こんなことをすると、もしもアレクセイ様に見つかってしまったら……」

と心配そうにエクリースがたしなめると、ソフィアはその形の良い唇に人差し指を持っていく。

「シーっ」

「は？」

「この日を待っていました。兄は今日、新しい駿馬（しゅんめ）を見に行ったのです。毎年、夏の前に兄は狩りの為に新しい駿馬を買うのです。丸二日はここには居ませんの」

そう言うと、ソフィアはやっと微笑んだ。始めてみるソフィアの笑顔は、エクリースをドキリとさせる。彼女の艶かしさは、エクリースの凍った心臓を溶かしていくようだ。そして新たなときめきを覚えてしまうのだ。

――いけない！　この気持ちを持ってしまっては……。

「ソフィア様……」

「ソーニャと呼んで。せめて、兄の居ない間は」とソフィアは控えめに命じた。

「では……ソーニャ。あなたはなぜ僕をこんな部屋に……」

「二人きりでお話したかったんです」とソフィアは悪びれずに答えた。

「あなたは幾つ？」

「１７歳」

「わたしは、もうすぐ１８。一つ年上ね」

ソフィアは小さな窓際の長椅子に座ると、手招きした。そして横をポンポンと叩く。

「ここにお座りなさい、エリス」

「で、でも……」
「大丈夫。タチアナは信用できます。そう怯えないで、エリス。わたし達、似たもの同士なのよ」
「それは……」
「どちらも、籠の鳥という意味で、ね」
そう言うと、ソフィアは意味深に微笑んだ。

エクリースは仕方なく、ソフィアの横に座った。
「エリス、その服似合っているわ」
「この、ピラピラした服が、ですか？」
「まあ！　あなたなら、どんな服でも似あうでしょうに！　そうね……もっと地味な服でも、狩りの服でも、王子のような服でも」
「王子のような……」
苦い思いが、エクリースを包む。

「では、ソーニャ……あなたの美しさは、誰が見ても際立っています。その上、もうお年頃。なのになぜ、男の方々が寄って来ないのです？　婚約者も居ないとは、僕には信じられない。花嫁姿が最も似合う人だと思うのに」
「それは」とソフィアは苦しげに言うと、黙り込んだ。
「ああ、済みません、ソーニャ」
「いえ、いいの。……それはね、エリス、兄が許さないの」
「ん？」
「わたしを誰とも結婚させないつもりなのよ」
「どうして！？」とエクリースは驚きの声を上げた。ソーニャは辛そうに俯く。

「それは……。いえ、言えません！」
「でも、誰かを好きになったり、誰かから好かれたりしたら……」
「わたしを好きになる男の方は、兄の怒りを買うのです。もう数人

ほど、酷い目に合われました。わたしのせいですわ。わたしが色目を使った、と兄はわたしを責めました。でもそうではなく」

「当然です！　あなたのような方を好きになられるのは、しごく当たり前です。男なら、誰だって……！」とエクリースが珍しくいきり立つと、

「では、あなたも？」と顔を上げながら、ソフィアが尋ねた。その表情はいつになく真剣で、その青い瞳は期待に輝いている。「エリス！　あなたもなのですか？　わたしを、愛して下さいますの？」

エクリースは口をポカンと開けたまま、じっとソフィアの顔を見つめていた。その瞬間、二人は燃えるような口付けを交わしたのだった。エクリースのズボンのポケットの時計が、ジリジリと震えているのにも気付かず……。

3

3

次の日の夜、エレーヌ・フォンテーンの肖像画から、何かが抜け出したのを見た、と一人の小間使いが台所で騒ぎ立てた。

「わたし、見たの！　先ほど廊下や居間の蝋燭やランプの灯りを灯しに、種火を持っていたときのこと、あの肖像画から誰かが、まるで影のように抜け出したのよ！」

ぎゃあぎゃあ騒ぎ立てる小間使いを、下働きのアンヌおばさんを含む他の召使い達が、気にも留めずに笑い倒した。

「何言ってんのよ、お前。そんなことがあるわけが無いじゃないか！　じゃあ、あの肖像画の女の人の姿が無くなっているのかい」

「い、いいえ、そうじゃないけど」と小間使いはトーンダウン。

「でも、見たの！　見たんだってば！　嘘なんかつかないわよ！」

「何かが横切ったのを、勝手に想像してんだろ」ともう一人も言った。

「さあ、黙った黙った。これから、お皿を洗わなくちゃ」

白夜の頃なので、今はかなり夜更けだ。屋敷の人々も、もう既にみんな寝静まっているか、宵っ張りの人々だけが居間に数人居残って、ゲームをしているかだろう。

「明日は、アレクセイ様のお帰りだから、ちゃんとした夕食を作らなくちゃ～ね」

とアンヌも欠伸をしながら呟いた。

「お前も早寝おし！　寝不足なんじゃないのかい」

「違うったら！　でも、もういいわよ！」

プンとして小間使いは、出て行った。

「なんだい！？　あの子は夢でも見たのか、それとも頭がいかれちまったのかい」
残った下女達は、散々嗤い合った。けれどもふとアンヌが呟く。
「でも、ここはいつも陰気で妙な雰囲気のお屋敷だよね。何が起っても、不思議じゃないよ。大体、アレクセイ様だって、わたしゃもう何年もここに居るけど、全然お歳を召されないんだから……変と言えば変だよね」

☆　―　☆　―　☆

自室で熟睡していたはずのエクリースが目覚めたのは、なぜだか分らなかった。ただ無性に、身体が燃えるような気がしたが……。
そして目覚めたエクリースの目の前に立つ人影を見て、エクリースは叫び声を上げた。暗闇のはずなのに、その人物はぼんやりと光を放っているような気がしたからだ。そしてその人物こそは！
「エレーヌ・フォンテーン！」
エクリースはガバッと起きようとしたが、まるで岩になったかのようにびくともしない。
エレーヌは、じっと哀しそうな目付きでエクリースを見つめていた。

「エクリース、又会えるとは……いいえ、会える様に仕組んだのはわたしですが、でも悲しいことに、あなたはわたしの事を半ば忘れていたのですね」
「そんなことは言わないで下さい、エレーヌ姫」
とエクリースはブルブル震えながら答えた。エレーヌ姫は、不気味に続ける。
「あなたの叫び声は、声になっていないのです。ですから、誰もあなたの叫び声は聞こえませんわ。誰にも、わたしが見えないように

……。

いや、違う。わたしを見た者は、もう一人居ります。ここに居ると、わたしは奇妙なことに、誰かに見られてしまうようですね。やっぱりここが、わたしの生まれた故郷であったせいでしょうか？」

「エレーヌ姫。わたしはあなたの事を忘れてなぞいません。けれども、わたしの境遇を見て頂きたいものです。こんな有様では、わたしがどう行動できるというのです！？　おまけに、もう他国に居るのですよ」

「あなたのような聡明な王子のしていることとは、今は到底思えませんね」

とエレーヌ姫の咎めるような声がした。

「仕方ないのです。ここでは、わたしはただのお小姓」

「そうね、でも助けられなくて、ごめんなさい」とエレーヌ姫の霊は言った。

「ただし、これを言いにきたのです。つまり、アレクセイの秘密……それを知ることが第一だと。アレクセイは、有る意味人間ではないと」

「え！」

「そして、あなたの愛するあのソフィアの罪と、裏の顔を知るべきだと、忠告しに参りました」

「そんな……」

エクリースは絶句した。

「ソフィアを愛しているのですね、エクリース。でも、それには大変な危険が伴いますわ。わたしの子孫を悪く言いたくは無いのですが……でも、それを知ると、あなたは大層傷つくでしょう」

それからエレーヌ姫は、半分消えかかりながら告げた。

「ああ、暁の光がやって来る。わたしは、もう消え果てなければ！

だからこれだけは言いましょう。あの東の“人食い森”よりももっと東に来てしまっているのですよ、あなたは。

そして嫁ぎ先のフォンテーン家よりも、更に東に来すぎてしまったとみえますね。でもそちらの方が都合が良いのです。ここには数多くの謎が潜み、そしていずれあなたはそれを知ることになるでしょう。そしてそれがあなたを導くのですわ。でもそれらを知ったら、必ずわたしの墓に詣でて下さいね。

わたしを忘れないように！　エクリース……ハイラは今でもあなたを探しているのですから」

そしてエレーヌ・フォンテーンは、暁の光の中に消えた。

4

4

エレーヌ・フォンテーンの出現と、その約束……これらによって、エクリースはやっと本来の心を取り戻しつつあった。今までは、自分が自分ではなく、ただ運命に流されていただけだったのだが、今まで見失っていた自分のあるべき姿とやるべき事をやっと思い出したのだった。

何よりも、エレーヌ姫の言った『アレクセイは、ある意味人間ではない』ということと、『ソフィアの罪と裏の顔』という言葉がひっかかる。

時々エクリースは、ソフィアの方にそっと視線を走らせたが、ソフィアは相変わらず静かにはにかんだ、その彫刻のように美しい横顔を向けるだけだ。そのソフィアのどこが危険なのか、エクリースには分らなかった。

けれども、駿馬を買って意気揚々と戻って来たアレクセイを、エクリースは深く観察することにした。確かに、アレクセイには悪い噂があり、不可解な状況であることが多い。それは召使い達の言葉の端々にも現れていた。それに以前のお小姓達二人が、悲惨な死に方をしたというのも、どこか気にかかる。

けれども、そのようなエクリースの気持ちを簡単に踏みにじるのが、アレクセイだった。

アレクセイが戻って来た晩は、豪華な晩餐会が開かれ、あちこちから客人が呼ばれていた。その中、エクリースは煌びやかに着飾らされて、その一座に立っていたが、客の中の一人がラテン語の詩を

暗唱する場面に遭遇したのだ。

ああ　薔薇よ薔薇よ　その朝露の滴りは　涙の如し

されど　手折らば　その棘は剣の如し……

「ちょっとお待ちを」と突然エクリースが制したので、その客はムッとして振り向いた。

「何だ、小姓の分際で」と明らかに不機嫌そのもの。

「お客様、その詩は一部間違っております。発音がおかしいのです」

「何だと！」と客は怒り出した。「小姓風情が何を言う！？」

されど　手折らば　その棘は槍の如く　我が胸を突き刺す

とエクリースは、穏やかに訂正した。一人の婦人がその詩集を持ちながら、

「ブラボー！」と賛美し、手を叩く。「まことその通りですわ！エリスとやら、このお小姓は並みの人間ではありませんことよ。アレクセイ様は、賢いお小姓をお持ちですこと！」

「ありがとうございます」

そう言うと、エクリースは恭しくその婦人に向って会釈をした。隅では、ソフィアが顔を輝かしているが、反対に恥をかかされた客人は、憤怒の余り真っ赤になっている。

「エリス、ちょっとこっちへ来い」とアレクセイが命じたので、エクリースはやって来た。

「何か……」

「お前、いつからラテン語など知っているのだ！？　わたしには黙っていたな」

「以前の……ご主人が、わたしに教え込んだのです」

「なるほど」とアレクセイは目を細めながら、エクリースを凝視す

る。その目が、人間的ではないのを察して、エクリースは戦慄した。どこか、野獣のような、いや、もっとおぞましい何かを秘めたぞっとする瞳の色。

ふとエクリースは、自分の持っている不思議な力や感覚を思い出していた。人には分からない物が見える感覚、未来を見通す力、そしてどす黒いどこからともなく湧き出す煙。今まで、それらを忘れていたとは！

「あとで我が部屋へ来い」とアレクセイは冷たく命じた。「嘘を付いていた罰だ。お仕置きだ」

「お仕置き」とエクリースは鸚鵡返しに言った。

「あなたは今までも、二人のお小姓にしていたのですね、そのお仕置きとやらを！　彼らはそれに耐えられなかった……きっと……二人は……」

途端にアレクセイはエクリースの頬を引っ叩き、見事な絨毯に飴をぶちまけた。

「さあ、エリス！　これを腹ばいで全部食うのだ！　見せしめだ。お小姓などに、学問など要らぬ！　人々に滑稽な有様を見せるだけでいいのだぞ、お前のような愚劣な輩はな！」

アレクセイは、カカカカカと高笑いした。エクリースが真っ青になって躊躇していると、突然人々の視線が、他所に向けられた。

「あ！　あれは！」

「あの方は！？」

そしてソフィアと言えば、スカートを摘むと、頭を垂れている。エクリースがそちらに顔を向けると、その階段には、執事イワンに手を取られた見知らぬ老人が立っていた。

「まあ！　ワシリー様だわ」と驚きつつ言う客の婦人の言葉で初めて、この弱々しいが威風堂々とした老人が、ここの当主でアレクセ

イとソフィアの父、ワシリー・ロマネフスキー伯爵だと知った。

「お珍しい！　長い間、ご病気で部屋の外にも出られぬと聞いていたのに！」

と言う誰かの言葉をエクリースは聞いたが、その当主の視線が自分を射抜いているのに気付いたのだった。

5

「ワシリー様！」と一人の召使いが、うろたえながら叫んだが、並み居る全員が頭を下げる中、ワシリーとその執事イワンは、そろそろと優美に半円を描く階段を降りて行く。

「ち、父上……」

とアレクセイは明らかに狼狽している。

「又、新しい小姓を見つけてきたか」とワシリーは地の底から出してくるような声音で、皮肉っぽく言った。「さてさて、いつまでその小姓は持つかのう？」

「お父様！」とソフィアも優しく言いかけたが、その声にどことなく嘘があるのを、エクリースは感じ取った。

「おお、ソーニャか！　相変わらず綺麗じゃ」と一応ワシリー伯爵は、父親の顔になった。

「実に、二年ぶりかの？」

「はい、お父様。お父様が部屋に閉じこもられてから、もう二回の夏が来ようとしております。再びお目にかかれて、嬉しゅうございますわ」

―　ソーニャの声には、嬉しさなど微塵も無いが？

エクリースは交互にこの奇妙な家族を見つめていた。そしてワシリーの視線が、自分にも注がれているのに気付いた。

「あ！」

「そうじゃ、そこの者、あとで我が部屋へ来るのじゃ」

「父上！　お小姓に何の用があるのです？」

とムキになって聞くアレクセイの言葉が空しく響くが、ワシリー公爵は意に介さないようだった。

「その者……嘘つきのようじゃからの」とワシリー。

「そもそも、そのようなラテン語など、農奴は知らぬはず。そしてその詩は、もっと難しい発音のはずじゃ。そんなことも知らぬとは！　アリョーシャ、相変わらずそなたは無能者だの！」

決め付けるようなワシリーの言い方に、全員が凍りつく。ワシリーは、威厳というより、もっと深い不気味さを漂わせている存在だ。

「又、今のような下品な遊びはせぬように、アリョーシャや」

「は、はい、父上」

「お父様！　ではこれからは、この屋敷の采配を再び振るうと？」

とソフィアが的を得たことを尋ねた。

「もちろん！　では、そなたは、わたしが廃人と化した方が良かったのか？」

「い、いいえ！　まさか、そんな……」

――今のソーニャの言葉は、いい訳じみているな……それにしても、なぜ僕を召されるのだろうか、ここの領主ワシリーは？

「今再び、わたしはしばらくここの領主としての采配を捨てるわけにはいかんのじゃよ、可愛いソーニャ。そなたは益々亡き母に似てきたな。そなたを見ると、遠い遥かな昔をふと思い出す……」

ワシリーの目は、一瞬まともになり、彼方を見つめているように見えた。

「ワシリー様。この辺で、お戻りを」と年取った執事、イワンが制すると、ワシリーは意味深な笑みを口元に浮かべて、元来た階段を一歩一歩上って行った。

その間シーンとしていた全員は、ワシリーが居なくなると、途端

にホッとした溜息をついたのだった。

「ったく、糞親父め！」とアレクセイの罵りを、エクリースは聞いた。

「おい、エリス。どうやら、お前はあのジジイのお目に止まったようだな。暫く後に、あのジジイの部屋に行くが良い」

「はい、アレクセイ様」

―けれども、父親なのに、ジジイと罵るとは！　アレクセイは、ワシリーを徹底的に嫌っているようだな……？　そしてソフィアも又、嫌っているというよりも、何とかして避け様と魂胆している。

そういうエクリースの思いの最中に、

「エリス！　ワシリー様のお召しである！」と召使いが告げに来たのだった。

エクリースは、今まで入った事も無い屋敷の奥に、案内されて行った。

☆　―　☆　―　☆

ところで、エクリースの国では、皇太子となったドイル・アンギヴィルの悪評が、日に日に増してきていた。

ドイルは、片っ端から侍女に手を付け、気に入らない召使い達を鞭で殴り、逆らう臣下達の領地を取り上げたり、挙句の果ては農民達から取る税金を二倍に上げたりしていた。

人々の心は次第にドイルから離れていき、それと同時に恐ろしい飢饉がこの国に訪れてきていた。雨が一滴も降らず、日照り続きで農地は枯れ果て、農作物は育たない。それを知ってか知らずか、ドイルは毎日遊び狂っていたのだ……。

6

6

サミュエルは、ドイルの乱行に苦々しい思いを抱いていた。けれども、皮肉なことに、

「やはり、跡継ぎは正統な王子、第二王子のエクリース王子が妥当だったのではないか」という風評が、あちこちから起ってきていたのだ。

「何を今更！」と、ビクターは面白くない。

「今まで、散々エクリース様を『呪われている』『デスティの化身』『不幸を呼ぶ王子』など言い立てていたくせに、今頃になって『ひょっとして、エクリース様の方が良かったのでは！？』とは！　ふん！」

「まあまあ、怒るな、ビクター」とサミュエルは苦笑いしつつビクターを慰める。

「我が儘なようだが、人間とはそういうものだ。居なくなれば懐かしみ、居れば居たでうざったいと感じる。それが人間なのさ」

「ですが」とビクターは怒りが収まらない。

「肝心のエクリース様の行方が分らないというのに、あの馬鹿殿ドイルは、毎晩湯水のように国の税を浪費しているというではありませんか！　それなのに、王様は一室に篭られて、何一つ仰らないとか。馬鹿げてる！」と憤懣やるかたないビクター。

「いや、、、、実はな、ここだけの話だが」とサミュエルは声を潜ませた。

「え？」

「王は今病の床にあるという噂だ」

ビクターは絶句した。

「では……あの……もしや、王が亡くなられでもしたら」

「シーっ！　だが、そうなのだ。この国は滅ぶぞ。あんなアホ丸出しのドイルが、この国を建てなおせるはずが無いではないか！　賢い王であったとは言え、既に王は老齢に近い。そして二人のお妃と王子達を亡くされ、心理的にも参っておられる。

もう何かを判断する余力は無いと思われるが、それが怖いのよ。今この国は、危機に瀕しているというのに！」

「それでは、王はエクリース様を探し出そうとはしないのでしょうか？」

「そうだな～」とサミュエルは腕組みをした。

「探し出すとしたら……ま、その後は言わずもがな、だ。な？」

ビクターは問われて、ふふふっと笑った。

「では、いよいよ、ですか？」

「そう。我々のやるべきことが何か、そなたも知っていると見える。ただし、しばらくアンネットと可愛い盛りの息子とは会えないぞ」

「構いませんとも！」とビクターは即座に答えた。

「ほれほれほれ、おぬしたち、何をこそこそ言っておるのじゃな！？」

その聞きなれた声で、二人は飛び上がった。いつの間に来たのか、背後には杖を持ったソラリス先生が居るではないか！

「あっ、ソラリス先生では！」

「何をびっくりしておるのじゃな、サミュエル様は。……お二人だけでお出かけとは、見損ないましたぞ！　このわたしをお忘れか？」

「しかし先生は、すでに」とビクターが言い始めると、

「老人だと言いたいのかね、君は」とピシャリとソラリス先生は反論する。

「い、いえ。ただ、お体に障るのではと」
「心配ご無用！」とソラリスは一喝。「わたしも、エクリース王子によって救われた身。この恩を返さねばの」
「あー、はいはい」と呆れた風のビクター。
「まことにありがたく思います、先生」
とサミュエルは丁寧に礼をした。「それでは、早速色々算段を致しましょう」
「ふおっほっほ。三銃士と言うわけですな」とすこぶる楽しそうなソラリス先生を、あきれ返った様子でチラッと一瞥するビクター。
「年齢違いのデコボコ三銃士ですか！？」
「まあまあ、いいではないか、ビクター」とサミュエルは慰める。
「いざ、東へ、ですな」とソラリス先生は、逸る心を鎮めていた。

☆　―　☆　―　☆

いささか浮かれ気味のこちらの三人に比べ、エクリースの居る陰鬱な屋敷では……。
今しもエクリースが、この屋敷の主人で当主ワシリー公爵の部屋に入るところだった。
「お入り、よく来たな」と、正面の椅子に鎮座したワシリーが、重々しい声でエクリースを招く。
「お前は、ここに来るのが怖くないのか？」
「いいえ」
「なぜじゃな」
「わたしは、今まで色々な摩訶不思議な経験をしてきましたので」
エクリースがそう答えると、
「そのようじゃな」とワシリーは満足そうに言った。その時、エクリースのポケットの時計が、凄まじい音をジリジリと立てたのだった。

7

7

エクリースの銀時計の音を聞くや否や、ワシリー公爵は飛びずさった。そして、怯えたような表情を浮かべると、端に控える執事イワンの方を向く。

「ご主人様、どうかお鎮まり下さいまし」とその老執事がなだめるように言うと、やっとワシリー公爵はもとの威厳を取り戻したように見えた。

その途端、時計の音は鳴り止んだ。エクリースはただ訝しげに、ワシリーの狼狽振りを眺めているだけだったが。

「その音は、わたしを不安にさせるぞ、エリス。どこでそんな物を……？」

「ああ、これはわたしの兄の物でした。けれども、わたしの誕生日にこの壊れた時計を下さったのです」とエクリースは淡々と答える。

「そうか」と一言だけ、ワシリーは呟いた。

「ときに、そなた……わたしには、お前がただの農奴では無いことぐらい、見分けがつく。我が愚息アレクセイのような馬鹿ではないのでな」

ワシリーは時計の鳴る音が止んだので、再び傲慢な態度でエクリースを見つめ直した。

「そなた……正直者ではないな。農奴ではない、そうだな？」

「はっきり申し上げると、わたしは農奴ではありません」

「やはり」とワシリーは舌打ちする。

「では、お前は一体何者だ？」

「申し上げられません」とエクリースは極めて率直に答えた。この

ワシリーだけには、嘘が通用しないことを知っていたからだ。
「多分……他国の者であろう」
「その通りでございます、公爵様。ご明察でございますね」
「当たり前だ。少し前まで、わたしはこの屋敷の主（あるじ）だった。そして、この屋敷の者達全てを束ね、采配を振るい君臨していたのだ。そう、今のようにはならず、この屋敷ももっとまともで、佇まいも麗しかった」
「では、なぜ？　ここの采配を、アレクセイ様に譲られたのでしょう？」
「譲ったわけではない！」とワシリーは断固たる態度で言い放った。「ある日……わたしは倒れてしまったのだ。原因不明の病でな」

エクリースがチラリと執事に一瞥を与えると、イワンも微かに頷いた。
「それから二年間……わたしは原因不明の震え、熱、頭痛で床に伏せっていたのじゃ」
「それはそれは大変でございました」とイワンも続けた。「何度も、もう駄目かと思われたのですが、ご託宣通り、ある人物によって明らかになる、と言われていた通り、お前が来てから少しずつワシリー様のご容態が回復に向ったのでございまする」
「ご託宣！？」とエクリースは頭を傾げた。
「ご主人様が倒れた直後、あるロマの女が来て言うには……『来るべき人物が来た折に、必ずや回復する。その人物はまだ教えないが、その内に分る』と占って……。わたしは信じませんでしたが、藁をもつかむと言うか、ご主人様はその言葉を信じて辛い闘病に耐えていたのでございます」

「それがお前だったとは！」
ワシリー公爵は、深い溜息をついた。
「どうして、わたしだとお思いで？」とのエクリースの問いかけに、

ワシリーははっきりと答えた。
「西南より来る、見目麗しい若者……ラテン語が得意な、教養有る若者。が、彼にはどこか謎めき、哀しみが常に宿っている……そのロマの女は、そう申したそうじゃ。お前はその通りの者では無いか！」
「分りました、アンジェラですね」
エクリースは微かに微笑みながら言った。

☆ ― ☆

― ☆

その頃、東に向う三人連れが、こそこそと王国の裏門から出立した。一人は気品溢れるがどこか不遜な青年、一人はもう少し年かさの、はしっこそうな従者風、そしてもう一人は一見するとよぼよぼの老人。
このどこでどう繋がっているのか他人にはとんと分らぬ三人組は、互いに目配せをしながら、裏門を馬で通過すると、あとは疾風のように走り出したのだった。

誰も気付かないと思っていた、この少し抜けた三人を、けれども秘かに遠くから見つめていた老女が居た。
「はて？　サミュエル様、ビクター、そしてサミュエル様がどこからか拾ってきた怪しげな錬金術士の三人が、どこへ向うのだろうの？」
ハイラの口元には、不気味な微笑が浮かんでいた。

8

8

ハイラは最近不安に苛まれていた。もう歳も歳で、後先短いことは分っていたのだが、自分がフォンテーン家の小間使いのときに犯した罪を長い間、ずっと隠し続けていた今頃になって、あのエクリースと間抜け三人組のせいで暴かれるのは耐えられなかったからだ。

このままでは、自分は天国ではなく地獄行きとなるだろう……そう、あのイデットのように。

安らかに死にたいという願いは、ハイラの唯一の狂気に近い願望となった。そしてハイラは実行した。

☆ ― ☆ ― ☆

ハイラは皇太子ドイルにお目通りを願い出た。その願いは簡単に叶えられた物の、一室に入ってみると、“馬鹿殿”ドイル・アンギヴィル皇太子が、両手にしどけない格好の女性二人を抱き、キスをちゅっちゅっとしている情けない姿を見る破目になった。

エクリースを憎んでいるハイラだが、このドイル馬鹿皇太子の有様を見れば、一般に喧伝されているように、

（ひょっとしたら、エクリース王子の方がずーーーーっとマシでは？）

と思い至るのだ。

―亡くなられたブライト様は、それはそれはご立派な王子だったし、あのイデットの息子、三番目のサイラス王子様でさえ、子供ながら才気活発な可愛らしい王子だった。

それに比べて、この皇太子の下劣極まりない様子はどうじゃ！？

全く、王様は嘆きの余り頭がおかしくなられたとしか思えぬ！

憤怒を抑えたハイラは、それでもニタリと微笑んだ。この馬鹿殿ならば、騙すことはいとも簡単そうだ……。

「敬愛なる殿下」とハイラは心にも無いお世辞を述べると、杖を付きながらも平伏した。

「何じゃな、侍女のなかの侍女、最高齢の侍女ハイラよ」

と大仰な言い方で、ドイルは応える。

「まあ！　何と言う素晴らしい仰せでしょう、殿下！　……ともあれ、今日わたしが参ったのは、耳寄りなお話なのでございます」

「ほお？　耳寄りな？」

（耳寄りな、という意味さえ知っているのかいな、このアホ皇太子は！？）

「おほほほほほ、そうでございますわ。皇太子殿下ドイル様、この度の飢饉についてはどれ程ご存知で？」

「飢饉とは……まあ、植物が枯れることだな」

（当たり前でしょ、このぉぉぉ！）

「と言うか、人民達が食物が無くて苦しんでおりまする。そして国家財政も破綻しかかっているというか」

「だから、わたしは農民達の税金を二倍にしたのだ！」

とドイルは得意げに、キイキイ声で叫んだ。

「でも、その人民達自身が飢えているのでございます」

「じゃ、どうすればいいのだ？」

（やっぱり、徹底的に馬鹿だわ）

「ですから、その飢饉の元を断つといいのでございますよ」

「ん？」

「この飢饉は、魔女の仕業と思われます」

「魔女！？」

ドイルは両手で口を塞いで、急に怯えた様子を見せた。
「その事は考えていなかったぞ。では、その責任は全て魔女の？」
「まことに左様でございます」
とハイラは重々しく答えた。

「で、その魔女はどこに？」
「東、でございますわ」
そう言いつつ、ハイラの老いた顔に邪悪な微笑が浮かんだ。
「東の果てに“人食い森”という森がございます。そこには魔女とその兄と申す者達が住んでおり、その者達が呪いをこの国に掛けているものと思われます。
そして、そこに赴いたのは、何とあのサミュエル公とお供二人。そして、これはわたしの考えですが、あのエクリース王子も又その辺りに出没しているのではと」
「おおおおお！」
と叫ぶドイルの怯えようは、尋常ではなかった。

「エクリース！　そして、あの気障ったらしいサミュエル・グールデュール達が！」
「そうです。魔女と結託しているのでは、とわたしは考えます」
「最長老の侍女ハイラよ！　そなたの言葉を信じよう」
（とまあ、何と単純なお方よ、この方は。この方が王になると、間違いなくこの国は将来的に滅ぶであろうの。けれど、その後はわたしは知らぬがねぇ）

かくして、ドイル皇太子は、まんまとハイラの老獪な姦計に嵌っていったのだった。
「へ、兵士達をかき集めて、東の“人食い森”へと出発させよ～！」
怯え切ったドイルは、悲鳴のような大声を上げたのだった。

第四章　公爵家の秘密　1

1

ワシリー・ロマネフスキー公爵の豪華だが陰気な私室で、エクリースはただ黙ったまま突っ立って、次にワシリー公爵が口を開くのを待っていた。

「そうだ、その占い女は、アンジェラと言った。なぜこのわたしがその女を信じたか、お前に分るか？　アンジェラは、その昔フォンテーン家に仕えていた占い女の子孫だからじゃ」

とワシリーが重い口を開くと、エクリースは直ぐに質問した。

「あの、大きな居間に掛けてあった絵の中の女性、エレーヌが嫁いだ家の、ですね？」

「その通り！　だが、何ゆえお前がエレーヌ姫のことを知っているのか、合点がいかぬ。エレーヌ姫は、随分昔の姫君。わたしでさえ、会ったことの無い祖先じゃ。その上、彼女は汚名を着せられて……亡くなった。夫を毒殺したという汚名をな！」

「存じております」とエクリースは短く答えた。

「やはり！」とワシリーは両手を打った。

「アンジェラの占いは正しかったのだ！　お前は、この呪われたロマネフスキー一族を救い出してくれるに違いないと、アンジェラは言った」

「呪われている！？」

驚いてエクリースが尋ねると、ワシリーはくるりと背を向け、そして微かに頷いた。

「我が一族は、確かに呪われているのじゃよ、エリスとやら。恐らくその名前も嘘なのであろう。が、それは聞くまい。お前にも何らかの事情があるようだからな」

「ご明察でございます、公爵様」
とエクリースは片手を胸に当てて、お辞儀をした。

「お前のことはともかく……エリスよ、わたしの背後にある二つの肖像画を見よ！」
ワシリーの目配せで、執事イワンは壁に掛かっていた黒い布を取り払った。そこには、二つの肖像画があり、どちらも見目麗しい婦人の姿だ。けれども、エクリースのポケットの時計が狂ったようにジジジジと鳴り響き、エクリースも稲妻に打たれたような衝撃を受けたのだった。

「お前には分るようじゃな、エリス」
「何やら……言い難い物があると。でも、分りません」
エクリースが銀時計を持ち出しながらそう言うと、やっと時計は安心したようにおとなしくなった。
その二人の婦人達は、誰かに似ているような気がしたエクリースは、じいっとその肖像画に目を凝らした。
「あ！　このお二人は、ご子息とご令嬢様の……お母上では！？」
「その通りじゃ、お前は聡明で賢い上に、勘も鋭いと見えるな」
「勘ではなく……」

――それは、僕の持って生まれた魔力のせい？

「……よく似ておられるからです、お二人に」
「右が前妻で、左が後妻じゃ。だがな、この二人の年齢差は、実に２０年！　前妻の息子アレクセイと、後妻の娘ソフィアは実に２０年以上歳が離れておるのじゃ。それなのに、二人の年の差はさほど離れているとは見えんじゃろう？」
「そう……ですね」と、エクリースは以前ソフィアから告白されたことを思い出していた。

「でも、不思議です」
「それはそうじゃ。前妻はな、前妻は……」
そこまで言うと、突然イワンが「ワシリー様！　それ以上は」とたしなめたのだった。
「構わん。わたしはこの若者を信頼している」とワシリーは怒鳴りつけると、キッとエクリースを見据える。
「真実を言おう。前妻は……人間ではなかった」
「ええっ！？」
「森の精、フェアリーだったのじゃ。既にこの世に存在しておらぬ者と、わたしは契ってしまったのだ！　そして出来たのが、あの息子」
「それも、悪のフェアリーだったのですぞ」とイワンが辺りをキョロキョロ見回しながらそっと続けた。
「“人食い森”に住む、フェアリー？」
とエクリースが聞くと、こちらの二人は驚愕して固まってしまう。
「なぜ、それを！」
「少し繋がってきましたので」とだけエクリースは言った。

☆ ― ☆ ― ☆

「ったく、行けども行けども何も無いのが、東だったのか！」
とサミュエル達一行はぼやきまくっていた。
「あるのは荒れ果てた土地と寒村だけでございますよ」
とビクターはサミュエルに告げた。「だから、そう言ったじゃありませんか！　けれども、かなりの美女がこういう土地にも居るのでございますよ、サミュエル様」
ビクターはコレットを思い出していた。

「ううん、いい匂いだ」と呟きつつサミュエルが振り向くと、馬上のソラリス先生が籠に一杯のご馳走を抱いているではないか。
「ええっ、どうして！？」
「わたしを侮るでない、お二方よ。これでわたしは２００年間、生きることが出来たのじゃよ。がはははは」
「先生は、錬金術士ではなく、錬食術士であられたのかな！？」
とサミュエルは呆れて言ったのだった。

2

2

「悪のフェアリーと契って出来た息子アレクセイは、あの通り歳をとらなくなった。けれども、寵愛するお小姓達は皆、生気を失くして死んでいくのじゃ。お前も注意しなければならぬぞ」

とワシリー公爵は言い含めた。エクリースは「はい」とおとなしく答える。エクリースは、ソフィアの語ったお小姓達の最期を思い出す。いずれも哀れな死に方だったという。

「けれども、恥ずかしいことにそれだけではないのじゃ。前妻はアレクセイを産むとすぐ、元の森へと戻って行き、二度と姿は現さぬ。わたしは、初めて騙されていたことに気づき、以後妻はめとらなかった。

けれども、約２０年後のある日、狩りに出た時に娘に会い、一目惚れしてしまった。それが、ソフィアの母じゃ」

「綺麗な方ですね」とエクリースは、絵を眺めながら言った。「けれども、どこか……」

「その通りじゃ、エリスとやら。わたしは再び犯してはならぬことをしてしまったのじゃ。愚か者よの。いや、運が悪いとしか言いようが無いが」

「彼女もまた、フェアリー、とか？」

「まさか。けれども、もっと悪い」

ワシリー公爵は、そこで一息ついた。そして、ふっと溜息をつく。その姿は、どこか侘しく痛々しい。

「彼女は、母は人間、そして父はバンパイアだった！」

「え！？」とさすがのエクリースも、驚いて目を見開く。

「けれども、恐れるなエリスよ。娘は、母の血を濃く取っており、今まで人の血を吸った事は無い。だが、その秘密を持った娘は、誰にも心を開かぬようになった。自分自身が恐ろしいのだろう。後妻は、娘を産んでその事に悩み、ほどなくして亡くなった。

わたしも、この二人の子供達に掛かる呪いを、何とかして消し去ろうとしたが……無理じゃった」

それから、ワシリーはエクリースに向き直った。

「そこでじゃ、エリス。お前こそ、この呪いに打ち克つものを持っているらしいというではないか！」

「わたしに、何をしろと仰せですか？」

「子供達を、ただの普通の人間にしてやって欲しいのじゃ。そうすれば、わたしは心置きなく、家督全てを二人に分け与えることができる。残った日々、自分の老いを心安らかに過ごすことができるだろう」

「呪いを消すのは、難しゅうございます」とエクリースは正直に告げた。

「なぜだ、エリス」

「わたしも又、ある種の呪いを背負う身だからです。それが何かは言えませんが」

「お前のように美しい若者が、又違う呪いを背負っていると！？けれども、だからこそ、あの二人の苦しみが分るのではないかな」

「とりあえず……探ってみますが、如何でしょう、公爵様？」

「お前に任す。わたしには出来ないことだからな」

「はい」

「そしてもう一つ。この秘密は、誰にも漏らさぬように」

「分りました。知ってるのは……ご本人達だけ、ですね」

「そして、ここに居る執事イワンだけじゃ」

言われたイワンは、麗々しくお辞儀をした。

☆ ― ☆ ― ☆

サミュエル、ビクター、ソラリスの一行は、焚き火を囲みながら、美味しい料理を食べていた。

「……ってことで、わたしはネズミにされた代わりに、魔女プレティスから、物を食物に変える力を貰ったのじゃ。で、延々２００年間、わたしにキスしてくれる“麗しい人”を待ち続けておった」

「それが、エクリース様で!?」とビクターはやっと納得する。

「なるほど。“麗しい”のは、何も女性とは限らないな。確かに、エクリースの美しさは尋常じゃないし。しかし、ドブネズミにキスするとは、如何にも心優しいエクリースしか出来ぬことだよな……」とサミュエルも妙に得心した。

「で、プレティスの孫が、かのアンジェラ?」とビクターが尋ねると、急に真顔になったソラリス先生は厳かに告げた。

「そうじゃ。そして、アンジェラもまた、東方におるのじゃよ。そして、御仁達に言うが……どうやら、あの馬鹿殿ドイルの兵士達がこちらに向っておるようじゃ」

「え?　なぜ分るのです、先生」

「だ～から、サミュエル殿、わたしはこう見えても、結構な魔術が使えるということなのじゃよ。侮ってはいかんぞ!」

ソラリスが手をさーっと動かすと、あっという間に食べ物は無くなり、そして焚き火の炎も消えた。

3

3

ワシリー公爵の部屋から出たエクリースは、少し前、夢枕に出てきたエレーヌ姫の霊が告げた言葉を思い起こしていた。確かに、エレーヌはワシリーが言ったことと同じようなことを告げていた。『アレクセイは人間ではない』『ソフィアの罪と裏の顔』と……。それはワシリーの言ったことと附合している。彼ら兄妹は、人間でいるようで実は人間ではないのだ。そしてその事実に、彼ら自身が秘かに悩んでいると、彼らの父ワシリーは言った。

だからと言って、急にエクリースが彼らの呪いを解く事などは出来ない。いや……そうだろうか？　アンジェラの占いと言うのは、エクリースの出没を知って、それをワシリーに告げたのではないのか？　その上、ハイラにも気をつけろ、とエレーヌの霊は告げた。

「ああ、分らない！」

そう唸ると、エクリースは頭を抱えた。

――けれども、少しは繋がった。僕がここに来たのは、何らかの理由があってのことだったと。全ては東の方角に、何か因縁があるという事なのだ。

エレーヌ姫の霊もそう告げたし、あの大鷲も僕をここに運んだ。それもこれも、ただ単なるお小姓として生きろ、ということではなく、もっと重大な何かを解き明かす為なんだろうか？　それとも、それは僕自身の生き方にも関係があるのか？　全ては今はまだ謎のまま……。

その時、鈴のような声が背後からした。

「エリス！　エリス」
押し殺した声だが、それは紛れも無くソフィアの声。
「あ、お嬢様」
「まあ、そんな言い方はしないで、エリス」
そう言いつつ、物陰からソフィアが出てきた。白っぽい、端に綺麗な刺繍のあるベールを被っており、それはソフィアに本当によく似合っている。

「それでは……ソーニャ……」とエクリースは控えめに呼んだ。「何か御用でしょうか、ソーニャ」
「そんなに素っ気無い言い方はしないで！」
近付いて来るソフィアは美しい。そんな彼女が、バンパイアの血を持っているとは、とても思えないが。
「はい、ですが……」
「ねえ、エリス。あなた、父の部屋で何を見、何を言われたの？」
そう聞くソフィアは、数秒前の可憐な令嬢とは、微妙に違っていた。猜疑心が彼女を毒しているようだ。その美しさに、さっと翳りが走る。

「いいえ、別に」とさり気なくエクリースは答えた。「何か？」
「そうなの？　でも、エリス、あなた何か隠してない？」
「別に隠すようなことは何も」
「ならいいの」
ソフィアの声には、やはり微かな含みがあった。

「少し心配だったのよ、わたし。父という人は、無慈悲な人なのでね。それから……兄には気をつけてちょうだい。今日のことで、兄は非常に怒っていたから、今晩あなたをどうするか……不安なの」
「どうするか、って？」
「兄のもとのお小姓達って、兄の部屋から出てくるときは、本当に

生気を失くしていたわ。生きる気力を奪われているみたいで。部屋の中で何が起こっているのか、それは知らないけど」
「ご忠告に感謝致します、ソーニャ」とエクリースが礼をすると、ソフィアはベールを被りなおし、逃げるように去って行った。
「はて？　ソーニャは探りに来たのか？　それとも、忠告に来たのか……？」
エクリースは考えつつ、白夜の美しい庭に目を走らせた。

☆　―　☆　―　☆

「逃げるのじゃ！」
「逃げるって、どこへですか？　ソラリス先生」
「ですよね、サミュエル様！　この薄明かりでは、直ぐに見つかるのではないですかね」
三人は、秘かに馬を駆けさせながら言い合った。
「にしても、あの馬鹿殿は、なぜ兵を？」とビクターが聞くと、
「どうやら、兵士どもは、別の人間を探しておるようじゃな」
と、ソラリス先生は、犬のようにクンクンと夜風を嗅ぐ。

「そんなことして、何が分るんです？　ははあ、やっぱり、魔術とかって」
「わたしを馬鹿にするでない、若造よ！」とソラリスはビクターをたしなめた。
「兵士達を差し向けるという事は、こちらにやはり何かがあるということじゃな。エクリース様がこちらに居るという事は、やはり本当じゃったと見える。
だが、それだけではないぞ」
「ん？」
「ビクターとやら、そなたが言った、美しい娘の話……どうやらそれとも関係がありそうじゃな」

「コレットと！？」
「ほう？　その娘、コレットと言うのか。ちぇっ、お前もエクリースも隅に置けないよな」とサミュエルが茶々を入れた。
「そ、そんなんじゃないです」と赤くなるビクター。
「どうやら、そのコレットという娘にも、危険が迫っておるようじゃな」
と珍しくソラリス先生の顔がひきつったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6157l/

プリンス・エクリプス

2011年11月4日13時25分発行